
ハルラン～雨を呼ぶ猫の歌～

春日彩良

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハルラン〜雨を呼ぶ猫の歌〜

【Nコード】

N9237M

【作者名】

春日彩良

【あらすじ】

空が晴れたら、僕を忘れて…。韓国、ソウル市街 雨の日に
しか営業しないという謎の店『ペニー・レイン』。警察大学校出身のミンホは、仮配属された捜査課でコンビを組まされた警査のチョルスと共に、とある捜査のために店を訪れ、そこで【ナビ】と呼ばれるボーイに出逢う。気まぐれな猫のようなナビに振り回されながらも、次第に惹かれていくミンホ。だが、やがて彼は知ってしまう。ナビの秘密と、哀しい雨と罪の記憶を。 毎週水曜日更新

手のひらの雨（前書き）

握りこんだ、ひとつずつく……

手のひらの雨

だって、僕は雨だから。

ほんの一瞬、肩先を濡らして。

おろしたてのスーツが台無しで、
ツイてないけど、

悪くない。

そんな雨だから。

空が晴れたら、僕を忘れて。

通り雨に、降られたんだって

「こりゃ、ひと雨くるかもな」

ガードレールにもたれて、無意識にここ何日か剃り忘れていた無精ヒゲの感触を確かめながら空を見上げた男は、そう呟いて顔をしかめた。

ついさっきまで、サングラスが必要かと思うくらいの日差しだった。夏休みに浮かれる世間とは違い、季節に関係なく働かされる自分には、癪に障るような晴天だった。

それなのに……

夏の天気は気まぐれだ。

男の視線の先で、怪しい雲行きの空の合間からこぼれる陽光が、ソウル駅のガラス張りの駅舎に反射して輝いた。

「……遅いな」

何度となく確かめた『3番』と書かれた停留所の番号を、再び振り仰いで確認する。

やはり、場所に間違いはない。

インチョン仁川国際空港から、ここソウル駅まで直通のリムジンバスの到着を、彼はもう有に一時間は待っていた。

約束の時間を過ぎても、目当ての相手に乗せたバスは一向に現れない。

こんなことなら、職場を出る時に、あの口やかましいクムジャ姉さんの忠告通り、傘を持って来れば良かった。

待ち合わせた相手が持つていればいいが、会う前に降り出してしまったら、自分は濡れねずみになってしまう。それで風邪でも引いた日には、姉さんに「それ、見たことか」とバカにされ、しばらく笑いにされるのは目に見えている。

もう一度空を見上げて溜息をついた時、ターミナルの向こうから、ようやく待ちかねていたバスが姿を現した。

『KALリムジン』と印字された、水色にブルーのラインが入った車体が停車すると同時に、プシューッと空気が漏れるような音を立てて開いたドアから、荷物を抱えた若い男が、転がるように飛び降りて来た。

「兄貴ッ！ チョルス兄貴ッ！」

バスから吐き出された人ごみの中に紛れても、頭一つ抜け出た長身の彼は、行く手を遮る人波を掻き分けて、手に引いたトランクをガタガタ言わせながら、こちらへ向かってくる。

「遅いよ、ミンホ！」

男はガードレールから腰を浮かせ、向かってくる若い男を待ち受ける。

「ごめんなさいっ！ 渋滞に巻き込まれて」

ようやく人ごみを抜け、息を切らせながら詫びる彼が目の前まで辿り着くと、待たされた方の男は彼の右肩に自分の右肩をぶつけて、それからギュツと強く抱きしめた。

「お帰り、ミンホ。よく帰って来たな」

抱きしめられた若い男の方も、男の背中に手を回すと、ギュツと力を入れてその背を掴んだ。

「ありがとう、チョルスヒョン」

その時、チョルスと呼ばれた男は、若い男の後ろで息を切らせている少女に気がついた。小さな彼女は、長身の若い男の影になっていて、彼からは今まで全く見えずにいた。

「おっと！ 悪い。そちらが、例の……」
「あ」

若い男が気付いて振り返る前に、その少女はピョコンと勢いよく

頭を下げた。

「パク・ミジユですっ！ 初めまして」

クセのない長い黒髪が、サラリと揺れる。

その拍子に、手にしていた大きなキャリングケースが倒れそうになり、若い男が慌てて支えた。

「ごめんなさい、オッパ」

「気をつけて」

慌てて謝る少女に、若い男は柔らかく微笑む。

「最初から見せつけてくれるねえ」

男が呆れた声を出すと、少女は途端に赤くなって「すみません」と頭を下げた。

「いやいや、君が謝ることなんてないよ。だけど、兄さんを差し置いて、留学先でこんな可愛い婚約者を捕まえて帰ってきた可愛い弟分には、後でたっぷり事情聴取させてもらわないとな」

ニヤツと笑って、若い男の手からトランクを奪う。

「さ、行こうか。早くしないと、ひと降り来そうだしな。そこで、タクシー拾うから」

「タクシーなんて、久しぶりだな」

若い男は息を吐きながら、周りの人ごみを見渡す。

「何だよ、アメリカはタクシーもないような田舎だったのか？」

男がからかうと、若い男は苦笑しながら首を横に振った。

「そうじゃないけど。向こうじゃ、自家用車がないと生活できないから。銀に青のライン（一般タクシー）が懐かしいです」

「可愛い弟の二年ぶりの凱旋なんだから、黒に黄色（模範タクシー）ぐらい奮発するぜ。相乗りしたいってんなら、別だけどな」

「それも悪くないですけど」

若い男がそう言うと、男はヒュッと甲高い口笛を鳴らしてから、大げさに目を見開いて見せた。

「変わったなあ、お前。昔は、他人と相乗りなんて真つ平ゴメンのお坊ちゃんだったのに。どこの国の王子様だよって、みんなで笑ったの覚えてるか？ アメリカで相当揉まれて来たのか？ え？」

肩をぶつけて笑う男に、若い男も同じように笑いながら、逞しく張った肩をぶつけて応戦する。

「揉まれたのはアメリカで、じゃないですよ。たったの三ヶ月だったけど、補職の僕を、本職以上にしごいてくれたのはチヨルスヒヨンでしょ？」

「こき使われたって言いてえんだろ？」

人差し指で額を小突いて、男は無精ひげの下の唇を歪めて笑う。

若い男は小突かれた額を擦りながら、周囲の喧騒を見回した。

「それにしても、懐かしいな。この人ゴミ……三年前まで、本当にここで働いてたなんて信じられない」

「おいおい。西海岸でのんびりしすぎたんじゃねえか？ 警察大学校出のエリートの名前が泣くぜ。しばらくはリハビリが必要か？ しっかり稼がないと、後ろのカワイコちゃんに愛想尽かされるぞ」

男の言葉に、二人の後を小走りで追いかけてきていた少女が頬を染める。

「式はいつなんだ？」

「まだ、決めてないんです」

「ソウルでやるんだろ？」

「そのつもりですけど……」

その時、男の方ばかりを見て話していた若い男の肩が、すれ違いざまに誰かとぶつかった。

「あっ！ すみません」

若い男は肩を押さえて慌てて立ち止まる。

ぶつかったと思われる相手が、ほんの一瞬だけ男を振り返る。

小柄な身体に、目深に被った野球帽から覗くその輪郭はほっそりと華奢で、襟足に伸びた黒髪が、汗で白い首筋に張り付いていた。

「……いえ」

短くそれだけ言うと、彼は再び帽子のつばに手をやり、男に背を向けた。

「ニヤー……」

「うわっ！」

か細い鳴き声とともに、不意に足元をフワリとした感触が撫で、男は思わず飛び上がった。

ごった返すロータリーの人ごみを縫うようにして、痩せた猫が一匹、先ほどの野球帽の彼の背中を追いかけていく。

その時、若い男の足元に、ふいにキラリと光る何かが転がってきた。

「あっ……」

思わず腰を屈めてそれを拾う。

「これ……落としまし……」

そう言って顔を上げた時には、既に彼と猫の姿は雑踏の中に消えた後だった。

「どうした？」

前を歩いていた男が振り返る。その時男の額を、ポツリと一滴、空から降ってきた雨が叩いた。

「……降り出したな」

空を見上げて、溜息をつく。

（ 知らないの？）

「早く行こう……ミンホ？」

(猫は、雨を呼ぶんだよ……)

男はうずくまっただま動こうとしない若い男の元へ歩み寄った。側まで近付いて見た時初めて、若い男の手の中に、小さく輝くダイヤのピアスが握られているのが分かった。

「それは？」

先ほどから若い男の視線は、そのピアスに注がれたまま動かない。

「オッパ？ どうしたの？」

「え？」

後ろから追いついて来た少女が、若い男の隣りに屈みこむ。

「そこ、血が出る」

少女が指差したのは、男の右の耳たぶだった。男が手をやると、確かにヌルリと血の滑る感触がして、男の指先を濡らした。いつ怪我をしたのか、まったく心当たりのない傷だった。

「痛いのか？」

「いや……どうして？」

「だって、オッパ……泣いてる」

少女の言葉と同時に、冷たい雨がひとしずく、男の頬を打った。

男は反射的に、手の甲で雨の落ちた頬を拭った。しかし、すぐに新しい雨が、乾く間を与えず男の頬を濡らし続ける。

握りこんだピアスが、手の中でキラリと輝いた。

1 - 1 (前書き)

降りだした雨が、開店の合図……

薄いシャツの胸元を押さえて、先ほどから二度三度と深呼吸を繰り返す。

狂ったように早鐘を打っていた鼓動は、先ほど腕の内側に落とした痛みのために、大分和らいでいた。

それでも、一時は吐き気まで伴った程の緊張感が短時間で完全に去ってくれる訳もなく、少しでも気を逸らすため、視線を落とし、足元のアスファルトの目地に集中した。

「おいっ！」

その時、アスファルトに反射していた、路地から漏れるネオンの明かりが突然陰ると同時に、粗野な声に背中を押され、少年は飛び上がった。

「何ビクついてんだよ。情けねえな」

少年が身を隠していた路地裏に、無理やりその大きな身体をねじ込むように入ってきた若い男は、バカにしたように鼻を鳴らしながら彼の肩を小突いた。

ただでさえ狭いこの空間には、途中から割り込んできた男のお陰で、ますます暗く籠こもった空気が満ちた。

「ほら、これ」

そう言うと、突きつけるように、少年の胸に千切られたノートの切れ端を押し付ける。

「お前の番”だよ。嬉しいか？」
「……あ」

渡された紙切れを開いた少年の手が俄かに震えだす。

「ジスクは?!」
「は?」

叫ぶように尋ねた少年に、紙切れを渡した男は呆れ顔で振り返る。

「あの冴えないお前の女か? 知らねえよ。どうせ、もうすぐ“そこ”で会えるだろ」

「お……お前は、おかしいと思わないのか?」

震えながらも、少年は男の太くたくま遅い腕に縋りつき、食い下がる。

「何で、誰も帰って来ない! 今まで“あそこ”に行った奴ら誰も……」
「おい、いい加減にしろよ!」

男は苛立たしげに腕を振り上げ、それを掴んでいた少年ごと路地の壁に叩き付けた。

息を詰まらせて崩れ落ちそうになる少年の髪を掴んで、後頭部を固い壁に押し付けて顎を上げさせる。

「誰も帰って来ない? それは、帰って来たくないからさ。お前の女も、夢中でシャブってるか、さもなきや今頃、ブツを金に換えて、新しい男と海外に高飛びでもしてるかもな」

「っな?!」

「どつちにしろ、俺の知ったことじゃない」

その時、不意に男の厚い胸板を揺らして、胸ポケットに入れた携帯が震えだした。

「どつした？」

少年の髪を掴んだ手は離さぬまま、顎と耳に挟んで携帯に応答する。

「何だつて?!」

漏れてくる受話器の向こうの声はよく聞き取れないが、酷く慌てている様子だけは少年にも伝わってきた。それを受けた男の方も、見る見る顔から血の気が失せてゆく。

「バカどもがつ！ だから、あれほど待てつて、俺が……ックソ！」

男は吐き捨てると同時に、乱暴に少年の髪を掴んでいた手を離れた。

「……どつしたの？」

「一斉摘発だよっ！ 畜生っ。こんなに早く……ハメられた」

男は悔しげに齒噛みして、手にしていた携帯を壁に叩きつけ頭を抱えた。

戸惑うばかりの少年を残して、悪態をつきながらその大きな体躯を翻して男が路地へ出ようとしたその時、これまでの薄暗く淀んだ空気を一掃するような、強いサーチライトが、一直線に路地裏に入り込んできた。

「うわっ!..!」

床に折り重なって倒れうめき声をあげる若者の山に、巡回から戻ったばかり警官は、思わず驚きの声を上げた。拘置所内に入りきらないそれは、廊下にまで溢れかえっている。

「.....なあ.....くれよ.....頼むよ.....」

地獄の亡者のように長い髪を振り乱した若者の一人が、警官の足に縋り付いてきた。

「離せっ! ったく」

足で踏みつけて署内の奥へと進む。

「ああ、お疲れ、八警査」

同じように群がる若者を足蹴にしていた同僚の一人が振り返る。

「一体何なんだよ、これは?」

同僚の元まで辿り着くものにも苦勞しながら尋ねると、彼は拘置所の柵の向こうを顎でしゃくった。

「ソン先輩とチヨルスのヤマだよ。ほら、何ヶ月も前から追ってた
だろ？ 学生の間で出回ってたクスリの……」
「いい加減にしろっ！ さっさと吐けっ！」

その時、拘置所内に耳をつんざくような怒声が響き渡った。

「クスリはどこで手に入れた？ どっから仕入れて、大学で流した
のか聞いているんだ」

「……へへ……エデン……フッフ」

「本当の天国に送ってやるのか？！ ああっ？！」

床に伸びた若者の襟首を掴んだ中年の警官は、乱暴にそれを揺さぶった。若者はされるがままに首をガクガクと前後に揺らし、気味の悪い笑い声をあげている。

「素直に吐いたほうが身のためだぞ。どうせ、就職は絶望的だ」

もう一人の若い警官が、軟体動物のように揺れる若者の首を支えて、中年の警官と二人で挟むようにその若者に詰め寄る。

「親にあんなに高い学費を出してもらいながら、廃講堂でクスリ打って乱交パーティーなんて、まったく羨ましいご身分だぜ」

若い警官が、若者の頭を拳固で小突けば、若者は頭をダランと垂れ下げて笑う。

「あんまりナメるなよ、小僧。俺らはソウル市警の中でも気が短いので有名なんだ」

中年の警官が若者の背後にいる若い警官に目配せすると、若い警官は若者の襟首を後ろから掴んで締め上げた。

「……っつ」

息を詰まらせ、顔色を変える若者の耳元に、若い警官は鋭い切れ長の瞳を光らせ囁いた。

「いつまで意地を張れるかな？ 早く答えないと、脳に血がいかなくなるぜ。賢い頭が、もっと賢くなっちまうな」

若者が、自分を締め上げる警官の腕を苦しげに叩く。

「吐く気になったか？」

若者は青い顔のまま頷く。

「よし、聞いてやる。チヨルス、もう離せ」

苦しげに呻く若者を見下ろしていた中年の警官がそう指示を出すと、若い警官は言われたとおりに若者の襟首を解放した。

「さあ、どこから話してもら……」

しかし、若い警官が言い終わらない内に、首の戒めを解かれた若者は、警官の靴の上にゲロゲロと盛大に嘔吐した。

「この野郎っ……!」

警官の激高を他所に、周囲からは他人事の忍び笑いが漏れた。

「お前、絶対に許さねえからな」

再び若者の襟首を締め上げた警官は、吐しゃ物のすえた匂いも相まって、思い切り眉間に皺を寄せながら、同僚の間でも特段に『目付きが悪い』と評判の、睨みをきかせる。

だが焦点の合わない視線をさ迷わせるだけの相手に、自慢の眼光が効く訳もなく、彼の鋭い視線は若者を通り越して、先ほどから拘置所の隅で膝を抱える、陰気な空気をまとった少年の元に辿り着いた。

「何だよ?」

若い警官は、最早ただの軟体動物と成り果てた若者の身体を床に投げ出して、少年に向き合った。

「先輩、あいつ……」

「明洞ミョウドウの路地ロヂで、最後に拾った奴だ」

若い警官の耳打ちに、中年の警官が答える。

「よお、こいつらと違って、お前は随分寡黙なんだな」

若い警官は吐しゃ物で汚れた靴もそのままに、カツカツと床を踏み鳴らして少年の元に向かった。

長身の彼が座った姿勢のままの少年を見下ろせば、随分な威圧感が生まれる。それを充分分かった上で、更に胸を張り、少年を威嚇する。

「お前も見てただろう？ あのバカじゃ話にもならない。床に倒れてる奴らも同じだ。見たとこ、お前は少しはまともそうじゃないか？ せっかく大学行っておベンキョしてんだ。ここは賢く、先に吐いちまった方が、今後のタメってもんじゃねえか？」

「……お、俺……」

「ん？」

若い警官とは逆に、中年の警官は座り込み、顔を傾けて、俯いた少年の表情を覗き込む。

威圧と懐柔。

ターゲットに合わせて、使い分ける戦法。

長年コンビを組むこの二人の警官の間では、今更打ち合わせなどしなくても、呼吸するくらい自然になせる技だった。

「……お……俺え」

だが、何事かを吐くかと思われたその少年は、自白の代わりに目に溜めた大粒の涙を零しながら、ただガタガタと震えるばかりだっ

た。

「ダメだ。こりゃ」

しばらく少年の言葉の続きを待ってみたものの、先に痺れを切らしたのは、若い警官の方だった。

「時間の無駄です。先輩、もう一人、適当なヤツ締めましょう」

座り込んだ中年の警官の腕を引いて、重い身体を立ち上がらせるための手助けをする。

「オラッ！ 拘置所は眠る場所じゃねえんだぞ！」

少年に背を向けて、汚れたままの靴で床に転がる若者を二三人蹴り上げながら、道を開ける。

その時だった。

少し後ろを歩いていた中年の警官が、突然バランスを崩して前につんのめった。

「ソン先輩?!」

驚く若い警官の前で、中年の警官は床に転がった若者の一人を巻き込んで、拘置所内の冷たい床にベシャツと音をたてて倒れた。

肉付きのいい中年の警官の下敷きとなった若者は、クスリが切れたこととは異なる種類の、悲痛な呻き声をあげている。

「ソン先輩、大丈夫ですか?!」

下敷きになった若者そっちのけで、若い警官は慌てて床に倒れこ

む先輩の身体を抱き起こそうと、その背中に手を差し伸べた。

その瞬間、又ルリと嫌な感触に手が滑り、そのまま若い警官の指は冷たい金属に触れた。

その時初めて、若い警官は、先輩の腰に深々と突き立てたナイフに必死の形相でしがみついている、先ほどの陰気な顔をした少年の姿に気がついた。

「何してるんだ、お前っ！」

若い警官は、慌てて腰に張り付くその若者を引き剥がそうとした。

「……………うっ……………うっ」

少年は意味のない嗚咽を繰り返すばかりだったが、骨と皮のようなその華奢な風貌からは想像できないほどの狂気めいた馬鹿力で、中年の警官に取りすがっていた。

「離れるっ、お前っ！」

少年の身体をやっとの思いで引き剥がすと、少年はもんどりうって拘置所の端の壁まで転がった。

「……………畜生、狂ってやがる」

肩で息をしながらそう吐き捨てる警官の前には、見るも無残な先輩の姿が横たわっている

溢れ出した血の海の中に腰から下を沈め、取りすがると同時に穿たれた楔くわくのように、腰から直角に突き出たナイフがきらめいていた。

「誰か、誰か来てくれ！ 早くっ！」

若い警官が大声で叫ぶと、拘置所内は騒然となった。

「全治、三ヶ月の重症だ」

三日後、署長室に呼び出された若い警官　チャン・チョルスは、眉間の皺を揉みながら、疲れた表情でそう告げる、署長の言葉を聞いた。

「神経を切つててな。治つても、元のように歩き回れるようになるには、長い時間のリハビリが必要だそうだ」
「俺、待ってます」

即答するチョルスに、署長は苦い表情を浮かべた。

「待つてどうする？　半年か、一年か、いつ終わるかも分からないリハビリの間、お前は遊んで暮らすのか？」
「署内の雑用でも何でもします。ソン先輩のリハビリも手伝います。ソン先輩以外とコンビを組むつもりはありませんから」

チョルスの言葉に、署長はドンツと強くデスクを叩いた。

「事件はどうする？　せっかくシッポ掴んだヤマだろう。ヤマが悠長に、ソンが回復するまで待つててくれると思うのか？」

「でも……！」

「これは、命令だ」

署長がピシヤリと、チョルスの言葉を遮る。

「明日、お前の新しい相方を決める。分かったな？ 分かったらさっさと出て行け。用は済んだ」

怒りに震えるチヨルスを冷たく一瞥すると、署長は厄介者を追い払うように、所長室のドアを指差した。

チヨルスは鋭い眼光で署長を睨みつけると、奥歯をグツと噛み締めて踵を返した。

「……つたく、狂犬が」

署長はチヨルスが部屋を出て行く前、わざと聞こえるようにそう言った。

見舞いの花束を持って、病室の前に立つ。

警察官になってから、随分と危ない橋を渡って来たが、幸運にも病院のお世話になるような事態に至ったことはない。

無機質な警察病院の白い部屋が、ドア一枚を隔ててそこにある。

その部屋の中央に置かれたベッドの上には、自分がこのソウル市警で働くようになってからずっとコンビを組んできた、粗野で教養はないが、警察官としてのほとばしる情熱を持った先輩の姿がある。

チヨルスは意を決して、病室のドアを開けた。

中では、ベッドの脇で彼を見守っていた彼の妻と幼い娘が、入ってきたチヨルスに気付いて振り返った。

「……チヨルスさん」

チヨルスは二人に向かって、丁寧に頭を下げた。

「先輩の様子は、いかがですか？」

彼女は夫の身体にかかった、白い掛け布団を直してやりながら答えた。

「今はぐっすり眠っています。痛み止めの点滴が効いたみたい」

妻は微笑むと、娘の手を引いて言った。

「私たち、洗い物をするために一旦家に帰ります。何のおもてなしも出来なくてゴメンなさい。でも、ゆっくりしていつてくださいね」

男同士の話もあるだろうからと、彼女なりに気を使ってくれたのが分かって、チヨルスは申し訳なく思い、再び深々と頭を下げた。

「後、よろしくお願いします」

そう言うと、妻は娘を連れて病室を出て行った。

チヨルスは持ってきた花束を慣れない手つきで枕元の花瓶に挿すと、ベッドの脇にあったパイプ椅子に腰を下ろした。

目の前で目を閉じて眠る男は、こうして改めて見ると、出会った頃よりも、随分と年を取ってしまったんだということを実感する。年中外を歩き回って日に焼けた黒い肌も、病院の白すぎるベッドの上では、くすんでしまい、生気がないように見えた。

「……チヨルスか？」

その時、横たわる男が、片目を開けてチヨルスを見上げた。

「大丈夫ですか？ 先輩」

チヨルスが覗き込むと、男は気恥ずかしいのか、照れたように顔を背けた。

「お前、何でこんなところにいる？」

「何でって、先輩のお見舞いに来たんですよ」

「バカヤロ、あのヤマはどうした？ こんなところで油売ってる場合じゃないだろ」

「だって、先輩がいないのに」

「ガキみたいなこと言ってるんじゃないやねえよ」

男はベッドの中から手を伸ばして、ゴチンとチヨルスに拳固をお見舞いした。

「……痛いですよ、先輩」

「痛くしたんだから、当たり前だ」

涙目になって額を押さえたチヨルスに、男は続けて言い放つ。

「お前は俺がいなきゃ何も出来ないのか？ デカイ図体して、赤ん坊と同じか？ 18の年から俺がお前に叩き込んできたのは、何だったんだ？」

高校を卒業してすぐ、ソウル市警に入ったチヨルスは、巡査から今の巡警の職に上がるまで、底辺から叩き上げてきた警官だった。同じように高卒で、事件の場数を踏んでドロ臭く生きてきたこのソンのという男が、入庁して以来のチヨルスの相棒であり、教育係だっ

た。

親子ほど年の離れたこの野放図な先輩を、チヨルスは本当の父親のように慕っていた。

「先輩以外と、コンビを組めって言われました」

「ヤマは待つてくれないからな」

恨めしげなチヨルスの呟きに、男は平然と頷いた。それから少し表情を緩めて、駄々っ子のような目で自分を見つめるチヨルスの頭をクシャクシャに撫でながら言った。

「俺が今まで教えてきたこと、お前はちゃんと分かってる筈だ。今度はお前が、後輩に教えてやる番だ。俺に義理立てする気持ちで他のヤツとのコンビを嫌がるなら、それは違うぞ、チヨルス。そう思うなら、しっかり先輩としての役割を果たして、俺を安心させてくれ」

チヨルスはまだ納得がいかないという顔をしていたが、子どものように頭を撫で続ける男のために、やがてコクリと小さく頷いた。

「お前の相方が決まった」

再び呼び出された署長室で、チヨルスは相変わらず冷たい署長の声を聞いた。

「名前は、ハン・ミンホ。今日の午後、署に到着する予定だ。顔合

わせが済んだら、早速事件の概要を教えて明日からでも捜査に入れ」
「概要つて言つたつて、いきなりは無理でしょう？ どころか署で
経験があるんですか？」

無茶な指示にチヨルスがムツとして問い返す。

署長はチヨルスと目を合わせることなく、無然として言い放った。

「経験はないが、ココはいい筈だ」

そう言つて、コメカミの辺りを指で指し示す。

「何でそんなこと分かるんですか？」

「新米だが、肩書きは『警衛^{けいえい}』。意味、分かるか？」

嫌味な調子でそう投げかける署長の言葉に、チヨルスの目が点になる。

「……『警衛』つて、まさか……」

「そう。警察大学校出身の真正正銘のエリートだ」

署長は鼻で笑つてチヨルスを見た。その目が、言外に「お前とは違つて」と語っていた。

韓国の国家警察機構において『警察大学校』とは士官学校的な意味合いを持ち、卒業後は幹部候補生としての輝かしい将来が約束されている。

それ故に、当然入学に当たつてのハードルは高く、全大学受験者数の上位5%ほどしか合格出来ないという狭き門だった。

通常、大学進学する男子が高校卒業後に身体検査を受け、学校を

休学して兵役につくところ、彼らは警察大学校卒業後に、機動隊や参謀本部での二年間の兵役義務を課せられる。その後『循環補職』じゅんかんほしょくとして、三ヶ月から半年程の短期間で生活安全課や刑事課等の様々な部署で補佐的な勤務につき、適正が認められた部門に配属されていくのである。

今回、負傷したソンの後釜として配属されるのが、その『循環補職』の座にある幹部候補生とあっては、チヨルスが動揺するの無理はなかった。

入庁以来十年、ソンとコンビを組んで現場の最前線を駆け回って来たチヨルスに、身近で警察大学校出身者を拝む機会などなかった。同じ警察官とは言え、鉄砲玉のように挿げ替えのきく下っ端であるチヨルスたちと、警察機構の中枢を担うために教育された彼らとは、そもそも住む世界が違うのだ。

チヨルスは部下を持ったことさえなかった。

それなのに、ソンの負傷という不可抗力の結果とは言え、初めて持つ部下が（一時的な『補職』であることを考慮したとしても）階級では『警査』けいさである自分より明らかな上位である『警衛』けいえいであることなど、チヨルスには想像も出来ない事態だった。

「幹部候補生って言ったって、ついこの前ようやく兵役が終わったばかりの甘ちゃんだ。事件の場数を踏んでるお前には適わないだろ。しっかり指導して……期待してるぞ」

言葉とは裏腹に、署長の目は意地悪く光る。高卒叩き上げの鉄砲玉に、エリート予備軍の手綱が握れるのかお手並み拝見。その目は、そう言っていた。

「どんな子かしらねえ」

チヨルスのデスクの上に淹れたたのコーヒーを置きながら、ベテラン婦人警官であるクムジャが呟く。

「『循環補職』ですって？ 長いこと勤めてるけど、同じ職場で働くななんて初めてよ。あーん、可愛い子だったらいいけど」

「仕事に可愛いかわ愛くないかは関係ないでしょ、姉さん」

チヨルスがムツとしてコーヒーを啜りながら言うと、クムジャは目を吊り上げた。

「毎日毎日、こんなむさ苦しい男たちに囲まれてる私の身にもなつてよ！ 目の保養くらい求めたってバチは当たらないはずよ」

「むさ苦しくて、悪うございました」

チヨルスはクムジャに聞こえないように小声で反論すると、マグカップの影でベーツと舌を突き出した。

「もう来る頃よね？ あんた、下まで迎えに行かないの？ あんたの相棒になる子でしょ」

「何で最初から、そんな特別扱いしなきゃいけないんですか？ 幹部候補生だか何だか知らないけど、新米は新米……」

チヨルスとクムジャが言い争いを始めたその時、油の切れた捜査課の部屋のドアが、キイツと音を立てて開いた。

部屋にいた皆の視線が、一斉にドアのところに集中する。

「……あの、捜査課はこちらでしょうか？」

入ってきた青年は、おずおずと部屋の者たちを見回して口を開いた。

「今日から、ここでお世話になることになりました、ハン・ミンホと申しますが……」

「……つま！？」

その言葉を聞いて、真っ先に声をあげたのはクムジャだった。頬を染め、口元を手で押さえて、青年を見つめる。

「……おい、嘘だろ？」

対するチョルスは、そんなクムジャの横で、ポカンと口を開けたまま青年を凝視した。

捜査課の空気が、一呼吸置いて急激に色めきたつ。

スラリと伸びた長い手足。

捜査課の中では長身を誇っていたチヨルスよりも、恐らく高いであろうその身長。彫刻のように整った目鼻立ちに加えて、どこぞの貴族と言っても通用しそうな、気品溢れる佇まい。

一言で言えば、彼は埃つぽく薄汚れた捜査課には、およそ場違いな人物だった。

「掃き溜めに、鶴だわ……」

「掃き溜めは言いすぎでしょ、姉さん」

思わず呟いたクムジャの言葉に、突っ込むチヨルスも、心なしかいつもの元気が感じられない。

「ほら、チヨルス……」

周囲につつかれて、チヨルスはようやくきこちない仕草で青年の前に歩み出た。

「あ……えっと……うん……あ、よく来たな。俺は、今日からお前と組んで捜査を担当することになった、チャン・チヨルス警査だ」
「よろしく願います」

チヨルスが手を差し出すと、ミンホは大きな手でその手を握り返し、直角に腰を折り曲げて、深々と律儀に頭を下げた。

「じゃあ、とりあえず署内を案内するから。付いて来な」

チヨルスは軽く咳払いをすると、捜査課の皆の視線を浴びながら、このむやみやたらに目立つ新人警官を連れて、廊下へ出た。

一時間ほどたつて一人で戻ってきたチヨルスは、ドツカリと自分の席に腰を下ろし、疲労困憊といった様子で頭を抱えた。

「ねえ、ねえ、ミンホ君は？ どうしたの？」

「帰りましたよ、今日はとりあえず。明日から取り調べの時、俺の側に張り付けます」

「すっごいハンサムだったわよねえ。背も高いし、俳優さんみたい。明日から楽しくなるわあ」

「冗談じゃないですよ！」

能天気なクムジャの言葉に、チヨルスはデスクを叩いた。

「俺たちは潜入捜査だつてしなけりゃならないんですよ！ あんな目立つヤツ、すぐに顔覚えられて、オトリ捜査にもならないじゃないですか。さつき、ちよつと署内を歩いただけでも、みんなが振り返るんだから」

「やっぱりねえ。ちよつとやさつとの美形じゃないものねえ」

「……姉さん、人の話聞いてます？」

うつとりと目を細めるクムジャの横で、チヨルスは大きな溜息をつき、再び頭を抱えた。

翌日、出勤してきたミンホを連れて、チヨルスは取調室に向かっ

た。

「今追ってる事件の資料は読んだか？」

「はい」

素直なミンホの言葉に頷くと、チヨルスは続けて言った。

「俺と、お前が来る前に負傷した先輩で、ずっと追ってたでかいヤマだ。長い時間かかって、ようやく麻薬密売グループの学生組織のシッポを掴んだ。だが、まともな自供はまだ一つも得られてない。これから自供させられるかどうかは、俺たちの腕一本にかかってるんだ」

「はい」

ミンホは神妙に頷いた。

「よく見ておけよ。お前がこれからやる仕事っていうのは、こつこつ仕事だ」

チヨルスは鋭い瞳で一瞬ミンホを振り返って言った。

「よお、久しぶりだな！」

取調室のドアを足で蹴破るなり、チヨルスは殺伐とした室内のデスクの前に座った少年に向かって声をあげた。

「今日は顔色がいいじゃねえか。あの辛気臭い面はどうした？」

チヨルスはパイプ椅子を乱暴に引き寄せると、デスクに頬杖をつけて怯えたような目を向ける少年と真正面から対峙した。

ミンホはどうしていいか分からず、チヨルスの隣りに立ちすくんでいる。

「何も、話すことなんてない」

少年は盗み見るようなオドオドした様子で声を上擦らせながらも、チヨルスに向かって言った。

「おいおい、それはないんじゃないか？」

チヨルスは薄く笑うと、いきなり少年の、伸びかけた地毛で根元が黒くまだらになった髪を鷲掴みにした。

「俺の先輩は、お前に刺されて重傷を負ったんだぜ？　俺の目の前で」

「……あの時のことは、よく覚えてないんだ」

髪を引っ張られて、少年が苦しげに顔を歪める。チヨルスは髪を掴んだまま、少年の顔をデスクに勢いよく押し付けた。

「いいか、よく聞けよ坊や。こつちも仲間をやられてんだ。取調べ中の事故なんか、日常茶飯事なんだぜ。人間の肋骨は、何本だったかな？　俺は頭悪いから、一本一本、折って数えてやるうか？」

チヨルスの手の下で、少年がヒツと息を飲む。それに続けて、別のところからゴクリと唾を飲む音が聞こえてきて、思わずチヨルスが振り返ると、ミンホが青白い顔でチヨルスを見下ろしていた。

チヨルスは軽く舌打ちして少年に向き直ると、再度頭を強く押さえつけて言った。

「何で、あんなマネした？」

口を割らない少年に、押さえつけるチヨルスの手に更に力がこもる。

「ダンマリを決め込んで、ここで肋骨全部折られるか、それとも潔く白状して、少しでも監獄暮らしを短縮するか。お前に選ばせてやる。制限時間は、三秒だ。三、二、一………」

「え？ あ………」

「はい、タイムアウト！」

チヨルスは言うなり、今度は少年の頭を掴んで引き起こすと、椅子に座った自分の腿の上に少年を仰向けに倒れこませた。

立てた膝に少年の背骨を当てたまま、髪を掴んでいた手を若者の肩に置き直し、もう片方の手は腰に置く。

そこから、一気に力を加えれば、チヨルスの膝を支軸にして宙に浮いた少年の背中は、一気に逆方向へ押されることによって、メキメキと嫌な音を立てた。

「う……うわあああああ！ 止めてくれ！ 言う、全部言うからっ！」

少年も恐怖の前ではプライドも何もかなぐり捨てて、顔をグシャグシャにして泣きじゃくりながら訴えた。

チヨルスは再び少年の髪を鷲掴みにし、グツと後ろに反らせて顔を近づけた。

「どこで、クスリを手に入れた？」

「……俺はまだ、手に入れちゃいない」

「何だと？」

不可解な言動の続きを促すように、チヨルスの手に力が加わり、少年は華奢なノド元を見せて更に反り返る。

「本当だっ！ ほんの一二回“溜まり場”に残ってたおこぼれをもらったことがあるだけで、“本物”を拝んだことなんかない。他のヤツみたいには……」

「他のヤツみたいには？ 何だ？」

一瞬、若者は唇を噛み締め答えを躊躇する。だが、チヨルスの目

に鋭さが加わり、自分の髪を掴む指が微かに動いた瞬間、既に一度学習している彼は、叫ぶように続きを吐き出した。

「溜まり場”にあるだけじゃ足りなくて、貰いに行こうとしてたんだ。もっとキメられる、上質の”

「貰いに、だと?」

「でも、俺は行く前に捕まった。探しに行かないのに! ジスクが戻って来な……」

「ちよつと待てっ!」

無理な体勢のまま、タガが外れたように話し出す少年をチヨルスが止める。

「お前は、どこへ行くこうとしてたって?」

「みんな、そこに行けばもっと質のいい『エデン』が貰えるって。でも、選ばれた人間しか行けない場所なんだ。みんな“溜まり場”から、選ばれるのを待ってた」

「だから、“そこ”がどこかって聞いてるんだよっ!」

肝心なところで噛み合わない会話に、苛立ちながらチヨルスは少年の身体を揺する。

「次は俺の番だった。ジスクも5月に……」

「おい、お前。いい加減にしろよっ!」

チヨルスは少年の胸倉を掴んで、その薄く頼りない身体を宙に浮かせたまま噛み付くように言った。

「選ばれた人間? 『^{エデン}楽園』? ご大層な名目と名前つけたって、ヤクはヤクだ! お前らは選ばれた人間なんかじゃない。列を成し

て誘惑に屈する反吐が出るくらいの甘ちゃん野郎どもが」

チヨルスは掴んでいた少年の胸倉を乱暴に離し、その身体を床に転がした。

「お前らみたいな馬鹿を先導してる奴は誰だ？ その『楽園』^{エデン}とやらはどこから出てる？」

少年は転がった姿勢のまま、膝を上げたチヨルスの固い靴裏が、真っ直ぐに自分の喉元を狙っている光景を捉えた。

「三……二……一……」

「『ペニー・レイン』だっ！ そこに行けば、『エデン』が手に入るって！」

先ほどと同じ、不気味なカウントダウンが終わる前に、少年は血の気を失って叫んでいた。

「……何だって？」

チヨルスの目が細められる。

「でも、ジスクが帰って来ないんだ！ 『ペニー・レイン』に行っ
たきり、もう一月以上経つのに」

足を下げたチヨルスに、少年は必死でしがみつき訴える。

「それで、何で先輩を刺した？」

冷たく降ってくるチヨルスの声に、制服のズボンの裾を掴む少年

の手が思わず萎縮する。

「……早くジスクを探しに行きたいのに、邪魔するから」
「お前、俺らに見つかる前、明洞ミョンドンの路地裏で何やってた？」

始めから答えの分かっている問いを、チヨルスは更に冷たく浴びせかける。

「一緒にいた男……聖智大の、ペク・ギョウンだな？」

なぜそれを？ と言うように少年が目を見開く。そんな反応にチヨルスは嘲笑で答えた。

「ヤツがどうなったか、覚えてるか？」

少年は今度は力なく首を横に振る。

「気が動転してたから……」

「一人で逃げたよ。“選ばれた人間”であるはずのお前を置いてな。気が動転してた？ 覚えてない理由はそれじゃないんじゃないか」

チヨルスはしゃがみこんで、少年の顎を掴んだ。

「捕まる直前にも、ヤクをやってた！ そうなんだろ」

チヨルスの怒鳴り声が取調べ室にこだまする。

「違う！ ヤクなんかやってない。だって、尿検査も陰性で……」
「そうか？」

つられて大声を出した少年に、とぼけた顔でチヨルスは笑う。

「じゃあお前は、素面すめんの状態じょうたいで、先輩を刺したってことだな。ヤクのせいで普通の精神状態じゃなかったなんて、言い訳は立たなくなった。お前が犯したのは、立派な殺人未遂だ」
「そんなんっ！」

今更チヨルスに嵌められたことを悟った少年は、慌てて言い募る。

「俺はジスクを助けるためにっ」

「“警官を刺せ”って、天啓でも下りたことにするか？ ヤクの代わりに、イカした精神状態を立証してみるか？」

掴んだ頬の肉を通して、チヨルスの握力で歯が圧迫されてミシリと音を立てたのが分かった。少年の顔が苦痛に赤く染まる。

「今の、記録取りましたね？」

チヨルスは少年から手を離さぬまま、先ほどから、暗い取調室の片隅でペンを走らせていた、年老いた警官を振り返った。

闇が微かに動いた気がして、その書記官が頷いたのだと分かった。ミンホはその時初めて、書記官の存在に気が付いた。それほど、完全に気配を消し去って、その書記官は取調室の闇に溶け込んでいた。陰鬱な空気に、まるで幽霊に遭遇したかのように、ミンホの背中を冷たい汗が伝う。

「“溜まり場”の奴等じゃ、ダメだ……」
「ああ？」

ボソツと呟いた少年の言葉に、チヨルスが耳を寄せる。

「“溜まり場”の仲間じゃない俺が、やっと……やっと頼んで、ようやく『ペニー・レイン』に行けるようになったんだ。俺が、ジスクを助けに行かなくちゃいけないんだ」

「何、ワケの分からないことを言ってるんだ？」

チヨルスは呆れたように返答する。

「お前は誰のことも助けたりできない。これから気が遠くなるほど長い時間を、塀の中で過ごすんだ」

少年を乱暴にうち捨てて、チヨルスが立ち上がる。

「行くぞ」

苛立たしげにミンホに声をかけ、取調室を後にする。
廊下を歩きながら、ミンホを振り返ることなく言った。

「ボーっとするな。俺らの仕事がどういうもんか分かっただろ？」

答えに窮するミンホを見て、チヨルスは冷たく笑った。

「お前、俺が怖いか？」

「……いいえ」

「人を殴ったことは？」

「……あります」

「どこで？」

「大学のテコンドーの授業で、手が滑って……」

情けないミンホの答えに、チヨルスは思わず失笑した。

「ここは大学でもなければ、今は授業中でもない。これから何度も、手を滑らせなきゃならねえ時が来るぞ」

「……はい」

「大丈夫かあ？ ボクちゃん」

一瞬、思わずムツと鼻白んだミンホを見て、チヨルスは声をあげて笑った。

「まあ、いいさ。今にお前も、素手で人を殴るのを何とも思わなくなる」

そう言って踵を返すと、チヨルスは自分より背の高いミンホを従えて歩きながら、思索するように顎に手をやった。

「……だが、よりによって『ペニー・レイン』とはな」
「え？」

聞き返すミンホに、チヨルスは足を止めずに告げる。

「厄介だって言ったんだよ……そのうち分かるさ」

暗く重く、今にも落ちてきそうな空に、およそ不釣り合いな明るい歌声が吸い込まれていく。

ハスキーな子どものような声はよく響き、気分に乗ってきた彼が勝手なアレンジを加えてシャウトすると、通りで残飯を漁っていた猫たちが、ビクツと身体を震わせて逃げ出した。

その様子を見ていた彼は、ちよつと心外だというように唇を尖らせて、再び鼻歌の続きを歌い始めた。

彼の手にはモップが握られ、足元には水の入ったバケツがある。先ほどから彼は、大きく道路一面に広げられた黒いビニールシートの上を、熱心に擦って掃除している。これは、彼の大切な商売道具で、組み立てれば、大きな黒いテントに早変わりする代物だった。

身体を揺らす度に、彼の左耳に下げられたドロップ型のピアスがキラキラと輝く。腰を軽快にスイングさせながらモップを操る彼は、黒いステージの上を自在に動き回るエンターティナーだった。何度目かのターンを決めて振り返った時、さっき逃げられたとばかり思っていた猫たちの中に、ただ一匹だけその場に居残り、ジツと彼を

見つめている猫がいた。

アバラが透けて見えるほどに痩せていて、灰色にくすんだ毛並みは、元がどんな色だったのかさえ分からない。

「さっすが、オンマ！ お前はジャズの何たるかを分かってる！」

感心して指を鳴らす彼に、猫は興味無さげに、ボリボリと耳の後ろの、もう大分薄くなってしまった毛を掻いた。

その時、ふいに落ちてきた冷たい雨が一粒、上機嫌な彼の頬を打った。

「っあ」

思わず手を止めて空を見上げる。

限界まで雨を溜め込んだ雲が、辛抱できずに抱えた雨を地上に落とし始めた。

「……雨だ」

彼は手にしていたモップを投げ出すと、ビニールシートの横に止めてある大きなキャンピングカーに向かって走り出した。

「兄貴ヒイマン！ 兄貴ヒイマン！ 降ってきたよ」

車に近付くほどに、うまそうな肉の焼ける匂いが漂ってくる。

「天気予報、外れたな」

ジュージューと肉の焼ける音の合間から、低く楽し気な声がそれに答えた。

「急げよ、ナビ。開店準備だ」

「イエッサー！」

飛び上がった手を叩きながら、肉の匂いが充満したキャンピングカーのステップに足をかける。

そこで彼は思い立ったように、地面に広げたままの黒テントの向こうを振り返った。

「おいで！ オンマ！」

彼の声に誘われるまま、雨の中で身づくろいしていた灰色の猫は駆け足で黒テントを横切り、ステップを上がって彼の脇をすり抜けた。

猫が車内に入ったのを確認すると、彼は二人と一匹を雨から匿ったキャンピングカーのドアを閉め、中へと消えて行った。

降りだしたな

捜査課の自席に座って、何とはなしに窓の方を見つめていたミンホは、あつという間に窓にいくつも筋を作り出していく雨の様子を眺めていた。

警察署内は、たとえ真夏日であっても、いつもどことなく薄暗くて湿っぽい。

ましてこのような雨の日だったら尚更だ。

先ほど先輩婦警のクムジャに淹れてもらったばかりのコーヒーに口をつけると、無意識に大きな溜息が漏れた。

こんなに暗いと、赴任早々に受けた取調室での洗礼を思い出す。

気配を完全に消した、取調室の闇の中に住む書記官 彼の名はノ・ヒチョルと言い、若い頃は腕利きで知られた刑事だったそうだが、薄い髪に彼がまとった幽霊のような陰鬱いんうつな空気は、廊下ですれ違っただけでもミンホをゾツとさせた。

そして、チャン・チョルス

相手が容疑者とは言え、暴力を振るうことに何の躊躇も見せなかった。あの目は、決して脅しなどではなかった。あのまま少年が自白しなければ、本当に骨の一本や二本簡単に折っていただろう。

狂犬

他の警官が影で囁くのを聞いた、チョルスの影の通り名。

不名誉な名に違いないが、彼にはピッタリだと思った。
相手と言われても、あの鋭い眼光には、未だに慣れることが出来
ずにいる。

「おい、一人で黄昏れてないで、出掛けるぞ」

そんなことを考えていた矢先にいきなり声をかけられて、ミンホ
は思わず飛び上がって、コーヒーの入ったマグカップを取り落とし
てしまった。

「大丈夫？ ミンホ君?!」

派手な音に、真つ先に飛んできたのはクムジャだった。

「あ、ごめんなさい。僕、片付けます」

「いいのよ、私に任せて。洋服濡れなかった？」

甲斐甲斐しく世話を焼くクムジャの後ろで、チヨルスは呆れたよ
うに言った。

「声かけたくらいで何ビクついてんだよ、お前。さては、勤務中に
エロイこと考えてたんだろ？」

「あんと一緒にするんじゃないわよっ！」

ミンホが否定する前に、クムジャが猛烈にチヨルスに喰ってかか
る。

「だいたい、あんたはね」

クムジャのマシガンのようなダメ出しが始まり、チヨルスが一

歩一步後ずさりを始める。

(おい、早く出るぞ)

チヨルスは声を出さずに口の形だけでミンホにそう告げると、クムジャが息を継いだ瞬間に身を翻した。

「行くぞ、ミンホ。急げっ！」

ミンホもチヨルスの後に続いて駆け出す。

「あっ！ ちょっと、待ちなさいよ、あんたたち！」

クムジャの悔しそうな声は、捜査課のドアが閉められると同時に止んだ。

チヨルスはそのまま、警察署の地下駐車場まで降りていき、そこで皮ジャケットのポケットに手を突っ込むと、車のキーを取り出した。

「乗れよ」

黒いセダンの前に立つと、ミンホを振り返り、助手席を顎でしゃくった。

「どこへ行くんですか？」

「来れば分かる」

それだけ言うと、チヨルスはさっさと運転席に乗り込んだ。

ミンホも言われたとおりに助手席に滑り込み、きちんとシートベルトを締めた。

その様子を横目で見ていたチヨルスは何も言わなかったが、口の端が不自然に歪んで、笑いを噛み殺しているのがミンホには分かった。

荒い運転で地上へ出ると、本降りになった雨がフロントガラスを叩き出した。

「こりゃいいや」

チヨルスがハンドルを握りながら、ニヤリと笑う。

「いい具合で降ってるから、開店してるのは間違いない」

「もしかして、あの取調べの時言ってた……」

「『ペニー・レイン』だよ」

ミンホの言葉を受けて、チヨルスが答える。

「どこにあるんですか？」

「さあ」

「さあ？」

怪訝な顔で聞き返すミンホに、チヨルスは口の端を更に吊り上げて笑ってみせた。

「営業時間も、場所も、誰も知らないのさ。分かっていることと言えば、ただ雨が降った時に営業することだけ。神出鬼没、いつどこに現れるか分からない。せいぜい雨が止まないように、祈ってる」

そう言つと、チヨルスは乱暴にアクセルを踏み込み、雨の降るソウルの街を疾走していった。

激しく振り出した雨が、黒いテントを叩く。勢いよくビニールの屋根を弾く雨音は、しかし、店内の喧騒には適わず、中にいる者には届かない。

ただのテント屋台に毛が生えた程度のお粗末な外観に反して、二十畳ほどの店内は意外に広々としている。店の壁には往年のジャズの名曲のレコードジャケットがディスプレイされ、静かに流れるピアノ曲のBGMと相まってこの店の経営者の趣味の良さを感じさせるが、薄暗い空間にごった返す客の声で、そのほとんどは意味のないものになっていた。

「せんせえー、まだ飲みたりなあい」

「あん、せんせえ、私もお」

「いいよ、いいよ。好きな頼みなよ」

一番奥のテーブルでは、ソファアに深く腰をかけた男が、左右に座らせた露出度の高い服を着た女の肩に両手を回し、上機嫌で笑っていた。

斜めに被った英国貴族のような帽子がいかにも気障きざな印象のその男は、女の肩越しに軽く手を上げて、通りかかったボーイを呼び止めた。

「ねえねえ、オーダー頼んでいい？」

きつちりとアイロンがけされた白いシャツに黒いベストを羽織ったボーイは、チラリと男を振り返った。店の暗い照明の中では、金色に近い明るい茶色の髪が却って引き立ち目立っていた。片耳だけ

に飾られたピアスが、彼が動くたびに光を反射してキラキラ揺れる。

「先生、お金あるの？」

首をかしげて小生意気な視線を送って寄こすそのボーイに、男はますます笑みを深くした。

「心外だなあ。俺、ツケで飲んだことなんかないよあ」

「それは、知ってるけど」

ボーイは困ったように眉を寄せ、渋々ズボンの後ろポケットから、オーダー表を取り出した。

「ご注文は？」

ボーイが尋ねると、男は女たちに回していた手を解き、真っ直ぐボーイを指差して言った。

「ナビちゃん一つ、お願いします」

「はあ?!……っうわっ! ちょっと!」

言うが早いか、男はボーイの手を掴んで、そのままグイッと引き寄せた。

ボーイは女と男の膝の上にダイブするような形になり、女の方から抗議の悲鳴があがる。

「ちょっと、君、どいてくれない」

さっきまで隣りにはべらせて喜んでいたくせに、男は笑顔で女に席を立つよう促し、開いたスペースにボーイを座らせ、先ほど女に

していたようにその肩に手を回した。

「どんなお酒より、俺はナビに酔いたいな」

「っな?! ちょっと、離してよっ!」

「ほっんと、いつ見ても、可愛いよねえ」

いつの間にか両手をボーイの肩に回して抱きしめると、横からボーイの頬にキスするような勢いで顔を近づけてくる。

「ちょ……本当に、止めて! 兄貴!^{兄貴} 兄貴、助けてっ!!」

タコのように唇を尖らせて、ボーイの膨らんだ頬に吸い付こうとしている男を力いっぱい両手で突っぱねて、ボーイは店の奥に向かって叫んだ。

その時、男の頭の上でスコーンと小気味良い音が響いた。

衝撃で、男の被っていた帽子が前にはじけ飛ぶ。

パーマを当てたまま放っておいた伸びかけの髪が、柔らかくカールして男の横顔を彩る。

「困りますね、お客さん。ウチは、そういう店じゃないんで」

男の背後には、ボーイと同じようにアイロンの利いた白いシャツとベスト だが、その上に白いエプロンを巻いた 姿の男が、片手にフライパンを持って立っていた。

「ジェビン兄貴!!」^{兄貴}

ボーイは救われたというように、男の手を振りほどいて、そのエプロン姿の男の背後に隠れた。

「うちの大切な従業員を、あんまりいじめるなよ」

「いじめてなんかいないよお。軽くチューくらい、アメリカじゃ当たり前前のスキンシップよ」

「生憎ここは、儒教の国、韓国だぜ？」

ニツコリ微笑むその顔は、背筋がゾツとするほどの美しさだ。どこか作り物めいて冷たく見えるのは、あまりにも整いすぎた顔立ちのせいだろう。薄暗い店の照明に反射する瞳は、色彩が薄く、灰色がかって見える。

「今度うちの弟に触ったら、ペナルティ料金取るから」

「へえ？ お金払ったら、触ってもOKなワケ？」

男も負けずに笑顔で言い返すが、フライパンを持った男と睨みあうこと数秒　それで、完全に勝負はついた。

男はガツクリと肩を落とし、手をヒラヒラと振った。

「分かった、分かりましたよ！　本当、ツレナイんだから」

ブツブツ言いながら、既に氷が解けて味の分からなくなったブランドーを手に取る。

その時、テーブルの下で睨みを利かせていた灰色の猫と目があつた。

「やだなあ。おたくまで牽制することないんじゃない？」

猫の機嫌を取るように、男はテーブルに載っていたチーズを干切つて投げてやる。

だが、猫は醒めた目付きで一瞥しただけで、尻尾を降りながらク

ルリと方向転換してしまった。

「ツレなさ加減は、飼い主に似るのお？」

嘆きの声を上げて、懲りずに身体は再び目をつけたあのボーイの元に向き直る。

「あー、でも、ナビヤア（ナビちゃん）。何か困ったことがあったら、いつでも俺を頼ってね。例えば、妊娠したりとかあ」
「するかっ！！」

真っ赤になって叫びながら、ボーイは男に向かってオーダー表を投げつける。それは見事に男の頭にクリーンヒットした。

その時、店のドアが開き、店内にザーッとといった雨の音が入り込んできた。

「……やっと、見つけた」

店の入口には、ずぶ濡れになりながら、肩で息をする二人の男が立っていた。

二人とも180センチはゆうに超える長身で、入口に立っているだけで相当な威圧感があった。

「あれえ？ 珍しい顔」

オーダー表の攻撃を受けた頭を擦りながら顔を上げた男は、突然乱入してきたこの珍客に目を細めた。

「久しぶりだね、チョルス」

すると、フライパンを片手に持った男もそれに気付いて、まだ入口に佇む男に微笑みかけた。

「……雨が降ってるうちに、見つけられてよかったぜ」

入口に立った二人　　チョルスとミンホは、雨の雫を全身からポタポタこぼしながら、店の中に入ってきた。

ボーイが慌ててタオルを取りに奥へ走る。

「相変わらず、神出鬼没もいいとこだな。まさかこんな高架橋の下で、店広げてるなんて。車で探したら、見つからないはずだぜ」
「最近は取り締まりが厳しくてね。チョルスのお仲間が、頑張ってくれてるから」

フライパンを持った美貌の男は、サラリと笑顔で皮肉を口にする。それに反応して、チョルスの切れ長の目も心なしか吊り上がった。

「……にしちゃあ、随分繁盛してそうじゃないか。いつ開店するかも分からないような店に、どこからこんなに客が集まってくるんだ？」

「さあ？ それは俺にも分からないよ。雨に聞いてみたら？」

完全に一枚も二枚も上手の美貌の男に、チヨルスはギリツと唇を噛んだ。

「でも見つけ出しちゃうあたり、執念だよねえ。オマワリの執念深さは、本当尊敬に値するよ」

その時、突然話に割って入ったソファアの男に視線を移したチヨルスは、皮肉気に唇を歪めた。

「これは、これは、オーサー・リー先生じゃありませんか」

両手を広げて、わざと恭しく頭を下げる。

「やめてよー、オマワリに『先生』なんて呼ばれたくないよお。嘘寒くなるから」

ふざけた口調だが、笑っているのは口元だけだった。

「相変わらず、オマワリがお嫌いですか『リー先生』」

「俺から未来の輝かしい『先生』の称号を取っ払ってくれたのは、あんたたちだからね」

「その割には羽振りが良さそうじゃねえか」

「お陰さまで。本当の『先生』になろうがなるまいが、俺がどこでも引っ張りダコなのは変わらないみたい。ほら、俺、腕だけは確かだから」

オーサーと呼ばれた男は、先ほど美貌のこの店のオーナーにフライパンで叩かれた際にはじけ飛んだ帽子を拾い上げると、また気障きざらな仕草で自分の頭に載せた。

「『ペニー・レイン』の常連客になれるなんて、あんたくらいのもんだ。一体、どこで嗅ぎつけてる？」

チヨルスの言葉に、オーサーはクスクスと笑った。

「イヤだなあ。ただの勘に決まってるじゃない」

「随分、都合よく働く勘だな」

「もしくは、『愛』かな」

そう言うと、オーサーはタオルを手に戻ってきたばかりのボーイに向かってウインクしながら言った。

「その、可愛いナビちゃんへの、ね」

チヨルスの視線がボーイを捕らえ、その鋭さにボーイの身体が一瞬強張る。

「あーあ、可哀相に。ナビちゃん、怖くないでちゅよー、このお兄さん、怖いのは顔だけだからあ」

「ふざけるなよ、先生」

チヨルスは座ったままのオーサーの肩を軽く押して威嚇する。

オーサーの顔から笑みが消えた。

「最近、学生の間で出回ってるタチの悪いクスリの噂は知ってるよな？」

「何のこと？」

「今さらとぼけるなよ」

チヨルスはオーサーを見下ろしたまま、低い声で呟いた。

「あんたなら、どんなクスリでも都合付けられる筈だ。一介の医学部生だった時から、その手の黒い噂が耐えなかったあんただ」

「イヤだなあ。『潜入』 捜査の『潜入』 って、『先入観』の『先入』 だったの？」

二人の間に緊張が走る。

その張り詰めた空気を壊したのは、タオルを手にしたまま立ち尽くしていたこの店のボーイだった。

「……あのお」

そこにいた皆が、一斉にボーイを振り返る。

「取り敢えず、拭いてからにしませんか？」

ボーイはチラリと、チヨルスとミンホの足元を見た。

二人の足元には、立派な水たまりができていた。

「あ、すみません」

先に謝って、ボーイからタオルを受け取ったのはミンホだった。続いてチヨルスも、受け取ったタオルでびしょ濡れになった頭や身体を拭いた。

「捜査途中で、この店の名前が出た」

身体を拭きながらチヨルスはボソツと低い声で、この店のオーナーである美貌の男に向かって言った。

「例のクスリを流してる本拠地だとな」

「“例の”？」

「『エデン』だよ。分かってるだろ」

「さあ、何のこと？ 『エデン』なんて、初耳だよ」

チヨルスは唐突に本題を切り出して男の表情の変化を見て取ろうとしたが、あっさり流され、効き目は無かった。

チヨルスは更に問い詰める。

「だったら、言い方を変えてやる。学生の間で出回ってるクスリの流通ルート焙り出したい。証言に基づけば、ここもそのルートの一つだ。だが、証拠がない以上、お前らを今すぐしよっ引くワケにもいかない。だから、尻尾を出すまで張らせてもらう」

「何言って……いきなり来て、勝手すぎるよっ！」

男の代わりに猛抗議しようとカウンターの中から身を乗り出してきたボーイを見て、チヨルスは内心ほくそ笑んだ。

「やましいことがなければ、この程度の捜査協力なんてわけはないはずだ」

冷たく突き放すチヨルスに、更にボーイが何事か言い返そうと開きかけた口を、背後から男が塞ぐ。

「いいから、ナビ」

口を塞がれたまま、ボーイが心配そうに美貌の男を見上げれば、男は反対側の手でボーイの頭をポンポンと叩いて、大丈夫だ、と言うように微笑んだ。

子どものように過剰反応してみせるボーイとは違って、チヨルスの言葉に、男は動揺する風でもなく、フワリと微笑んで言った。

「俺は構わないよ、別に。張られて困るようなことは何もないから」

ボーイは男の腕の中から、恨めしげにチヨルスとミンホを睨みつけている。

「ただ、一緒に動くのは勘弁してよ。“雨の日にだけ出現する、神出鬼没の黒テント”それが、我が『ペニー・レイン』の『ペニー・レイン』たる所以だからね。どこに店を出すかは企業秘密だし、警察と言えどそれを知って先回りされたら、店の営業妨害になるから」
「僕らが犯人って、決まったわけでもないのに！ オマワリなんかにウロウロされて、売り上げ落ちたら、どう責任取ってくれるのさ！」

自分の口を塞ぐ手が緩んだ途端に、男に追従して、ボーイが子どものような甲高いハスキーボイスで叫ぶ。

チヨルスは何かを言おうとしたが、グツと言葉を飲み込んで、渋々頷いた。

「……分かった。だが幸い、季節は梅雨だ。これから何度も、寄せてもらおうぜ」

「どうぞ。得意客が増えるのは嬉しいよ」

美貌の男が微笑むと、チヨルスはフンツと鼻を鳴らして踵を返した。

「帰るぞ、ミンホ」

「え？ もうですか？」

驚いたミンホが、慌ててチヨルスの後を追う。

「チヨルス！」

その時、立ち去ろうとするチヨルスの背中に向かって、男が声をあげた。

チヨルスがゆっくりと振り返る。

そんなチヨルスに向かって、男が一步踏み出す。その時、ミンホは微かだが、男が左足を引きずっていることに気が付いた。

「だけど、いつか手錠をかけられるなら、俺はチヨルスがいいよ」

妖艶ささえ漂わせて、男が微笑む。その笑みは、同じ男性であることを意識しても尚、正気を持っていかれそうな程の艶やかさだっ

た。

隣りで、チヨルスがゴクリと唾を飲む音が聞こえた。

「行くぞ！」

チヨルスはそう言うと、自分の頭の中の男の幻影を振り払うように首を振って、店の出口に向かった。

「またのご来店、お待ちしております」

二人の背中を、嫌味たっぷりなハスキーボイスが追いかけてくる。ミンホが一瞬振り返ると、オーナーと揃いの金色の髪をしたボーイが、舌を出しながらシッシと手を振っているのが見えた。

「さっきの店のオーナー、知り合いなんですか？」

帰りの車中で、むっつりと押し黙ってハンドルを握るチヨルスに向って、ミンホは尋ねた。

「……まあ、古いな」

チヨルスには歯切れの悪い口調だった。

「昔ちよつとした事件があつて、その関係者だった」

「あの、オーサーって人もですか？」

「ああ、あいつは別件」

チヨルスはハンドルを切りながらスピードを上げる。

オーサー・リーという彼の名と英語読み（韓国語での本来の発音は李である）についてミンホが尋ねると、チヨルスは彼が韓国系アメリカ人なのだと教えてやった。

「あいつは、いいところのお坊ちゃんだな。元は名門医学部期待のホーブだったんだよ。だけど、色んな黒い噂塗れで、結局はインターンになる前に退学になって、地下に潜った。医者としての実績は、無免許状態で積んできたクセモンだ。ナヨナヨした外見に騙されんなよ。外科に内科、半分趣味も兼ねた婦人科に美容整形外科、おまけに精神科まで、腕は玄人裸足の超一流ときてる。全く、ふざけた野郎だよ」

「あの人が、怪しいと？」
「さあな」

チヨルスの答えに、ミンホは意外な顔をした。店での様子からも、チヨルスはすっかりあのオーサー・リーという男が、怪しいと踏んでいるものだとばかり思っていたからだ。

「確かに今まで何度も、色んな事件の容疑者候補になってる奴だし、裏社会では知らない奴のいない有名人だ。だが、医学部を退学になるきっかけになった事件以外で、今までただの一度も逮捕されたことはない。頭の切れる奴だから、簡単に尻尾出すような真似はしないんだ」

チヨルスは片手をハンドルから離し、親指の腹で思索するように鼻を擦った。

「クスリの横流し、しかも学生相手なんて、わざわざそんな派手でリスクの高い方法を、あの男が選ぶなんて考えにくいんだがな」

「じゃあ、どうして張り込みを？」

「ただ、あいつが犯人にしろそうじゃないにしろ、アレだけ派手に店でやりあえば、本当のホシへの警告にもなるだろう？ 主犯じゃなかったとしても、あの男が関ってる可能性は捨て切れない」

狂犬の名前そのままに、勘だけで動いているのかと思われたこの男が、意外にも冷静に事態を観察していたことに、ミンホはほんの少し敬意の情が生まれるのを感じていた。

「……僕に、今できることはありますか？」

突然のミンホの言葉に、チヨルスはキョトンとした顔で助手席のミンホを見たが、やがてニヤリと笑って言った。

「てるてる坊主逆さにして、警察署の軒先に100個吊るしとけ」

「降ってきた！ 行くぞ！」

最近のミンホの日課は、警察署の窓から空を見上げることになりつつあった。チヨルスが冗談で言った『てるてる坊主100個』は、律儀なミンホによって本当に仲良く100人並んで、軒先で逆立ちしている。

雨が降り出せば、朝でも昼でも夜でも、時間は関係なくチヨルスと二人で外へ飛び出した。

『ペニー・レイン』の出没先は大変手強く、初日に見つけた高架橋の下には二度と姿を現すことはなかった。いつも分かりにくい場所にひっそりと現れ、一度現れた場所には二度と出店することはなかった。

運良くすぐに見つかることもあれば、一晩ソウルを走り回っても、見つけ出せないこともしばしばだった。

「チヨルスヒョン！ バック、バック！」

助手席から、細い路地裏の奥に僅かな明かりを捕らえたミンホが叫ぶ。

チヨルスは急ブレーキを踏んだため、後ろの車から盛大にクラクションを鳴らされた。

「テントが見えました」

「ったく、いつもいつも、変なところに現れやがって」

チヨルスは車の窓を開け、威嚇してくる後ろの車に暴言を吐くと、路地の一つに頭から突っ込んで、Uターンの準備をした。今日の雨は霧雨で、路地全体が灰色にくすんで見えた。

「いらっしやませー」

店のドアを開けると、聞き慣れたハスキーボイスが出迎えてくれた。

ここ何日か耳にただけで、頭から離れなくなる不思議な声だ。ミンホはいつも、泣きすぎて声が枯れた子どものように思う。

「あれー？ 今日随分早く見つかったね」

屈託無く微笑むのは、この店のボーイ、ナビだった。

初日に会ったばかりの時は、強引に捜査を進めようとするチヨルスたちに、毛を逆立てる猫のように敵意剥き出しでいたのに、二度三度と二人が店を訪れる内に、徐々に彼元来の人懐っこい笑顔を見せるようになった。

「ジエビニヒョーン、お二人さん、ご来店だよー」

店の奥に向かって声をかける。

一応潜入捜査ということになっているから、二人が警察官であるということはこの店では秘密になっている。

チヨルスとミンホは、最近の二人の定位置であるカウンター席に腰を下ろした。

今ナビがいるカウンターの中は、奥の出入り口でキャンピングカーと繋がっていて、車の中が厨房の役割を果たしていた。

「はい、タオル」

ナビがカウンター越しにタオルを手渡してくれる。いつもナビが渡してくれるそれは、洗剤の香りなのか、甘く柔らかな匂いにする。

「……………ありがとうございます」

ミンホはそれを受け取って、思わずナビをジッと観察する。

「……………ん？」

真面目なミンホからすれば『髪が可哀相ですよ』と忠告してやりたくなるほど、徹底的に色を抜いて少しパサついてしまった金色の頭頂部の髪をピヨコンと揺らして、ナビが目を上げる。

「……………いえ、すみません」

ミンホが慌てて目を逸らすと、ナビは眉根を寄せて怪訝な顔をしたが、それ以上特に気にする様子もなく、再びカウンターの中で皿洗いを始めた。

ザーザーと派手に流れる水音、ガシャガシャと皿が鳴る音……………良く言えば豪快、悪く言えばガサツ極まりないその手つきに、ミンホは内心ハラハラしながらナビの手元を見つめる。

『ペニー・レイン』に通えば通うほど、ミンホにとってこのボーイは不可解極まりない存在になっていた。

店に通い出して暫らく経ち、捜査と言いつつも徐々に向こうの警戒心も解けてきた頃、店のオーナー、ジェビンは、初めてミンホに自己紹介をしてくれた。

それによれば、ナビはジェビンの弟で、9年前両親が亡くなった

のをきっかけに、この移動テントの店をオープンさせて以来、兄弟二人肩を寄せ合って暮らして来たと言うことだった。

だが、ジエビンと揃いの金色の髪にしているものの、よく見れば顔立ちは似ても似つかない。

色素の薄い灰色の瞳や、高い鼻筋、男とは思えないような抜けるような白さの肌を持つ長身の兄ジエビンに対して、弟のナビは、小柄で華奢で、小さな顔の輪郭にはまだふっくらとした幼さが残り、可愛らしくはあっても、ジエビンを形容するのに相応しい『美貌』という言葉では、お世辞にも括れないタイプだった。

哀れそうなミンホの眼差しを感じ取ったのか、ナビはプツと頬を膨らませて、手にしていた布巾を放り投げて言った。

「何だよ？ どうせお前も、僕がジエビニヒョンに似てないって言いたいんだろ？」

「いえ……僕は、そんな別に……」

凶星を突かれてうろたえるミンホに、ナビはますます唇を尖らせて言った。

「お前、グリム童話知らないの？ 『醜いアヒルの子』って言うでしょ？ 僕は成長前の白鳥なんだから、ジエビニヒョンも言ってるもんね」

「『醜いアヒルの子』は、グリムじゃなくて、アンデルセンなんじや……」

「とにかくっ！ 僕もジエビニヒョンの年になったら、モムチャン（筋肉マン）、でオルチャン（イケメン）になるんだから！」

「……はあ」

鼻息荒くそう捲くし立てられては、返す言葉も見つからない。

呆気に取られるミンホの前で、ナビは冷蔵庫から取り出した牛乳を、腰に手を当てて、これ見よがしにミンホの前で一気に飲みし見せた。

まるでビールでも飲み干したように、プハーツと息を吐きながら白く汚れた口元を拭くと、ミンホの胸元に人差し指を突きつけて言った。

「お前より、デカくなってやるからなっ！」

宣戦布告のようにそう告げると、ナビはフンツと鼻を鳴らし、空になった牛乳瓶をシンクに投げ入れた。

「ところであなた、本当の名前は何て言うんです？」

機嫌を損ねたついでに、ミンホは前から聞いてみたかったことを思い切って切り出した。ナビはカウンターの向こうで、キョトンとした顔でミンホを見ている。

「まさか“ナビ”が本名なワケないでしょう？ 猫につける名前じゃないですか（韓国では日本語の“タマ”と同様のニュアンスで使われる名前）」

「おっ前！ 本当に失礼なヤツだな！」

今にもカウンターを飛び越えて行きそうなナビを、背後からこれまでの二人のやり取りをクスクス笑いながら見ていたジェビンが止める。

「まあまあ。ナビはナビだよ。風変わりだけど、覚えやすくっていいだろ？ それに、こいつに合ってる。そう思わない？」

そう言って艶やかに微笑まれてしまえば、ミンホも頷くしかない。確かに、クリクリとよく動く黒目勝ちの瞳に、落ち着きはないが俊敏によく動き回る様は、猫のそれによく似ていた。

「いらっしやい、チョルス、ミンホ」

カウンターの奥のスライド式のドアが開いて、この店のオーナー、ジェビンが顔を出した。最初にこの店を訪れた時に目に留めたジェ

ビンの左足について、ミンホが複雑な表情で見ているのに気が付いて、ある日ジェビンは『昔からの古傷だから、気にしないで』と微笑んだ。自分がそんなにも不躰な視線を送っていたのかとひどく恥じ入ると同時に、ミンホは改めて人の視線や気持ちの動きに敏感なジェビンという男の不思議を垣間見た気がした。

「早かったね」

そう言って、ジェビンが微笑む。

「三日前はとうとう見つからなかったからな」

チョルスも負けずに、ニッコリと微笑む。

「ハハハ、じゃあ辿り着いたお祝いに、これはオレからのオゴリ」

そう言うと、グラスを二つチョルスとミンホの前に置き、続けて戸棚からブランデーのボトルを取り出した。

「……あ、僕は、勤務中ですから……」

「いただくよ」

ミンホの声を遮って、チョルスがグラスに手をかける。

ジェビンは笑いながら頷くと、二つのグラスにブランデーを注いだ。

「チョルスヒョンッ！」

ミンホが小声でたしなめ、チョルスの膝を打っても、チョルスは涼しい顔でブランデーを一気に煽った。

「相変わらず、いい飲みっぷりだね」

ジェビンは目を細めて微笑んだ。

「お前も、付き合えよ」

チヨルスはそう言うと、ジェビンからブランデーのボトルを奪った。

ジェビンは挑発に乗るように、自分の分のグラスを取り出し、カウンターに置いた。

見詰め合う二人の間に、殺伐とした空気が流れる。

「チヨルスヒョン」

気が気ではないミンホだが、二人は濃厚なブランデーの匂いを撒き散らしながら酒をついで飲みあうだけで、特にそれ以上掴み合いを始めるような雰囲気もなかった。

その時、他のテーブルから、だいぶ出来上がった状態の集団が声をあげた。

「おい、さつき注文した酒、まだ？」

カウンターの中で洗剤の泡を飛ばしながら皿洗いに没頭していたナビが、ハツとしたように顔を上げる。

「あっ！ すみませんっ！ ただいま！」

ミンホのすぐ横で、カウンターに手をかけ、それをヒラリと飛び越えたナビを、ミンホは啞然としたまま口を開けて見送った。

身軽　だが、メチャクチャだ。

本物の猫じゃあるまいし。

カウンターに置いてあるグラスやら何やら、一歩間違えば全部なぎ倒してしまってもおかしくないのに。

だが、ナビの兄である前に雇い主であるはずのジエビンは、相変わらずチョルスとの無言の攻防に意識を集中させているのか、弟に注意する様子もない。

ナビは手にしたステンレスの盆の上に注文されたカクテルをいくつも乗せ、危なっかしい足取りで若者のいるテーブルに向かう。

ミンホは一度チョルスとジエビンの様子を振り返ってから、思い切って席を立ち、ナビの後を追った。

「お待ちせしましたあ」

少し舌足らずな声で、ナビが客のテーブルに到着する。

「えーっと、これが『思い出のサンゴ礁』、そんでもってこれが、『夏の夜明けのハーモニー』……」

詩的なのかクサイだけなのか、そのセンスも微妙な長々しいカクテルの名前を、ナビはポケットに入れたアンチヨコを隠そうとせず、堂々と取り出して読み上げた。

「ご注文は、お揃いででしょうか？」

言い終えた満足感に胸を張った時には、既にテーブルを囲んだ男たちはカクテルに口をつけていた。

ナビが開いた皿やグラスを盆に載せて帰ろうとした時、不意にナビの動きが止まった。

ナビの背後で、少し離れたところからそつと様子を窺っていたミンホの目に、不自然な動きで、モジモジと腰を揺するナビの姿が見えた。

「追加、頼むよ」

ナビにそう話しかけているのは、テーブルの一番端の席にゆったりと陣取った、この集団のリーダーらしき男だった。周囲を取り巻き連中が囲んでいる。

「長つたらしいカクテルなんかじゃなくてさ、もつとキメられる、強い酒ないの？」

その男を見つめるナビの顔が、無表情のまま、みるみるうちに赤くなっていく。様子がおかしいので、ミンホは人ごみを掻き分けてナビの側まで寄ってみた。

すると、不自然に身を擦るナビの腰から尻にかけてラインを、男の手が執拗に這い回っていた。

「テキーラでいいですか？」

「何でもいいよ。兄ちゃんも、一緒にそこに座って飲めよ」

「仕事中ですから」

「構わねえだろ、金は払ってやるんだから」

「……」

男の手がナビのベルトにかかった。

ミンホが思わず飛び出そうと身構えた時、パリンツとグラスの割れる乾いた音と、水が飛び散る音が聞こえた。

「うわっ！ 何すんだ、この野郎！」

先ほどまでナビの尻を触っていた男が立ち上がり、大げさに声をあげた。テーブルに置いてあった飲み残しのグラスが床に落ちて割れ、そのグラスに残っていた酒が、見事に男の足元を濡らし、男が着込んでいたスーツの色を変色させていた。

「すみません、手が滑りました」

ナビは無表情のまま、そっけなくそう言って、男の足元にテーブルに置いてあったおしぼりを投げた。

「弁償してくれるんだろうな？」

男はナビに一步グツと詰め寄ると、ナビの細い顎に手をかけて力を加えた。

「すぐ拭いたら、取れますよ」

ナビも負けずに睨み返す。それで刺激されたのか、男はますます声を荒げた。

「そんなモンで済まされると思ってたのか？ 弁償って言ったら、やっぱりこれしかねえだろ？」

そう言うと、ナビのシャツの胸元を乱暴に掴んだ。その拍子に弾け飛んだボタンが、床に転々と転がっていく。

ハラリとはだけた胸元に、無遠慮に侵入してくる手をナビが振り払う前に、横から伸びてきた腕が、男の手を強い力で取り押さえた。

「……っい?!」

「恥ずかしくないんですか？」

突然手首を押さえられ、そのまま背中側にねじ上げられる。

「僕は、見てましたよ。あなたがあんな破廉恥な真似をしなければ、そもそもこの人だつて、グラスを引っくり返すことはなかった」

男の腕をガツチリと固めたまま、ミンホは厳しい口調で言った。
狭い店内で、客たちの注目も自然にこの騒動に集まる。

「つな？！ 何が破廉恥だ！ そいつの方から色目使ってきたやつ
たんだ。俺は誘いに乗っただけだ」
「ウソつきは、モテないよー」

その時、店のドアが開いて、雨の音とともに、あの気障な帽子を
被ったオーサーが現れた。

「先生っ！」

ナビが思わず声をあげると、オーサーはナビに向かってニッコリ
微笑んだ。

「遅くなってゴメンね、ナビヤア。ちょっと取り込んだじゃって」

そう言うと、オーサーはミンホに取り押さえられている男の元ま
でゆっくりと歩いて行き、面白そうに男の顔を覗き込んだ。

「ナビが色目使ってきたって？」

「そ、そうだよっ！」

「うーん、有り得ないね」

「何だと？」

「猫は、そんなに気安い動物じゃないわよって言うてんの」

柔らかい口調で言いながら、男を見据えるオーサーの目は冷たく尖っていた。

「この色男の代表格、オーサー・リー先生だつて誘われたことなんかないのに。ちなみに、おたく、鏡見たことある？」

「っな?!」

途端、男は顔を真っ赤にして、オーサーに向かって飛びかかって行こうと暴れ出した。それをミンホが更に強い力で抑えつける。

「兄貴っ！」

男の取り巻きたちも腰を浮かせて騒ぎ始める。

「失礼します、お客様」

その時、人垣の間を掻き分けて、この店のオーナー、ジェビンがスツと男の前に歩み出た。

「従業員が、大変失礼をいたしました」

男に向かって、深々と頭を下げる。

「本当にどうなってんだ、この店は！」

男はミンホに抑えられたまま、唾を飛ばして咆えた。

「賤がなつてないんだよ！ 客にこんな真似して、どう責任取ってくれるんだ」

すると、ジエビンは、ズボンのポケットから皺くちやになった一万ウォン札を数枚取り出して、男のシャツの胸ポケットにグイッと突っ込んだ。

「これで、ご勘弁を」

そう言つと、ポケットの上から、紙幣で膨らんだ男の胸を軽く叩いた。

「それで、二度と来るな」

カツと男の頬が怒りに紅潮する。『兄貴』をバカにされた取り巻きたちも、一斉に席を立ち、ジエビンたちに襲い掛かってきた。

「やっと、俺の出番だぜ」

このタイミングを待っていたかのように、先ほどジエビンが出てきた人垣の間から、チョルスが勢いよく飛び出してきた。

そのままの勢いに乗って、長い足が宙を切り、ジエビンに向かってきた取り巻きの一人の喉元にヒットした。

「……ウグッ」

声も出せないまま、後ろの集団をドミノ倒しのように巻き込んで、床に倒れこむ。

「加勢しろっ！ ミンホッ！」

「はいつ!!」

チヨルスが叫ぶやいなや、ミンホも男の腕を固めて両腕の自由が利かない状態で、次々に襲い掛かってくる男たちに強烈な蹴り、頭突きをお見舞いした。

最後の一人が倒れた頃には、チヨルスもミンホも流石に息を切らしていた。

「どうする？ おたく、一人になったけど」

チヨルスがミンホに取り押さえられたまま振り回され、苦しげに息を切らしている男に向かって言った。

「勝ち目ないって、分かるよな？」

男は悔しげに唇を噛んで、チヨルスを見上げる。

「兄貴っ！！」

その時、突然店のドアが開き、先ほどよりも強くなった雨音が、ダイレクトに店内に流れ込んできた。

「……覚えてるよ、お前ら」

男は苦々しい口調で吐き捨てると、乱暴にミンホの腕を振りほどいた。

チヨルス、ミンホ、オーサー、ジエビン、ナビに取り囲まれたまま、一歩一歩出口へと向かって歩かされる。

あと一歩で店の外へ、というその時、男が不意に立ち止まった。

振り向いた瞬間、一番近くにあったテーブルの上の殻になったワインボトルを手にして、大きく頭上に振り上げた。

その狙いの先には、その時男の一番側にいたナビの顔があった。

「危ないっ!!」

一瞬の出来事に、誰もが　ナビでさえも固まって動けない中、
ミンホは咄嗟に男とナビの身体の間飛び込んでいた。

バリーンッ!!

グラスが割れる派手な音が、店内に響き渡る。

「ミンホッ!!」

チヨルスが叫ぶ。

割れたグラスの破片を浴びながら、ミンホの顔や服は真っ赤なワ
インで流血したように汚れた。

「この野郎っ!」

言うなり、チヨルスは地面を蹴ってそのまま男のアゴに強烈な回
し蹴りを食らわせた。衝撃で、男の身体が床に倒れる。倒れた男の
襟首を捕まえ、チヨルスはそのままズルズルと床を引き摺り、店の
出口から男を雨の降りしきる外へと放り出し、音を立ててドアを閉
めた。

「だ、大丈夫?!　ねえ!」

チヨルスが振り返ると、うずくまるミンホを、すっかり狼狽しな
がら覗き込んでいるナビの姿が見えた。

「おい、平気か？」

チヨルスもミンホの元に駆け寄りその様子を覗き込む。

「……大丈夫です。ちょっと……軽く、眩暈がする……だけ」

チヨルスはワインでベタベタに汚れたミンホの髪の中に手を突っ込み、ボトルの破片のガラスを払ってやった。

「出血はないみたいだな。石頭で良かったな。さっきの頭突きも、何気に効いてたみたいだし」

チヨルスが笑うと、ミンホも痛み顔に顔をしかめながら片頬を引き攣らせて笑った。

「とにかく、手当てしなきゃ。こっちへ……」

ジェビンはチヨルスに目で合図をしてから、カウンターの方へと誘導した。ふらつきながら身体を起こすミンホに、ナビが素早く肩を貸した。

「……ふうーん」

ナビとミンホの背中がカウンターの中に消えるまで後ろ姿を見守っていたオーサーは、二人の姿が見えなくなると、顎に手を当て、意味深な溜息を漏らした。

「何だよ、先生。もぐりとは言え、あんた医者だろ？ 早く行って、ミンホの手当てしてやってくれよ」

「やだ」

「はあ?!」

チヨルスが背中を押すと、子どものように足を突っ張って動こうとしない。

「ライバルに、塩を送るようなマネ、したくないもんね」

「ライバルだあ?」

チヨルスはワケが分からないと言う顔で、オーサーを見た。オーサーはプツと頬を膨らませた後、自分のそんな態度に自分でウケたらしく、クスクスと声を漏らして笑い始めた。

「差し詰め、ナビちゃんの『ナイト』ってところかな。こりゃ、全く油断できないね」

肩を揺らして笑いながら、ようやくカウンターの方へ向かって歩き出す。

「……相変わらず、変な野郎だ」

チヨルスは首をかしげながら、ほんの少し気味の悪いものを見るような目でオーサーを見ながら、その背中を見送った。

大学ではテコンドーを始め、一通りの護身術や武術は仕込まれてきたのであろう。実践に不慣れとは行っても、先ほどミンホが見せた乱闘の様子はなかなか様になっていて、チヨルスを驚かせた。

しかし、それ以上に驚かされたのが、ミンホがナビを庇うためにとった咄嗟の行動であった。

男がワインボトルを振り上げた瞬間、ミンホは誰よりも早く、男とナビの間に割り込んでいった。

防御の体制も何もとらずに、ただ身体一つでナビの盾となったのだ。

あの『僕ちゃん』然としたミンホからは、想像もつかない行動だった。

まともにワインボトルの攻撃を食らう無茶な行動で、決して褒められたものではないが、意外に骨のあるヤツだと、チヨルスはほんの少し、ミンホを見直していた。

カウンターの奥のドアから繋がった、大型のキャンピングカーの中で、ミンホはワインでベタバタの身体のまま簡易ベッドに寝かされていた。

「うーん、軽い脳震盪のうしんどうだね。切り傷は無いみたいだし、少し休めば大丈夫でしょ」

「先生、本当なの？」

「やだ、ナビ。俺のこと信用してないのぉ？」

「ちよっ！ くっつかないでっ！ もっとちゃんと見てよ」

横たわるミンホを覗き込んだまま、ふざけた攻防を続ける二人に、ミンホのコメカミが知らずにピクリと動く。

ハスキーだがよく響くナビの声は、頭に強か衝撃を受けた今の自分には、いささか神経に障る代物だった。

「念のために、大きい所で、脳波見てもらおうといいよ」

オーサーはいくら言っても信用してくれないナビに、少しションボリと肩を落として立ち上がった。

「ナビ」

その時、キャンピングカーのドアが開いて、何枚もの白いバスタオルを持ったジェビンが顔を出した。

「はい、タオル」

そう言つて、一番上の一枚を投げて寄こす。

「兄貴、店は？」

「ああ、今日はもう閉店。いま、チヨルスが手伝つてくれてる」

そう言つて、親指でドアの後方、カウンターの向こうの店内を指差す。

「ほらあ！ 帰つた帰つた！ もう出すモンねえよ」

店内からは、チヨルスの少々荒っぽい閉店を告げる声が聞こえてくる。

ね？ そう言つて、ジェビンは小首を傾げて笑つてみせた。

「……大丈夫、なんですか？」

思わず、ミンホの方が心配になつてそう尋ねる。どう鼻屑目に見ても、自分の兄貴分は、商売に向いているとは思えない。彼の店締めめいせいで、二度と客が寄り付かなくなつたらどうするのか。

そんなミンホの心中を察したのか、ジェビンはニッコリと微笑んで言つた。

「大丈夫でしょ。二度と来るか！ って言われたつて、来たくても来れないお客さんの方が多いからね。うちの常連客は、そのお医者さんと、最近の君ら二人くらいのもんだから」

当の店主は、誰よりもあっけらかんとしたものである。

「ジツとして」

すると、突然何の前触れもなく、大判のバスタオルがミンホ目がけて降ってきた。

「え？ あ?!」

抗う間もなく、ミンホの視界は真っ白に閉ざされる。

「わっ?! ちょっと……ちょっと痛いですって!」

悲鳴を上げるミンホにお構いなしに、バスタオルでミンホの顔を覆ったナビは、そのままガシガシと音がするぐらい乱暴に、彼のワインで汚れた顔や頭を拭き始めた。

「そんな……強くっ! あ”ー、もうっ!!」

我慢出来なくなったミンホは、ベッドの上に勢いよく身体を起すと、顔にかけられたタオルとナビの手を同時に払いのけた。

「何だよお、キレイにしてやってるのに」

「そう言うのは、キレイにしてるとは言いませんっ! だいたいあなたは、荒っぽすぎるんですよ。ここ何日か見てきたけど、皿の拭き方だって運び方だってなってないし……」

「ふうーん、随分ナビのこと見てるみたいに言うんだねえ」

壁にもたれたオーサーが、腕を組んだままニヤニヤと笑う。

「見てるって言うか……だって、危なっかしいでしょう? 誰が見たって」

ミンホはうろたえながらオーサーを振り返る。別にやましいことは何もないのに、この医者の方にはカチンとくる材料には充分だった。

「それに、あなた!!」

見透かすようなオーサーの視線への苛立ちを、そのまま目の前のナビの手首を掴む力に変換させる。

「痛っ!」

今度はナビが悲鳴を上げる番だった。

「あなた、本当は未成年でしょう? お酒を提供する場なんだから、今日みたいな危ない目に合うことだってあるんだし。あなたも、仮にもこの人の保護者なら、一体どういつつもりで彼を店に出してるんですか?」

ナビの手首を掴んだまま、ミンホはジェビンを振り返る。
生真面目な口調に、一瞬そこにいる皆が黙り込んだが、次の瞬間、ジェビンとオーサーは腹を抱えて笑い出した。

「うははははははは!! こりゃいいや!!」

オーサーは手を叩き、目に涙さえ浮かべて爆笑している。

「ちよっ……何で、笑うんですか? 僕は、真剣に……」

「ナビ、教えてやれよ。お前、今年で幾つ?」

ジェビンも肩で息をしながら、美しい顔を惜しげもなく破顔させ

てナビを指差す。

当のナビはと言うと、ムスツツという効果音がぴったりの子ども染みた表情で頬を膨らませている。

「おっ前！ 本当に失礼なヤツだな！」

いつか聞いた台詞と全く同じ悪態をつくど、ナビはミンホの腕を振りほどいて、キャンピングカーのロフトスペースになった二階へと繋がる梯子を駆け上り、何かゴソゴソとカバンをひっくり返していたかと思うと、またすごい勢いで駆け下りてきた。

「これが目に入らぬかー！」

居丈高に胸を張り、ミンホの目の前に小さなカードのようなものを突きつける。あまりに近付きすぎて、焦点が合わず、それが一体何なのかさえ分からない。

ミンホはナビの手首ごと掴んで、正常に視界に収まる位置までそれを後退させる。

「…………住民登録証？」

それは、ミンホもよく見慣れた　というよりも、五千万の大韓民国国民なら、誰もが例外なく持っている住民登録証だった。ミンホも、勿論、財布の中に入れて常に持ち歩いている。

「よく見る!」

ナビはグイグイと、ミンホの顔の前にそのカードを押し付けてくる。ミンホは両手でナビの手首を押さえて、ともすれば顔に貼りつかんばかりに近づけられるそれを、必死に防ぐ。

「住民登録証の、最初の6ケタはっ?」

「本人の、生年月日」

「はい、正解。じゃあ、よく見る!」

ナビはカードをユラユラ揺らしながら、ミンホの目の前でカードを誇示する。

その時初めて、ミンホの目にカードに刻まれた数字が飛び込んできた。

「……………え?」

見間違いではないかと、カードを掴んだナビの手首ごと引き寄せらる。

「どっしたの?」

ナビはしてやったりと言うように、ニヤニヤ笑いながら、カードを揺らす。

「……………まさか」

6ケタの最初。そこに刻まれた西暦を現す2文字が信じられなくて、ミンホは何度もカードとナビの顔を見比べた。

「……年上？」

そこには、自分の財布の中の住民登録証番号よりも、一年若い数字が刻まれていた。

「分かったかあ？」

顔色を失うミンホを見て、目の前のナビは満足げに腰に手を当てた。

「兄貴ユウキと呼べー」

更に反り返るくらい胸を張り、続ける。

「お兄様ユウニムでもいいぞー」

そう言つと、自分で自分のセリフにウケて、ガハハと笑った。

「どう？ 刑事さん。違法な雇用じゃないって、認めてもらえたかな？」

ジェビンが悪戯っぽく笑つと、ミンホはまだ納得できないと言う様に、ナビの手首を掴んで言った。

「何かの間違いなんじゃないですか？ その顔で、その……態度で、25歳？ 僕より年上？」

「お前今、カード見なかったの？」

ナビは不満げにミンホの手を振り払おうともがく。

「もう一度、ちゃんと良く見せてください」

「もうダメだよ。時間切れ！」

ナビの手にある小さなカードを奪い取るうとするミンホと、そうはさせまいとするナビの攻防が続く。

だが、ナビの方が素早くミンホの隙を突いて身を翻した。

「怪しい物じゃなかったら、もう一度見せてくれたっていいでしょうっ？」

「さっき散々見ただろ？」

「じゃあ何ですか？ あなたは、25歳にもなつて『醜いアヒルの子』だとか言ってたんですか？ もうとつくに成人も超えるのに、モムチャン（筋肉マン）だのオルチャン（イケメン）だの、これ以上どう成長しよう？ 牛乳飲んで背を伸ばそうなんて、小学生の発想ですよ！」

「おっ前！ 本当に失礼なヤツだな！」

「第一、軍隊は行つたんですか？ こんな子どもみたいな体格で？ 配属は一体どこに……」

「うるさいなっ！ ちょっとデカいからって偉そうにっ！」

もはや定番と化したミンホとナビの言い争いを見ていたジェビンが、ようやく助け舟を出しに動いた。

「そろそろ許してもらえないかな？ 取りあえず、酒場で働けない年齢ではないことは兄の俺が保障するよ」

ジェビンにそう冷静に言われて、ミンホは顔を赤くして俯いた。

「……はい、すみませんでした」
「怒られたー」

ジエビンの後ろで、ナビはイシシと笑った。

たしなめる様にジエビンが後ろに手を回してその尻を叩くが、ナビは身を捻ってそれをかわし、更にアツカンベーをして見せた。

「タメ口利くなよー」

ナビは上機嫌でそう言うと、パンツの尻ポケットにカードを押し込んだ。

「……ショックです」

車の中で、ミンホはうなだれた。

「お前は、老けすぎ、あのボーイは幼すぎだもんなあ」

チヨルスはハンドルを握りながら、にべもない言葉をくれる。

「老けすぎって、僕、そんなに老けてますか？」

「顔の話してんじゃないよ。何て言うの、その……お堅い雰囲気かな。俺のジイさん（ハラボジ）にそっくりだよ」

「ジイさん（ハラボジ）って……」

ミンホはますますガツクリと肩を落とす。

「おいおい、落ち込んでる暇はねえぞ。しっかり店探せよ。だいぶ鼻が利くようになってきたんじゃないかねえの？」

ミンホは車の窓越しに、今日も相変わらずドンヨリと重たい、ソウルの空を見上げた。

雨を追うように、後を追いつける『ペニー・レイン』だったが、未だにあの薬物中毒の若者の証言を裏付けるような出来事はなかった。

何せ、オーサー・リーという医者以外、ほとんどが偶然店を見つけて入った一見さんなのだ。そもそも、どこに開店するのか分からない状態では、クスリの取引場所にするには適さない。あの、ジェビンというオーナーが手助けでもしないかぎり。

だが、ここしばらくの張り込みで、ジェビンやボーイのナビにもそんな様子は微塵も感じられなかった。

気のみ気のまま、二人とも世間ずれした自由な雰囲気はあったが、犯罪に手を染めて暗躍するような人間には見えなかった。

だが、そう考えるのは甘すぎるだろうか。

現にチヨルスは、『ペニー・レイン』への張り込みをやめようとしめない。相変わらず雨が降りそうな日は、ソウル中を駆け巡って『ペニー・レイン』を追っている。

「ところで、聖智大への聞き込みの成果は？」

「あ！ はい」

ミンホは慌ててダッシュボードから、ここ何日かで調べ上げた調査結果をまとめた資料の束を取り出した。

「あの学生が言った、『ジスク』って子の件ですが」

「ああ、“神隠し”にあっただって言う、あの坊やのコレか？」

小指を立てて見せるチヨルスに、ミンホは複雑な顔で話の先を続ける。

「どうやら、そうでもないみたいで」

ミンホは、拘置所内で警官を刺した少年がずっと訴えていた『ペニレイン』から帰って来ないという少女の足取りを追うため、彼女が籍を置く聖智大学女子寮を訪れた時のことを思い出していた。

「どんな些細なことでも構いませんから、知っていることを教えてくださいませんか？」

インターホンを鳴らしてからややあって、ドアが開く。

聞き込みの途中で閉め出されないように、相手が部屋から出てき

たらず靴の爪先をドアの間に挟めとチヨルスに教わった通り、ミンホは長い足を突き出してドアの間に踏み込んだ。しかし、部屋から出てきた女学生はミンホの予想とは大きく外れた行動をとった。

彼女はミンホの顔を見るなり、ドアを閉めるどころか全開に開け放して、彼の腕を取って部屋に招き入れるような体勢をとったため、ミンホは逆に下着姿に等しい彼女一人の部屋に踏み込まないように、突き出した足に力を入れて踏ん張らなければならなくなった。

「ちよっ……話は、ここでも出来ずからっ！」

「あなた、本当に刑事さん？ すんごいいい男」

女学生は自慢の胸を擦り付けるようにミンホの腕にしな垂れかかってくるので、ミンホの額からは嫌な汗が噴出した。こんなところを誰かに見られたら、誤解されて痛い目に合うのは自分の方だ。長年積んできた経験から導き出す、自分の容姿が招く様々な災難のシユミレーションを瞬時に頭の中で組み立てて、ミンホはドアに手をつけて、彼女の身体を部屋の中に押し込んだ。

代わりに自分は、見えない壁でもあるかのように、一步も部屋に入らずドアの前に仁王立ちになる。

「あなたと同室だった、ナ・ジスクさんのことですが……」

ミンホは咳払いをしてから、気を取り直して、改まった口調で本題を切り出した。

「やっぱり、その話。一斉摘発があったからね。来るだろうなあとは思ってたのよね」

部屋の中にミンホを招き入れることに失敗した彼女は、うんざり

したように肩を竦めた。

「コ・ジョンヒョンという名に聞き覚えはありますか？」

ミンホが問うと、女学生はハツと嘲笑するように息を吐いた。

「知ってるも何も、ジスクのストーカーじゃない」

「ストーカー？」

ミンホが出したコ・ジョンヒョンという名前は、拘置所内で警官を刺したあの少年のもだった

「ジスクさんは、彼の恋人だったんでは？」

「恋人お？」

ミンホの言葉に、女学生は大きさに目を見開いてから、次いでゲラゲラと笑い出した。

「あいつは恋人なんかじゃないわよ。ジスクが高校生の頃、隣の工業高校にいたあいつに、帰り道でも待ち伏せされて随分迷惑してたって聞いたわよ。大学に入ってから何かと引っちゃ付きまとして。この部屋にも何度も押しかけてきて、ウザいったらないっての。まあヤツも、ガリ勉でダサイジスクなんかのどがそんなに良かったのか分らないけど」

ねえ？ そう言いながら「私の方がいいでしょ」と言わんばかりに、薄い部屋着に隠しきれない豊満な肉体をさりげなく誇示しようとする彼女を、ミンホはさらりとかわしながら話の先を促す。

「5月から、彼女が帰っていないと聞きましたか？」

今は6月の半ば。少年の話が本当ならば、もう一月以上もルームメイトは帰ってきていないことになる。普通で考えれば特異な状況であるはずなのに、少しも動揺した様子もない女学生を、ミンホは探るような目で見つめる。

「さあね。駆け落ちでもしたんじゃないの？」

「駆け落ち？」

あまりにも突飛な発言に、ミンホが思わず食いついた。その反応を心良く思ったのか、女学生は一気に身を乗り出して話し始めた。

「ここだけの話、ジスクには他にいい男がいたわけ。同じ大学のヤツなんだけどね。成績は良くって将来有望、定職もないジョンヒョンなんかとは大違い」

ミンホの耳に息を吹きかけんばかりに唇を近づけて、女学生は続ける。

「そんな彼が消えたのは、4月。後を追うように、ジスクが消えたのがその一ヶ月後。ね？ 怪しいでしょ」

女学生は更に一步ミンホに近づいて囁く。

「去年から、“学生自治会メンバー”の駆け落ちが流行ってるのよ。ジスクも、ジスクの彼もそうだしね。前から、自治会メンバーでクスリやってるんじゃないかって噂にはなってたけど、まさか本当だったとはね。この前の一斉摘発は、結構衝撃だったわよ」

好奇心を隠そうともせず目を輝かせて語る彼女に内心辟易しながら

らも、ミンホはもう少しで引き出せそうな有力情報のために、不快感を堪えて食い下がる。

「その駆け落ち騒動とやらを、もう少し詳しく教えてください」
「だから、“自治会メンバー”って、男も女もジスキみたいなガリ勉タイプが寄り集まってるから、傍から見たら気持ち悪いくらい、結束力が固いわね。だからこそ、昔からカップル率も高いんだけどね。そんな中でデキてたカップルが、去年から何組か続いて駆け落ちしてるの。男と女と、微妙に時間差を開けてるから、表向きは分からないんだけどね。だけど、大体男の方から先に姿を消してるから、逃げる準備を整えて、女を呼び寄せてるんだと思うわ」
「なぜ、逃げる必要が？」

仮にも名門の呼び声高いこの大学で、金に不自由しているとも思えない、ましてや“自治会メンバー”になるほどの優秀な学生カップルが、逃げなくてはならない理由などミンホにはどうしても思いつかなかった。

「馬鹿ね、刑事さん」

女学生は初心つひなミンホの胸を小突いて笑った。

「察しが悪すぎるわよ。理由なんか、デキちゃったからに決まってるじゃない」

「デキ……?!」

途中まで言いかけて、ようやく意味を理解したミンホは途端に力ツと頬を染めた。

「妊娠したから……逃げた?」

「そうよ。みんなそう言っただけで。気持ち悪いくらい、結束してる奴らだっただけでしょ? まあ、真面目な顔して、クスリ使って乱交パーティなんかするような連中だから、誰の子だか分かりやしないけど」

思いも寄らないような衝撃的な内容に絶句しているミンホの前で、女学生が指を折って何やら数え始めた。

「……六……七、八……去年から姿を消した“自治会メンバー”の数よ」

「同じ大学で、そんなに大勢の学生が消えたら、家族だって黙っていないでしょう? なのに、警察に捜索願も出ていないなんて」

「甘いわよ、刑事さん。うちの大学をどこだと思ってるの? ソウルでも一二を争う、ブルジョアの集まり、“ザ・世間体”を何より

大事にする一族出身の奴らばかりよ」

こつ見えて、私もね。

そう言つて女学生は艶っぽく笑う。

なるほど、彼女も“自治会メンバー”を馬鹿にしながらも、ご他聞に漏れず、親元を離れてハメを外している典型例なのだと、ミンホは納得した。

「それに、家族へのフォローは、駆け落ちコーディネーターがソツなくこなしてるから」

「駆け落ちコーディネーター？」

「ペク・ギョウンよ。ヤツだけ逃げのびてるでしょ？」

ミンホの記憶の回路が、女学生が出した名前を瞬時に弾き出す。

それは、明洞ソルムンの路地裏で、ジョンヒョンと一緒にいるところを取り逃がした男だった。

「ヤツが、駆け落ちカップルの家に行つて事情を話して丸く治めてきたのよ。幾ら貰つてるんだか知らないけど。捜索願いなんか出して騒ぎ立てて一族の恥を晒すより、どこかでひっそりと墮ろして帰つて来てくれた方が、家族にとつてもありがたいのよ。本音のところではね。男と別れさせるなり、責任取らせるなりは、帰ってきてからの話だしね」

女学生はいい加減しゃべり疲れたと言うように、欠伸混じりにミンホを見上げた。

「ところで刑事さん、最初にジョンヒョンのこと言ってたわよね。あいつ、今どこにいるの？」

「彼は、拘置所の中です。摘発の日に、一緒に」

ミンホがそう言った途端、女学生はブツと噴き出した。

「バツカみたい！ あいつ、“自治会メンバー”どころか大学生でもなくせに。まあ、バカだけど、ジスクに付きまとった結果と思えばヤツも不幸よね。巻き込まれたようなもんだから」

(“溜まり場”の奴等じゃ、ダメだ……)

(“溜まり場”の仲間じゃない俺が、やっと……やっと頼んで、ようやく『ペニー・レイン』に行けるようになったんだ。俺が、ジスクを助けに行かなくちゃいけないんだ)

取調べの際に、ジョンヒョンが訴えていた不可解な言葉が蘇る。

「最後に一つ聞きたいんですが」

ミンホは真っ直ぐに女学生を見つめて言った。

「『ペニー・レイン』という名前に、聞き覚えは？」

「今の学生ってのは何を考えてやがるんだか」

ミンホの報告を受けたチヨルスは、ハンドルを握ったまま、啞えていたチビた煙草を苦々しげに噛んだ。

「“学生自治会”は、大学創立当初から見られた由緒ある組織で、

簡単に言ってしまうえば、購買等の管理から始まり、学園祭等の学校行事の統率、大学全体に関する学生の自治権を行使する学生団体だそうです。各学部から成績優秀者が集まることでも有名だそうです。「それで、自分たちでクスリを回してパーティーも主催するって？大した自治権の行使だな」

鼻で笑うチヨルスに構わず、ミンホは続ける。

「聖智大学の失踪者は、昨年9月から始まって、今年の5月のナ・ジソクまで、計八人、四カツプルです。いづれも搜索願いは出ていません。それどころか、家族から休学願いが出ています」
「ブルジョアってのは、何を考えてやがるんだか」

先ほどと良く似た悪態をついて、チヨルスは開けた窓から、唾と一緒に吸い切った煙草をペツと吐き出した。

「ナ・ジスクのルームメイトの彼女は、『ペニー・レイン』の存在を知りませんでした」

「だろうな。だが、墮胎手術だったら『リー先生』のお得意分野だろうよ。その“駆け落ちコーディネーター”だっていう、ペク・ギウンと組んで、馬鹿な学生どもの手助けをした可能性は大だな」

「チヨルスヒョン」
「ん？」

ミンホは真面目な顔で、ハンドルを握るチヨルスの横顔を見つめた。

「どうしても、コ・ジョンヒョンが拘置所で言ってた言葉が気になるんですが」

「“溜まり場の仲間じゃない俺が……” ってヤツか？」

「はい」

ミンホは頷く。

「彼は“溜まり場”、つまり“自治会メンバー”の連中の内、選ばれた者だけが、上質な『エデン』を貰うために『ペニー・レイン』へ行けるって言うてましたよね」

「上質な『エデン』とやらが本当に実在するかは怪しいぞ。仲間の手前、堂々と「墮胎しに行く」とも言えないだろう。『エデン』は失踪の口実じゃないのか。本当に『エデン』を手に入れに行ったなら、一人くらい仲間の元に帰って来て、その上質なブツを撒いたって良さそうなもんだ」

「僕もそう思います。だけど彼は、メンバーでない自分がようやく行けるようになったと言っていました。それが本当なら、墮胎に困ったカップルでもない彼が『ペニー・レイン』に呼ばれる理由が分かりません」

ミンホの言葉に、チョルスはニコチンの苦味が残った口元を曲げて、うーんと唸ってしまった。

そのまま考え込んでしまった二人の沈黙を破ったのは、ミンホだった。

「……あっ」

助手席の窓から外を見ていたミンホがチヨルスを振り返る。

「ヒョン！ 見つけました」

それは、最初にミンホたちが『ペニー・レイン』を訪れた時、開店場所選ばれていた高架橋の下だった。車からはほとんど死角になっていた。今回の前回は、最初の時には気付かずに素通りしていた場所だった。今回は、前回のことがあったので、ミンホは微かに漏れるテナトの明かりを察知することが出来たのだった。

「同じ場所に戻るなんて、珍しいな」

チヨルスは急ハンドルを切って、路地の隙間に頭から突っ込む。ギョルギョルとタイヤの音をさせて、今来た道を逆戻りする。

「あ、ヒョン！ あれ」

そう言っつて、ミンホが指差した先には、橋の下に広げられた黒いテントの店の前で、細身のデニムのポケットに両手を突っ込んで、煙草を啜えながら所在なげに立ち尽くしているオーサーの姿があった。

「今日もあの野郎が先回りか。開店場所は企業秘密だなんて言うてるが、あのお医者さんは、場所を予め知っているとしか思えないな」
「誰か来ます」

その時、ミンホの指差す方向に、一人の男がフラフラと歩いて来るのが見えた。傘も差さずにずぶぬれになりながら、男はオーサーの元まで辿りつくくと、彼の胸に縋るようにして何かを訴えているようだった。

当のオーサーは、めんどくさそうに煙草をふかし続け、やがて全部を吸い終わると、ゆっくりと雨の中にその吸殻を投げ捨てて、男に向き直った。

オーサーのシャツを掴み、苦しげに何事かを訴える男の頬を、オーサーはいきなり何の前触れも無く思い切り張り倒した。

男は足元の水溜りに派手な水飛沫を上げながら転がった。
冷たく踵を返し、歩き出そうとするオーサーのジーンズの足元に、男は必死で取り縋る。

「……ミンホ」

「はい」

チヨルスが低く呟くと、二人同時に車のドアを開ける。

車を置いて高架橋の下へ駆け下りると、距離を保ってオーサーと男の様子を見守った。

オーサーは濡れた手で容赦なく掴まれた事によってどんどん水気を吸っていくジーンズに苛立っていたようだが、やがて地面に寝そべる男の腕を持ち、強引に立ち上がらせた。

引きずるように男を連れて、雨の中を歩き出す。

チヨルスたちも、気付かれないように足音を忍ばせながら後を追う。

やがてオーサーと男は『ペニーレイン』から離れること数百メートルのところにある、朽ちかけた廃材置き場の影に消えた。

「チヨルスヒヨン」

チヨルスは無言でミンホに向かつて頷いた。腰に下げた銃の在りかを確認すると、二人はチヨルスと男が消えた廃材置き場の脇まで静かに忍び寄って行った。

「早く……早くくれ。お願いだ……先生」

「それが、人にモノを頼む態度？」

材置き場の中からは、途切れ途切れに、男の切迫した掠れ声と、相変わらず人を食ったようなオーサーの声しか聞こえてこない。

「洋服、それに着替えて」

「……そんなことより、早く……」

「あれ？ もう忘れちゃった？ もう一度、ここに来るための条件。俺の言う事は、何でも聞くんじゃないの？」

ピシヤリと言い放ったオーサーに、男は渋々言う通りにしたようだった。耳を澄ますと、衣擦れの音が微かに聞こえてくる。

「パンツも忘れないでね」

オーサーは楽しげに、歌うように言った。男が軽く舌打ちしたのが分かった。

「……何を、してるんでしょうか？」

「さあな。黙って、聞いてろ」

チヨルスは廃材置き場の壁に耳をつけて、ジッと中の様子をつかがっている。

「着替えたら、その水飲んで。全部ね」

「おいっ!? いい加減に……」

「じゃあ止めようか? 俺は一向に構わないけど……」

「分かったっ! 分かったから……言うとおりにすればいいんだろ?！」

そう言つと、男が喉を鳴らして水を飲み干す音が聞こえてきた。

「はい、よく出来ました」

部屋の中で、オーサーがパチパチと拍手する渴いた音が響き渡った。

「じゃあ、準備完了だね。隣りの部屋に行つて。ベッドで待つててね」

「ベッドオ?!」

思わず素っ頓狂な声をあげそうになったミンホの口を、慌ててチヨルスが塞いだ。

「バカッ! お前、大声出すなっ!」

「……だ……だって、チヨルスヒョン……あの医者……クスリの見返りに……まさか……身体を?」

「お前の言つとおりだったら、『非法堕胎』に『密売』に『買春』の三重の罪でしょっ引けるだろうけど、最後のはどうかな? 同意の上なら、個人の趣味にとやかく言えない」

「あれが、同意の上に見えるんですかっ?!」

「シッ! 声が大きいつ!」

チヨルスはミンホの口を押さえたまま、ズルズルと立ち上がって
廃材置き場の中を覗き込んだ。二人は奥の部屋に消えたらしく、こ
こからは見えなかった。

「うわっ?! 何するんだよっ!」

その時、奥の部屋で男の叫び声があがった。同時に、カチャカチ
ヤと、金属の擦れる音、それに続けて、ベッドが軋むような音が聞
こえてきた。

「や……やめる……っう……ぐううう」

最後の方の男の叫びは、猿轡でもかまされたのか、くぐもって声
にならなかった。

「チヨルスヒョンッ!」

ミンホが自分の口を塞ぐチヨルスの手を振り払って叫ぶ。

「買春なんてもんじゃない。あれじゃ、完璧に強……」

もうこれ以上は傍観できないと、部屋の中に踏み込んでいく姿勢
を見せるミンホに、さすがのチヨルスもミンホの後に続いて乗り込
もうと踏み出したその時、雨に霞んだ暗がりの向こうから、ユラユ
ラとこちらに向かって近付いてくる明かりが見えた。

遠くの方で明かりを灯す『ペニーレイン』と、高架橋の上を行き交う車のライトくらいしか周辺に目立つた光源はないため、その揺れながら近付いてくる明かりは酷く目立った。

不安定に左右にユラユラ揺れながら、徐々に近付いてきたその明かりが自転車のライトだということが分かるまで、しばらく時間がかかった。

油が切れているのか、キコキコと軋んだ音をさせながらその自転車をこいでいたのは、『ペニーレイン』のボーイ、ナビだった。

傘を差しながらの片手運転のため、あんなにもフラフラユラユラ危なっかしい走行だったのだと納得する。その上、自転車の前の買い物カゴには、パンパンに食材を詰め込まれたタッパーがうず高く詰まれ、それがますます彼の自転車のバランスを奪っていた。

鼻歌を歌いながら自転車をこぐ彼は、廃屋の前でキュツとタイヤを鳴らして自転車を止めた。

かごの中のタッパーを取り出し、相変わらず危なっかしい足取りでフラフラと歩くナビは、真っ直ぐ廃材置き場の入口へと向かった。ナビの位置からは陰になっていて、チョルスやミンホの姿は見えていないようだった。

「っあ！」

思わず声をあげたのは、チョルスだった。

ミンホが闇の中を飛び出し、真っ直ぐナビの元へ飛んでいくと、背後からナビの口を塞いだ。

「…………んぐう?!」

驚いたナビは、手にしていた食材の入ったタッパーを全て取り落とした。

「ん…………んんう!」

抵抗するナビの口を塞いだまま羽交い絞めにして、ミンホはナビを入口から遠ざけるためにズルズルと引き摺って、チヨルスと二人で身を隠していた廃材置き場の影に連れ込んだ。

「お前っ！ 勝手に何やってるんだ！」

ナビを引き摺って戻ってきたミンホに、思わずチヨルスの怒声が響き渡る。

「シッ！ チヨルスヒョンッ！」

ミンホにたしなめられて、チヨルスも慌てて口を嚙む。

「だって、もしかして、中で予想通りの…………あの…………いかがわしいことが行われてたら、そんな現場を、この人に見せるわけにはいかないでしょう?」

「だからって、俺の指示も仰がないで勝手な真似しやがって…………」

ブツブツと説教を始めようとしたチヨルスだったが、ミンホに口を塞がれ、顔を真っ赤にして苦しげにしているナビに気付き、ミンホの腕を叩いた。

「おいっ！ 早く離してやれっ！」

ミンホもそこでようやく我に返り、ようやくナビの身体を拘束していた腕を解いた。

「ぶはっ！！」

口を塞ぐミンホの大きな手が離れた途端、ナビは大きく息を継いだ。

「いきなり何すんだよっ！ この野郎っ！」

振り返ったナビがミンホに掴みかかろうとしたその瞬間、再びミンホの手でそのハスキーな甲高い声を発する口を塞がれてしまった。

「んんっ！！」

「お願いだから、静かにしてください。静かにするって約束してくれたら、この手を離します」

ナビは再び顔を真っ赤にしながらミンホを睨みあげたが、息苦しさには適わず、口を塞ぐミンホの手を叩いて頷いた。

ミンホの手が、そっと離れる。

「一体、何なわけ？ 何で、あんなところがこんなところにいるんだよっ？」

「それは、こっちのセリフだ、ボーイさんよ」

ミンホを押しつけて、チヨルスがズイツと前に乗り出す。

「あんなこそ、店を離れてこんなところに何しに来た？ 自転車で

運んでたあの食料は？」

「僕は、出前に来たただだよ」

「出前だと？」

ナビは眼光鋭いチヨルスにも臆することなく、唇を尖らせて胸を張った。

「仕事中の先生に夜食を運んでるんだよ。ジェビニヒヨンの特性弁当だよ。あんたたちのお陰で全滅だよ。どうしてくれるの？ 僕が兄貴（ヒヨクン）に怒られるんだからね」

「先生の仕事って……お前、この中でヤツが何してるのか知ってるのか？」

チヨルスの問いに、ナビは口を噤んで、曖昧に目を逸らした。

「おいっ！ 質問に答える。お前も、ジェビンも、ヤツが何してるか知ってて協力してるんなら、同罪だぞ」

「同罪？」

ピクリとナビのコメカミが動く。

「ドラッグの密売と……」

言いかけて躊躇するミンホの肘を、チヨルスが突く。

「強姦（ほうじょう）の幫助です」

「……密売と……強姦？」

ガラス玉のように澄んだ目が、キョトンと見開かれる。自分よりも年上だと知ってからも尚、ミンホはいたいけな子どもに大人の汚

い世界を覗き見させたような、嫌な感覚を抱いていた。

だが次の瞬間、ナビは弾かれたように笑い出した。

「ブハハハハハッ！ 先生、本当に信用ないんだね。だけど、よりによって、強姦って……ツク……フハハハハハハ」

両手で口を塞いで必死に笑いを堪えているが、ほとんど効果は無いようで、ナビは身体を二つ折りにして、こみ上げる笑いの発作を耐え忍んだ。

「何が可笑しいんだ？」

怪訝な顔をするチヨルスとミンホに向かって、ナビは笑いすぎて目に涙を溜めながら、きつぱりとした口調で言った。

「先生は密売や強姦なんかしてないよ。確かに、変態だけど、あんたたちが思うような犯罪者じゃないよ」

そう言って、ナビは立ち上がった。

「来れば分かるよ」

ナビはクイツと指を曲げて、二人に着いてくるように促した。チヨルスとミンホは仕方なく、ナビの後について廃材置き場の中に入ることにした。

「せんせー」

ナビが奥の部屋に向かって呼びかけると、中から汗だくになったオーサーが出てきた。

「ナビ……ッ？」

オーサーはナビの後ろに控えている、チヨルスとミンホの姿を見て、一瞬鋭く目を細めた。

「オマワリさんたちね、そこで会ったの」

無邪気な口調でナビが続ける。

「ジェビニヒョンのお弁当持ってきたのにさ、その、デカイオマワリさんに襲撃されて、撃沈。せんせー、責めるんならこのオマワリさんを責めてね。ジェビニヒョンにも謝ってもらうんだから」

ぶうつと頬を膨らませて、相変わらず恨めしげにミンホを睨む。

「つけられてたってワケ？ 俺としたことが、不覚だったな」

「奥にいる男は何だ？」

チヨルスがナビの前に踏み出して、オーサーに詰め寄る。

「彼に何をした？」

オーサーは諦めたように肩をすくめた。

「その目で見てくれば？　ここまで来たら、隠しても仕方ないよ」

チヨルスがミンホを振り返ると、ミンホも頷き、チヨルスの後に従って、オーサーが出てきた奥の部屋へと足を進めた。

薄暗く蜘蛛の巣だらけの部屋の中は、あちこちに廃材が転がっている以外には、部屋の真ん中に粗末なパイプベッドが一つ置いてあるだけだった。

その上で、男が大の字になって寝かされている。

いや、正確には寝かされている　のでは、ない。

両手はどこで手に入れたのか手錠をはめられ、鎖部分をパイプベッドの頭の部分に通され固定されていた。両足はロープでベッドにグルグル巻きに縛りつけられている。

「……これは」

近寄って覗き込んだ男は顔面蒼白で瞳孔が開きかけ、猿轡を噛まされた口の端からは、白い泡を吹いていた。

ビクンツ、ビクンツと身体を震わせ、その度にベッドを激しく軋ませている。

「禁断症状でしょうか？」

恐る恐るチヨルスの顔を覗き見たミンホに、チヨルスは唾を飲み込みながら答えた。

「間違いないな」

「あんまり、長居しないほうがいいよ。これからが本番だから」

いつの間にか、部屋の入口に佇んでいたオーサーが、壁に背をもたれさせ、腕組みした姿勢で言った。

「クスリ抜くのは想像を絶する苦痛だからね。発狂しそうな叫び声を一晩中聞いてたら、あんたたちの方がおかしくなるよ。しばらく、夢にも出てくるしね」

「……お前」

チヨルスの視線を受けながら、オーサーはゆっくりとベッドの男の枕元に近寄った。

「それにこいつは、『抜き』の途中で耐えられなくなって逃げ出した出来の悪い患者でね。結局禁断症状に耐えられなくなって戻って来たはいいけど、逃げてる間にしこたま粗悪品をシャブリつくして来たから、ちょっと手間取りそうなのよ。紳士な俺からしたら、乱暴にするのは、本意じゃないんだけどね」

軽くウエーブのかかった髪を頬に垂らしたその横顔は、相変わらず女性受けする優しげなラインを描いているが、前髪の間から覗くその目はギラギラと冷たく光りながら、ベッドの男を捕らえていた。

「何してるか分かったら、出てってくんない？ ここからは、俺のワンマンショーだから」

オーサーがミンホたちを振り返ってニッコリと微笑んだ瞬間、ベッドの男が突然痙攣するように身体を激しく揺さぶって、粗末なベッドはガタガタと宙に浮くほど軋みだした。オーサーは男の肩を押さえてベッドに乗り上げると、そのまま男の腹の上に跨って、髪を振り乱しながら男を押さえつけた。

「早く出て行けっ！ 幻覚が見えてるんだよ。あんたたちがいると、ますます暴れるっ！」

男を押さえつけながら、オーサーが叫ぶ。
その時、男の口を塞いでいた猿轡さるくわが外れた。

「……っち！」

オーサーは軽く舌打ちすると、片手を男の口の中に突っ込んだ。

「早く行けっ！」

チヨルスとミンホは慌てて、言われるままに部屋を出た。

「うぎゃあああああああ！……！」

閉めた扉の向こうでは、聞いている方が気が変になりそうな叫び声があがる。その声に共鳴するように小屋全体が揺れ、軋んだ音を立てる。

「分かったでしょ？」

部屋から出てきたチヨルスとミンホに、ナビは言った。

「先生は、密売や強姦なんかしないよ。ヤク中になった学生を、救っているんだ」

その時、廃材置き場の外で「うわっ！」という短い悲鳴が聞こえた。

「ナビツ?! 俺の特性弁当、どうしてくれたんだよっ!」

続いて聞こえてきた声に、ナビはヒツと息を飲んで、慌ててミンホの背後に隠れた。

「え?.....あの.....ちよつと」

困惑するミンホをよそに、ドスドスと低く重量感のある足音が響いてきて、突然小屋の扉が開いた。

「ナービーター」

低く、地の底から響き渡るような声で、その足音の主がヌツと姿を現した。

「.....お許し下さい。神様、助けて、お守り下さい」

ミンホの背で、ナビはガタガタ震えながら十字を切り出す。

「食べ物を粗末にするやつは.....」

「こいつでっす! 兄貴ヒミン、僕は無実ですっ!」

「え? あ、えええっ?!」

ナビは勢いよくミンホの背中を突き飛ばして、静かな怒りに震えるジェビンの元に突き出した。

「こいつの闇討ちのせいで、兄貴ヒョウの大事な弁当が全滅でしたっ！
以上！」

「や、闇討ちって……」

反論しようと口を開きかけた瞬間、ジエビンの凍るような視線に射抜かれて、ミンホの心臓も止まりそうになる。

「お前ら、二人とも天誅っ！」

そう言うや否や、どこから出したのか、銀色に輝くお玉で、二人の頭をリズムよく、スコンツスコンツと叩いた。

「……っ……！」

「ギャンツッ……！」

二人仲良く悲鳴を上げて、頭を押さえる。

「ジエビン、悪かったよ。俺からも謝るから。捜査の途中で、このボーイさんが来たもんだから。ミンホも悪気はなかったんだ。勘弁してくれよ」

見かねたチヨルスが間に入ると、ジエビンはようやくお玉を引っ込めた。

「ここで張ってたってことは、もうバレてるんだろ？」

ジエビンは溜息をつきながら、相変わらず獣じみた叫び声の耐え

ないドアの向こうを見やった。

「場所を移そうか？　ここじゃ話もできないから」

数分後、四人の姿は早々と店仕舞いした『ペニーレイン』の中にあった。

「どこから話せばいいのかな？」

カウンターの中で、ジェビンはナビにティーカップを用意させ、自分はアールグレイの缶を取り出しながら静かに言った。

「最初から、全部だ。全部話せ」

急かすように先を促すチョルスに苦笑しながら、ジェビンは言った。

「きっかけは、ある日偶然、さっきの廃材置き場で、たむろしてた学生の集団を見つけたことから始まったんだ」

ナビが用意したカップにゆっくりと紅茶を注ぎながら、ジェビンが続ける。

「去年の9月くらいだったかな。その時も、秋の雨を避けるのに丁度よくて、この高架橋の下にテントを広げようとしてた。それで、ナビに周囲を点検しに行ってもらったんだ。いつもやることだけど、俺らみたいな水商売には厳しい縄張り争いもあるからね。知らずに誰かのシマを荒らしたりしないように、店を広げる前に下見は欠か

さないのさ」

その時、カウンターの向こう、テントとキャンピングカーを繋ぐ通路から、まるで話に加わろうとでもするかのように、灰色の猫が現れた。

「オンマが最初に見つけたんだよ」

ナビは痩せぎすの猫を抱き上げて、そっと優しくそのみすばらしい毛並みを撫でた。

「夕方、開店前にオンマと一緒に探検してたら、学生の集団がゾロゾロあの廃材置き場に入っていくのを見たんだ。身なりもしっかりしてて、髪を染めてるようなヤツもいなくて、真面目そのものの普通の大学生。最初は、サークルか何かのキャンプかと思ったんだ。だけど、あんな廃屋でキャンプやってるのなんか見たことないし、そいつらの様子も、妙にコソコソビクビクして、怪しかった。だからこっそり、窓から覗いてみたんだ」

また、あなたは！

ミンホは思わずそうたしなめたくなったが、周囲の手前それをグツと我慢した。好奇心旺盛なのは結構だが、こんな場面では時としてそれは命に関する。

「変な匂いがした」

その時のことを思い出すように、ナビが顔をしかめる。

「匂い？」

「開いた窓の隙間から漏れてきた。お香に似てるけど、すごく嫌な匂い」

その時、ナビの腕の中で大人しくしていた猫が、急に身じろぎをしてナビの手から逃れ、対角線上にある店のソファアの上に陣取ってしまった。

「今みたいに、匂いに反応したオンマが暴れたんだ。それで、覗いてたのがバレちゃった」

実際にその現場に居合わせた訳でもないのに、ミンホはドキドキと胸が騒ぐのを感じた。

何て無茶な人なんだろう。

「逃げようとしたけど、捕まって……そしたら、オンマが兄貴ニヤクのところまで、助けを呼びに行ってくれたんだ」

灰色の猫は赤いソファアの上で、「当然だ」とでも言うように、優雅な仕草で耳の後ろを掻いた。

「オンマはいつも、僕を助けてくれるんだよ」

そんな猫の姿を見て、ナビも誇らしげに微笑む。

話の本筋からずれ始めたナビの話を、ジェビンが引き取って続ける。

「それで、その時店に来てたオーサーも一緒に、廃材置き場に駆けつけた。奴らを見て一目で、クスリをやってるって分かった。でも、そこまでなら、別に珍しいことでもなかった。客の中でも、何人もヤク中の奴らは見てきたからね。小奇麗な身なりをしてたって、ヤ

クをやる人間の目はいつも同じだから。そうだよな？」

ジェビンがそう言うと、いつの間にか入口のところ立っていたオーサーが、音もなく店の中に入ってきた。全身、雨のせいか汗のせいかびしょ濡れだった。

「あの男はどうした？」

チヨルスが立ち上がってオーサーを振り返ると、オーサーはナビから投げてもらったタオルで顔を拭きながら、くぐもった声で答えた。

「今は眠ってる。安定剤が切れたから、取りに戻ったんだ。長丁場になるから、ちょっと休憩しなきゃ俺も持たない」

タオルから上げた顔には、疲労の色が滲んでいた。

「それで、その学生たちとはその後どうしたんだ？」

「早速取り調べ？ 容赦ないな」

オーサーは苦笑しながら、奥のテーブル席のソファアにグツタリと身体を投げ出した。

「まずは、ナビを返してって言ったよ。当然だろ？ だけど、ヤツらだってバカじゃない。ヤバい場面を見られて、大学にチクられでもしたら終わりだ。ナビちゃんは大事な人質ってわけだから、簡単には返してくれない。だから、粘り強く交渉してみることにした」

「交渉？」

「そ。まずは、友好の証に、そのキメてるクスリをお裾分けしてくれないってね。俺も同じ穴のムジナだって教えてあげたわけ。ヤバいことを喜んで共用するんだから、俺らが奴らをチクることはないって、安心させるためにね」

「……ちよつとだけ、吸った」

ナビが小声で、言いにくそうに呟く。

「でも、ちよつとだよ！ 僕を助けるためにしたんだから、そのくらい多めに見てくれるよね！」

「ナビ、今は取り敢えず、それは置いておこう」

ジエビンに遮られ、渋々ナビも押し黙る。

「だけど、キメるまでもなかった。本当は、吸う前から匂いで見当はついてたけど」

「見当？」

チヨルスの問いに、オーサーが答える。

「やつらがキメてたクスリは『エデン』なんて呼ばれてたけど、そ

んなご大層な名前が似合う代物じゃない。混ぜモンの粗悪品だ。気持ちイイのは、最初だけ。常習すれば強い頭痛、吐き気、死にたくなるような幻覚……簡単に命も持つてかれる。まあ、あの世へ直結つて意味では、確かに『エデン』かもしれないけど。問題は、俺が以前にも似たようなクスリを見たことがあるってことだ」

「何だと？」

チヨルスとミンホの顔色が変わる。

「九年も前の話だけだね。今回の『エデン』そっくりな、混ぜモンの粗悪品がある大学を中心に回って、死人も出した」

「死人も？ 待てよ……そんな記録あったか？……」

コメカミを押さえて、警察の過去の事件を思い出そうと考え込むチヨルスに対して、オーサーは鼻で笑う。

「いくら考えたって思い出せっこないよ。“無かったこと”になってる事件だから」

「一体どう言うことだ？ 何で、お前がそんなこと知ってる？」

謎かけのようなオーサーの言葉に、苛立ちを募らせたチヨルスが詰め寄る。

目を剥くチヨルスに、オーサーはクスクスと手の甲で口元を押さえながら笑う。

「九年前、『ある大学』を中心にその夕子の悪いクスリが出回り始めた頃、俺は知り合いに頼まれて変死した女子大生の周辺を洗ってたんだ。警察発表では既に“心筋梗塞”^{しんきんこうそく}として処理されてたけど、途中で依頼主が死んで、調査は頓挫した。結局、肝心のクスリの出所も掴めないまま、真相は闇の中だ」

オーサーの目が暗い光を放つ。ミンホは、今さらながらこの医師が、普段見せているような柔和で軽くい加減なイメージは、カモフラージュなのだ実感した。

「似てるんだよ。九年前と、クスリの出回り方が。素人の甘ちゃん学生集団相手に商売してるようだが、もっと大きな土壌を隠すためだと俺は思ってる。俺らが見つけた“聖智大学”以外にお宅らが摘発した大学はいくつある？」

チヨルスが答える前に、ミンホはチヨルスから預かった資料に書いてあった数値を反芻する。

「ソウル市内だけで、5大学、学生数にしたら50弱」

「一大学10人弱の計算だ。数にしたらそう多くも無いが、そいつらに、間も切らせずクスリを運ぶには、組織だった販売ルートが必要はず。だが、肝心の大本は、功名に姿を隠して分からない」
「まるでトカゲの尻尾だな。いくら下っ端の尻尾を捕まえたところで、胴体には辿り着けない。俺たちが手をこまねいていたのもそこだ」

チヨルスの言葉に、オーサーは意味深な笑みを漏らした。

「そう悲観するものでもないよ。尻尾だって、一本一本丁寧に辿っていけば、どれか一本くらいは胴体に繋がっているもんさ」

「それは、どういう……」

眉を潜めるミンホに、オーサーは子どものように無邪気な、満面の笑顔で答えた。

「君らと違って、俺には時間も暇も売るほどあるからね。シッポちやんたちを一人一人集めて、逆から追ってやることにしたんだ。廃材置き場で捕まえた学生の一人に吹き込んだ。今よりもっとキメられる、特製の『エデン』を持ってるって。だけど、本当に特製だから、一度にちよつとしかあげられない。君と、君の彼女の分くらい。他の仲間には秘密。じゃないと、殺到しちゃうからね。俺の“お気に”の子しか呼ばないよって念押ししたら、噂はあつという間に広まった。みんな『ペニー・レイン』に気に入られようと、競争を始めた。『ペニー・レイン』の“お気に”になる方法はたった一つ、胴体に繋がる情報を持つてくること。俺は彼らに競争させて、一人一人別々に『ペニー・レイン』に呼び出した。大抵の場合は男の方から先に呼んで、彼女を呼び寄せたいがために頑張らせたってわけ。クスリを抜いた後じゃないと、彼女も呼ばせないし特製の『エデン』もあげないよってね」

「じゃああなたは、墮胎の幫助ほつじょをしていた訳ではないのですね？」
「あれ、何？ そんな噂になってるの？」

ミンホの問いに、オーサーは目を見開いて、面白そうに口の端を歪めた。

「そつか、時間差でもカップルで消えれば、そう怪しまれても仕方がないかもね。男女で呼んだ理由は簡単だよ。男の子は女の子のためなら、頑張っちゃうでしょ？ 君にも経験あるんじゃない？」

バチンとミンホに向かってウィンクしながら、さり気なくその目はナビの姿を追う。

「ジロジロ見るなよっ！」

思わずオーサーの視線の先を追ってナビと目が合ってしまったミンホに、ナビから厳しい一言が飛ぶ。

「別につ！ あなたなんか、見てません」

苦し紛れにそう反論しながら、第一、あなたは“女の子”じゃないでしょっと、モゴモゴと口の中で呟いた。

「ちよつと待て！ お前はじゃあ、学生から集めた情報で、黒幕の正体を知ってるのか？」

「どんだん話の本筋と脱線する周囲の状況を引き戻そうとチョルスが声をあげると、オーサーは首を傾げながら、「半分正解で半分不正解」と笑った。

「決定的な証拠は無いよ。俺が持つてるのは、トカゲの尻尾ちゃんたちから集めたリストだけ」

そう言つて、胸ポケットから折りたたんだ紙切れを取り出す。

「名づけて、シツポちゃんリスト」

「そのまんまだし！」

緊迫した空気を忘れてしまったかのように、ナビが明るい声で突っ込みを入れる。

事実オーサーが長い指の間に挟んでいるその紙切れには、几帳面な小さなハンゲルで『シツポちゃんリスト（末尾にはハートマークまで付けて）』と記されていた。

「それ、見せる！」

「別にいいけど。もう、隠す必要もないし」

オーサーが興味なさげにテーブルの上にその紙切れを投げ出すと、チョルスがそれに手を伸ばすよりも早く、ナビが飛んできた。

「待つて！」

ナビはオーサーの紙切れを奪い、胸に大事そうに抱えてジツとチヨルスとミンホを見据えた。

「ジェビニヒヨンのことも、先生のこと、もう疑ってないよね？
先生はわざと麻薬密売人みたいな真似をして、何人も麻薬中毒の学生を救って来たんだよ。ジェビニヒヨンも、そんな先生を応援していただけ。人助けをしたんだよ。だから、逮捕したりしないよね？」

「それは、全部の取調べが済んでからだ。こんな大事なことに勝手に警察に黙って進めてたんだ。しょっぱく理由が完全に無くなったわけじゃない」

「やだっ！」

「やだつて、お前なっ！」

青筋を立てながらナビに手を伸ばしてきたチヨルスを、ナビはひらりとかわして、店の中を駆け出した。

やっぱり猫だ。

兄貴分が目の前でてんてこ舞いする様子を見ながら、ミンホの脳裏はそんな不謹慎な思考を紡ぐ。

「この野良猫っ！ いいから、早くそのリストを寄こせ！」

チヨルスも同じことを感じている。

妙なところに関心している間にも、チヨルスは店の床をキュツと靴の底で鳴らして、そんな猫を追いかける。

『狂犬』と『野良猫』の追いかっこ。

思わずクスリと笑いを漏らしそうになり、ミンホは慌てて椅子から立ち上がった。

「待ってください」

「ツキヤンツ！！」

いきなり目の前に立ちふさがったミンホの胸に弾かれて、よろける猫の腕をミンホはがっちり取り押さえた。

「何すんだよっ！？ 離せ、デカイのっ！」

「僕はデカイのって名前じゃありません。ハン・ミンホって名前があります」

「そんなの知らないよっ！」

ナビは必死に身を擦ってその腕を振りほどこうともがくが、ミンホはビクともしない。

「落ち着いてください。僕らも、あの人がやっていたことを、ついさっき目の前で見ました。だから、絶対に悪いようにはしません。だけど、あなたがそうやって必要以上に捜査の妨害をするなら、僕らも黙っているわけにはいかないんです」

ミンホはナビの手首を握ったまま、その幼顔を覗き込む。

「あなたが、オーナーや先生を大切に思ってることくらい、僕にも分かりますよ。だからこそ、僕らのことを信じてください。僕らはあなたたちを、捕まえたいんじゃない。ただ、事件の手がかりを知りたいんです」

ね？

そう言って、首を傾げるミンホに、ナビは尚も悔しそうに唇を噛み締めていたが、やがて真っ赤な顔をしたまま、渋々コクリと頷いた。

「……………ありがとう」

ミンホはそう言って、ナビの強く握り締められた拳を少しづつ開いていく。拳の中でグシャグシャになったオーサーのリストを受け取り、ミンホはチョルスと二人でそれを広げた。

リストには、氏名、年齢、大学・学部名、男女の別、連絡先の携帯番号など、詳細な個人情報網羅されていた。驚いたことに、大学年は神隠し事件が流行っていた『聖智大学』だけでなく、ソウルを代表するそうそうたる名門大学の名も記されていた。名前の横には赤鉛筆でチェックが入っており、所々、そのチェックが飛んでいた。

『ペニー・レイン』に呼ばれる前に、おたくらにしょつ引かれた学生も多いよ。ついこの前の一斉摘発でも、随分情報網を持ってかれて苦労したんだから」

そう言われてみれば、リストの真ん中辺りでは、大人数のチェックが飛んでいる部分があった。

「チョルスヒョン！ この名前……………」

ミンホはリストの中に、見覚えのある名前を見つけてチョルスを見上げた。

コ・ジョンヒョン

拘置所でチヨルスの先輩、ミンホの前任であるソン警査を刺し、ここ数日ミンホが周辺を洗っていたあの彼だった。

「その子は、異色だよ。そもそもクスリの土壌になってる大学の生徒じゃないからね。だけど、随分熱心にアプローチしてくるもんだから、一度呼んでみようかって思ったたところで、おたくらに持ってかれた」

「……それで、ソン先輩を刺したって訳か」

チヨルスがリストを目で追いながら、忌々しげに舌打ちする。

「ヤクを抜くつたつて、一晩やそこらでどうにかなるものじゃないだろ？ ずっとこんな廃材置き場に置いとくわけにもいかないだろうし」

「勿論、波が過ぎたら場所を移すよ。俺の隠れ家でリハビリさせる」「隠れ家？」

「そ。俺だけの秘密のお城」

首を傾げる愛らしい仕草にも、目の奥は強かな光を放っている。

「ヤクが抜けた後、そいつらはどうなる？」

「いい子になるよ」

ふざけたオーサーの答えに、チヨルスが声を荒げる。

「真面目に答えろっ！」

「本当のことだよ。俺のリハビリが終わって帰る頃には、クスリに溺れてたことは、きれいさっぱり忘れてる」

「忘れてるだど？」

チヨルスの眉が釣りあがる。

「そんな馬鹿な話があるか」

「あるんだなあ。ほら、俺天才だから。ちょちよいと魔法をね」

オーサーは、相変わらずクスクス笑いながら立ち上がった。

「じゃあ、俺そろそろ戻るよ」

「おい、待て！ まだ話は終わってないぞ」

「待てないよ。また発作がきて、火事場の馬鹿力で手錠切られて逃げられたらおしまいだもん。禁断症状時のヤク中患者の力って、尋常じゃないんだから」

オーサーは出口に向かいながら、ふと思いついたように足を止めた。

「でも、丁度良かったよ。一人一人シツポちゃんを誘き出してクスを抜いてくのも、そろそろ限界だったから。辿っても追いつかないくらい、患者は増えてる。元を断たなきゃ、イタチごっこだ」
「だから、その大元がっ……」

苛立つばかりのチヨルスに向かって、オーサーは長い指を突き出した。

「リストの名前の横をみな。シツポちゃんたちから集めた情報だ。色んな大学を迂回しながらも、どのルートも、最終的には一箇所に集まってる」

オーサーの言葉通り、チヨルスとミンホはもう一度リストの上から下まで視線を走らせる。そこには、名前の横にいくつものイニシャルが刻まれていた。

エンピツで幾度もなぞり黒く汚れたそれらには、どの名前の横にも共通するある一つのイニシャルが書かれていた。

「……M・K？」

「ソウル市内の大学で、そのイニシャルがつく大学と言ったら？」

「明慶大学っ！」

思わず叫んだミンホに、オーサーがニッコリ笑って指を鳴らす。

「ご名答！ ちなみに、俺の母校」

オーサーが肩を竦める。

「そして、『無かったこと』になってる、9年前のあの事件の舞台になった学校だ」

それは、名門の呼び声高い、ソウルでは知らぬ者のない名前だった。

「……やっかいなことを、掘り出してきてくれたな」

署長室のデスクの前で直立不動の形をとる長身の男二人を前に、警察署長は明らかにさまな溜息をついた。

「オーサー・リーは本当にクロじゃないのか？ 奴が善意だけでヤク中患者のリハビリを買って出てるとは思えんが」

「食えない奴なのは確かですが、実際にヤツがクスリ抜きをしてる現場を押さえたので、確かです」

チヨルスの言葉に、ミンホも強く頷く。

「……だが、明慶大学か。警察幹部の中にも出身者が多いからな。

それに、この間の一斉摘発でも、明慶だけはシロだったじゃないか」「何かカラクリがあるはずです！ このまま見て見ぬフリしろって言うんですか？」

「そうは言っていないだろう」

すぐに熱くなるチヨルスに、鬱陶しそくに署長が頭を搔く。

「大っぴらには、出来ないと言ったんだ。潜入捜査で確かな証拠を掴んだら、全く出来ない話じゃない」

「潜入捜査?!」

思わず、チヨルスとミンホの声が重なる。

「俺に、今さら大学生になれと?!」

裏返った声で叫んだチヨルスを、署長がバツサリと切り捨てる。

「薄汚いヒゲ生やした三十路男に、そんな無茶は言わん。マフィアへの潜入ならともかく、どう見たってお前に今更大学生は無理があるだろう。第一、そんなスレた目えした大学生がいるか」

「……自覚してますけど。面と向かって言われると、すぐく腹立ちますね」

ブツブツと消え入りそうな声で文句を言うチヨルスを尻目に、署長は真っ直ぐにミンホを見据えて言った。

「お前が行け」

「え？ 僕ですか？」

突然の話に、ミンホが目を見開く。

「つい二年程前まで本物の学生だったんだ。わけないだろう？」

事も無げに署長は続ける。

「本当なら、もう一人署からあてがうべきだが、あまりこの件を大っぴらにしたくない。民間人を巻き込むのは得策じゃないが、仕方ないだろう」

「民間人って、署長、まさか？」

「その『ペニー・レイン』とか言う店の関係者を、捜査に協力させるんだ」

チヨルスは開いた口が塞がらなかった。

「今のところは、中毒患者との唯一のラインだろ？ まだ隠してることがあるかもしれない。潜入捜査への協力依頼できっと、自分たちへの疑いは晴れたと思いつく筈だ。捜査の途中でボロを出す可能性も大いにある。チャンは引き続き『ペニー・レイン』周辺も洗うんだ」

よくもそんな狡猾な手管を思いつくものだと、チヨルスは舌打ちしたい気持ちになる。協力と言う名の下で信用させ手のひらを返す。それが自分の仕事では日常茶飯事であることはチヨルスも充分承知していたが、何となく『ペニー・レイン』の彼らに対して、そういった手口は使いたくなかった。

「で？ 誰かいないのか？ 大学生に見えそうな奴が」
「いません」

即答したのはチヨルスだった。

「オーサー・リーは？ 腹の立つことに、場末の娼婦が夢中になるくらいのルックスだろう」

これまで幾度も重要事件の参考人になってきただけあって、オーサーの顔は警察署内には知れ渡っていた。署長もこれまで何度も、まるでプロマイドのようなオーサーの資料写真を目にしている。

「明慶大学のOBですよ。顔が割れてます」

「じゃあ、そのオーサーの男って言うのは？」

「ある意味、俺よりスレた目をしてます。それに、映画俳優みたいなツラしてますけど、ヤツだって俺と同じ年、三十路男です」

「え?!」

真横から聞こえて来た正直すぎる驚愕の声に、チヨルスはミンホを睨みつける。

「なんだよ！ 声に出さずに口の動きだけでそう言って、ミンホを威嚇する。」

「他にはいないのか？」

チヨルスとミンホは顔を見合わせた。

あと一人、残っていることは確かだが……。

「いるのか？ いないのか？」

徐々に署長が苛立ち始めてきたのが分かる。

「いるには、いるんですが……」

ミンホが歯切れ悪くそう答えると、署長は手を差し出して資料を寄こすように催促する。今回の張り込みで、ミンホがまとめた報告資料だった。そこには、ジエビンやオーサーを始め、分かる範囲で『ペニー・レイン』関係者の情報が載っている。

「……ん？ ユン・ナビ？」

予想通りの展開に、チヨルスとミンホはますます青ざめて顔を見合わせる。

「これでいいじゃないか！ 早速、交渉に行け」

二人の気持ちなど知る筈もなく、署長はミンホに資料を突き返しながら言った。

チヨルスは眉間に皺を寄せて俯いたままだ。

ミンホは、一瞬目の前に、落ち着きなく店中を動き回りながら、トレードマークの金髪を揺らして、ハスキーな笑い声を響かせるナビの顔が浮かんできて、慌てて頭を振ると、それからギュツと目を閉じた。

だが脳内に入り込んだこの猫は、現実の彼と同じくらい無遠慮にミンホの脳内を駆け回り、ミンホを悩ませた。

「……先が思いやられるぜ」

ポツリと呟いたチヨルスの一言が、ミンホの今の気持ちを代弁してくれていた。

第1章【ペニー・レイン】完

2 - 1 (前書き)

ラストダンスは、あなたと……

サンダルを脱いだ素足を前の座席の間に投げ出して、自慢のネイルの手入れをしていた少女は、不意に車が動き出したせいで大きく爪からはみ出してしまったマニキュアの瓶を閉じて、悔し紛れに運転席目がけて投げつけた。

「やめろよ、ユリッ！ 運転中に危ないだろ」

「急に発進するからでしょ、バカッ！」

「仕方ないだろ。朝は渋滞することくらい、毎日通ってるんだから分かるだろ。爪の手入れなんか、家でやってこいよ。毎日毎日、ギリギリまで寝てる君が悪いんだろ」

「生意気ねっ！ ただの運転手の分際で」

少女が鼻を鳴らすと、ハンドルを握っていた少年も負けじと言いつ返す。

「僕は君の運転手になった覚えはないよ」

「パパに言いつけてやるからね」

「僕こそ、おじさんに言いつけてやるよ。折角高い学費出してもらってるのに、勉強もしないで……」

「やめてよ、説教はたくさん。兵役から帰った途端、口うるさいパパが一人増えたみたい」

少女は顔の前で大きく手を横に振ると、前に乗り出していた身体を、再び後部座席へと深く沈めた。

「……っあ！」

その時、不意に窓の外を覗いた少女は、渋滞する隣りの車線に止まる車を見て顔を輝かせた。

「ヒヨンスツ！ 私ここで、降りるわ」

「え？ ユリ?!」

言うが早いか、少女は自分で勝手にドアを開け、隣りに並んだ車の窓を叩いた。すると、全面をスモーク張りにした黒いスポーツカーの窓が開き、中からサングラスをかけた男が顔を出し、少女の首に手を回した。二人は人目もはばからず、朝の通勤・通学ラッシュで渋滞する道路の真ん中で熱いキスを交わし始めた。

ハンドルを握る少年の手に、思わずギリツと力がこもる。

すぐにスポーツカーの助手席のドアが開いて、少女が滑り込む。スモークの窓が再び閉まり、少女の姿を完全に隠してしまう前に、少年は大声で叫んだ。

「ユリツ！ 今日は八時から、おじさんと大事な会食があったらど？ 忘れるなよっ！」

すると、少女の代わりに、先ほどのサングラスの男が窓から顔を出した。男は窓越しに対峙した少年を見るとニヤリと笑い、サツと親指を突き立て、首を横に掻き切る仕草をすると、親指を下に向けて舌を突き出した。

少年の頬がカツと熱くなる。

男と少女の笑い声を残して、スモークの窓が閉まると、少年の乗る車を残し、彼らの車線が流れ始めた。

少年は距離を開けていく黒いスポーツカーの後ろ姿を見送りながら、深い溜息を漏らした。

「え?! ナビを?!」

シトシトと降りしきる雨の下、客足の途絶えた明け方の『ペニーレイン』にて、ジェビンはカウンターに座るチョルスの言葉に目を見開いた。

「無茶な頼みなのは、分かってるよ。本当は、こんなこと頼めた義理じゃないんだけど……」

うつむくチョルスに合わせて、隣りにいたミンホも深く頭を下げる。

「身の安全は、僕が責任を持って保障します。学生間でのクスリのルートさえ掴めれば、すぐにナビさんをお返しします」

「僕はヤダよ!」

その時、相変わらずガチャガチャと危なっかしい手つきで皿洗いをしていたナビがキュツと蛇口を捻って水を止めてから言った。

「そりゃさ、潜入捜査なんてちょっと面白そうだとは思っけど、そんなに何日もジェビン兄貴ヒョビンを放つといて店を空けたり出来ないよ」

不機嫌そうに布巾を取り上げ、これまた慣れない手つきでゴシゴシとさつき洗ったばかりのグラスやら皿やらを拭いていく。

「それに、そのデカいのと一緒ってのがヤダッ！」

子どものように唇を突き出し、カウンターのミンホを恨めしそうに見つめる。

「デカいのって……僕はハン・ミンホって名前があるって言ったでしょう?」

ミンホは溜息をつきながら言った。

「知らないよ。僕は、気に入らない奴の名前までいちいち覚えてないもんね」

「ああ、頭に入りませんでしたか? あなたの可哀相な脳ミソには、一人の名前すら収まりきらなかったんですね」

ミンホが、さも哀れだと言うように首をすくめると、ナビは言い返す代わりに、手にしていたビショビショになった布巾をミンホ目にかけて投げつけた。

ベシヤッ!!

と音を立てて、それは見事にミンホの顔面にヒットした。ズルツと重い音を立ててカウンターに落ちるその布巾を、チヨルスとジェビンは青い顔をして見つめる。

ワナワナと震えだしたミンホは、突然ガタツと立ち上がると、カ

ウンターの中のナビを指差しながら大声で叫んだ。

「あなたねっ！ 僕がお弁当台無しにしたこと、一体いつまで根に持ってるつもりなんですかっ！？ あれは、きちんと謝ったでしょ。弁償だってしたじゃないですか。いつまで子どもみたいに拗ねてれば気が済むんですか！」

「開き直るなよっ！ あれは、ジエビン兄貴キョウの真心がこもってるだよ！ プライスレスなんだよ！」

「ナビ、俺はもういいから」

見かねたジエビンが間に入り、二人のバトルはナビのミンホに向けた渾身の『イーダッ』で幕を閉じた。

「……ねえ、ナビ。店のことは大丈夫だから、協力してあげたらどうかな？」

思いもよらないジエビンの言葉に、ナビを初め、その場にいる三人全員がキョトンとジエビンを見つめた。

「オーサーのところに来る学生も増える一方だし、俺も今回の一連の騒動は何だか気になるんだ。チヨルスたちに、力を貸してやってもいいんじゃないかな？」

「ジエビン……」

感動したチヨルスが口を開こうとした時、ナビは猛烈な勢いでジエビンの肩を掴んだ。

「そんな……兄貴ケムシッ！ 店はどうするの？ 僕がいなかったら、どうやって開店準備するの？」

「……お前がない間は、チヨルスに手伝ってもらおうよ」

「え？ 俺?!」

ニツコリ微笑むジエビンに、驚いたのはチヨルスの方だった。

「こつちからも大切な人員を一人出すんだ。おあいこでしょ？ 心配しなくても、毎日じゃないよ。雨が降りそうな時だけ、開店準備だけ手伝ってくればいいから」

「……いや、でも……」

接客業には向いてないとよく言われる。十八の年から野獣のような叩き上げの警官の中で育ってきたチヨルスに、今さら客の顔色をうかがう仕事が出るのか。当のチヨルス自身が不安になってきた。

「お願いします。いいですよ？ チヨルスヒョン」

躊躇するチヨルスに代わって、ミンホがサクッと返事をしてしま

った。

「おい、ミンホ……お前！」

「次に来る時までには、潜入用の学生証や教材その他を揃えてきます。詳しい打ち合わせもその時に。ですよね？ チョルスヒョン」

「……お、おう」

ミンホに押され気味のチョルスが頷く。

「その時一緒に、チョルスヒョンにも接客の何たるかを教えてください」

「任せといて」

ジェビンはミンホの言葉に頷き、親指を立てた。

不満と不安の表情をそれぞれ浮かべたナビとチョルスは、そんな二人を見てムツツリと押し黙った。

「……ナビ、いつまで拗ねてるの？」

完全に店じまいをして、チョルスとミンホを送り出した後、キャンプングカーに引き上げたジェビンは、先に引き上げさせ、今は枕を抱いて、ロフトスペースでこちらに背を向けて横になるナビの背中にも声をかけた。

しかし、ナビからの返事はない。

ジェビンは苦笑しながら、下にある自分の簡易ベッドに腰をかけた。右手で左足のふくろはぎを持って、やっとの思いでベッドの上

に乗せる。

すると、ロフトで不貞腐れていたナビが、まだ不満いっぱい顔をしながらも、ジェビンの元へ降りてきた。

「……兄貴ケイのバカ」

顎を真っ直ぐ引いて、上目遣いで文句を言うナビは、本当に幼い子どものようだった。

「あれ？ ナビちゃん、ちゃんとお口あつたんですか？」

ジェビンはクスクス笑いながら、ナビの手を取る。そのまま引っ張られて、ナビはジェビンの座るベッドに腰を下ろした。

すぐ側にある、ジェビンの左足に手を伸ばす。

小さめの手のひらで、固く強張ったジェビンの左足のふくろはぎから足首までを、丁寧に揉み解すようにさすっていく。

「……痛む？」

「んーん、今日は平気」

ナビが枕を壁とジェビンの身体の間差し込んでやると、ジェビンは、ありがと、と言ってそのまま後ろに体重を預けた。

「僕がいなかったら、誰が雨の日に、こつやっケイて兄貴の足をさすってあげるのさ？」

ジェビンが見下ろす先で、うつむき一心に足をさするナビの頬が赤く染まっている。長年の付き合いで、これはナビが泣き出す一歩手前で我慢している印だと分かる。

「あの、チヨルスってオマワリに任せるの？」
「……まさか」

ジエビンは笑って、ナビの熱くなった頬に手を伸ばした。

ああ、やっぱり。

ジエビンは笑い出したいような、切ないような、くすぐったい気持ちになった。

顔を上げたナビは、予想通り、泣き出す寸前だった。

「お前のマツサージ受けたら、他には頼めないよ。ゴールドフィンガー、ナビヤア」

真っ赤な顔から赤みが引いて、途端にパアツと効果音が付きそんな笑顔を輝かせる。

「雨が降ったら、絶対戻ってくるよ」

「……分かった。でも、無理はするなよ」

こうなったら、ナビは意外に頑固だ。

行ってもいいという気持ちになっただけでも、儲けものだろう。

「髪、少し切るうか？」

ジエビンはナビのトサカ頭に手を伸ばした。ハードムースで無理やり固められた、本来は柔らかい猫っ毛を、優しく解していく。

「あまり目立たない方がいいなら、色も少し染め直したほうがいいな」

「イヤだよ。ジェビニヒョンと同じ色がいいんだ」

ナビは大人しくジェビンに髪をいじられながら、唇を尖らせた。確かに、首筋まで伸びたジェビンの髪は、薄暗い『ペニーレイン』の店内でも一際目立つ艶やかな金色だった。

「お前には、もう少し落ち着いた色が似合うよ。顔が明るいから」「何それ？」

ナビの怪訝な顔に、ジェビンは手の甲を口に当てクスクス笑う。

「表情の話だよ」

ナビは両手を自分の頬に当て、首を傾げる。

「俺が、切ってやるよ。カッコ良くしてやるから……な？」

髪を撫でながら、優しく微笑むジェビンに、やがてナビも素直に頷く。

拗ねて膨れて見せたって、結局はいつも、この優しい兄に反発したままであることなんて自分には出来ないのだ。

心地よく髪を流れるジェビンの細い指の感触に、目を閉じて身を任せようとしたその時、不意にジェビンの手の動きが止まった。

「……………兄貴？」

怪訝に思っただけで見上げた視線の先で、ジェビンの灰色の瞳に出逢う。思慮深く、いつもどこか憂いを秘めた、その瞳に。

「……………ナビ」

「うん？」

「……バレない自信、ある？」

不意を突いた言葉に、ナビが喉を詰まらせる。

「行けって言ったのは俺だけど、保護者としては、それだけがちょっと、な」

すると突然、ナビがバチンツと音を立てて、さっきまでジェビンの足をさすっていた小さな手で思い切りジェビンの白い頬を挟んだ。

「ナビ?!」

驚いて見開かれたジェビンの目の前に、額を付き合わせるような距離でナビの黒めがちな目が迫る。

「大丈夫だよ。兄貴ヒムンの弟を信じなさい！」

大真面目な口調が可笑しくて、ジェビンはナビの丸い後頭部を抱き寄せて頷いた。

「持ってきたぞ！ あ、何だ先生。あんたもいたのか？」

スポーツバックを左右の肩にかけた上に、大ぶりのトランク二つを持ったチヨルスは、ミンホに傘を差しかけてもらいながら『ペニレーン』の中に入ってきた。

「ひどいよー。こんなに面白いこと、俺にナイショで進めるなんてさ」

オーサーはカウンターに腰かけ、頬杖をつきながら唇を尖らせた。

「ナビのコスプレ、見たいーい」

「コスプレって何だよ？」

呆れたチヨルスが尋ねると、オーサーはシレッとした口調で言った。

「え？ 女子高潜入ハラハラ大作戦！でしょ？ その中には、二人

分のセーラーフックがー……」

「んなわけ、あるかつー！！」

その時、カウンターの奥からナビが姿を現した。

「おっ！！ ナビ」

その場にいた皆の視線が、ナビに集中する。

ナビはトサカの形に固めていた金色の髪を黒く戻し、サラサラの前髪を下ろしていた。

元々童顔だったが、落ち着いた髪の色と髪型のせいで、今は初々しさは残るものの、きちんと大学生に見えないこともなかった。

「ナビヤ可愛いー」

「可愛いって言うな」

ナビは赤くなって、髪に伸びてくるオーサーの手を振り払いながら、乱れた髪をグーのカタチにした拳で、何度も何度も撫で付けた。照れ隠しの仕草なのだと、ミンホにも何となく分かった。

ミンホはチョルスの荷物を半分持ってカウンターの席についたが、なぜだか今日はナビの顔をまともに見れなかった。

見慣れぬ姿が新鮮で、何だか初めて会う人物のような気恥ずかしさがあった。

「なかなか似合ってるぜ。あとは、その左耳のピアス、取った方がいいな。特徴になるようなモンは、なるべく身につけない方がいい」

チョルスの指摘に、ナビは左手をグーの形に握ったまま、その手でピアスを隠すように左耳の上に持っていった。

「……これは、ダメだよ」

「ダメ？」

左耳に手を当てたまま俯くナビを覗き込もうとしたチョルスの顔の前に、突然銀色のお玉が降ってきた。

「……っな？」

「ピアスくらいしてた方が、今ドキの大学生っぽくって、却って目

立たなくていいと思うけど?」

お玉の柄を掴んだジェビンの腕は、青い血管が幾つも走り、もう一度本気でそのお玉を、今度は頭上に振り下ろされたらと思うと、チヨルスは震え上がり、これ以上口にすることが躊躇われた。

気を取り直して咳払いを一つすると、チヨルスは用意してきた話を振った。

「下準備もなかなか大変だったんだぜ。いくつか考えてきたんだけど、ナビ、お前、希望の学部あるか?」

「体育学部!!」

即答するナビの頭を、チヨルスがにべもなくぺチンと叩く。

「何だよっ!」

頭を押さえてナビは抗議する。

「明慶に、体育学部はありません。それに、仮にあったとしても……だ。体力自慢の健康優良児集団が、廃人寸前になるようなヤクに手を染めると思っつか?」

チヨルスは目の前に突き出した人差し指を左右に振って言った。

「二年の法学部、四年の文学部。人数も多くて顔の知らない奴が紛れ込んで分らない。この線が潜るには丁度いいと思うんだ。二人バラバラの学年と学部で、目ぼしい学生を見つけて欲しい。ナビが二年……ミンホが四年……」

「分かりました」

「ちよっと待ってよっ!」

素直にナビの言葉に頷いたミンホとは違い、ナビは勢いよく手を上げた。

「はい、ナビ君、どうぞ」

律儀にチヨルスに指名され、ナビはカウンターから身を乗り出した。

「何でこいつが上の学年なの？ 僕の方が年上なんだから、可笑しいでしょ？」

「……いや、でも……見た目的に？ ほら、ミンホの方が……」

「ぜーったい、四年が僕だもんね！ お前は二年！ 年下なんだからっ！」

「別にいいですけど。あなたが卒業間近のゼミの勉強にもついていけるって言うなら。ちなみに、潜在対象は英米文学科を選んでますから、一部には全編英語、韓国語使用禁止の授業もありますけど。それでもあなたがどうしても四年がいいと言うのなら、僕は一向に構いません」

ミンホの言葉に一瞬グツとつまったナビだったが、すぐに体勢を立て直して言い返した。

「バカにするなよ！ 僕だって毎日新聞ちゃんと読んでるんだぞっ」

「ああ、それは失礼しました」

「お前ら、ケンカばかりするなよ。これから協力して捜査してかなきゃならないんだぞ」

チヨルスが呆れて口を挟む。

「と言うわけだから、不満はあるだろうけど我慢してくれ。ナビは二年の法学部、ミンホが四年の文学部でいいな？　おい、ナビ！　ちゃんと聞け！」

英語くらい、何だよ……そう言いながら、未だにミンホに恨めしげな視線を送りながらブツブツ言っていたナビの額を弾いて、チョルスが注意を戻す。

「連絡用のプリペイド携帯はそれぞれに渡しとく。くれぐれも、慎重にやってくれよ。身元がバレたらお仕舞いだ」

チョルスの言葉に二人は一旦休戦を決め込んで、頷く。

「雨が降ったら、兄貴ヒョムンのところへ帰してね。それが、条件だよ」

先にジェビンから聞いていた、ナビの譲れない条件を、チョルスたちは承諾していたところだったので、それには素直に頷いてやった。

「心配しないで、ナビ。俺も、ナビの捜査の間はこの店手伝うことにしたから」

その時、カウンターに座り面白そうにナビたちの様子を眺めていたオーサーが言った。

「何だつて？　俺はそんな話聞いてないぞ？」

驚いたのはチョルスだった。

「当たり前だよ、今話したんだから」

オーサーはニッコリ微笑んでカウンターの中のジェビンにウィンクする。

「オーサーもいたら、心強いよ」

その笑みを受けて、ジェビンも微笑んだ。

「……ま、まあじゃあ、店の体制も決まったことだし、よろしく頼むぞ」

チヨルスが無理やり自分を納得させてそう告げると、ミンホはナビに向き直った。

先ほどのケンカの続きかと、ファイティングポーズを取って身構えたナビに対して、ミンホは意外にも律儀に頭を下げた。

「……色々不満があるのは、お互い様です。でも、決まった以上は僕は警官としてあなたを守る義務があります。危険な目にはなるべく合わせないように守りますから、あなたも出来る限り協力してください」

生真面目な挨拶に出鼻を挫かれたナビだったが、思い直したように胸を張って体勢を立て直した。

「条件がある」

「……何でしょう？」

この期に及んで、また何を言い出すのか。今度はミンホが身構える番だった。そんな彼に向かって、ナビは大きな声で言った。

「クヨン」

「……はい？」

ナビの馬鹿デカイ声で宣言された言葉の意味が分からなくて、ミ

ンホは思わずマジマジとナビを見返した。

「ナビ兄貴ケムンて呼べ！」

手を腰にやり、ふんぞり返ってカウンターのミンホを見下ろす。

「ほら、呼べ！」

フンツと鼻息も荒く、ミンホを急かす。仕方なく、ミンホは口を開いた。

「……………ナビ……………」

「兄貴ケムン！！」

「……………ナビ兄貴ケムン」

消え入りそうなミンホの声でも満足だったらしく、ナビは独特なハスキーボイスを響かせて笑うと、ミンホの肩をポンポンと満足気に叩いて言った。

「安心して、兄貴ケムンを頼れよ！」

何が、兄貴ケムンだ　高校生みたいな顔をして。行動と言動はもつと下、小学生並みだ。

それでもミンホは、これから望まずとも相棒になるナビの機嫌を損ねないように、コメカミを震わせながら無理やり愛想笑いを浮かべた。

「あーん、何で大学なのお？ 折角ナビヤのジヨシコーサールックにお目にかかれると思ったのに。私服なんてつまらないじゃない。あのサラサラ黒髪は可愛かったけどお」

「まだ言ってるのか、お前」

カウンターに肘を突いた姿勢のまま、グーの形で作った手の中に自らの顎を乗せ、可愛らしい仕草で首を傾げるオーサーを、洗い物の途中にあるジェビンは冷め切った視線で一瞥する。

「何なら帰って来てからでもさ、メイドさんの格好させてさ、給仕してもらったのはどう？ 俺、仕入れてくるよ。お隣の日本では流行ってるらしいじゃない？ そーゆーの」

「おい。皿が飛んでく前に、そろそろその軽薄な口閉じた方が身のためだぜ？」

潜入前の日用品を揃えに、ナビがミンホとチョルス連れられて出て行ってから、店内に残された二人は、ずっとこの調子であった。狭いカウンターの中で休むことなく働くジェビンに対して、オーサーは手を貸すどころか内容の無いおしゃべりでその仕事の邪魔をしていた。

「前言撤回」

「え？」

「お前がいれば、心強いつて言ったこと」

ジェビンはかけていた白いエプロンで手を拭くと、そのまま身体から剥ぎ取って、水分をたっぷり含んだそれを、丸めてオーサーに投げつけた。

「働かざるもの、食うべからず！ 残りの皿はお前が洗え」

そう言うと、自分はさっさとカウンターを飛び越える。

「残りつて、まだ半分以上残ってるじゃない」

「お前がくだらないことばかりしゃべって邪魔するからだろ！

一分でいいからその口閉じて、仕事してみやがれ」

「いくらくれる？」

「は？」

「“沈黙は金” って言うで……」

「いいから、早くやれっ！」

最後までいい終わらない内に、ジェビンの鋭い一喝が店内を奮わせる。

「はいはい……そんなヒステリーじゃ、せつかくの美形が台無し……

…はい！ 可及的速やかに片付けさせていただきますっ！」

氷よりも尚冷たいジェビンの視線に射抜かれて、オーサーはようやく姿勢を正して立ち上がった。

その時だった。

店のドアが開くと同時に、倒れこむように一人の男が店内に入ってきた。

狂ったように鳴り響く耳障りなドアベルの音が狭い店の中にこだまする。

「…………ハア…………あ…………センセ…………」

筋肉で盛り上がった背中を大きく波打たせ、脂汗を流しながらそれでもようやく顔を上げた男の顔を見るなり、オーサーの瞳から、つい先ほどまでの茶目っ気たっぷりの色が消えた。

「ねえ、ジエビン」

視線は入口の男に向けたまま、オーサーは口元に冷ややかな笑みを作って囁く。

「俺みたいな美形がカウンターの中で皿洗いなんて可笑しいんじゃない？ 適材適所って言葉があるでしょ？ 俺にはやっぱり表舞台のホールの方が向いてると思うんだよね」

見てて…………そう言って立ち上がると、大仰に手を広げて、オーサーはまだ息の整わない男の元へ踏み出した。

「いらっしやいませ、お客様」

そのまま汗まみれの男の短い髪を掴み、グイッと男の顔を上げさせる。

「お一人様ですか？」

「……センセ……やめ……苦し……」

喉仏を見せながら仰け反る男は、苦しさに耐えかねてその目尻に涙を滲ませる。

「お・ひ・と・り・様ですか？」

オーサーは一言一言区切るように言いながら、さらに男の髪を後方へ引つ張る。

「ッ！」

真つ赤な顔をして声にならない苦痛を訴える男に、ようやくオーサーは手を離れた。

激しく咽ながら、男が床に転がる。

「何で、お一人様なんですか？ 友達いないんですか？ なら、どうぞ一番トイレから近い席へ……」

「先生っ！」

オーサーの足に縋りながら堪らず声を上げた男の手を振り払いながら、オーサーはゾツとするような冷たい声で言った。

「どの面下げて、戻って来たの？」

途端にオーサーのズボンを掴んでいた男の手が強張る。

「最後のシツポちゃんを置き去りにして、自分だけまんまと逃げ出したんだよねえ？ 宿命のライバルに一本取られて動揺した？ そんなんだから、アメフトの国内選抜の枠も、大事なガールフレンド

も、根こそぎ持って行かれちゃうんだよ」

「そんなっ……先生！」

悔しげに歯噛みしながら、男がその大きな体躯を波打たせる。その顎を片手で掴み、オーサーは男の口を封じたまま続ける。

「何か間違ってる？ その通りでしょう。お陰で、計画は大幅に変更。シツポちゃんをオマワリさんに取られちゃったせいで、この店も張られるようになった。おまけに、俺の可愛いナビヤまで連れてかれちゃって、俺今ものすごく、機嫌悪いの。セーラー服姿も拝めないしね」

理不尽な理由も一緒に並べ立てながら、顎の骨がミシリと嫌な音を立てるまで手に込めた力を強くする。

「やめろ、オーサー。死ぬぞ」

見かねたジエビンが声を上げ、男はようやくオーサーの手から解放された。

「いい？ ペク・ギョウン。一度しか言わないからよく聞いて。頭の悪い子はキライだから」

オーサーは指で拳銃の形を作ると、外れそうになった顎の関節に手を当て涎を垂らしながら泣いている男の額にスツと宛がった。

「二度目は、ないよ」

ニツコリ微笑んだオーサーの指の銃口は、真っ直ぐに男の額を狙っていた。

重低音の音響がフロアを震わせる。

地下のダンスフロアに集まった何百人もの若者は、皆それぞれ思い思いに身体を揺らし、頭を振りながら踊っている。

その中に、ステージ下中央を陣取り奇声を発しながら踊る、フロアの中でも一際目立つ集団がいた。男女7、8人で構成されたその集団の中心では、腰まで伸びたストレートの髪を振り乱し、一心不乱に踊る少女の姿があった。

「ユリ！ 今日もキメてるね」

「えー?!」

「ハジケてるって、言ったのー」

「あー」

集団の一人が、汗を飛び散らせ激しく踊る少女に向かって言った。少女は聞こえているのかいないのか、上機嫌で踊り続ける。

「帰らなくていいのお？ オヤジさんと、夜からタルイ約束があるって言ってたじゃん」

「知らない。関係ないし。シラけること言わないでよ」

水を差すなど言わんばかりに、少女は声をかけてきた仲間の一人の肩を押す。

「ねえ、それより、ガンホは？ さっきから見かけないんだけど」

少女がそう言った途端に、周囲の仲間が押し黙った。

「ちょっと！ 何隠してるのよ」

その態度にピンときた少女は、踊るのを止めて、仲間を睨みつけた。

「言いなさいよ。あいつ、また浮気してんでしょ？」

目を逸らす仲間たちに、少女は更に苛立ちを強め、仲間たちに肩をぶつけながら道を開けさせ、フロアを横切るうとした。

「待つてよ、ユリ！ そっちは……」

仲間の制止も無視して、少女はダンスフロアを抜け出すと、『関係者以外立ち入り禁止』の札が下がった配水室のドアを押しした。案の定、鍵はかかっておらず、少女は勝手知ったる顔でズンズン奥へと進んで行った。

「ガンホッ！ いるんでしょ。あんた、またこんなところに女連れ込んでっ！ この前言ったわよね。二度と浮気してごらんない。殺してやるからって！」

ヒステリックに喚き散らしながら進んで行くと、配水された水道水をビルの上層階まで汲み上げるために設置された大型の受水槽の陰に、こちらに背を向けた恋人の背中が見えた。

「ガンホッ！」

少女が更に近付くと、恋人の足元には、横たわる女の長い髪が見

えた。

頭にカツと血が上った彼女は、恋人の背中に飛び掛るようにして喚いた。

「誰よっ！ この女。また違う女連れ込んだの?!」

恋人のシャツの背中を引き千切らんばかりに掴みかかる少女の肩を掴んで、男はサツと横たわる女を自分の身体で隠した。

「何よ、今さらっ！ 何とか言いなさいよっ！」

「……落ち着け、ユリ。静かにしろ」

「落ち着けて、バカにしてるの?! あんた……」

そう言って、男を押しつけいつまでも横たわったままの女を見下ろした時、少女の動きが止まった。

「……ッヒッ!」

思わず声を上げそうになった少女の口を男は慌てて手で塞ぐ。

「……お前は、何も見なかった。いいな？」

男は低い声で、少女の耳元に囁いた。

「……何もなかった？ そうだろ？ ユリ」

もう一度、齧すようにドスを聞かせた声が、少女の耳の中でこだまする。少女はただ息を飲み、ひたすら頷くしかなかった。

「うっわー！！　すごい！！　見て見て！」

学生課で編入手続きを終えてキャンパスを歩き出してから、ナビは終始この調子だった。

蔦の絡まる校舎をキレイだとウツトリ眺めていたかと思えば、運動部の部室棟の向こうにサッカー場があるのを見つけて、自分がどんなにサッカーが好きで得意であるかをミンホに向かってとくとくと言っただけで聞かせた。

初めの内こそ、ナビの感動に付き合っていたミンホだったが、やがて面倒になり、「はあ」とか「へえ」とか、気のない相槌を打つようになった。それでもナビは気にならないらしく、あっちへフラフラこつちへフラフラしながら大はしゃぎだった。

まるで小学生の遠足だ

ミンホは変装用に掛けたメガネをずり上げると、前を歩くナビの黒く戻した髪の毛のせいで、元々の肌の白さが目立つようなじを眺めた。

子どものような言動と、小柄で華奢な危なっかしい容姿、何かあったら本当に自分が身を呈して守らなければならない。

『ペニーレイン』でナビが客に絡まれた時、咄嗟にワインボトルとナビの間に割って入ったあの時のように、ナビは年上だと威張るが、出逢った時からミンホには、この子どものような男を守らなければならないという、説明できない使命感のような感情が湧いてくるのを感じていた。

特に今は、ナビがべつたりとくつついている、あの『ペニーレイン』のオーナーで実兄でもあるジェビンから、捜査のためとは言え無理やり引き離して連れて来ているのだ。言わば、保護者から預かって来た身。何があっても無傷で帰さなければならぬ。

「……………っあ！」

そんな矢先、ミンホの視界から突然ナビが消えた。　　思ったら、何も無いところで思い切り転んで、ナビは顔から地面に突っ伏していた。

「あーもー、前見て歩かないから」
「いってえ……………」

顔面から突っ込んだせいで、鼻の頭が擦りむけている。
用意のいいミンホは、すかさずポケットから絆創膏を取り出した。

「じつとして」
「イイよ、恥ずかしいから」
「恥ずかしいのは絆創膏じゃなくて、あなたの落ち着きの無さです」
「何をー！…！」
「はい、できた」

ナビの顔の真ん中に絆創膏を貼り終わると、ミンホはパンパンと手を払って立ち上がった。

「ほら、まだ手続きは終わってないんですよ。明日から早速授業に参加するんだから、今日中に教材も購買で全部揃えなきゃならないし、ホテルの部屋へ運ぶのに二人じゃ無理だから、車も借りて来ないとならないし。やることは山積みです」

雨の日は『ペニーレイン』に帰す

そうだった約束だったが、晴れの日の寢床は、二人で安いホテルの一室を借りることになった。そこから、地下鉄の駅を二つ乗り継いで、しばらくの間大学に通う。

「……学食は？」

座り込んだままのナビが、恨めしそうにミンホを見上げる。先ほどナビは、部室棟の中にあつたカフェテリアを見て、目を輝かせていた。正直ミンホにとっては、自分が通つた警察大学校のカフェテリアの方がよほどキレイであつたし、また、学食のメニューなどががしれていて、その辺のファミレスと大差ないことも知つていた。だから、この程度のものに目を輝かせるナビが理解出来ないとは思いつつも、この程度のもでもこんなに楽しみを見出せる彼を少し羨ましく思った。

敢えて今日寄らなくても、これから毎日通えば、嫌でも学食に入る機会はあるのだろうが、ナビのワクワクしている今の心中を察してミンホは言った。

「購買で教材を買つたら、お昼にしましょう」

ミンホの言葉に、ナビは立ち上がつて「いやっほう!」と叫ぶと指を鳴らした。

「早く行こつぜ、ミンホ!」

ついさっきまで自分が座り込んでいたくせに、再びテンションを上げて歩き出そうとする。

「ナビヒョン、待って！ 中庭通って行った方が近道です」

ミンホはナビの肘を掴んで方向転換させる。

できれば、兄貴ヒョクなどと呼びたくはないが、年上には違いなく、ナビもそれに物凄くこだわるので、未だに舌を噛みそうになりながら、『ナビ兄貴』と呼ぶように意識している。

中庭を通ると、休講情報や学生への事務連絡などが張られた掲示板の前に、何人かの若者がそれぞれグループを作って、ビラを巻いていた。

好奇心旺盛なナビは、自分からそのグループに近付いて行き、ビラをもらって来た。

ナビが手にしたビラのうち、一枚は『聖書講読会』、一枚は二週間後に開催されるという学内ダンスパーティーの案内チラシだった。

「ダンスパーティーって、HIPHOP?」

僕、得意！ そう言って目を輝かせるナビに、ミンホはバツサリと言った。

「社交ダンスでしょ。どう考えても」

「何でさ？ HIPHOPの方がノリノリで楽しいじゃん」

「あなたみたいに、お一人様で楽しむ分にはね。男女ペアで踊るのが目的なんですから。あなたには、今まで縁のないダンスだったかもしれないけど」

思わず毒づくミンホに、ナビはムキになって言い返す。

「じゃあ、お前はあるわけ？ 社交ダンスの経験が？ 女の子と？」

「ありますよ」

シレッとミンホは答える。

「大学の卒業パーティーでは、踊るのが恒例になってましたから」

圧倒的に男子学生が多い警察大の卒業パーティーでは、その際に恋人をダンスのパートナーとして呼ぶのがステイタスになっていた。特定の恋人はいなかったミンホだが、相手には不自由しなかった。結局、隣の女子大でもナンバー1の美人と評判だった相手の方から、猛烈なアタックを受け、ペアを組んだ。卒業パーティー後もその女性からは熱烈なアプローチをもらったが、二年間の参謀本部での兵役義務についたミンホに女性を構う余裕などなかった。

いや、これは性格の問題かもしれないと、ミンホは冷静に自己分析する。現に、大学の同期たちは皆、韓国の若いカップルが直面する過酷な兵役期間の間での別れを経験しながらも、兵役を終えて半年もしないこの間で、それぞれ仕事もこなしながら、ちゃっかり彼女も作っているのだから。

「……あの、すみません」

その時、ナビとミンホの元に、ビラを配っていた学生たちとは違う、年配の女性が近寄ってきた。手にはやはり、大量のビラを持っている。

「娘を探しているんです。一週間前に、大学へ行ったきり、行方が分からないんです。どんな小さなことでもいいですから、何か娘について知っていることがあったら教えてください」

そう言うと、その女性はナビとミンホに一枚づつビラを手渡し、丁寧に頭を下げた。女性は行き交う学生一人一人に頭を下げて、ビラを配り続けていた。

ナビは手にしたビラに目を落とす。

「……ノ・ミラ。経済学部経営学科四年。6月3日 大学へ行く
と行って家を出たまま行方不明……」

ミンホも神妙にそのビラの記事を目で追う。

「……気の毒に」

ナビがポツリと呟いて、必死にビラ配りを続ける女性の後ろ姿を見つめる。

「おばさんっ！ 僕も手伝いますっ！」

すると、突然ナビが手を上げて、女性の元へ走り出した。

「え?! ちょっと、ナビヒョン?!」

慌てたのはミンホだ。女性はナビの突然の申し出に驚いた様子を見せたが、すぐに頭を下げてナビにビラの半分を渡した。ナビはあの独特の掠れた大声で、まるで市場の呼び込みのように道行く学生に声を張り上げる。さっきまでとは打って変わって、皆場違いに元氣いっぱいなナビの声に引き寄せられ、何事かと立ち止まるので、ナビと女性の周囲にはあつという間に人だかりができた。

「ああつ! もうっ! あれだけ、目立つマネはよして下さいって言ったのにっ!」

ミンホは歯噛みしながらも、ナビの取った行動を責める気持ちにはなれず、仕方なく人ごみを掻き分けてナビの元まで辿りつくと、自分も一緒にビラを配り始めた。

この人と一緒にいると、すっかりペースを乱される。そう舌打ちしながら。

「じゃあ、いいですね。ナビヒョン。待ち合わせはお昼、あなたの大好きなカフェテリアで。あ! くれぐれも、昨日みたいなマネはしないでくださいよ。なるべく、地味に、目立たなく。授業は分らないかつたら聞いてなくても構いませんが、ノートぐらいは取ってくださいね。後でレポート提出があった時、ノートもないと僕も手助けできませんから。それから……」

「ああ、もつっ！ 分かってるよ。うるさいなあ。僕に、まっかせなさい」

登校初日、ミンホは自分と同じように変装用のメガネをかけさせたナビの早速歪んでいるシャツの襟元を直しながら、注意事項を一つずつ言い含めた。広範囲の捜査を目的に、学年も学部も分かれて潜入するため、いくら危なっかしいとは言え、授業中まで付き添っている訳にはいかない。心配でしようがないが、当の本人は至ってマイペースで、この調子だ。

何が、まっかせなさいだ

ミンホは朝からもう何度目になるか分からない溜息をついた。

そんなミンホの目の前で、ナビの鼻からスーツと赤い筋が跡を引いて行く。

「ほら、まだ血が出てる」

ミンホは新しいシャツが血で汚れる前に、素早くポケットから取り出したティッシュでナビの鼻をかんでやった。

ミンホの脳裏に、購買で大量の教材を買い込み、ホテルの部屋に引き上げてからの昨晚のナビとの、呆れるようなやりとりが浮かぶ。ホテルの部屋はミンホの予想以上に狭いものだったが、キャンピングカー暮らしに慣れているナビにとっては贅沢な程だったようで、部屋に入るなり彼のテンションは最高潮に達していた。

(僕、窓際のベツツッ！！)

(あー、はいはい。好きにしてください)

嬉しさのあまり、靴も脱がずにはしゃいで窓際のベッドにジャン

ブしたナビだったが、ミンホにも大分耐性がついてきたのか、特に咎める気にもなれなかった。

(こつちからこつちが、僕の陣地だからね！ 絶対、入って来ないですよ！ 覗くのも禁止！)

ナビは舞い上がる埃の中で膝を立てて起き上がると、二人のベッドの間に、『ペニーレイン』から唯一持ってきた小さなトランクケースを立て、更にその上に枕を置いて即席のバリケードを築きながら声高に宣言する。

(入ったら、どうなるんです?)

もう一方のベッドに腰掛けていたミンホが、呆れ顔で振り返る。

(デコピンの刑に処す!)

片目を瞑って指を弾く真似をしてみせるナビに、ミンホはスウツと目を細めて微笑んだ。

(入るなって言うなら入りませんが、あなたはどうするんです? この部屋の構造上、部屋を出る時は、あなたは僕の陣地をどうしても通らなきゃならない)

クリクリとよく動いていたナビの大きな瞳が固まる。
しまった と思った時にはもう遅い。

(デコピンの刑………ですよ? やっぱり)

自分のベッドに片足を乗り上げて、長い指で輪の形を作ったミン

ホがにじり寄って来る。

(やっぱさっきの無し！ 陣地交代！)

(嫌ですよ。あなた、靴のままベッドに上がったでしょ？ 僕そういうところ繊細なんで)

(男のクセに、軟弱なこと言ってるな！)

(どっちが?! あなたこそ男のクセに、覗くの禁止！ なんて、思春期の女の子の台詞ですよ)

(何をあ?!)

売り言葉に買い言葉。

途端にベッドの上で枕投げの攻防が始まる。

(もういいっ！ お前の陣地通らなくなってる、僕は部屋を出られるもんね)

(はあ? どうやって……)

ミンホが言い終わらない内に、ナビはベッドのスプリングを軋ませて大きくジャンプした。

(うわっ!! ちょっと……待っ……)

気づいた時には頭上を掠めて、ナビの小さな身体がミンホのベッドを飛び越えて飛んでいく と思った矢先、ナビの足がミンホのベッドのシーツに絡まり、派手な音を立ててホテルの床に顔から落ちた。

(…………ウ…………ウ、ウ…………)

(あの…………ちよっと、ナビビョン?)

床に顔面を押し付けたまま、泣き声とも唸り声ともつかない低い声をもらすナビを、ミンホが恐る恐る振り返る。

(だ…………大丈夫…………?)

(ウワーンッ!!)

途端、火がついたように泣き出したナビに、オロオロしだしたのはミンホの方だった。慌ててベッドを跨いでナビの身体を助け起す。

元々そんなに高くない小作りの鼻が、気のせいか衝撃でペシャツともっと低くなったように感じる。

痛々しく鼻血と涙で顔を汚すナビを笑ってはいけないと自分に言い聞かせ、ミンホは唇を噛み締める。

それでもナビが赤ん坊のように泣けば泣くほど、どうにも不細工で愛らしいその顔がツボにハマって、ミンホは噛み締めた唇を奮わせるのだった。

(本当に、あなた20歳超えた大人ですか? 今時、小学生だってこんな真似しませんよ)

(…………う…………うるひゃい)

ミンホに鼻筋を押さえられたまま上を向いたナビは、涙声で弱々しく抗議する。

結局ナビは泣き疲れたまま眠ってしまい、グシャグシャになったベッドを一から直したのも、顔の血と涙の跡をキレイに拭いてやって、そんなナビをベッドまで運んでやったのもミンホだった。

そうこうしている内に、予鈴の鐘が鳴り響き、ミンホはハッと我に返った。

「じゃあ、ナビヒョン！ また後で」

「おう！ お前もしっかり勉強しろよー」

ナビは上機嫌で、スキップでも踏みそうな勢いで校舎へと入って行く。

「ちよつと！ そんな急に動くと、また鼻血が……」

たしなめようと声を上げた時には、既にナビの背中中は小さくなっていた。ミンホはそんな背中が完全に校舎の中に消えるのを見届けてから、自分も小走りにナビとは違う校舎の教室へ向かった。

キョロキョロしながら、ナビは人の流れに沿って、これから法学部の授業が行われる講堂に入っていた。旧校舎と呼ばれるここは、大学開設当初から校舎として使われていたもので、建物自体が有形文化財の指定を受けるような歴史的な価値の高い校舎だった。

梅雨のジメジメした気候の中、周囲の学生たちは冷房も聞かないこの旧校舎を嫌がり、ミンホが潜入した文学部が主に使う、去年建てられたばかりの新校舎を羨ましがっていた。

しかし、ナビにとっては、例え熱いのを我慢したって、断然この古びた趣のある校舎の方が好きだった。

ここにはどんな歴史が刻まれているのだろう。

例えば僕が座ったこの席には、今までどんな人たちがどんな思いで腰掛け、学び、巣立っていったのか。

そういったことに一つ一つ思いを巡らすことが、ナビにとっては楽しくてしかたなかった。

そんな時には、わくわくすると同時に、大学はおろか学校すらもまともに行けなかった自分の境遇に思いを馳せてしまい、ほんの少しやりきれない気持ちになる。だが、持ち前のポジティブ精神で、すぐに今目の前のワクワクに気持ちを切り替える。

ナビは講堂の一番前の席に陣取り、ミンホが昨日買って持たせてくれた教材を一つ一つ確かめるように机の上に並べた。

布製のペンケースを開けると、中には律儀にきちんと削られた鉛筆が並んでいた。シャーペンでないところが、いかにもミンホらしい。昨日ケンカしてふて寝した自分より遅くまで起きて何をしていたかと思えば、夜中に一人でナビのための鉛筆を削るミンホの姿を想像すると、ナビは思わずプツと吹き出してしまった。

その拍子に、忘れていた鼻筋に意識が向かう。

血を止めるため、ミンホの指で押さえられたそこは、まだ少しジンジンしていた。

そつと、その場所に触れてみる。

「あんな、デカイ手のクセに……」

目の前には、キレイに削られたエンピツが並んでナビを見上げている。

「……器用なヤツ」

ちょっと癩に障って、ナビは寝そべるエンピツの一つを指先で弾いてやった。

一方のミンホは、時間ギリギリまでナビを見送っていたせいで、始業時間直前に教室に駆け込む羽目になった。

新校舎のガンガンに冷房の効いた教室は、走って汗だくになったミンホにはありがたかった。

自由に居眠りをしたり内職をすることができる後ろの席から埋まっっていくのは自分自身の大学生時代の体験からも熟知しているので、ミンホは諦めて前の席に座った。

幸い、講師はまだ来ていなかった。

冷房にさらされても収まりきらなかった汗をハンカチで拭くと、教室全体が妙にザワついているのに気が付いた。

本業は警察官であるミンホの、職業病とも言えるクセで、咄嗟に何が起こっているのか、その原因を突き止めるべく周囲に意識を張り巡らせた。

さりげなく、後ろを振り向く。

すると、気のせいかな先ほどよりざわめきが大きくなった。

何だ？

ミンホは眉間に皺を寄せ、再び向き直る。文学部は女性徒の方が圧倒的に多いので、ざわめきは自然、甲高い彼女たちの声で占められていた。

気にせずカバンから教材を取り出し、昨日ナビのを削ってやるついでに自分もきれいに削った鉛筆の入ったペンケースを取り出す。

科目は何であれ、学業に励むのは嫌いではなかったため、昨日購入した教材にも一応全て目は通していた。

真新しいテキストの表紙を開いた時、机の隅に置いてあった消しゴムに手が当たり、床に落としてしまった。

拾おうと座ったまま手を伸ばしたミンホのその手の数センチ先を、白く華奢な手が掠め、ミンホの消しゴムを拾い上げた。

恥ずかしそうにミンホの机に消しゴムを載せた女生徒に、ミンホは頭を下げる。

「どうも、ありがとうございます」

その途端、ざわめきは一気に黄色い悲鳴に変わった。

「……ここ、いいですか？」

ナビが頬杖をついて講堂の中をキョロキョロと見回していた時、不意にヒョロツと痩せて頼りない印象の男子学生が現れ、ナビの前に立った。

「どろどろどろ、座ってよ！」

ナビはパアツと顔を輝かせて、造り付けの椅子を引いてやった。

「誰も隣りに来てくれないからさ、寂しかったんだよね」

そう言って振り返るナビの背後五列には、一人の生徒も座っていなかった。

広い講堂の中、一番前の席にナビとその男子学生、そのすぐ後ろ五列を空けて、最後列から順に学生の集団が出来ていた。

「この授業、退屈で眠くなるって有名だから。みんな眠りに来てるようなものなんだよ。僕がこの授業取ってから、最前列でノート広げてる人を見るのなんて、君が初めてだよ」

男子学生の言葉に、ナビはキョトンと不思議そうな顔をした。

「えー？ 眠ったりしたら勿体ないじゃん。一番前の方が先生の声も聞こえやすいし、中身なんか分かんなくたって、こんな素敵な校舎の匂い嗅いで、難しそうな講義聞いているだけで、僕って勉強して

るんだーって、気分になるじゃない。眠かったら、僕、家に帰って寝るよ」

「勉強してる、気分？」

「そう、気分だよ、気分。僕、今は学生なんだーって、思うだけで楽しいじゃん」

「今？ 君はずっと、学生でしょ？」

男子学生の言葉に、ナビは慌てて口を噤んだ。そうだ、浮かれて妙なことを口走ってしまった。

「もしかして、兵役帰り？ 僕も、この4月に除隊になったばかりだけど」

「そ、そそそうつ！ あの辛い生活から抜け出して、僕は今“学生”なんだって……敬礼もしなくていいし、夜間訓練で叩き起こされることもなくて……」

必死に取り繕うナビを見て、男子学生は突然ブツと吹き出した。

「確かにね。でも、君って面白いね。変わってるよ」

「……そ、そう……かな？」

今さらになってマゴマゴし始めたナビを尻目に、男子学生はクスクス笑い続ける。

「この授業は初めて？ 見ない顔だから」

「へ、編入してきたんだ。前の大学でも、法学部だった」

ナビは、予めミンホと口裏を合わせていた嘘をついた。

「この時期に編入なんて珍しいね。優秀なんだね。うちの編入試験

は、競争率高いでしょう？」

「……そ、それほどでもないよ」

ナビは冷や汗をかきながら必死に取り繕う。それ以上突っ込まれて聞かれたら、嘘をつくのが苦手な自分にはきつと耐えられなかっただろう。

しかし男子学生はそんなナビを不信には思わず、人の良さそうな細い目を更に細めて、手を差し出してきた。

「僕は、コ・ヒヨンス。よろしくね」

「コン・ナビだよ。こちらこそ、よろしく」

ナビもニツコリ微笑んで、ヒヨンスの手を取った。

授業が終わった後、ヒヨンスとナビは連れ立って学食のカフェテリアへと向かった。

九十分に及ぶ、「睡眠薬」との異名を取る法律概論の事業だったが、外国語のような法律用語も、ナビには魅惑的な言葉に聞こえて、ちっとも飽きなかった。

意味は分からずとも、講師が黒板に書き殴った文字を、講師と競争するかのようにノートに綴った。授業始まって以来の熱心な生徒だと、講師の方が授業後にえらく関心して、わざわざナビのところに来た程だった。

「君って本当に面白いよ。ナビ」

ヒヨンスは先ほどから、ずっとそう言っては笑っている。

「そうかなあ……」

ナビは襟足の短い毛をいじりながら首を傾げる。

「僕が知ってる学生の中で、間違いなく最高……あっ！」

その時、不意にヒヨンスの足が止まった。

「……どうしたの？」

「ユリッ……！」

ナビに答える間もなく、ヒヨンスは駆け出していた。人ごみの向こうで、大胆に肩を露出させたワンピースを着た小柄な少女の腕を掴んでいる様子が見えた。

「ユリッ！ 昨夜は一体どこに行ってたんだよ。おじさんも心配して寝ないで待ってたんだよ。大事な会食もすっぱかして！」

「うるさいわねっ！ どこで寝ようと私の勝手でしょ？ 離してよ。皆見てるじゃない」

少女はヒヨンスから逃れようと、金切り声を上げて身を擦る。

「ユリッ……！」

「人の女に勝手に触ってんじゃねえよ」

その時、ヒヨンスと少女のやりとりを遠巻きに眺めていた人垣の中から、サングラスをかけた長身の男が現れた。

「手え離せよ。運転手」

男はそう言うと、ヒヨンスの細い肩を掴み、乱暴に少女から引き

剥がした。反動でヒヨンスはよろけ、地面に尻餅をついた。ナビは慌ててヒヨンスの元に駆け寄った。

「ふん」

男はヒヨンスを見下ろすと、側にペツと唾を吐き捨てた。

「……このっ！」

思わず立ち上がりかけたナビのシャツの裾を、ヒヨンスが握って押し留めた。

男はもう一度、ヒヨンスとナビを見下ろすと、少女の剥き出しの肩に手を回し、そのまま二人に背を向けた。

「あいつっ!」

「いいんだ、ナビ」

今にも男の背中に飛び掛っていきそうなナビのシャツを掴んだまま、ヒヨンスは首を横に振った。ナビに手伝ってもらって身体を起こす。

「あの女の子、君の恋人じゃないの？ あんなヤツに連れてかれちゃっていいの？」

ナビの言葉に、ヒヨンスは自嘲気味に笑いながら首を振った。

「……ユリはそんなんじゃないよ。世話になっている家のお嬢さんなんだ。小さい頃から一緒に育ってきた、幼馴染なんだ」

ヒヨンスはナビと共にカフェテリアまで歩きながら少しずつ話し始めた。

ヒヨンスの家は、彼がわずか二歳の時に母親を亡くし、以来彼の父親が男手一つでヒヨンスを育ててきたが、ヒヨンスが五歳になった年、折からの不況の煽りを受け、父の勤めていた運送会社が倒産してしまった。食うにも困る生活が続き、途方に暮れていた時、ヒヨンス親子はひょんなことから貿易会社を経営するユリの父親に拾われた。ヒヨンスの父は住み込みの運転手となり、ヒヨンスも一緒に、ユリの家で暮らすようになったということだった。

ヒヨンスたちにとって、ユリの父は貧しい自分たち親子を救ってくれた、命の恩人と言っても過言ではない存在だった。そんな彼の

愛娘であるユリもまた、ヒヨンスにとって特別な存在になるのは自然なことだった。

カフェテリアは昼時で混み合っていたが、運よく席を見つけて二人で腰を下ろす。

「あの子も、この生徒なの？」

「うん。文学部英米文学科の四年生。同い年だけど、僕は二年間兵役に行ってたからね」

「英米文学科？」

それなら、ミンホと同じ学科だ。

「どうかした？」

「ううん。一緒に編入したヤツも、英米文学科だったから」

ナビはメニュー表に視線を落とすと、パアツと顔を輝かせた。

「わっ！？　すごい、クリームソーダがある！」

メニュー表から顔を上げたナビのあまりの喜びように、ヒヨンスもつられて笑顔になる。

「ねえ。じゃあ、あのガラの悪いデッカイのが、ユリの恋人なの？」

会話の流れを止めたクリームソーダの話題から、自由自在に元の話題に戻って、ナビがストレートに尋ねてくる。ヒヨンスは肩をすくめてみせた。

「そうだね……ハン・ガンホって言って、この大学の学長の息子なんだ。アメフトの有名な選手でね。社会人リーグの強豪チームに内定が決まってる四年生なんだ。ユリとは去年の夏くらいから付き合ってる」

「ふうん……でも、似合わないな。ユリには、ヒヨンスの方が合ってるよ」

ごく自然に出たナビの言葉に嘘はなく、社交辞令でも何でもなく本気でそう思ってくれていることが分かり、ヒヨンスはありがたいような切ないような複雑な気持ちになった。

「……僕は、ダメだよ。ユリは綺麗だしね」

「確かに美人だけど、ヒヨンスだってカッコいいよ。少なくとも、あの顔面色黒お化けより、数百倍ハンサムだね」

一度見ただけのガンホの特徴を、顔面色黒お化け というネーミングで表現したナビの微妙なセンスに、ヒヨンスは先ほどまでの居た堪れない気持ちを忘れて思わず吹き出した。

「ピッタリでしょ？」

ナビはヒヨンスにウケたと勘違いして、エヘへと得意気に笑った。

「……でも、やっぱり僕はダメだよ。僕はユリの子分みたいなものだから」

「子分？」

「じゃなかったら……下僕、かな」

思い切り自分を卑下してみせたのに、ナビは思いもかけない反応を見せた。

「いいね！ 子分。僕も欲しいっ！……いや、いたっ！」
「へ？」

的外れなナビの言葉に、ヒヨンスの目が点になる。

「とりあえず、このクリームソーダ買わせるだろ。それで、それで……」

手をグーのカタチにして、口元を押さえてグフグフと笑う。ワケが分からないながらも、ナビがあまりにも楽しそうなので、ヒヨンスも付き合っつて愛想笑いを浮かべる。

「ヒヨンッ！ ナビヒヨンッ！」

その時、カフェテリアのドアが開いて、聞きなれた声がナビの名を呼んだ。

「噂をすれば……遅いぞ、ミンホ！」

そう言っつて顔を上げた時、ナビは思わず仰け反った。

「ミンホ……お前、何やっつてるの?!」

ナビがそう言っつのも無理はなかった。

汗だけでカフェテリアに入ってきたミンホの後ろには、何人いるのか、もはや数えるのも困難なほどの女子学生の群れが出来ていた。

「ハン・ミンホシー、お昼は私と！」

「何言っつてるのよ、私が先よっ！」

狭いカフェテリア内は、途端にミンホを追いかけてきた女子学生たちで埋まる。

「逃げますよ、ナビヒョンッ！」

言うなり、ミンホはナビの腕を掴んだ。

「え？ あ……おい！」

ミンホに引きずられるまま席を立ち、出口へと向かう。

「きゃあああああ！ ミンホシー、どこへー?!」

「どきなさいよ、あんたっ！」

「ちよっと、足踏まないでよっ！」

途端に、大混乱に陥る店内。

「ヒョンスッ！ 君も来てっ！」

ミンホに腕を引っ張られながらも、ナビは人垣の間から頭しか見えないヒョンスを呼んだ。ヒョンスも女子学生たちを掻き分けて店の外へ出た。

どのくらい走ったのかわからない。

カフェテリアを出てもしぶとく追いかけてきた女子学生たちを何とか振り切って、ナビとミンホとヒヨンスの三人は、旧校舎の空き教室に逃げ込んだ。

「……………はあ……………はあ」

三人とも肩で息をしながら、そのまま床に倒れこむ。

「……………ミンホ……………いたい……………ハア……………ッ何なんだよ、あの子たちは……………」

「……………ハア……………僕に……………聞かれても……………知りませんよ」

ミンホは息を整えるために、着ていたポロシャツの胸を掴んだ。

「授業前……………から、何か僕を……………チラチラ見て……………変だなんて思ったら……………授業、終わった途端に……………あの騒ぎで」

ミンホはようやくやく上半身を起こして、汗に濡れた前髪をかきあげた。

「……………ところで、そちらは？」

ミンホは、成り行きでここまで一緒に逃げて来たヒヨンスを見て言った。

「あ、そうだ！ さつき友達になったの。法学部法律学科のヨ・ヒヨンス」
「友達？」

ミンホの目が、一瞬警戒の色を宿す。

「ヒヨンス、これがさつき僕が言ってた一緒に編入してきたヤツ。僕の子分の、ハン・ミンホ。英米文学科四年生」
「は？ 子分？」

聞き捨てならないというように、ミンホの目が光る。

「クリームソーダ買ってよ」

「突然何の話をしてるんですかっ！」

脈略が無さ過ぎるナビに、ミンホの声も大きくなる。

「さつき、四年って言ってましたよね？ 年……上なのに、子分？」

今や大分フランクになってきたとはいえ、儒教精神に乗っ取り、年功序列を重んじる国の若者とはとても思えない。二学年も上の相手に敬語はおろか神をも恐れぬ態度で子分扱いするナビの様子を見て、当事者でもないのにヒヨンスの方がハラハラして尋ねた。

するとミンホが、すかさずナビの頭を大きな手で押さえつけるようにして、ヒヨンスに向かって愛想笑いを浮かべた。

「ああ、この人ね、本当は僕より一つ年上なんです。三浪なんて親不孝な真似して、ようやくお勤め（兵役のこと）が終わってもこの調子でしょ。こんなナリして大学生なんて、詐欺ですよね？ 見た目も中身も中学生でしょ。これじゃ」

「なにをお?！」

ミンホに頭を押さえつけられた状態で、ジタバタと両手を回して暴れるナビは、ミンホの“親分”の貫禄はまるでなく、“子分”とされたミンホは、完全にナビの保護者のようだった。

「……フツ…… 八八八、アハハハハハ」

二人のやりとりを見ていたヒヨンスが、たまらず笑い出した。当の二人は、何を笑われているのか分からなくて、キョトンとした顔でヒヨンスを見つめる。

「君たちって、本当に面白いね」

腹を擦って笑うヒヨンスに、ミンホとナビは顔を見合わせる。

「面白い? 僕らが?」

「さつきから、そう言って笑うんだよ」

「面白いのは、あなただけでしょう? 僕はお笑い担当じゃありませんから」

「ハア?!」

「ほら、また!」

手を叩いて、ヒヨンスの笑いの発作は尚一層激しくなる。

「でも、確かに“お笑い”担当じゃないよね……ミンホ君だった……? 君、ダンスパーティの相手決めるの大変だよ、きつと。さっきのあんなもんじゃない。女子の間で戦争が起こるね」

「ダンスパーティって、これ?!」

「あ! あなた、いつの間に」

途端にナビが目を輝かせ、ポケットの中から皺くちやになったチラシを取り出した。ミンホは呆れ顔で見守る。

「そう、それ。我が校の伝統行事だからね。ラストダンスで踊った相手と結ばれるっていう伝説のイベントだから。あと二週間、みんなパートナー選別に躍起になってるんだよ」

ヒヨンスの言葉に、ナビはポンツと膝を打った。

「じゃあさ、チャンスじゃん。ユリを誘いなよ、ヒヨンス！」

名案が浮かんだと、ナビは目をキラキラさせてヒヨンスを覗き込む。

「……無理だよ。ユリはきつとガンホと……」

うつむくヒヨンスの頬を両手で挟むと、ナビはゲキツと音がするくらい乱暴に、無理やり顔を上げさせた。

「何弱気なこと言ってるの？ あと二週間もあるんだよ！ 押して押して押して押しまくれっ！」

「……あの、全然話が見えないんですけど。ユリって誰ですか？」

置いてきぼりをくらったミンホに、ナビは明るい声で答えた。

「ヒヨンスの片想いの相手」

「ちょ……ちよっと！ ナビ」

「ほっ、なるほど」

真っ赤になるヒヨンスにはお構いなしに、ミンホも知った顔で頷いた。

「こんなおあつらえ向きなイベントがあるなら、利用しない手はないですねえ」

腕を組み、顎に手を当て神妙に頷いてみせる。

「ほらね、ヒヨンス。子分もそう言ってる」

「ちよつと、ナビヒヨン？ さつきからその聞き捨てならない名称は、ひよつとして僕のことじゃありませんよね？」

「お前以外、誰がいるの？」

悪びれもせずにナビが言う。

「だから、クリームソーダ」

「だからって、何がだからなんですかつ！！」

ミンホが思わずナビの腕を掴みそうになったその時、ナビの視線が止まった。

「……あ、雨だ」

ミンホの肩越しに見上げた教室の窓を、ポツリポツリと雨がたたき出した。

「僕、帰らなきゃ！」

途端にナビは勢いよく立ち上がり、教室のドアへと向かう。

「ナビヒョンッ!」

思わず大声で呼んだミンホを振り返り、ナビはほんの一瞬、切なそうに目を伏せた。

「……ヒョン」

その表情に、ミンホの心臓がドキリと跳ね上がる。普段バカみたいに明るい人間が不意に見せる寂しげな表情は反則だ。ミンホがかける言葉を探しあぐねていると、不意にナビが顔を上げた。

「ミンホ……」

意味もなくドキドキしながら、ナビの言葉を待つ。

「代返頼む!」

スチャツと軽い敬礼のポーズを取ると、ナビはハスキーな笑い声を廊下中に響かせて、駆けて言った。

「ナビヒョンッ!」

後には怒りに震えながら拳を握り閉めるミンホと、困惑顔のヒョンスが残された。

ヒヨンスは明かりを落としたりリビングのソファで、先ほどからジツと時計と睨めっこをしていた。

ここは、ユリたち社長一家が暮らす母屋で、ヒヨンスと父親は同じ敷地内にある離れに暮らしていた。しかし、部下思いのユリの父親の計らいで、いつも夕食は他の住み込みの従業員も一緒に母屋で取るようになっていた。

今日も夕食を終えた父親は先に離れに引き上げたが、ヒヨンスだけその場に残った。幼い頃から成績優秀だったヒヨンスは、特にユリの父親に気に入られ、本当の家族同然に可愛がられていたので、こうして遅い時間まで母屋にいても咎められることはなかった。

却って、高校に上がる頃から急激に素行が悪くなりだした一人娘のユリに代わって、以前にも増してユリの父親はヒヨンスに目をかけるようになっていた。

ヒヨンス自身もユリの父親を心から敬愛していたし、目をかけてもらうのは単純に嬉しかった。しかし、それが、ユリを家に寄り付かせない理由の一つなのではないかという思いもあり、複雑な気持ちだった。

結局今日もユリは夕食の時間まで帰って来ず、ユリの分の夕食は住み込みの家政婦の手によって、キレイにラップがけされ、テーブルの上に乗っている。

先ほどまでリビングで、ヒヨンス相手に最近の政治や経済の話をしてきたユリの父親も、一時間前に自室に引き上げた。それまでユリのことには触れず、明るくヒヨンスと話していた彼が、リビングを去り際、横目で手を付けられていないユリの分の夕食を見て、深い溜息をついたのをヒヨンスは見逃さなかった。眉間を揉む仕草には明らかな疲労の色が見て取れ、もうそれほど若くない彼の身体にかかる、心労の深さを思っただけヒヨンスは胸を痛めた。

時計はもうすぐ、0時を回ろうとしている。

結局今日も、日付が変わる前にユリは帰って来なかった。

誰もいない深夜のリビングは静まりかえっているが、先ほどからヒヨンスの頭の中には、昼間知り合ったばかりのユン・ナビという学生の、ハスキーボイスが大音量で鳴り響いている。

連れのハン・ミンホという学生も合わせて、風変わりな子だとヒヨンスは思った。

とても大学生とは思えないほど無邪気で自由奔放だが、不思議とナビの言葉には力があつた。

(ユリにはヒヨンスが合ってるよ)

(あと二週間もあるんだよ！ 押して押して押して押しまくれっ！)

ナビに言われると、不思議と「そうかな？」という気がしてくる。諦めるな！と背中を押してもらっているような気持ちになる。

だから、今日はこの場所で、胸をドキドキ言わせながらも、ユリの帰りを待っている。

ダメで元々の気持ちで、ダンスパーティーに誘ってみるつもりだ。

その時、暗い室内に、カーテンの隙間から車のヘッドライトの明かりが差し込んできた。ヒヨンスが窓に駆け寄り外を見ると、門の

前に車が止まり、ドアが開く音、閉まる音に続いて、中から二つの影が降りてきた。

「……っ」

小さい方の影はユリ。

もう一つの影は、遠目でも分かる。

ガンホのものだ。

あちらから見えるはずもないのだから、隠れる必要もないのに、ヒヨンスはカーテンを握り締めて、二人の様子を見守る。

二つの影が一つに重なり合う。

見慣れている光景とはいえ、ガンホは胸が詰まって呼吸が苦しくなる。

しかし、今日はいつもとは様子が違った。

ガンホの黒い大きな影の中に包まれたユリは、ガンホの腕の中から逃れようと身じろぎをすると、ガンホの肩を突き飛ばし、手にしていたハンドバックでガンホを何度も何度も叩いた。

ガンホの手が伸び、ハンドバックを振り下ろすユリの手を掴む。

ユリは首を左右に振って、イヤイヤをするように抵抗する。

ヒヨンスは思わず、窓を開け外へと飛び出していた。

「ユリッ!!」

大きく叫んで、ガンホから逃げ出して庭の中に駆け込んできたユリを抱きとめる。

後から追ってきたガンホと、ユリを挟んで対峙する。

「何だよ、運転手」

ガンホが先ほどまでのユリとのやりとりで呼気を荒げながら、突然現れたヒヨンスを見て目を吊り上げた。

「ユリに、何をしたんです？」

肩を震わせるユリの背中を抱きながら、ヒヨンスは声が震えないように腹にグツと力を込めながら言った。

「ただの痴話喧嘩だよ。お前には、関係ないだろ。ユリ、こっち来い」

「イヤッ！」

「おいっ！」

「やめてくださいっ！ 警察を呼びますよ」

ヒヨンスはユリの腕を掴むガンホの腕を振りほどいて叫んだ。

「警察だあ？」

「不法侵入に脅迫、連行してもらう理由はいくらでもあると思いますよ」

ガンホはヒヨンスの顔ギリギリまで自分の顔を近づけて威嚇したが、ヒヨンスは目を逸らさずにそれに耐えた。

「っち」

ガンホは小さく舌打ちすると、先にヒヨンスから顔を背けた。

「明日の朝、迎えに来るからな。ユリ」

そう言つと、庭の芝生の上にペツと唾を吐いて二人に背を向けた。ガンホの背中が門の外へ消えた途端、ヒヨンスはヘナヘナと足から力が抜け、芝生の上へたりこんだ。ヒヨンスの腕が離れると同時に、ユナは家に向かって駆け出した。

「ユリッ！ ちょっと、待ってよ！ ユリッ！」

ヒヨンスは慌てて、まだ力の入らない足を踏ん張ってユナの後を追う。

「ユリってばっ！」

逃げるユリの腕を掴んで振り向かせた瞬間、涙でグシャグシャに濡れたユリの顔がそこにあった。

「どうしたの？ 何があったの？」

驚いたヒヨンスがユリの肩を掴んでも、ユリはただしゃくりあげて泣くだけだった。

「泣いてちゃ分からないよ、ユリ。俺に話して？」

そう言っつてユリの頬に手を伸ばした時、ポトリとユリのジーンズのポケットから何かが落ちた。

「……………何？」

屈みこんでそれを拾おうとしたヒヨンスに、ユリは鋭い声で叫んだ。

「ダメッ！」

だが、一步遅く、拾い上げた白い包み紙は既にヒヨンスの手の中にあつた。

「……………これ……………ユリ、まさか……………」

その途端、ユリはワツと泣き崩れて、ヒヨンスの胸に縋った。

「……………ヒヨンス、助けて……………お願い」

「……………ユリ」

戸惑いがちにユリの背に手を回すと、ユリはますます身体を密着させてヒヨンスに縋り付いた。

「ねえ……あなた、いつも私を助けてくれたわよね。小学校一年の時、オネシヨした時も、あなたが庇ってくれた」

胸の中で震えるユリは、本当にあの頃の小さな少女に戻ってしまったようだった。

「……助けてよ、お願い。あなたはいつだって、私を喜んで助けてくれたじゃない」

確かに、そうだった。
今でもよく覚えている。

『……ヒヨンスウ』

『ユリ？ どうしたの？ 眠れないの？』

真夜中、みんなが寝静まった後、泣きながら枕を抱えて自分の部屋にやってきたユリのために、ヒヨンスは身体を動かしてベッドの半分を空けてやった。

もぐりこんできたユリの身体は、ヒヤリと冷たく濡れていた。

『……ん？ ユリ？』

不信に思つて、嫌がるユリの寝巻きの尻を触つて確認すると、しつとりとした感触がした。

『お前、まさか……』

絶句するヒヨンスに、ユリはシクシクと泣き出した。

『……どうしよう……パパに怒られる……』

あまりにも哀しそうに泣くものだから、ヒヨンスはそれ以上責めることが出来なくなつてしまった。

仕方なく二人の上にかけていた布団を剥がすと、ヒヨンスは自分のパジャマのズボンを脱ぎ、シャツも剥ぎ取つた。

『……ヒヨンス?』

『代わつてやるよ。おじさんには、俺が怒られるから』

キョトンとするユリの前で、ヒヨンスはテキパキと作業を進める。全てが終わると、ユリを連れて、こつそり階下のシャワールームへ連れて行つた。

肩に掴まらせながら、ユリの汚れた身体を洗う。

『……ありがとう、ヒヨンス』

翌朝、オネシヨがバレたヒヨンスは、大人たちにこつぴどく叱られた。罰として、屋敷の廊下に正座させられ使用人たちにかかわれても、ヒヨンスは恥ずかしいどころか、むしろ誇らしい気持ちになつていた。

シャワールームで、肩に触れていたユリの小さな手の温度を思い出せば、何だつて出来るような気がしていた。

今、ユリの手はあの頃のように小さくもなく、暖かい温度も持っていない。

白くなまめかしいその細腕は、先ほどから媚びるようにヒヨンスの肩に触れている。

ヒヨンスはライトも付けずに、そっと真夜中のガレージから車を発進させた。

「……あんただけが、頼りなの」

ユリは泣いた後の濡れて甘えた声で、そう囁く。

ヒヨンスは言われるままに、車を走らせた。

しばらく走り続けて、やがて、明かりの消えたクラブの前に車を止めた。ユリの後に続いて、フロアの奥の配水室へと歩を進める。

「何も聞かないで。ただ、黙って言うとおりにして」

ユリが振り返り、もう一度念押しする。ヒヨンスはただ黙って頷くしかなかった。

懐中電灯を手に、鍵のかかっていない配水室のドアを肩で押して中に入る。毛細血管のような配水管の合間を縫って、奥へ進んでいった時、足元を不意に駆け抜けた生暖かい生き物の感触に思わず悲鳴を上げた。

「しっ！」

ユリが厳しい口調で振り返る。

チューという泣き声とともに、ネズミが駆けていく音がした。

「……どこまで行くんだよ？ 何があるんだ、一体……」

その時、ヒヨンスの照らす懐中電灯の明かりの先に、大型受水槽が姿を現した。その陰に隠すように、簡易ベッドが見える。

「……何だ？」

そう言っつて目を凝らした次の瞬間、その上に乗せられた黒い塊を捉えて、ヒヨンスの目が大きく見開かれた。

「っな?!……」

悲鳴を上げる寸前で、突然横から飛び出してきた大きな影に口を塞がれた。

「……見たよな？ 見たからには、お前も共犯だからな」

その影は、ヒヨンスの耳元で低い声で息を吹き込むように囁く。目だけを動かしてその影の手の先を追うと、正気ではない光をたたえたガンホの目と視線があった。

「……手を貸せ。ユリのためだ」

口を塞いでいた手がスルリとヒヨンスの首に巻きついた。ヒヨンスがゴクリと唾を飲み込む音が、狭い配水室に響いた。

ドアを蹴破る勢いで、明け方の捜査課にチヨルスが飛び込んできた。

緊急召集を受け、気のみ気のまま一人暮らしのアパートを飛び出して来たため、辛うじて肩に引掛けたスーツは皺くちや、髪はボサボサの酷い有様だったが、目だけはキラキラと輝いていた。

「ソンステギヨ聖水大橋から、遺体があがったって？」

肩で息をしながら、チヨルスが当直だった刑事に詰め寄る。

「ああ。該者は明慶大学経済学部経営学科四年、ノ・ミラ、二十二歳。橋のもとに引っかけたのを、通行人が見つけた」

「明慶大学！？」

「6月3日、大学へ行くと行って家を出てから行方不明。家族から搜索願が出されてた」

そう言うと、当直の刑事はチヨルスに向かって資料を放った。チヨルスはすぐさまその資料に目を通す。

「遺体の状況から見て、死後だいぶ日数が経ってるな」

当直の刑事は、資料写真の惨たらしい写真に顔をしかめながら言った。

「死因は？」

「今、鑑識に回してるが、恐らく……コレだろ？」

そう言つて、当直の刑事は自分の腕に注射針を刺す真似をした。

「そこ、見てみる」

指で差し示された資料写真には、剥き出しになつた少女の腕の内側に、赤黒く変色した内出血の痕がクッキリと残っていた。

「鑑識の結果を待てば、ハッキリする」

刑事の言葉に、チヨルスも頷いた。

しかし、鑑識の結果は、チヨルスたちの予想とは大きく異なるものだった。

「心臓麻痺だと?!」

「な……何ですか?!? 鑑識の結果が信じられないとつ？」

公式発表された今回の該者の死因は、当初、当直の刑事とチヨルスが予想していた薬物使用によるものではなく、女子学生の元々の持病である心臓疾患により、麻痺を起こした突然死とされた。川の側を歩いている時にたまたま発作が起き、その拍子に聖水大橋の二つ先の大橋の欄干から落ちたのだと推測された。

発表されるなり、チヨルスは鑑識室に乗り込んで、主任の胸倉を掴んだのだった。

「もう一度良く調べろっ! 薬物反応が必ず出るはずだ」

「薬物反応なんて出ませんでしたよ。何度調べたって同じです」

主任はチヨルスに締め上げられたせいですり落ちたメガネを直す
と、僅かに上擦った声で反論した。

「資料写真に残ってる、あの針の痕は何て説明するんだ？」

「資料写真？ そんなものがどこにあるんですか？」

主任の言葉に、チヨルスは大声で怒鳴った。

「とぼけるなよ！ 該者の死体遺棄現場の写真だ！」

そう言っつて、すぐそのデスクの上に散らばっていた写真を取り
上げた。だが、一枚、一枚、二枚、乱暴に数えていつても、チヨルスが当
直の刑事と一緒に見た、女子学生の腕にはつきりと残る注射痕の内
出血が見える写真はどこにも無かった。

「……っな?!」

絶句するチヨルスを前に、主任はゴホンツと咳払いしてからチヨ
ルスに掴まれていた襟首を整えると、背筋を伸ばして言った。

「全く。変な言い方がかりはよしてくださいよ。鑑識の結果は変わり
ません。あなたが見たと言う、幻の写真が出てきたとしてもね」

チヨルスに冷たい一瞥をくれると、主任は部下の職員に顎をしゃ
くつて、呆然と立ち尽くすチヨルスを鑑識室から追い出した。

明白な筈なのに、なぜか隠匿される死亡原因。

無くなる筈のない、資料の紛失。

まさか、内部に？

チヨルスは鑑識室の扉の前で立ち尽くしながら、ギリツと唇を噛んだ。

安いビジネススクラスの固いスプリングのシートを弾ませて、ペク・ギョウンは文字通り、その場で電気ショックにでもあったかのように跳ね上がった。

広げた新聞の端が、隣りの座席で頭にサングラスを載せたまま大イビキをかいていたオーサーの顔にかかり、オーサーはムズムズと鼻を動かした後、不快そうにそれを振り払った。

「……そんな……ミラが、何で……？」

いつもなら、オーサーの機嫌を損ねる失態を演じないよう気を使うギョウンだったが、今日ばかりは様子が違っていた。

オーサーを気に留める余裕もなく、一人口の中でブツブツと呟く新聞を握る手も、小刻みに震え、見る見るうちに顔が青ざめていった。

「……ん？」

面倒くさそうに額のサングラスを押しやり、隣りのギョウンを見上げたオーサーは、そこで初めて、彼の様子がおかしいことに気がついた。

「……どした？」

眠い目を擦りながら、ギョウンに尋ねる。

ギョウンは何も応えず、そのまま力なく新聞を握った手をダラリと垂れ下げる。床に落ちて広がる一歩手前で、オーサーはその新聞をキヤツチした。

【ソンステギョ聖水大橋からの発見遺体。身元は、明慶大学四年、ノ・ミラさんと判明】

目を走らせた先に、紙面の端に小さく載ったその記事を見つけた。ともすれば見過ごされても不思議ではないその記事が、ギョウンに口を利くのもままならないほどに、大きなショックを与えた原因に違いなかった。

「この娘……」

言いかけたオーサーの前で、ギョウンは急に立ち上がった。

「おい?!」

驚くオーサーに応える余裕もなく、ギョウンは座席の間をよるめきながら、狭い機体の後方へと向かう。

「お客様、間もなく着陸ですので……」

止めるキャビンアテンダントを振り切って、ギョウンは機体の一番後ろにあるトイレの中へと駆け込みガチャリと鍵をかけた。

「あの、お連れ様が……」

困り果てたキャビンアテンダントが救いを求めるようにオーサーに視線を移すと、オーサーはそれに応えてニッコリと微笑んだ。

「ごめんね。昨日の夜食べた、タツパール（激辛の鶏の足料理）がアタツたみたい」

親指の先でトイレの方を指しながら、オーサーは可愛い彼女に向かってウインクしてみた。

「そろそろ出てきてくれない？ 何時間ウ コで粘るわけ？」

もぬけの空になった機内で、オーサーはトイレの前でしゃがみ込みながら開かずの扉に向かって語りかける。

出口付近では、機内清掃の職員が迷惑そうにオーサーに視線を送っている。

目的地であるチエジユド濟州島国際空港に着陸してからも尚、ギョウンはトイレに立てこもったままだった。

「いつまでも粘るなら、俺にも考えがあるよ。国内線の発着ロビーでアナウンスしてもらおうか？ 『ソウルからお越しのペク・ギョウン様のお腹が荒れ模様のため、国内線に遅れが出ております』ってね」

その時、バンツと音を立ててオーサーの目の前で扉が開いた。

そこには涙と鼻水で顔をグシャグシャにした、酷い有様のギョウンが立っていた。

「……先生……」

「タンマ！ 今その顔で俺に抱きついたら、命はないよ。このシャツ、今回の旅行のために新調したんだから」

そう言って、趣味の悪い、ヤクザ者丸出しのアロハシャツの裾を引っ張って見せる。

「センセエ……」

情けない声でもオーサーに縋ろうとするギョウンの肩を押し返して、オーサーは機内清掃員に頭を下げながらチップを渡して、まだグズグズと泣いているギョウンの背中を押してタラップを降りた。

手続きを済ませ、そのまま人目を避けるように発着ロビーの柱の影に連れて行くと、オーサーはギョウンと向き合った。

「そろそろ落ち着いた？ あの娘はやっぱり……」

言った途端、ようやく乾きかけたギョウンの目に涙がいっぱいに浮かんできた。

「もう、泣くなっ！ 鬱陶しい！」

オーサーに一喝されて、びっくりしたようにギョウンの涙が止まる。

「……そうです。俺の女だった、ノ・ミラです」

うな垂れたまま、小さな声でそう呟く。

「……あの時の、二大原因の一つってわけね。一つはアメフト、もう一つがこの娘？」

「……はい」

ギョウンはそのまま、ズルズルとその場に座り込んだ。

悪夢のような、どん底の状態にいたあの頃の記憶が蘇ってくる。

(ギョウン！ あんたは、韓国一のクォーターバックよ！)
(ずっと、私と一緒にいてね)
(……好きな人が出来たの。だからギョウン、悪いけど、もう会えないわ)

「うわああああああつ！」

「ちよと！ お客さん」

カウンターに並べられたグラスをなぎ倒し、奇声を上げるギョウンを店の主人が振り返る。店の四方に目配せをして、常駐させているボーイ兼用心棒の男たちにギョウンを取り押さえさせる。

屈強な複数の男たちを持ってしても、将来を渴望されていた大学アメフト界の元花形スターの鍛え上げた肉体を押さえつけるのは至難の技だった。

「摘み出せ！」

店を滅茶苦茶にされて、青筋を立てた主人が男たちに命じる。

「触るなっ！ 誰も、俺に触るな……ウ……グウエ」

そのまま身体を二つに折り曲げて、ギョウンは自分を取り押さえていた男の一人の足元に嘔吐した。

「貴様っ！」

ピカピカに磨き上げた革靴を汚された男は、躊躇なくギョウンの頬を殴り倒す。

床に腹ばいになりながら、ギョウンは吐しゃ物の中に顔を埋めた。

「二度と来るな」

そう言われて、勢いよく店の外にはじき出される。路地に積まれていたゴミの山に頭から突っ込むと、後ろでピシヤリと店の扉が閉められる音が響いた。

外はいつの間にか雨が降り出していた。

ペク・ギョウンは、聖智大学アメフト部の有名選手だった。

同じ学年で明慶大学のハン・ガンホとは、高校時代からのライバルで、大学タイトルの数々を二人で競い合っていた。

他校に通う美人で有名な彼女もいた。

彼女　ノ・ミラは、高校時代、ギョウンが通う高校の隣の女子高に通う彼女を口説き落としてモノにした。

人生まさに順風万帆。

挫折なんて言葉とは無縁に生きてきた。

だが、彼が大学三年生の春、明慶大学との練習試合中にそれは起こった。

いつものような激しいぶつかり合いの中、不意に足を払われた。

グラウンドに転がったギョウンの膝の上に、幾人もの明慶大学側の選手が覆いかぶさってきた。

転んだ時の姿勢が悪く、不自然に曲がった膝に大勢の体重が一気にかかる。

痛みに叫ぶギョウンの視線の先で、冷たい笑みを浮かべて彼を見下ろすガンホの姿が見えた。

膝の半月板損傷に靭帯断絶

アメフトへの復帰どころか、完全な日常生活に戻るまで半年を要した。

完全に経たれた選手生命と共に、これまでのギョウンの人生は終わり告げた。

始めのうちこそ足しげく入院先を訪れてくれたチームメイトも、荒れるギョウンを前に、日が経つにつれ一人減り、二人減りして、とうとう誰も来なくなった。

それは、最愛の恋人、ノ・ミラも例外ではなかった。

（早く良くなつてね　　）

可愛らしい声でそう囁かれ、照れ隠しに邪険な態度を取るギョウンにもいつもの笑顔を向けていたミラが姿を見せなくなってから、今日で二週間になる。

毎日見舞いに来ていた彼女だが、大学の試験があるから忙しくなると言つて、二日おき三日おきになり、この前は本当に久しぶりに病院へやつて来た。

ご無沙汰していたお詫びにと、高価な高麗人参を手土産に持つてきたが、今ではその彼女の置き土産だけが、サイドテーブルに足を組んだ人間そっくりの姿勢で鎮座して、ギョウンに哀れみの眼差しを向けていた。

一週間を過ぎた頃から、流石に痺れを切らして、看護師の目を盗んで喫煙室にもぐり込み、ミラあてに電話をかけてみたが、電源を切っているのかいくらかけても繋がらなかった。

そして半年後、ギョウンがやつとの思いで退院する日まで、とうとうミラは姿を現さなかった。

退院後、学校の理事者室に呼ばれ、今後の身の振り方を問われた時、ギョウンは明らかに彼らに厄介者扱いされているのが分かった。“我が校の誇り”と口を揃えてギョウンを誉めそやしていた者が一様に、手のひらを返したような態度だった。

確かにスポーツ推薦で入った大学だから、もうアメフトを続けられないとなれば、大手を振って在学できる資格はない。学校側とし

ても、ここまで母校に数々の栄光をもたらしてきた名選手を、途中で退学させるという無体な真似は表立っては出来ないが、その態度や言葉の端々から、ギョウンに自主退学を促しているのが感じ取れた。

「荒れ狂った気持ちのまま、身辺整理のために立ち寄った部室で、ギョウンは耳を疑うような後輩の会話を盗み聞いてしまう。」

「哀れなもんですね、ペク先輩も。退学するって噂ですよ」

「そりやそうだろう。肩身が狭くて、普通の神経じゃいられないよ。恋人にまで見放されて」

「ペク先輩の彼女、明慶のハン・ガンホに乗り換えたって知ってました?」

「本当かよ? 女って怖いなあ」

クスクスと忍び笑いを漏らす二人がいる部室のドアを、ギョウンは部室棟全体が揺れるような大きな音を立てて蹴破った。

「せ……先輩?」

噂をすれば、影。

しかし、あまりに唐突で予期していなかった激しい影の登場に、二人は恐れおののいて震え上がった。

手前にいた後輩の胸元を締め上げ、ギョウンは搾り出すような声で言った。

「……おい、今の話は……」

「す、す、すみませんっ!」

締め上げる力を強める。グウツと息の詰まった後輩の横で、締め上げられていない方のもう一人がなぜかより青ざめる。

「質問に答えろっ！ ミラが、ガンホに乗り換えたって一体……」
「お、俺の女が明慶にいて、明慶では有名な話だってっ！」

後輩が苦しげに叫ぶと同時に、ガンホは乱暴に彼を戒めていた手を離した。

「……つくそ！」

蹴破った時と同様に激しい音を立てて、ガンホは部室を飛び出していく。

真っ直ぐに向かった先は、ミラのアパートだった。

「ミラッ！ 開けろっ！ 出て来い」

隣人の迷惑も顧みず、インターフォンを鳴らすこともせず、ギョウンは通いなれた彼女の部屋のドアを叩く。

「ミラッ！」

何十分もそうして叩き叫び続けていたら、根負けしたのか、静まり返っていた扉の向こうで、カチャリと鍵の開く音がした。

細く開けられたドアには、しつかりとチェーンがかかっていた。

そこに彼女の拒絶の色が何よりも明確に現れている気がして、ギョウンは怒りよりもやりきれない寂しさに襲われた。

「ミラ……どうして、病院に来てくれなかったんだよ？ 電話も繋

がらないし。俺、心配……」

「ごめんなさい」

ギョウンの言葉を遮って、ミラが小さな声で呟く。

「何謝ってるんだよ？」

昼間だと言うのに、ミラの部屋には厚い遮光カーテンが引かれて
いるのか、彼女の身体の向こうには薄暗い闇が広がっていた。

綺麗好きで掃除好きで、派手な外見に似合わず家庭的で、いつも
部屋の中は明るく整頓されていた彼女の部屋とは思えなかった。
心なしか、部屋の中からはすえた匂いも漂ってくるようだった。

「何があっただよ？ とにかく、入れてくれ。中で話をしよう」

ギョウンがドアの隙間に足を挟もうとすると、ミラは咄嗟に扉を
閉めようとした。

「ミラ?!」

「……好きな人が出来たの。だからギョウン、悪いけど、もう会え
ないわ」

ミラは一気に息を吐ききるようにそう呟いた。

「……お前、本気で言ってるのか？」

その時ギョウンの目に、ミラの身体の向こう、明かりの乏しい玄
関先に無造作に脱ぎ捨てられたスニーカーが映った。

「新しい男が出来たって、本当だったのか？」

ビクッとミラが身を竦ませる。

「相手が、ハン・ガンホだって、本当だったのか？」

部屋の奥にいるであろう相手にも届くように、ギョウンは声をあげた。

「……ごめんなさい。もう、離れられないの」

ミラはまるで何かに怯えているようにそう言うと、弱々しい力でギョウンの肩を押し返した。もともと華奢なスタイルだったが、しばらく会わぬ内に、随分とその腕は痩せてしまったように見えた。

それからは直視できない現実から逃れるように、酒に溺れた。

大学へは半場やけっぱちの気持ちで、ミラのアパートから戻ったその足で退学届けを出した。

毎日することもなく、夜の店に繰り出しては、あちこちの店で鼻つまみ者になり追い出されるまで、飲み倒した。

その内、ソウル市内の店では噂が広まり、入店を拒否されることも珍しくなくなってきた。

世界中から拒絶されているような気がして、ギョウンの心はますます荒んでいった。

そんな時、雨の向こうに浮かぶ黒テントを見つけたのは、全くの偶然だった。

ゴミの山に頭から突っ込んだせいで、我ながら胸の悪くなるような腐臭を漂わせながら小雨の中を一人歩いている時、高架橋の下で隠れるように明かりを灯すテントを見つけた。

九月の終わり頃だった。

長く続く秋の雨に打たれていると、肌の体温を奪われていくのが分かった。眩しい太陽が照りつける夏は終わり、自分の人生にもう寂しい秋が訪れたような気分になった。

温めて欲しくて、何でもいいから慰めて欲しくて、ギョウンはその灯りに導かれるように、覚束ない足取りで高架橋の下へと降りていった。

テントの入り口にはまだ『準備中』の札が下がり、中から人の話し声が聞こえて来た。

「遅すぎない？ ナビヤが下見に行ってから、何時間経つのさ？」

「オンマも一緒だから、その辺で遊んでるんじゃないかと思うけど

……」

「だって、もう六時だよ？ 暗くなる前に帰って言ってあるんだろ？」

子どもでもいなくなったのか、中で交わされる二人の男の話し声には焦りの色が滲んでいた。

「やっぱり俺、ちょっとその辺見て……」

店の中で誰かが立ち上がる気配がしたのと同時に、粗末な黒テントのドアが開いた。

「あっ！」

全く心の準備をしていなかったギョウンは、突然のことに動揺して口をあぐりと開けた。

彼の動揺の原因は、店の人間との突然の対峙だけではなかった。ドアを開けて現れた男の、人間離れした容姿にまるで魂を抜かれるような気持ちになった。

蟬のように白い肌と、灰色の瞳、東洋人が否かすら定かではない。プラチナブロンドに近い明るい金色に染められた髪も、常人であれば少々奇抜すぎて違和感のある代物に見えたが、彼にかかつては、地毛だと言えばそれで納得してしまうほど馴染んでいた。

「あっ！」

ギョウンと同様に、その金髪の彼も声をあげた。

「オンマッ！」

だがその視線はギョウンを見事に素通りして、彼の背後に向かっていた。

「へ？」

思わず後ろを振り返ると、ギョウンの後ろには痩せた猫が一匹、雨に濡れそぼって立っていた。

金髪の男は邪魔なギョウンを押しつけて、その猫に向かって手を伸ばした。

猫は一声、ニヤアツと高く鳴くと、そのみすばらしい見かけに反して、さも当然といったような優美な動きで美しい男の胸に治まった。

「ナビはどこにいるの？ 一緒じゃないの？」

男はまるで言葉が分かるかとも思っているかのように、猫に向かって話しかける。

猫もそれに応えるように、男の胸で身じろぎをした。

また、ニヤアツと甲高く鳴くと、男の胸から飛び降りて雨の中を駆け出した。

「待て！ オンマー！」

金髪の男はそう叫ぶと、急いで店の中を振り返った。

「オーサー！ オンマが帰って来た。ナビに何かあったんだ。追いかけるよ」

「待てよ、ジエビン！ 俺も行く！」

しかし中の男の返答を待たずに、金髪の男は猫の後を追って既に駆け出していた。

「まったく、せつかちなんだから」

ブツブツ言いながら、二人目の男もテントの入り口に現れた。手には『CLOSE』の札を持っていた。

「ん？ おたく、誰？」

呆気に取られたまま立ち尽くしていたギョウンに目を留め、二人目の男が声をかける。

誰？ と問われても、何と答えていいのか分からなかった。自分はただ、明かりに惹かれ、ひっそりと立っている黒テントに温もりを求めて立ち寄った、ただの客に過ぎなかったから。

「ちようどいいや。緊急事態だから、ちょっと店番してて！」

「は?!」

言うのが早いか、男は有無を言わずギョウンの手に『CLOSE』の札を押し付けた。

「ちよ……ちよっとっ！」

「札下げて、中にいていいよ。客が来たら、断って店に入れなくていいから」

それだけ言うと、傘も差さずに、先ほどの金髪の男と猫が消えた雨の中へと飛び出して行った。

突然押し付けられた店番に戸惑いながらも、誰もいない店を放って帰ってしまうわけにも行かず、ギョウンは恐る恐る店の中に足を踏み入れた。

外から見るよりも案外中は広く、ジャズの名盤などがディスプレイされた店内は小奇麗に片付いていた。

言われた通り『CLOSE』の札を下げ、自分はカウンターに腰を下ろす。

店内は静かで、屋根を打つ雨と壁にかけられた振り子時計の秒針の以外に音は無かった。

やることもなく店内を見回した時、ふと、カウンターの飾り

棚に陳列された数々のワインやウイスキー、酒のビンが目にとまった。

意識した途端に、指先が震えた。

誰も見ていない　そんな誘惑が、ギョウンの頭の中を駆け巡る。

自主退学してからというもの、毎日浴びるように酒を飲む生活を送ったお陰で、すでにギョウンの身体は、本人が意識するよりもずっと深刻に、アルコールに侵されていた。

「さ、入って入って。狭くて汚い店だけどさ」

「狭くて汚くて悪かったな」

「あらら、オーナー様、聞こえてましたあ？」

どれぐらいの時間が過ぎたのか。

朦朧と霞む頭に、軽口を叩く甘く掠れた美声が入り込んできた。身を起こそうと思っても、意識と身体のバランスが取れず、思うように力が入らない。結局ギョウンに出来たことと言えば、床に仰向けに寝そべった状態で瞼をピクピクと痙攣させることだけだった。

「うわっ！ 何、この惨状」

瞼の裏を刺していた店内の橙色の光に影が差し、誰かが自分を真上から覗き込んでいるのが分かった。

「ずいぶんお行儀の悪い店番だねえ」

呆れた声と同時に、爪先で脇腹を小突かれた。

「まさかこれ、ゼーんぶ、君一人で飲んじゃったわけ？」

瞼の裏の影が揺れるたび、ギョウンの耳の側でパリンパリンとガラスが弾ける音がする。それと一緒に、濃厚な酒の香りも辺りに漂う。

「店番のお駄賃でもあげようかと思ってたけど、これじゃあお駄賃以上に飲んじゃってるね」

「おい、オーサー！ お前の持つてるそのビン……」

ワナワナと震える別の声が近づいてくる。

「……ロ……ロマネ・コンティじゃないか?!」
「へ?」

言われて、オーサーが初めてラベルに目を落とす。無残に赤い命を垂れ流すボトルの口に鼻を近づけて、クンツと香りを嗅ぐと、ニッコリと微笑んで言った。

「うん、間違いないね。ロマネ・コンティ、2004年モノ、占めて1300万ウォン（約100万円）なり!」

「なり! じゃない、この野郎っ!」

途端、寝ていたギョウンの頭が凄い力で引き上げられた。胸倉を掴まれ、ただでさえ酒でフラフラの頭を激しく揺さぶられる。

「お前っ! どういうつもりだ、よりによって店一番の超最高級ワインをつ!」

「……あ……やめ……ッウ」

しまった 思った時には、もう遅かった。

ゲロゲロと盛大に嘔吐したギョウンの胸倉を掴んでいたジエビンの白い手は、一瞬の内に嘔吐物でドロドロになった。

「……貴様……」

薄目を開けて自分を掴む男の顔を覗き見たギョウンは、一瞬で凍りついた。

静かな怒りに震えるジエビンのゾツとするほど美しい目には、明らかに殺気が見て取れた。

殺される！ そう思って思わず固く目を閉じたギョウンに、突然救いの天使が現れた。

「もうっ！ 先生も兄貴ヒムンもいい加減にしてよ。僕とお酒とどっちが大事なのさ！」

天使は世にもマヌケな声で、殺気に満ちていた男の体からあつという間に険を抜いてしまう。

「だって、ナビ……」

「僕は、1300万ウォンと変えられるの？ ん？ どうなの？」

「もちろん、ナビヤは10億ウォンとだって変えられないよ。ねえ、ジエビン」

調子の良い声が追隨する。

「そりゃそうだけど、でも、それとこれとは……」

「違うないでしょ。何だったら、後で弁償してもらって、お金が無理なら身体で返してもらえばいいじゃない」

誰よりも恐ろしいことを、マヌケな天使は意図も簡単に口にする。

「それより、こっちが先でしょ」

そう言って、ナビは自分の後方で、未だ店に入りきらずに、どう

したものかと思案しながら雨の中で立っている何人もの若者を指差して言った。

「取引き”するんでしょ?”」

そう言うナビをよく見てみれば、彼のすぐ後ろにピタリと張り付くように若者の一人が立っている。

不自然に密着したその腰元には、店内の薄暗い照明に照らされた、鈍いナイフの光がキラリと乱反射していた。

「ほ……ほほ……本当に、“エデン”を……も……もも……も……も……持つてるんだろっな?”」

ナビの腰にナイフを押し当てている学生は、酷く震えながらもそう言うって、ナビの身体を押しした。

「っ痛」

ナイフの切っ先がほんの少しだがナビの腰に食い込み、ナビは顔をしかめた。

「持つてるって言ったろ? それに、さっきちよっとお裾分けしてもらったけど、お宅らが持つてるような粗悪品じゃない。もっと、超高級の、それこそ麻薬界のロマネ・コンティみたいに、一瞬でイッちゃえるような“エデン”を持つてるよ。だけど、それをあげる前に俺たちのナビヤをちよっとも傷つけたら、俺がお宅らを一瞬でイカせてあげるよ。二度と戻って来れない、本当の“エデン”にね」

冗談めかした口調に似合わない冷酷な目で、オーサーは若者の集

団を見つめる。それが脅しでも何でもなく、いざとなれば本当に皆殺しにすることも厭わないということは、彼の目を見ればすぐに分かる。

「まずは、ナビヤをすぐに解放して」

「ク、クスリが先だ！ 店にしかないって言うから、こんなところまで着いて来たんだぞ」

「じゃあ、同時に。ハナ・トゥル・セツ（1・2・3）で俺はクスリを投げるから、お宅らはナビを離しなさいな」

「……い……いいだろう。可笑しな真似するなよ！」

「ハナ……トゥル……セツ！」

オーサーの掛け声と共に、白く小さな紙包みが宙を舞い、同時に突き飛ばされたナビがオーサーの腕の中にすぽりと納まった。

「お帰り、ナビヤア」

「止めて！ 先生っ！ ヒゲ痛い、ヒゲッ！」

もがくナビにお構いなしに、オーサーは頬ずりを繰り返す。

「おい、ふざけるなよ！ たったこれだけか？」

その時、宙に浮いた小さな紙包みを必死の形相で掴み取った若者が怒声を上げた。

「これじゃあ、一人分にしかないじゃないか」

「そうだよ、ナビヤ一人の命と引き換えなんだから、一人分で合ってるでしょ？ 取り引きはファイファイでなきゃ。それに言ったでしょ？ 超最高級品だって。量産できたら、高級品って言わないよ」

「テメエッ！」

若者は手にしたナイフを振りかざして、オーサーに襲い掛かろうとした。

「これだから、おバカな学生は嫌いなものよ。取引きの何たるかを、分かってないのね」

「黙れっ！」

そう言うなり、若者はオーサー目掛けて突進してきた。

「ちょっと、ナビをお願い」

オーサーは慌てる様子もなく、ナビの肩を掴んで傍にいたジェビ
ンに彼を引き渡すと、自分は悠々と若者に向き合った。

一瞬にして若者の手首を押さえると、身体を反転させて若者を背
後から壁に押し付ける。

捻りあげたナイフを持った手首にほんの少し力を加えただけで、
若者は耳をつんざくような悲鳴を上げた。

「もっと欲しいなら、お願いしなきゃ。可愛くね、おねだりしてみ
なよ。ベッドの中の女の子みたいにさ」

「その辺にしとけよ、オーサー。骨折れるぞ」

案の定、壁に押し付けられた若者の顔は見る見るうちに青ざめ、
額からは脂汗を流している。

「形勢逆転だね。ねえ、君たちもよく聞いて。リーダーの骨、バラ
バラにされたくないよね？ トべるクスリも欲しいよね？」

まだ戸口の所で雨に濡れたままパニックになっている若者の集団
に、オーサーは声をかける。

「取引きの条件は、簡単だよ。本当に特製だからね、さつきみたい
に一度に一人分か、そうだね、君の彼女の分くらいしか上げられな
い」

そう言って、一番戸口に近いところで、オーサーに取り押さえら
れている若者を心配そうに見つめている少女にウィンクした。

「嘘だと思っなら、帰って吸ってみて。ロマネ・コンティ級のこの

クスリに比べたら、君らが今までキメてたクスリは、10000ウオンの価値も無いって分かんと思うから。でも、さっき言ったみたいに量産は出来ないよ。ここにいる、君たちだけの秘密にしてくれなくちゃ、殺到しちゃうでしょ。ああでも、ここにいる全員分も、一気には無理だよ。順番に、一人づつ来てくれなきゃね」

「順番で来たら、必ず最後まで行き渡る保障があるのか？」

後方にいた若者の一人が声をあげる。

「いい質問だね。それが約束できないから、困ってるんだよ。最後の一人の直前で無くなるかもしれないし、保障は出来ないね」

「じゃあ、順番なんて、どうやって決めるんだ？ 行き渡らないことを承知で、最後になるヤツなんていないじゃないか」

「だから、言ったでしょ？ 何か忘れてない？ これは“取引き”なんだよ」

オーサーは人差し指を唇に当てて囁く。

「君らが、その10000ウォンワイン以下のクスリをどこから入手したのか、そのまた入手先の相手は、どこから手に入れたのか、出来るだけ詳しい情報を持つてる子から、一人づつ、ここ『ペニー・レイン』へ呼んであげる」

オーサーは居並ぶ学生たちをグルリと見回して言った。

「簡単でしょ？ 俺の気に入る情報だったら、特別に後から彼女一人だけは呼んでもいいよ。ささやかなお礼として、ホテルも一泊プレゼント。キメてヤルと気持ちいいって、君たちなら良く知ってるんでしょ？」

「先生っ！」

際どいオーサーの物言いに、思わずナビが声をあげる。ナビの過剰な反応を見て、当のオーサーはイシシと笑ってご満悦の様子だ。

「ちなみに、この店は雨の晩だけ開店して、開店場所も神出鬼没。秘密の取引きには持ってこいだから、安心して。ママやパパや学校の先生にバレずに、イケナイことし放題だよ」

軽薄な口調の誘惑でも効果は充分だったようで、若者たちは欲望に目を光らせて、生唾を飲み込んだ。

「でも、そんなにココロコ店の場所が変わったんじゃ、どうやってあんたに連絡すりゃいいんだ？ 全員に携帯の番号でも教えるのか？ 仮に皆があんたの連絡先を知ったとして、アポが重なったらどうやって順番を決めるんだ？」

矢継ぎ早な質問は、彼らが本気になってきた証だった。

「俺が直接、君らと連絡を取る訳には行かないよね。俺はイケナイクスリを配布する親玉だから。すぐに足がついちゃうでしょ。誰か、いい子を間に挟みたいんだけど……」

そう言って、若者たちを見回したオーサーの視線の隅で、何かがムクリと起き上がった。

この状況で皆に忘れ去られていたが、ロマネコンティを飲み干して、危うくジェビンに殺されるところだったペク・ギョウンだった。

「……あれ？……お前、どっかで……」

ギョウンは朦朧とした意識の中で、まだオーサーによって壁に押

し付けられたままの若者を見て言った。

「どっかで、会ったか？」

首を傾げるギョウンに、若者の方も次第に眉間に皺を寄せる。

「お前……自治会の……ヤツだよな？ あれ？ お前も……お前も？」

ギョウンは店の戸口に並んだ彼らにも視線を走らせる。徐々に頭にかかっていた霧が晴れるようだった。

「ペク・ギョウンッ！」

ギョウンより先に、壁の若者が驚いたように声をあげた。

「^{ウチ}聖智大学の学生だった、ペク・ギョウンだよな?!」

その途端、戸口の若者たちも一斉にざわめきだした。何日も櫛を入れていないボサボサの髪と、伸び放題になった汚らしい不精髭から、フィールドを駆け回っていた頃の輝かしい面影は皆無だったが、かつての母校のスターの顔は、皆良く覚えていた。

「嘘だろ？ アメフトの？」

「退学したはずだろ？ 何で、こんなところに？」

「今の会話、全部聞かれてたのか？」

動揺はあつという間にその場にいた学生全員に広がった。思いがけない目撃者に出くわし、彼への対処をどうすべきか、皆考えあぐねていた。

「何？ お宅ら同じ大学の生徒だったの？」

オーサーが面白そうに話に割り込んでくる。

「ふーん、いいこと考えた！」

愉快そうに膝を打って、オーサーは告げる。

「この子を仲介に立てるってのはどう？ 情報が入ったら、君らはこの子に連絡して。俺はこの子を派遣するから、そしたら情報を渡して。それが俺の気に入る代物だったら、そこで始めて『ペニー・レイン』へご招待！ どう？ 完璧じゃない」

「…………え？ お…………俺？」

突然のことに事態が飲み込めていないギョウンが、驚きに目を見開いてオーサーを見る。

「そつだよ。さっきナビも言ったでしょ？ どうせお金無さそつだし、身体で返してもらおうと思って。ロマネ・コンティ分は働いてもらわないとね」

オーサーの女好きするウインクで、あつという間にこの無茶な商談は成立してしまった。

「さーて、じゃあまずは、まともに働ける身体になっってもらわないとね」

若者たちを帰した後の明るくなってきた店内で、オーサーはなぜかギョウンの身体をロープでグルグル巻きにしていた。

「…………何してるんですか？」

「自覚あるでしょ？ 手足はブルブル。君は立派な、アル中患者だよ」

そう言うなり、縛ったロープの片方を担いで、ズルズルと店の奥へと進んでいく。カウンターの扉を開け、テントから繋がったキャンピングカーへとギョウンを連れて行くこうとしていた。

「ジェビン、二週間くらいシャワー室借りるよ」

「えー?! そしたら僕たちがシャワー使えないじゃない」

「代わりに貸し切りサウナ行こうぜ、ナビ」

「ヤッホーイ! それなら、許す」

呑気な会話が交わされる横で、ギョウンはこれから一体何が行われるのか検討も着かなかった。

高級ワインを飲んでしまったことを恨まれて、まさかシャワー室で拷問を? そう思うと、恐怖で歯がガチガチと鳴った。

「さあ、今日から二週間、君は俺とここで我慢大会だよ。本当は俺も、ナビヤと一緒に貸し切りサウナへ行きたいところ、我慢して君に付き合っただけだから、我慢大会。君は、アルコール抜きの我慢大会。どっちに軍配が上がるかな? 俺のナビヤ中毒は、君のアル中より重症だから」

空になったバスタブにロープでグルグルに縛り上げたギョウンの身体を乱暴に二つ折りにして放り込むと、自分はバスタブのへりに腰掛けて、悠々と煙草に火をつけた。

「禁断症状で、イライラしちゃったらゴメンね。いつもは優しい先生だけど、ナビヤが足りない俺、人格変わっちゃうから」

そのまま火を消しもせず、浴槽に啜っていた煙草を投げ捨てる。

「熱っ!」

「ふふ、じゃあ……レディーゴーツ!」

優しげに下がった目尻の奥から覗く鋭い目の光に、ギョウンは縮

み上がった。だが、既に籠の鳥、まな板の上の鯉　　彼に逃げ場は無かった。

「あの時の、先生の恩は一生忘れないよ」

チエジユド
濟州島国際空港の柱の影でうずくまった姿勢のまま、ギョウンは弱々しい口調で呟いた。

「……あのまま酒に溺れ続けてたら、俺、本当の廃人になってた」
「俺はグルグル巻きにして縛ってただけ。あと、ナビヤ欠乏症でイライラしたから苛めてやっただけ。乗り越えたのは、お前自身の力だよ」

いつものふざけた口調は別にして、滅多にかけられることのないオーサーの優しい言葉の響きに、ギョウンが思わず顔を上げる。

「『ペニーレイン』と学生たちの橋渡しをしながら、お前も俺の目を盗んでヤクに手を染める機会は沢山あったのに、お前は手を出さなかった。俺は正直、100%、お前を信頼してたわけじゃないのよ」

「ごめんねーと笑いながら、オーサーはギョウンの頭をまるで幼子にするようにグシャグシャと撫でる。

「……お前の愛しの彼女が、ヤクをやってるんじゃないかって、気付いたのはいつ？」

ギョウンの目から、一旦収まっていた涙が再び溢れ出す。

「……確信が、あったわけじゃないんだ……でも、あいつの……ア
パートに行った時、あいつが……何かに、怯えてるみたいで……」

(……ごめんなさい。もう、離れられないの)

あの時は、ガンホへの心変わりを告げる言葉としか受け取れなかった。
た。

だが、もしかしたら“離れられない”理由は、別のところにあつたのではないのか。

一年近く、オーサーの指示の元、聖智大学の学生を中心に薬物にハマった学生たちを『ペニーレイン』へ誘導する仕事をするうちに、この薬物騒動に明慶大学のガンホが絡んでいること、そして自分の傍を離れ、今はそのガンホの元にいるミラへの疑惑も深まっていた。

「一斉摘発のタレ込みしたのは、誰だと思う？」

軽い調子で尋ねるオーサーに、ギョウンは思わず言葉を詰まらせる。

「多分、俺とお前は同じこと考えてるよ。向こうも俺らに気付いたから、先手を打ってきたんだ。警察が彼らを持ってつてくれれば、俺らは奴らを上げる証拠に辿りつけない。それどころか、自分たちは身を隠したまま、あわよくば邪魔な俺らも警察が片付けてくれる可能性さえあるからね。聖智大の一件は、奴らのトカゲのシッポ切りだったんだよ」

ギリツと唇を噛み締めるギョウンに、オーサーはニヤリと笑った。

「悔しい？ ペク・ギョウン」

そう言いながら、ギョウンの額を小突く。

「負け犬人生なんて、プライドが許さないよね。一度でも栄光を味わった人間なんて、みんなそうさ。あの坊やを見てられなかつたんでしょ？ 今の自分を見るみたいで、イライラして苛めたくなくなつた？ だから、警察に追い詰められた時、見捨てて一人で逃げたりしたんでしょ？ 俺に怒られるの分かってて」

ギョウンが一斉摘発のあった夜、一緒にいたのはコ・ジョンヒョンという名の少年だった。

彼は聖智大学の学生ではなく、あの雨の夜に『ペニーレイン』傍

の廃材置き場にたむろしていた若者の中にもいなかった。その彼が『ペニー・レイン』に来たがった理由は、ただ一つ。彼の恋するナ・ジスクという少女が、あの廃材置き場のメンバーの中にいたからだ。

彼女には既に別の恋人がメンバーの中にいて、彼のことなどまるで眼中に無いというのに。

丁度、元恋人のミラを追いかけても、相手にされなかった自分のように。

彼は『ペニー・レイン』へ呼ばれたまま帰らない彼女を追いかけたい一心で、聖智大学のメンバーに何度も掛け合い、ギョウンに連絡を取ってきた。始めは取り合わなかったギョウンやオーサーだったが、あまりにしつこく粘るため、特例的に一度だけ彼を呼んでやることに決めた。だがその矢先に、あの一斉摘発事件が起こり、ギョウンの忠告を無視して、掻き集めた粗悪なクスリの残りを使っていた学生たちが警察へ連れて行かれてしまった。明洞ミョンドンの路地に身を潜めていたジヨンヒョンも同様だった。

「『ペニー・レイン』に連れて来ていれば、今頃会わせてやれたのに」

空港から予約していたレンタカーに乗り換え、郊外へ飛ばす車中でオーサーはさわやかな島の風にウェーブのついた髪をなびかせながら言った。

「会ったって、無駄だよ」

助手席のギョウンが苦々しげに呟く。

「あの女の男は、あいつじゃないんだから。あの女が待ってるのは、あいつじゃないんだから」

「そうかな？ 禁断症状に耐え切れなくて、彼女置いて逃げ出すような男を、彼女が今でも待っているとしても？」

「女なんて、みんな一緒だよ。バカで男を見る目がないんだ」

ギョウンの言葉に、オーサーはハンドルを握ったまま思わずプツと吹き出した。

「何が可笑しいんですか？ 先生」

「いや、ゴメン。そうだね、女は見る目ががないよ。お前や、あの坊やが簡単に振られる世の中は、ろくなもんじゃないね」

「全然心がこもってないよ。先生は、失恋したことないからそんなこと言うんだよ」

「どうかな？ これでも、人生の機微はそれなりに理解してるつもりだけどね」

拗ねるギョウンにオーサーは楽しげにアクセルを踏み込む。

「じゃあ、会いに行こうとしようか。そのバカで男を見る目のないお嬢ちゃんにね」

二人を乗せた車は、真っ直ぐに伸びた海岸線を横目に、リゾート地の穏やかな風を掻き分けて速度を上げた。

「……久しぶりだな、ちょっと、痩せた……ってより、やつれたか

「？」
「チヨルスヒョンこそ」

ペニーレインの店の前、静かに降り続ける雨を見上げながら、チヨルスとミンホの二人は、黒テナントの壁にもたれて、何気ない風を装いながら定期報告を行う。お互いがこうして顔を合わせるのには、ミンホがナビと大学に潜入して以来初めてであり、一週間ぶりのことだった。

「……ところでお前……その格好は？」

チヨルスはマジマジと、隣りのミンホを頭のとっぺんから爪の先まで観察する。

普段は少しくセのある束になった髪を、ペタンと七対三の割合で頭に撫でつけている。水色のギンガムチェックの半袖シャツの裾は、ベージュのチノパンの中にきちんと入れ込んで、仕上げにその上からしっかりと黒いベルトを巻いている。漫画に出てくるような、牛乳瓶の底並みに分厚いレンズの黒縁メガネをかけ、ブックバンドで縛ったテキストを小脇に抱えたミンホの姿は、はっきり言って『野暮ったい』の一言だった。

初めて署に配属されて来た時、クムジャを始め、誰もが振り返るような高貴な美男子の面影はそこには皆無だった。

「……それについては、やむにやまれぬ事情があったんです」

ミンホは、苦々しげに唇を噛み締める。

「そ………そうか」

それ以上聞くのもためらわれて、チヨルスはなるべく野暮ったい

ミンホを見ないようにしてやろうと、自分の爪先に視線を落とした。

「それで、どうだ？ 調子は？」

「どうも、こごもないですね」

ミンホは大きく息を吐き出し、それをきっかけに溜まりに溜まった不満を一気にぶちまけた。

「僕が、これほど……こんな格好までして目立たないように気を使っているというのに、あの人ときたら！」

「あの人が……ナビのことか？」

「他に、誰がいるっていうんですかっ！」

ミンホは怒りのあまりズリ落ちてくるメガネを指で直しながら、チヨルスに向かって捲くし立てる。

「この前なんか体育の授業で、あの人が、バトミントンの試合に出たんですよ。そこまではいいんです、そこまでは。それが、さっさと負けて授業時間で終わらせればいいものを、ムキになって勝ち進みましてね、バトミントン部の熱烈な勧誘を受けました。そこで、あの人が、あろうことか学部対抗の試合に出場したんですよ。そんな目立つこと止めるって僕は何度も止めたのに、『男の約束だから』なんて言っちゃって。その上当日になったら、僕にまで加勢しろって言って無理やり試合に引っ張りこんだんですよ！」

「それで？」

「優勝しちゃいましたよっ！」

頭を抱えて、ミンホが叫ぶ。

結局お前も、ナビに釣られて本気で試合しちゃったんじゃないか、とチヨルスは喉元まで出てきていた言葉を飲み込んだ。

「……お前も、大変なんだな」

チヨルスは冷静沈着だと思っていた弟分の振り回されっぷりに、ナビの計り知れなさを感じた。

「ところで、チヨルスヒヨンの方はどうなんですか？」

ようやく落ち着きを取り戻したミンホの問いかけに、チヨルスは一瞬躊躇を見せてから、重い口を開いた。

「……疑いたくはないが、今回の件には内部が噛んでる可能性大だ」
「内部？」

ミンホが信じられないという目でチヨルスを見つめる。

「ソンスデギョ聖水大橋であがった死体……」
「ウチ明慶大学のノ・ミラですね!？」

素早く反応したミンホにチヨルスが頷く。

「……検視結果が改ざんされてる」
「っな?!」

大声を出しそうになったミンホの口に、チヨルスは慌てて人差し指を当てて制する。

「証拠があるわけじゃない。だが、内部に今回の薬物事件を、いんぺい隠蔽したい動きがあるのは確かだ。俺はそれを探る」

厳しいチヨルスの視線に合わせて、ミンホも神妙に頷く。
その時だった。

「チヨルスッ! どこで油売ってるんだよっ?! 早く手伝ってっ
!」

店の奥から、フライパンの底をお玉で叩き鳴らしながらチヨルス
を呼ぶジエビンの声が聞こえてきた。

「は、はいっ！ ただいまっ！」

その途端、チヨルスは弾かれたように背筋を伸ばして、その声に
答えた。

「え？ チヨルスヒヨン？」

これまで見たことの無い兄貴分の姿に、ミンホが我が目を疑う。

「悪いけど、俺はこれで」

「はあ……あの、オーサーって医者はどうしたんですか？ 彼も店
を手伝うって言ってましたよね」

その途端、チヨルスが目を剥いた。

「そうなんだよっ！ あの男、調子のいいこと言いやがって。一日
も手伝わないで、俺だけ置いてトンスラしやがったっ！」

「チヨルスッ！ いい加減にしろよっ！」

「はいいっ！ 今すぐ行きます、オーナー様っ！」

先ほどよりも怒気を増したジエビンの声に、チヨルスは慌てて店
内に駆け込んで行った。

「……チヨルスヒヨンも、大変なんですね」

先ほどまでの眼光鋭い『刑事』の顔をしていたチヨルスの、情け

ない変貌振りに、ミンホは自分の境遇も重ね合わせて、深い溜息をついた。

ナビはいつものように講堂の最前列に陣取り周囲をキョロキョロと見回していた。

始業時間から五分程遅れて、教授が入ってくる。

「授業始めます」

胸元のピンマイクに唇を寄せて、テキストのページを指示する教授の声を、ナビは上の空で聞いていた。

今日も、ヒヨンスは欠席だった。

最初の授業に出て以来、熱心な生徒と誤解され、なぜか教授に気に入られてしまったナビは、教授から入学してから今までのヒヨンスの様子を聞いていた。教授によると、ヒヨンスはいつも最前列の席を陣取り、入学以来どの授業も一度も欠席することなかったと言った。ヒヨンスが主席で入学したというのも、ナビはそこで初めて知った。

「教授っ！」

授業が終わってから、ナビは廊下で教授を捕まえに走った。

「おう、ユン・ナビ。分からないところでもあったかい？」

「いえ……あの、ヒヨンスのことなんですけど」

ナビが切り出すと、教授も心なしに顔を曇らせた。

「今日でちょうど一週間になります。教授は何か知りませんか？」

「……残念ながら、何も知らんよ。君たちの方が仲がいいんだから、何か知っていたら教えて欲しいくらいだよ」

教授も抱えた資料をもう一度抱きなおすと、溜息とともに呟いた。

「……また、あのワガママなお嬢さんに振り回されてるんじゃないかね」

「え？」

「英米文学科のイ・ユリだよ」

教授は眉間の縦皺を深くして、苦々しげに言った。

「コ・ヒヨンスは優秀な若者だからね。将来のためにも、あの家は早く出た方がいい」

そう言つと、教授はナビを置いて、スタスタと歩いて行ってしまった。

「遅くなってすみません、ナビヒョン」

ミンホが待ち合わせをしていたカフェテリアに着くと、ナビは心ここに在らずといった表情で、クリームソーダのアイスをストックーでグシャグシャにかき回していた。

「ナビヒョン？」

ミンホがすぐ側まで近付いて初めて、ナビはミンホに気が付いたようだった。

「……ああ」

「どうしたんですか？ ボーっとして」

ミンホが向かいの席に腰掛けながら尋ねる。

相変わらず、やりすぎなほどに『野暮ったい』格好をしているお陰で、今はカフェテリアの中でも静かにナビと話が出来るようになっていた。

「……ヒョンス、今日も来なかったんだ」

「ああ、そのことですか」

ナビの言葉に、ミンホも眉根を寄せる。

ユリをダンスパーティーに誘い出すように二人でけしかけたのは、今から丁度一週間前の出来事だった。

二人に押され気味ながらも、その時のヒヨンスは、勇気を出してユリを誘ってみると、気合を入れて帰宅して行った筈だった。だが、それがヒヨンスの姿を見た最後になった。

その時、カフェテリアの中に、一際華やかで賑やかな集団が入ってきた。

さっきまでその辺のテーブルを占領していたサークル仲間たちも、誰からともなくその集団のために席を立ち、場所を空ける。

その中央には、中でも飛び切り目を引く少女が女王のように君臨していた。

ミンホの左目が、僅かに細められ、厳しい表情になる。

「ヒヨンスと入れ替わるように、あっちのお嬢さんは学校に来るようになってしまったね」

ナビもミンホの視線の先に目をやる。

「イ・ユリですよ」

「ヒヨンスと一緒に暮らしてる？」

「暮らしてると言えば暮らしてるで間違いはないんですけど。ヒヨンスの仕える、女王様ってところですかね」

ミンホは皮肉気に口元を歪める。

「まあ、授業に出るって言ったって、その間はずっと取り巻きたちとしゃべってるか、ネイルの手入れに忙しくて、まともに聞いちゃいませんけどね」

ミンホはユリから視線を外し、ナビに向き直った。

「……それより、気になることがあります」
「それより?」

ミンホの何気ない一言に、ナビがピクンツと反応する。

「それよりって、ヒヨンスのことより大事ってこと?」

「突っかからないでくださいよ。そんなつもりじゃありません」

思いがけず過敏なナビの反応に、ミンホが驚きの表情を見せる。

「じゃあ、どんなつもりで言ったんだよっ!」

子どものように顔を赤くして怒るナビに、ミンホは半ば呆れながらも、周囲に聞かれないように声を落として言った。

「一週間前に、ソンスデギヨ聖水大橋からあがった女子大生の遺体……」

「ああ。チラシ配ってた、あのおばさんの娘さんだろ? 気の毒だったね」

顔を曇らせるナビの言葉に、ミンホも頷く。

「その彼女ですが、学長の息子のハン・ガンホと付き合ってたらしいんですよ。周囲には、半ば公然の仲でした」

「ユリは?」

「そう、だから、いわゆる三角関係ってやつです」

ミンホは更に声を潜めて、ナビに顔を近づけた。

「ノ・ミラ……該者の名前ですが、遺体があがったその日から、ユリはこれまでの分を取り戻すかのように、学校に通ってます。ガン

ホも一緒ですね。反対に、それまで欠席したためしのないヒヨンスがずつと姿を現さない」

回りくどいミンホの話に、ナビが眉を潜める。

「何が言いたいわけ？」

「……おかしいと、思いませんか？」

ミンホの分厚いメガネの奥の目が光る。

「遺体で上がった相手は、ユリの恋敵。そのユリが、言いなりに出来る相手は？」

「お前、まさかヒヨンスを疑ってるの?!」

思わずガタンツとテーブルを鳴らした勢いで、ナビはクリームソーダの入ったグラスをミンホの方へ倒してしまった。

「うわっ！ 何するんですかっ！」

ミンホのベージュ色のチノパンに、みるみる濃い染みが広がる。しかし、ナビは謝ることもせず、顔を真っ赤にして言った。

「信じらないっ！ ヒヨンスを疑うなんて。お前、どうかしてるよ」

「疑うことが商売なんで」

ミンホもハンカチでチノパンの染みを必死になって拭きながら、言い返す。

「遺体があがると同時に、姿を消した人物がいれば、マークするの

は当たり前でしょう?」

「ヒヨンスはそんなヤツじゃないよ!」

「何でそんなこと言い切れるんですか? 会って間もないのに」

「分かるったら、分かるのっ! 僕、人を見る目だけは確かだ」

「あなたみたいに、勘だけでモノを言っていられたら僕らだって苦
勞しないんですよ」

「そうやって、誰のことも信用できないなんて、可哀相なヤツだな
! だから僕、お前のこと、キライなんだよ」

ナビの言葉に、ミンホの顔から血の気が引いた。

スウツと細められた目が、冷たい光を宿してナビを真正面から見
据える。

「……キライで結構。僕は僕の仕事をしてるだけです。最初から、
あなたとは違うんだ」

「僕と違うって、どういう意味だよ?」

「雨になったら、姿を消す。遊びでやってるんじゃない」

ミンホは冷たく言い放つと、スツとそのまま席を立った。

「っな?! ちょっと、待てよっ! おいっ!」

ナビは慌てて立ち上がったが、ミンホは振り向きもせずにかフェ
テリアを出て行った。

チツチツチツチ……

安ホテルの時計は、先ほどから耳障りな音を立てて時を刻んでいる。

ナビはこのホテルの部屋に入った初日に、大騒ぎしながら確保した窓側のベッドの上で膝を抱えて座りながら、先ほどからずっと窓の外ばかりを見つめていた。

ふと、窓から見下ろしたホテルのロビーに、彼が先ほどから探していた人物に良く似た長身の影が入って行くのが見えた。

ここは二階だから、すぐに上がってくるのは分かっている。

「あいつ……やっつとっ！」

ナビは弾かれたように立ち上がり、部屋の外に飛び出した。

「遅いよっ！　こんな時間までどこ行って……」

ナビが叫び終わる前に、階段を上がってきた男と目が合う。

それは、ずいぶん年のいった男で、ナビが先ほどから待ちくたびれていた相手ではなかった。

男は怪訝な顔をしながらナビの脇を通り抜け、ナビたちの部屋の二つ先の部屋を開け、中に入って行った。

ナビは肩を落として、自分の部屋へと引き返す。

再び舞い戻った部屋はすっかり暗くなっており、日が暮れていくのにも気付かずに、自分が部屋の電気すら着けずに今まで過ごしていたことに気付いた。

時計の針は、もう夜の8時を回ろうとしていた。

昼間、カフェテリアでケンカ別れをしてから、ミンホがホテルに帰って来た形跡はない。一緒に大学への潜入捜査を開始してから、およそ二週間。今までただの一度も、ミンホはナビを一人この部屋に置いておくことなどなかった。

雨が降ったらペニーレインへ帰す　その約束があったから、ナビがホテルに戻らない日はあっても、その逆はなかった。

普通に授業を受けている日さえ、ミンホはいつも先にホテルに戻り、帰ってくるナビを待っていてくれた。

ブツブツ文句をいいながらも、ちゃんとナビの分のご飯も用意して。

だから、初めて経験するミンホのいない一人きりのホテルの部屋は、何だか暗く広く感じて、落ち着かなかった。

「……ミンホの、バカッ」

ナビは拳を握り締めてそう吐き出すと、ジーンズの後ろポケットに携帯と財布だけを押し込んで、部屋を飛び出した。

地下鉄の駅を二つ乗り継いで、大学の最寄り駅で降りる。

帰宅する学生たちと逆方向に、ナビは走った。

六限の授業もとづくに終わっている時間で、校内にほとんど人影はなかった。開いている教室や、学食の周囲を一つ一つ見て回ったが、サークルの仲間同士やら何やらの小さな集団があるだけで、ミンホの姿はどこにも見えなかった。

「……どこ行っちゃたんだよ」

大学校内にいと決まっているわけではないが、ミンホが他にいきそうな場所など、ナビには検討もつかなかった。

考えてみれば、ここ二週間ほど四六時中一緒に居たとは言え、ほんの一カ月前までは全くの知らない同士、赤の他人だったのだ。彼自身がどういう人間なのかすらちゃんと知りはしないのに、彼の行動範囲など分かる筈もなかった。

どうしようもなく中庭へ出ると同時に、背後でさっきまでナビがいた校舎の明かりが消えた。もう明かりが付いているのは、部室棟と図書館だけだった。

何となく、引き寄せられるように図書館へと足を向ける。

大学へ編入して来た初日、ミンホと図書館の前で交わした会話を思い出す。

『……ああ、いいですねえ』

『何が?』

『ここ。金曜日は一晩中開いてるみたいですよ』

ミンホは学生課でもらってきた利用案内に目を落としながら、本当に嬉しそうに笑った。

『一晩中図書館にいて、何するのさ?』

『何って? 本を読むに決まってるじゃないですか。運動会でもしますか?』

『違うよっ! そうじゃなくてさ、一晩中読んでの?』

『一晩でも、二晩でも、時間が許すなら、何日だって読み続けたいですよ』

その時は信じられなくて、宇宙人でも見るような感覚でミンホを見ていたと思う。だけど、黙っていれば知的な雰囲気をするミンホに、図書館は妙に似合うなと思っていたのも本当だった。悔しいから、口に出したりはしなかったけれど。

吹き抜ける生暖かい風が、湿気を含んでナビの短くなった髪をなぶる。

経験上、肌に当たる感触で、これは雨を連れてくる風だと分かる。だが今は、ミンホを見つけ出すことの方が先だった。

図書館の中は、花の金曜日ということも手伝ってか、人影はまばらで静かだった。

ナビは棚の端から顔を出し、順々にミンホの姿を探して歩きまわった。

しばらく歩き回って『文学・詩』の分類棚に辿り着いたとき、ナビは目当ての人物を見つけて、思わず棚の隅に姿を隠した。

そこには、脚立の上に腰を下ろして、手にした本を一心に読みふけるミンホの姿があった。

カモフラージュ用の野暮ったいメガネは、今はミンホのシャツの襟元に差し込まれている。

長い足を脚立の上に投げ出し、静かに本に目を落とすミンホの姿は、本当に完成された一枚の絵画のようだった。端正な横顔で静かに文字を追い、長い指先がゆっくりとページを繰っている。

ナビは声をかけるのも忘れて、思わずその姿に見入っていた。

「……………何してるんですか？」

不意に声をかけられて、ナビが飛び上がる。

「それで、隠れてるつもりですか？」

「え？ 嘘っ？ いつから気付いてた？」

動揺するナビに、ミンホは本から目を上げて、溜息をついた。

「さつきからずっとですよ。丸見えです。それじゃあ、尾行は出来ませんね」

「……………うう」

棚の影から出てきて、顔を赤くして俯くナビに、ミンホは言った。

「何しに来たんですか？」

「……………べ、別にっ！ お前を探しに来たわけじゃないからねっ！

本でも読もうと思ったたら、たまたまお前がいただけで……………」

「へえ」

ミンホは軽く鼻を鳴らして、脚立の上から窓の外を振り返った。

「でも、もう降りそうですよ。行ったらどうですか？」

ミンホの言葉に、ナビはTシャツの裾をギュッと拳で握り締めて黙ってしまった。

「……イジワル、言うなよ」

見る見るうちに顔を赤くして消え入りそうな声で文句を言うナビを見ているうちに、頑なだったミンホの心にも、チクリとした罪悪感が生まれた。

「……ごめんなさい」

ミンホも小さくそう呟くと、本を抱えたまま、静かに脚立を下りてきた。

目の前を通り過ぎるミンホの後を、ナビも遠慮がちについていく。ミンホは窓際の席に本を置いて、自分も腰を下ろした。その向かいに、ナビもチヨコンと腰掛ける。

「……何、読んでたの？」

気まづくなつたナビが先に声をかけた。ミンホは黙って、ナビにその本を差し出した。

「……ラングストン・ヒューズ詩集『驚異の野原』？」

詩集など、読んだこともなかった。

「お前、こつというのが好きなの？」
「僕が詩を好きだったら、可笑しいですか？」

ミンホは少し赤くなって、プイツと横を向いた。滅多に見せない照れた表情に、ナビは初めて、ミンホを少し可愛い奴だと思った。

「読んで聞かせてよ」

「ええ?!」

「だって、詩って読んで聞いて、音で楽しむものでしょ？」

露骨に嫌な顔をするミンホの前で頬杖をついて、ナビはイシシと歯を見せて笑った。

「ほら、早く読んで！」

「自分で読めばいいじゃないですか」

「読めない字があるもん」

ナビはミンホの手を叩いて『早く』と催促した。ミンホは頭を掻きながら、やがて諦めたのか、渋々本の表紙を開いた。

ゆうべ 僕は

とても奇妙な夢をみたが

夢でみたのは

全く意外なことばかり

あなたが僕といっしょにいなかった!

目をさまし
ふりかえって
壁にむいて
眠っている

あなたに さわってみた

よくも夢が

ウソを云えるものだ！

と 云ってはみたが

あなたが全くいなかったのだ！

(引用『驚異の野原』ラングストン・ヒューズ詩集 斉藤忠利訳)

静かにミンホの声に耳を傾けていたナビが、不意にポツリと言った。

「……哀しい詩だね」

「そうですね」

ミンホも頷き、本をパタンと閉じる。

「でも、この逆よりマシでしょう」

「逆？」

「子どもの頃、昼寝してる間に、母親に黙って買物に出掛けられたことがあるんです。寝かしつけられる時、絶対起きるまで側にい

るよって約束したのに。母は、僕が起きるまでに帰ってくるつもり
だったらいいんですが、運悪く車が渋滞に巻き込まれてね、目
を覚ましたら母がいない！ 家の中にたった一人で、外はだんだん
暗くなる。結局、母が帰ってくるまで大泣きして過ごしました」

キョトンとしてミンホの話を聞いていたナビは、不意にプツと吹
き出した。

「フ……アハハハハ！ ミンホって、すっごい甘えん坊だったんだね」

「な、何ですか？ いいじゃないですか、別に。子どもの頃の話ですよっ！」

ミンホが慌てれば慌てるほど、ナビの笑い声は大きくなる。周囲を気にしたミンホがシツと唇に手を当てると、ナビは腹を押さえて、必死に笑いの発作をおさめようと身体をピクピク震わせた。

「いたいけな子どもを、騙す大人が悪いんですよ」

悔し紛れにミンホが言うと、ようやく笑いの収まったナビが顔を上げた。

「まあね……だけど、騙したくて騙すわけじゃないよ。そうするしかないって、時もある」

「そんなイジワルしたことが？」

ミンホは反撃とばかりに片目を細めて、少し意地の悪い笑顔でナビの顔を覗き込んだ。

「ナビピョンは、仕掛ける側ですかね？ 小さい弟や妹がいたら、寝てる間に姿を消して、遠くからそつと様子を覗ってるとか」

いつものように小さな拳で軽く叩かれることくらい予想していたのに、ナビは意外な反応を見せた。

「……そうだね」

ほんの少し目を伏せて、寂しそうに微笑むナビの横顔に、ミンホの心臓がドクンツツと音を立てた。

まただ

普段、バカがつくくらい明るくうるさいこの人が、ごく稀に見せるこの表情。

それはいつも見間違いかと思うような一瞬の表情で、すぐに元の屈託のない笑顔に戻るが、そのギャップが、いつまでも胸に残って何とも言えないやりきれない気分させられる。

「……ねえ、他の詩も読んでよ。僕、聞いているから」

ナビは頬杖をついたまま、ニコニコとミンホにねだる。もう、先ほどの寂しげな表情は消えている。

「僕の朗読は、高いですよ？」

悔しいから憎まれ口で返してやっても、結局最終的には、自分はナビのリクエストに答えてやるのだ、とミンホには分かっていた。この人が少しでも、いつもバカな顔で笑っているための役に立てるのなら。

ナビは目を閉じて、静かにミンホの読む詩の世界に耳をすませていた。

「……ヒョン？」

もう何ページ読んだだろう。

不意にミンホが顔を上げてナビを見ると、ナビは頬杖をついた姿勢のまま、静かに寝息を立てていた。

「まったく、人に読ませるだけ読ませといて」

ミンホが苦笑してナビと向き合った瞬間、ナビの肘がガクンッと机から外れた。

「うわっ！」

驚いたのはミンホの方だった。

考えるより先に身体が動き、大きく頭から机に突っ伏すナビの顔と机の間に、自分の腕を差し入れた。

危つく机に顔面衝突するところだったナビは、ミンホの腕に支えられ、またスヤスヤと寝息を立て始めた。

「この状況でも起きないって、どんだけですか？」

ミンホはまだドキドキ鳴る心臓を押さえながら、無邪気な顔をして眠るナビを見た。

ナビを支えた腕に突っ伏すように自分の顎を預けて、同じ平面からナビの寝顔を見守る。眠ると、余計に幼さが増すような気がする。やはり、とても年上とは思えない。

赤ちゃん　と言ったら、きっとこの人はものすごく怒るのだからうけれど。

その時、不意に窓を叩く雨の音が聞こえてミンホが視線を上げる。案の定、今夜も振り出した

「ヒヨン……降ってきましたよ」

クイクイツと指先でナビの柔らかい頬を触るが、ナビが起きる気配はない。

「ヒョン」

何度か頬を触って、ミンホは動きを止めた。

「……今日は、いいですか？」

雨になると、いつもミンホに背を向け走って行ってしまふナビ。ホテルで一人窓の外を見上げながら、雨が止み、ナビが帰ってくるのを待つ自分。

ナビは自分のような警官ではなく、雨の日は必ず帰すと約束している以上、自分に引き止める権利はないのだ。

だが、飛ぶように去っていくナビをいつも見送るのは、正直気分がいいものではなかった。

加えてそこに『キライ』と追い討ちをかけられたものだから、ガラにもなく無性に腹が立ってしまった。

「……僕も眠っていて、雨に気付きませんでした」

ミンホは小さくそう呟くと、腕に乗ったナビの温もりを感じながら、自分も静かに目を閉じた。

まどろみの中で、不意に誰かの歌声が聞こえてきた。

細く、小さく、囁くように。

明るいメロディラインとは裏腹に、少し掠れたその声は、泣いて
いるような哀切な響きを帯びていた。

どこかで聞いた歌だ

そう思いながら、ミンホは眠りの底へと落ちていた。

ソウルを南北に流れる漢江^{ハンガン}は、ソウルに住む人々の水源となっているだけでなく、夜になればライトアップされた美しい姿を披露し、海外から訪れる旅行者に対して、重要な観光地としての役割を果たしている。

商業や観光、生活の拠点としての美しく豊かな姿が表の顔ならば、その清流の下を流れる、澗の浮いた汚水を湛えた姿も裏の顔として持ち合わせている。

漢江の川岸に並び立つ貨物倉庫の影で、男は先ほどからイライラと煙草に火を点けては消しを繰り返し、待ち合わせ場所に現れるはずの男を待っていた。男の足元には、既に吸殻の山が築かれている。

「悪い、遅くなつたな」

その時ようやく、長い影を従えた待ち人が現れた。煙草を啜えていた男は怒鳴り倒したい気持ちグツと抑え、早くどこからも姿を見られない自分の側へ来るように手招きした。

「約束の時間、一時間以上過ぎてるぞっ！」

「そんなに、怒るなよ。オベンキョして遅くなったのよ。学生の本分は勉強だろ？」

「当直を抜け出して来てるんだぞっ！ 戻るのが遅かったら怪しまれるだろっ」

悪びれる様子もない男の襟首を掴み、煙草の男は声を荒げた。

「それより、ハイ。例のもの、出してよ」

男はおどけた調子で手を差し出す。煙草の男は忌々しげに舌打ちして、男の手の上にくつもの紙包みが入ったビニール袋を置いた。

「いつもどうも」

男はヒヒヒツと嫌な笑いを零して、捲りあげたＴシャツの中、デニムのウエストに無理やり袋を捻じ込んだ。

「いい加減にしておけよ、ガンホ。死人まで出したんじゃ、もう庇いきれない」

「薬物反応出なかったんだろ？」

不適に笑う男に、煙草の男はついに激昂して言った。

「出なかったんじゃないっ！ 出さなかったんだ！ いつまでも、こんなこと続けられないからな」

「はいはい、用心しますよ。ったく、相変わらず小心者だな」

そう言うと、男はケラケラ笑いながら、煙草の男の胸を叩いた。

*

「……おかしい」

「何が？」

「うわっ！……！」

「ちよっと、あんた何やってるのよっ！」

チヨルスとクムジャの悲鳴が同時に狭い資料室の中で交錯する。朝からこの部屋に籠もりっぱなしだったチヨルスを心配したクムジャが、コーヒーを持って現れ、背後から覗き込んだ瞬間、飛び上がったチヨルスの肩とコーヒーを持ったクムジャの右手がぶつかった。

「熱っ！ 姉さん、熱いよっ！」

「あんたが突然動くのが悪いのよ」

「いるなら、いるって言うってくださいよ。突然背後に回りこまれたら、怖いじゃないですかっ！」

ギヤーギヤー言いながら、チヨルスはクムジャが差し出したおしぼりで、コーヒーで汚れてしまったワイシャツを拭いた。

「朝から一体、何調べてるの？」

ようやく落ち着いて、チヨルスが叩いていたパソコン画面をクムジャが覗き込む。

「ああ……ソん先輩と上げたヤマを、もう一度洗い直してるんですよ。一ヶ月前の、あの一斉摘発の記録ね」

「おかしって、何のこと？」

チヨルスはマウスをクリックし、クムジャの前に新たな画面を展開させた。

「……ここ。摘発で押収した、ヤクのグラム数。こんなモンじゃなかったはずだ」

クムジヤはチヨルスの横に椅子を引つ張ってきて腰を下ろし、チヨルスの話に真剣に耳を傾ける。

「俺が先輩と、廃講堂の乱交パーティーに乗り込んだ時、ざっと数えても二十人以上の学生がいた。そんな中でも、しょっ引いた時に自分でヤクを持ってた奴は、半分以上だ。それなのに、押収したことになるヤクは、俺と先輩の目算の三分の一もない。残りは、どこに消えちまった？」

クムジヤも画面上のデータの数値に目を通しながら、厳しい表情でチヨルスを見る。

「俺たちだけじゃない。あの夜摘発に参加した他のチームが上げてきたヤクの数値だつて、おかしなもんばかりだ」

チヨルスは無意識に親指の爪を噛みながら、パソコン画面を睨みつける。

「押収した証拠品を好きにできるなんて、内部の人間だけだ」

「ちよと、チヨルス！ 滅多なこと言わないでよ。誰に聞かれてるかも分からないのに」

クムジヤは慌てて、声を潜めながらチヨルスの胸を叩く。

「だから、人目を忍んで慎重にやってるんです。怪しい人間を絞り込むためにね」

「怪しい人間？」

チヨルスはマウスをクリックして、ほぼ白紙に近いページを表示させた。

「今回の摘発で、唯一シロだった。一人のヤク中も洗い出せなかった大学」

「……あ……もしかして、明慶大学？」

恐る恐る尋ねるクムジャに、チヨルスが頷く。

「過去にも一度だけ、明慶に同じように捜査が入ってる。それを見つけて出すのに苦労しましたよ」

チヨルスが噛んでいた爪をようやく唇から離して、隣りに置いた埃塗れのデスクトップパソコンのキーを押す。ウィーンと低い唸り声を上げた旧式のパソコンは、セーブ状態の暗い画面から静かに目を覚ました。

「九年前、明慶に在学してた院生の変死体が漢江の河口で発見された。だけど、そもそも死後の遺体の損傷が激しすぎて、まともな検視は行えなかった。それなのに、死因は持病によって起こった心臓麻痺の末、河口に転落しての事故死として発表されてる。秘密裏に入った捜査でも、明慶の学生間での薬物使用はシロ」

クムジャがゴクリと唾を飲む。

「検視結果を記した書類も、どこにも残ってない。保存年限が過ぎているにも関わらず、です」

クムジャに向かって、チヨルスはゆっくりと頷いて見せる。

「そう。最近、よく似た事件が起きましたよね」

チヨルスはデスクトップの画面に指を突きつけた。

「当時行われた捜査の、担当捜査官の名前が載ってる」

そして、続けてクムジャの前で開きっぱなしにしていたノートパソコンのキーボードを忙しなくクリックして、乱暴にデスクトップの側に、手にしたノート画面を並べて見せた。

「今回の、一斉摘発で明慶を担当した捜査官」

チヨルスの目がギラリと光り、クムジャを捕らえる。

「両方に入ってるのは、ホン・サンギョ捜査官だけだ」

次の言葉を紡げずにいるクムジャの隣りで、チヨルスは厳しい顔でパソコン画面を睨みつけていた。

終業のベルとともに校舎から吐き出されて来た学生で、中庭はこつた返していた。

ナビはミンホとの待ち合わせ場所であるいつものカフェテリアに向かつて歩いて行く途中で、不意に見覚えのあるヒヨロツと細長い華奢な背中を見つけた。

「ヒヨンスッ！」

ナビは叫んで、その背中を追った。

「ヒヨンスッ！ 待ってよ、何で逃げるの？」

ナビは息を切らしながら必死で追いかけて、その手首を掴んだ。

「……一週間も休んで、一体どうしたんだよ？ 心配したんだよ」「ちよつと……忙しかったんだ」

ヒヨンスは故意にナビから目を逸らす。ちよつと見ない間に、随分顔色も悪くなり、やつれてしまったようだった。

「具合悪そうだよ？ 大丈夫なの？」

「……ナビ、ごめん。僕、急がなきゃいけないから」

そう言って、ナビの腕を振りほどこうともがく。

その時だった。
ヒヨンスが不意に動きを止めた。

「ユリッ！」

ナビの肩越しに見つけたその人影に向かって、ヒヨンスは叫んだ。

「え？ ちょっと、ヒヨンス？」

ナビが止める間もなく、ヒヨンスは人ごみを掻き分け、ユリの元へ走り出した。

「ユリッ！ 家に帰る約束だろ？ あの時、ちゃんと約束しただろ？ まだ、ガンホのところへ？」

「ちよっ！ 離してよっ！ みんな見てるでしょ。みっともないわね」

ヒヨンスに腕を掴まれたユリは、金切り声を上げながら身を擦る。ヒヨンスはユリの腕を掴み、湿度も高くだいぶ蒸し暑くなっているというのに、長袖を着込んだユリの腕を無理やり捲くった。

「……これ」

「やめてよっ！」

ユリは叫んで、ヒヨンスの腕を振りほどくと、素早く袖を下ろした。

「あの時、約束したはずだよ。もう止めるって。家にもちゃんと帰ってくるって」

ヒヨンスはユリの肩を掴み、声を落として言った。

「……………だから、俺……………」

「よお、どうした？ 親友」

その時、ガンホが人ごみの中から顔を出し、ヒヨンスの手からユリを奪った。

「ちゃんと学校には来なきゃダメだぜ。なあ？」

ガンホはヒヨンスの肩をドスンッと拳で一つ強く殴ると、ユリの背中を抱いて背を向けた。

「ヒヨンス……………大丈夫？」

駆け寄ってきたナビに、ヒヨンスは力なく笑って見せた。

「ごめん、ナビ。俺、もう行くね」

「ヒヨンスッ！」

そう言うと、ヒヨンスは早足に人ごみの中へと消えていった。

断末魔の叫びとは、こういった声のことを言うのだろうか。
何度聞いても慣れることがない。

聞いているこちらの方が気が変になりそうな叫び声に顔を歪めながら、チヨルスは廃材置き場の腐った床を踏み抜かないように注意

しつつ、ジェビンに持たされた弁当をドアの前に置いた。

さっさとこの場から逃げ出そうとクルリと方向転換した時、不意に目の前のドアが開いて、中から汗でドロドロになった上半身裸のオーサーが顔を出した。

「…………オマワリさん、待って…………水」

そう言うと同時に、チヨルスの腕の中に倒れこんで来る。

「おおっ…………おい、大丈夫かよ？」

慌てて支えたチヨルスの腕の中で、オーサーは差し出されたミネラルウォーターをゴクゴクと一気に飲み干した。

「…………何か、尋常じゃないくらい消耗してないか？」

水を飲み干しようやく一息ついたオーサーが、口元を手の甲で拭いながら皮肉気に笑う。

「そりゃ、消耗もするでしょ。夢のリゾート地、チエジユト 濟州島から帰って来た途端に、休む間もなく、あの麗しのオーナー様にこんなにかき使われてるんだから」

「お前、それを言うなら俺の方がよっぽど痛い目に合ってるんだぞ。お前がトンスラしてる間に、俺がどれだけジェビンに…………」

言いながら、ここ二週間ばかりの『ペニーレイン』において、ジエビンから受けた地獄のシゴキの数々を思い出し、チヨルスは思わず身震いした。

「悪かったって言ってるでしょ。だから、ちゃんとお土産も買って

来たじゃない」

「あんな趣味の悪いアロハ、どこで着ろってんだ？」

「えー？ オマワリさんの普段着よりよっぽどいい趣味だと思うんだけどお」

不服そうに口を尖らせるオーサーを、一瞬本気で殴ってやるうかと拳を振り上げかけたが、減らず口を叩きながら未だ肩で息をしているオーサーを見て、チヨルスはグツと涙を呑んだ。

「ねえオマワリさん、ちょっとこれ見てよ」

オーサーはポケットから、小さな紙包みを取り出してチヨルスの前で床に広げた。

「今、あそこの部屋で寝てる子が持ってたモンなんだけど、分かる？」

そう言っつて、親指と人差し指で白くザラザラした粉を掬って、その粉末を空中に散らす。

「混ぜモンの割合が、増えてんの。最初のヤク中の学生が持ってたモンより、更に混合物増やしてカサを増して、量産してるんだろっかな」

「……誰が？」

チヨルスの問いに、オーサーはきょとんとチヨルスを見つめ返す。そして、ニツコリと微笑んだ。

「誰って……それは、オマワリさんが一番良く知ってるんじゃない？」

チヨルスは思わず舌打ちする。

見透かしてやがる。

そう思った。

「その、オマワリさんってのいい加減やめろ」

チヨルスが不機嫌さ丸出しでそう言うと、オーサーは可笑しそうにクスクス笑った。

「はい。じゃあ、チヨルス？ これでいい？」

「本当に、食えない奴だね。お前って」

チヨルスが苦々しい顔をすればするほど、オーサーは楽しげにいつまでも笑っていた。

「13号、面会だ。出る」

拘置所の床と同じだけの冷たく固い声でそう呼ばれ、お情け程度の背の低い目隠ししかない、剥き出しになったトイレの横にうずくまっていたコ・ジョンヒョンは、力なく顔を上げた。

面会？

会いに来るような親もない。

友人と呼べる者は皆ヤクザ者ばかりで、頼まれたって警察に出向くような奴らではない。

一体誰が？ 不審に思いながらも、二度目は更に冷たさを増した看守の声に促され、ジョンヒョンはノロノロと腰を上げた。

「15分だ。時間になったら、合図するからな」

ここまで移送される間にはめられた手錠の鍵を外しながら、看守は素っ気なくそう告げる。

肩を押されて初めて入った面会室では、透明ガラスの向こうに、野球帽を目深に被った見知らぬ男が立っていた。

灰色の囚人服を着たまま、ゆっくりとガラス一枚を隔てた男の元に近づいていくと、ジョンヒョンは改めて首を傾げた。

「……………あの、どこかでお会いしましたか？」

室内だと言うのに、野球帽に合わせて大きなサングラスまでかけた男の表情は良く見え、何の目的があつて、こんなところまで自分に会いに来たのかが分からなかった。

「座れ」

低い声で命じられ、ここ何日かの拘置所暮らしで、自分でも情けないと思いつつすっかり板に付いてしまった従順な服従姿勢で、ジョンヒョンはガラスの前の椅子に腰を下ろした。

「……あの」

「俺が、分からないか？」

サングラスをほんの少しだけずらすと、男はその影からジョンヒョンに向かって、鋭い一瞥をくれる。

「……っあー！」

思わず声を上げそうになるジョンヒョンを威嚇するように、男はガラス戸を拳でドンツと叩いた。

「どうした?!」

部屋の外から看守が叫ぶ。

「何でもありません。僕が、ぶつかっただけです」

慌ててそう叫ぶと、ジョンヒョンは改めて男に向き合った。

「ペク・ギョウン。どうして?」

ガラスの向こうでは、苛立たしげに唇を噛みながら、ジョンヒョンを睨みつけているギョウンの顔があった。

「先生からの伝言だ」

ギョウンは声を潜めて、ガラスに顔を寄せた。人差し指をクイツと曲げて、ジョンヒョンにも顔を近付けるように無言で指示を出す。

「……先生つて、『ペニー・レイン』のオーサー・リー？」

「“さん”を付けるよ。礼儀知らずだな」

再びギョウンに怒鳴られ、ジョンヒョンは縮こまる。

「もうすぐ、ビックイイベントが起こって、この事件は解決する。そしたら真っ直ぐ済州島チエジユドへ行くといい。もしまだあの娘が、君のお姫様だと思うなら」だよ」

オーサーの甘い口調を無粋な棒読みでレコーダーの様に再生し終わると、ギョウンはさっさと席を立った。

「ま、待って！ ビックイイベントって何？ ジスクは今、済州島チエジユドにいるの？」

「知るか！ 言っただろ。俺は先生の言葉を伝えに来ただけだ」

ギョウンにはべもなくそう言い放つと、立ち上がりガラスに縋るジョンヒョンに背を向ける。

だが、ふと思いついて振り返った。

「看守、呼ばないのか？」

「え？」

聞かれている意味が分からなくて、ジョンヒョンはキョトンとした顔でギョウンを見つめる。

「俺はお尋ね者なんだぜ。お前を置いて、さつさと逃げた。なのにマヌケにも、自分からノコノコの監獄に来てやったんだ。チャンスだろ？ ドアの向こうの看守に言ってやれよ。『早く捕まえる』って」

小鼻を膨らませ、自棄になったようにそう告げるギョウンに、ジョンヒョンは哀しげに首を横に振った。

「そんなこと、しないよ」

「何だよ？」

「……君まで捕まったら、完全にジスクへ繋がる道が絶たれるから」

ジョンヒョンの言葉に、ギョウンは盛大に舌打ちした。

(あの坊やを見てられなかったんでしょ？ 今の自分を見てるみたいで、イライラして苛めたくなっただろ？)

チエジユド
濟州島での、オーサーの言葉を思い出す。

悔しいけれど、凶星だった。

愚鈍なほどの一途さと執着は、目を背けたかったギョウンの内面そのものだった。

「お前の女でもないのに」

「……関係ないよ。僕が好きで、ジスクを助けて、それだけだから」

「マヌケ野郎」

そう吐き捨てて、ギョウンは野球帽を被り直すと、今度こそ振り向かずに面会室を出て行った。

俺があの時、今のあいつのようにミラを想っていたら、ミラは死なずに済んだのか？

“俺の女”でなくなったミラを恨んで酒に溺れていたあの時に、つまらないプライドなど捨てて、ただミラを助けるためだけに行動していたら。

あいつはガンホから離れて、クスリで命を落とすこともなかったのか。

「チクシヨウツ！」

終わりの無い自問は自分自身へのやりきれない悔恨の情に変わり、ギョウンは思い切り拘置所の床を蹴った。

廊下ですれ違った面会人の老夫婦が、そんなギョウンを見てビクッと身を縮める。

顔が割れているのだから、拘置所内で目立つ真似はするな

出発間にそう釘をさされたオーサーの言葉を思い出し、ギョウンは老夫婦から顔を背けて、足早に拘置所を後にした。

「焼酎と、チャンジャ塩辛」

「俺にも、同じのね」

立ち並ぶ屋台の暖簾を捲って腰を下ろした中年男の隣りに、チヨルスは有無を言わず滑り込んだ。
ギョツとして振り返った男に、チヨルスはニッコリと微笑んで見せた。

「お疲れ様です、ホン・サンギョ警査」

「お前……」

「捜査課の、チャン・チヨルス警査です」

そう言っつて、敬礼のポーズを取る。

「……一緒しても？」

もう片足は椅子の上に乗せていて、断らせない体勢だったが、慇懃無礼にそう申し出る。

「……ああ、別に。構わんよ」

サンギョは警戒しながらも、強硬に断る理由もないので、チヨルスの着席を許した。

「この前は、お疲れ様でした」
「この前？」

チヨルスは目の前に出された焼酎のビンを掴むと、空になったサンギョのグラスに勝手に注ぎ、次いで自分のグラスも満たした。その拳勺に、まだ手に取ってもいないサンギョのグラスにぶつけて、勝手に乾杯の音頭を取る。

「くはーっ！ 美味いつ！」

喉を焼きながら落ちていく度数の高い酒に唸り声を上げながら、心底美味そうに目をつぶる。

「重労働した後は、焼酎に限りますよね。この前の一斉捜査が上がった後の酒も、美味かったなあ」

ねえ？ と、同意を求めるチヨルスの目を、サンギョは初めて警戒の色を込めて見つめ返した。

「大変でしたよ。俺らが入った聖智大学はね、お上品なオツムからは想像できないくらい、破廉恥にトンでる学生が多くてね。半裸のアホどもが、拘置所の中に入りきらないくらいだったんですから。それに引き換え……」

「はい、お待ち！」

話の途中で頼んでいたツマミの皿が出されると、チヨルスは歓声を上げた。

「俺、ここのチャンジャ大好物なんですよ。いい鱈使ってるのが分かるでしょ？このコリコリの歯ごたえ、堪えないなあ。先輩も、ほ

「ら、どうぞ」

「……ああ」

美味そうにツマミを頬張っては、早いペースで焼酎をグイグイと空けていく。

「で、何の話でしたっけ？」

「拘置所に入りきららない逮捕者の話」

「ああ、そうそう」

チヨルスはパシンと自分の額を打って、舌を出した。

「話した傍から、すぐ忘れていけねえや。学生のオツムを云々言えませんね。それに比べて、先輩が潜入した明慶は、さすがですよ。唯一、シロだったんですから。先輩にしてみりや、とんだ無駄足でしたな」

「……医者と警察は、ヒマなのに越したことはないって、昔から言うだろ」

「違うんです」

チヨルスは豪快に笑って、またサンギョのグラスに自分のグラスをぶつけた。

「じゃあ、先輩はかなりツイてる方ですね」

「何でだよ？」

「だって、先輩……九年前も、入ってますよね？ 明慶に」

その途端、サンギョの目の色が変わった。

「……お前、何でそんなこと」

「俺、捜査課の人間ですよ？」

チヨルスは、サンギョの肩を馴れ馴れしく抱いて、顔を近づけた。

「……いえ、なに。たまたまですよ。たまたま昔の資料洗ってたら、あんたの名前見つけましてね。ほお、同じ警察官の中にも、俺みたいな貧乏くじを引く奴と、捜査するところと、全部クリーンなラッキーガイもいるんだと、世の不条理を嘆いてみたわけですよ」

立ち上がろうとするサンギョの肩を、チヨルスは無言で強く押さえつける。

「俺、本当はあの捜査の後、焼酎なんか飲んじやいないんですよ。捕まえたガキの一人が、俺の上官を刺しやがりましたね。署内は騒然だったんです。せつかく明慶に潜入しても、一人もアゲる学生がいなかった先輩は、あの後、どうしました？ 手が回らない俺らの代わりに、アゲた証拠品のヤクの処理は、あんたたちがやってくださいですね」

チヨルスは不意に、サンギョの肩に回していた手を、そのままサンギョの胸元に滑らせた。

「何するんだ、お前っ！」

顔を真っ赤にして慌てるサンギョに構わず、チヨルスはサンギョの胸ポケットから束になったウオン紙幣を引きずりだした。

「こんなところでも、差がつくんだから嫌になっちまうなあ」

チヨルスはワザとらしく溜息をついて、サンギョの肩を抱いたま

ま紙幣を数え始めた。

「先輩は、羽振り良さそうですね。俺みたいなボンクラと違って、真面目にお仕事してる証拠なんでしょうねえ。先輩にしか出来ない大きな仕事をね」

「お前、一体、何が言いたい？」

イライラし始めてきたサンギョが、チヨルスを睨みつける。

「教えてくださいよ、先輩。俺だって、重労働安月給に、いい加減嫌気が差してるんだ」

サンギョの目が血走るほどに、チヨルスの笑みは深くなる。

「……例えば、そうだな。書類の改ざんとか？ 情報の漏洩とか？」
「っな！ お前……」

ガタツと音を立てて立ち上がったサンギョの前で、チヨルスはゲラゲラと笑い出した。

「冗談ですよ、先輩！ 酔っ払いの戯言です。本気にしましたあ？」
「不愉快だっ！ 帰るっ！」

サンギョはそう叫ぶと、屋台の椅子を蹴り飛ばして夜の闇の中に消えた。相当狼狽したのか、チヨルスが先ほど胸ポケットから拝借したウォン紙幣を、そっくりそのままテーブルの上に残していた。

「親父さん、お勘定ね」

チヨルスはそこから一枚抜き取ると、涼しい顔で屋台のテープ

ルの上にそれを置いた。

*

暗い路地裏に飛び込んだサンギヨは、落ち着きなく周囲をキョロキョロと見回すと、携帯電話を取り出した。

震える手で番号を押す。

長々と鳴り続ける呼び出し音に、苛立ちながら唇を噛む。

『……………何だ？』

ようやく応答した電話の向こうの相手に、サンギヨは噛み付くように叫んだ。

「追われてるんだっ！ 狂犬に」
『狂犬？』

一瞬、クスリと笑いを含んだ声に、サンギヨはカツとなった。

「捜査課のチャン・チョルスだよっ！ 分かってるだろ?!」

だが、上擦るサンギヨの声とは違い、電話の相手は冷静だった。

『落ち着け。何かあった？』

「カマかけてきやがったんだ。絶対、感じてる。俺たちのこと…」

『俺たち……………ね』

電話の声は、今度はハッキリと嘲笑の色を滲ませて呟いた。

『俺とお前の関係まで、気付いてるとは思えないが』

「ふざけるなよっ！俺は、捨て駒か？」

『まさか！俺とお前は運命共同体だよ。昔から……決まってるじゃないか』

電話の相手は、大げさに驚いてみせる。

「明慶だけに捜査情報流したことも、あいつは掴んでるんだ」

『そうかな？ さつき自分で言ったじゃないか。カマかけてきてるつて。それだけだよ。証拠なんか掴んでいない。うるたえるお前の反応を見ていただけだ』

熱くなるサンギヨに伝えて、電話の相手は今度はなだめるような猫撫で声を出した。

『心配しなくても、あいつは何も出来やしない。それより、お前にはまだ大きな仕事が残ってるだろう？』

携帯を持つサンギヨの肩がピクリと動く。

それをどこかで見ているかのように、電話の声は満足そうに笑って言った。

『期待してるよ。パーティが楽しみだ』

大学の構内は、いよいよ三日後に迫った学内ダンスパーティーの準備で活気づいている。ここ数日は、課業後になると、大看板の制作に取り掛かる学生が金槌を振り下ろす音や、パーティーの合間に余興として披露される学生バンドの音楽などが、暗くなるまで続いていた。

ナビは中庭のベンチに座って、慌しく働く学生たちの姿を眺めていた。

「ナビビヨン？」

その時、ナビの前を通り過ぎて行った長身の男が、そのまま後ろ向きで戻ってきた。

「……何だ、ミンホか」

ナビはどこか虚ろな目をしたまま、その男を見上げた。

「ダサすぎて、気付かなかった」

無表情で見つめる先には、最近ではすっかり『野暮ったさ』が板に着き、もはや美男子の面影を完全に捨て去ったミンホが立っていた。

今日の彼は、緑色の大きなナップザックを背負い、よれよれのTシャツにカーキ色のハーフパンツ、足元は素足にビーチサンダル、

そしていつもかけている牛乳瓶の底メガネという、いでたちだった。

「仕方ないでしょ。僕は血を見たくありませんから」

「血？」

キョトンとするナビに、ミンホは自分の背後を親指で差し示した。

「あれですよ、あれ」

それは、製作途中の大看板だった。バンダナで髪をまとめた女子学生が、手に大きな刷毛を持ち、黒いペンキで文字を入れている。

ラストダンスは、あなたと

文字は、そう読めた。

「この学校に伝わるジंकスらしいですよ。ラストダンスで踊ったカップルは、結ばれるって言う……」

そう言えば、以前ヒョンスも同じようなことを言っていた気がする。

「それが何で、血を見ることになるわけ？」

察しの悪いナビに、ミンホは深い溜息をつく。

「ラストダンスって、一曲ですよね？」

「ラストって言うぐらいだからね」

何を当然なことをと、ナビは呆れた顔をする。

「一曲つてことは、相手は一人しか選ばないってことですよね」

「まあ、そうだよな」

「選ばれる者、選ばれざる者。争いは、避けられません」

ミンホが再び、深い溜息を吐いたところで、ようやくナビは気がついた。

しかし、答えが分かって合点した顔はほんの一瞬で、すぐにムスツと頬を膨らませた。

「……フンだ。モテる男は辛いね」

「何ですか、ナビヒョン。元気のない原因はそれですか？ いつもバカみたいにうるさくて、百メートル先からでも嫌でも目に入る自己主張の強いあなたが、さっきは完全に気配を消してポーツとしてたから、思わず気付かずに通り過ぎてしまいましたけど。具合でも悪いのかと思ったら、相手がいなくて拗ねてたんですね」

「っな?! 違うよっ!」

訳知り顔のミンホに、ナビは顔を真っ赤にして抵抗する。

「ちょっと考え事してただけだよ。ダンスパーティーのことなんか、忘れてたよ」

「考え事？」

黙りこんでいてもその表情から、ミンホにはナビの考えていることが手に取るように分かった。

「……ヒョンスのことですね？」

ナビは曖昧に首を傾げながら、ブラブラとベンチに腰掛けた足を

揺らした。

「噂をすれば、ですよ」

ミンホはそう言って、ナビの背後へ顎をしゃくった。

「さっきのあなた以上に、浮かない顔ですね」

ナビが顔を上げて振り向くと、そこにはこの中庭で別れて以来、久しぶりに見るヒヨンスの姿があった。

「ヒヨンスッ！」

ナビは立ち上がり、背中を丸めて歩くヒヨンスの元へ走り出した

「……………ナビ」

ヒヨンスはナビたちに気がつくのと、気まずそうな顔をして一瞬逃げる体勢を取ったが、駆け寄った勢いそのまま抱きつくように肩を押さえるナビと、その後を追ってきたミンホにさりげなく退路を絶たれ、その場に留まらざるを得なかった。

「ねえ、ヒヨンス。本当に大丈夫なの？」

「……………何が？」

「この前学校に来た時から、何か変だよ？ ユリとはあれからちゃんと話せたの？」

真正面から自分を見据える真っ直ぐなナビの目に、ヒヨンスは居心地悪そうに顔を背けた。

「何か悩んでることがあるなら、話してよ。力になれるかもしれない」

「……何も、ないよ」

そう言っつて逸らした視線の先には、ミンホの目があった。

「恋の悩みですかね？」

ミンホの視線には、ナビとは違い、見透かすような冷たさがあった。

「あのお嬢さんに関わること……そうですよね？」

本当に言いたいことは別にあると、暗に仄めかされているのがヒヨンスには分かった。

「……何、言っつて……」

どう逃れようか、そんなことに頭を巡らせ始めた時、横から場違いな声が降ってきた。

「なあんだ！　そう言っつことか」

素っ頓狂な明るさを含んだ声に、ヒヨンスと一緒にミンホも啞然としてナビを振り返る。

「ユリをラストダンスに誘えなくて、しよげてるんだ。そうでしょ？」

「へ？」

「はあ?!」

ナビの言葉に、ほぼ同時に二人は呆れた声をあげた。

「水臭いな。言ってくれば、もっと早く協力したのに。だって、ジंकウスなんでしょ？ ラストダンスで踊ったカツプルは結ばれるって。こんなチャンス逃す手はないよ！ ガンホからユリを取り返さなくちゃ」

呆気にとられている二人にはお構い無しに、ナビは勝手に乗り気になって、黒目勝ちな目をキラキラと輝かせる。

「ね？ お前もそう思うだろ。ミンホ」

「え？ ああ……まあ」

同意を求められたミンホが、勢いに押され、顔を引き攣らせながらも渋々頷く。

「僕に任せて、ヒヨンス。絶対ユリが、君とダンスを踊りたくなるようにしてあげるから」

「え？ あの……えっと……」

「ごうしちゃいられない。じゃあね、ヒヨンス。期待して待ってて」

ナビはそう言い残すと、クルリと背を向けて全速力で駆け出して行った。

「ちよつとっ！ ナビヒヨンッ！」

慌てたミンホが追いかけてようとした時には、既にナビの背中は米粒大まで小さく遠ざかっていた。

「すみません、僕もこれで。あの人、放っておくと何をしでかすか分からないんで」

ずり落ちてくる眼鏡をクイツと引き上げて、ミンホも背中の上で、プザツクを揺らしながら駆け出していく。

嵐のような二人を、残された当のヒョンスだけが、ただ呆然と見送っていた。

肩で息をしながら、ミンホはようやくホテルの部屋の前に辿り着いた。

目の前で地下鉄の電車のドアが閉まり、無常にもあと一步のところでナビに追いつけなかった。

次の電車が来るなり飛び乗って、駅から全速力でホテルまで走ってせいで、目の前が酸欠でチカチカしている。

よろめきながら部屋のドアノブに手をかけた途端、思い切り戸が内側に開いて、バランスを崩したミンホは部屋の中へ倒れこんだ。

「あれ？ 何だ、お前も帰ってたの？」

足元に転がるミンホを見下ろして、ナビはキョトンとした表情を浮かべる。

華奢なその両肩には、どこへ旅行に行くのか？ と問いたくなるような大ぶりのシヨルダーバックが下がっている。

「……帰ってたの？ じゃないですよ……あなた、今度は一体何をしでかす気なんですか？」

息も絶え絶えになりながら、ミンホはナビを見上げる。

「ふふふ、ちょっとね。恋のキューピットってヤツ？」

手をグーの形にして口元に当て、肩を竦めるナビは可愛らしくは

あつたが、ミンホには、浅はかさ加減に関しては自分の想像の域をはるかに超えたこの男が、その小さなオツムで何を企んでいるのか、恐ろしいばかりだった。

「ねえ、ユリの取り巻きたちが入り浸ってるクラブの名前って、“ソメチメス”でいいの？」

「は？」

理解の範疇を超えすぎて、とうとう宇宙語までしゃべり始めたのか、ミンホは一瞬本気でそう思った。

「ほら、これ。“ソメチメス”」

そう言っつて、幼く拙い字で書き写された英字のメモを、倒れているミンホの目の前に晒す。

そこには、“sometimes”と書かれていた。

「“サムタイムス”でしょ！　あなた、こんな簡単な英語も読めないんですか！？」

心底衝撃を受けて叫ぶと、ナビは耳の後ろを掻いて聞こえないフリをした。

「ちよつと、ナビヒョン。あなた、どこでこの店の名前を？　さては、僕の調査資料、勝手に読みましたね？」

「さあてと、そろそろ行かないとなあ」

「ちよつと待て！」

「じゃね、ミンホ。今夜は遅くなるけど、心配しないで」

スチャツと敬礼のポーズを取るなり、猫のようにドアの隙間をす

り抜けていく。咄嗟に、目の前にあった細いジーンズの足を掴もうと伸ばしたミンホの腕が、虚しく空を搔いた。

「ナビヒョンッ！」

ホテルの廊下に、ミンホの悲痛な叫びがこだました。

夜更けと共に盛り上がりを見せる地下のクラブの入り口に立った黒服は、近づいてくる異様ないでたちの女に、職務を忘れて思わずアングリと口を開けた。

戦闘服のような、厚い肩パットの入った濃いピンクのド派手なボデイコンスーツを着込み、クネクネと腰を振ってシナをつくりながら歩いてくる。

肩まで真っ直ぐに伸びた髪を気取った仕草で後方にかきあげながら、女は黒服に向かって、ウインクを投げた。

パツンと一直線に切られた厚い前髪の下から見え隠れする眉毛は太く濃く、真っ赤なルージュと相まって、まるで八〇年代のディスコ全盛の時代からタイムスリップして来たように見える。呆気に取られたまま思わず入口を通しそうになった時、黒服はハッと我に返った。

「ちょっと、困ります」

「え？」

女はなぜ自分が止められたのか分からないといった様子で、怪訝な顔で黒服を見上げる。近くで見ると、その化粧はより強烈だった。

「誰かの紹介が？　ここは会員制だから、初めての客はお断りなんですよ」

「あんだ、本気で言ってるの？」

裏声のような妙なソプラノの掠れた声が、黒服に向かって抗議する。

「まさか、アタシを知らないの？　“明慶大のダンシング・クイーン”の、このアタシを？」

「……ダンシング・クイーン？」

今時そんな通り名があるものか。

もしかしたら、頭が少タイカれた女なのではないか？　黒服が別の意味で薄気味悪くなっているところへ、女とは180度異なる、今ドキの女子学生の集団がタクシーから続けざまに降りて来た。

「ちよつと、何してんのよ」

「邪魔よ。入れないじゃない」

少女たちは、店の入口で押し問答しているこの妙な女と黒服に向かって、口々に文句を言った。

「すみません。どうぞ、お入りください」

黒服はすぐに脇に避けて、顔パスらしい彼女たちのために道を開ける。

ボディコン女は図々しくも、彼女たちの後に続いて何食わぬ顔で入って行くこととする。

「だから、あんたはダメだった！」

「アタシを通さないなんて、このクラブの恥になるわよ」
「何なのよこの女？」

鼓膜を刺激する女のソプラノに反応して、地下への階段を下りかけていた少女たちが振り返る。

「さつきから、困ってるんですよ。 “明慶大のダンシング・クイーン” だそうで」

「明慶大？ こんな女見たことないわよ」

見たら絶対、覚えている。

そう言っつて鼻で笑う少女に、周囲も追隨して嘲笑の輪が広がる。

「これだから、モグリは困るのよ」

「……モグリ？」

使う言葉がいちいち古めかしい。

それを、女は何よりもイケていると勘違いしていそうな様子が痛々しいほどだ。

「あんたたち、イ・ユリは知ってるでしょ？」

女の言葉に、少女たちの顔色が変わる。

「私はユリの親友チングよ。ユリの親友チングを追い出したってバレたら、後でどうなるかしらね？」

少女たちは途端に不安げな顔で互いの肘を小突きあう。

「嘘に決まってる」

「ユリがこんなダサイ女と、親友なワケないじゃない」

だが、疑念はさざ波のように広がっていく。

「あんたたち、何してるの？」

その時、一台のタクシーが店の前に止まり、中から着飾ったユリが降りて来た。

「ユリッ！」

女王の登場に、少女たちが一斉にユリに駆け寄る。

「何よ」

「この女が、勝手にユリの親友だなんて言って、店に入ろうとしたのよ」

告げ口するように、少女の一人がユリの腕を取る。

「私の親友？」

ユリは美しく整えられた、女の極太眉毛とは対照的な眉を吊り上げて、女を見やる。

「こんな女、知らないわ」

鼻を鳴らして行こうとするユリの腕を、女は思いの他強い力で掴んだ。

「何すんのよっ!？」

金切り声を上げるユリの耳元に、女は囁く。

「私、コ・ヒヨンスにダンスを申し込まれてるの」

思わず女に視線をやったユリの反応を見て、女はどぎついルージュの唇でニンマリと笑みの形を作った。

「ヒヨンスが、あんたみたいな女、相手にするわけない」

「そうかしら？」

「あいつは、私に夢中なんだから」

「今わね」

平静を装うユリだったが、この奇妙な女のペースに徐々に乗せられ、イライラが募っていく。

「ラストダンスのジnkクス、知ってるよね？」

女の言葉に、ユリの頭にカツと血が上る。

「何してるの？ さっさと行くわよっ！」

取り巻きの少女たちに向かってそう鋭く叫ぶと、未だ強い力で女に掴まれている腕を乱暴に振りほどく。

「彼、最近様子がおかしいわよね。何か悩み事があるみたい。心当たり、無い？」

背を向けたユリだけでなく、周囲の皆に聞こえるように、女は声を上げる。

「何で私にそんなこと聞くのよ？」

「コ・ヒヨンスのことは、誰よりもあんたが知ってると思ったから」

意味深に微笑んで見せる女に、ユリは背筋が寒くなるものを感じ

た。

「何が望みなの？」

「クラブに入れてよ。踊りたいだけ」

女は待つてましたとばかりに、まるでお化けのように唇からはみ出したルージユで微笑む。

ユリは不快そうに眉根を寄せたが、やがて乱暴に顎をしゃくった。

「……着いて来て」

「ユリッ？」

「いいから、黙ってて」

周囲の少女がユリの腕を引っ張ってユリの選択を咎めるが、ユリは首を横に振ってそれを制した。

女は分厚い肩パットを揺らしながら、嬉々としてユリたちを追い越して地下のクラブへの階段を降りていった。

*

「へえ、こんな風になってるんだあ」

女は派手な電飾に彩られた品の無い店内をキョロキョロと見回しながら、鼓膜を破るような音の洪水を楽しんでいるようだった。無意識に身体がリズムを取って揺れている。

狭い店内で女にぶつかる客は、皆一様に女のいでたちを見てギョツとしているが、当の女の方は全く気にする様子も無く、マイペー
スにカウンター席に陣取った。

「クリームソーダ一つ！」

「は？」

カウンターのボーイが、女の格好よりも言動に驚いて尋ね返す。

「この人……ユリさんの、連れですか？」

後から女の横に腰掛けたユリに、ボーイが助けを求めるように視線を投げる。

「連れなんかじゃないけど。ウーロン茶にして」

「えー？ クリームソーダが飲みたかったのに」

「贅沢言わないで。奢ってやるんだから」

ユリはピシヤリと言い放つと、投げつけるようにカウンターにウオン紙幣を置いた。

「あんだ、ヒヨンスの何を知ってるの？」

ユリは店内の様子に気を散らしている女に、腹立たしげに問いかけた。

「今はまだ何も。でも、これからゆっくり知りたいと思ってる」

ハッと息を吐いて、ユリは嘲笑した。

「付き合いきれないわね。せいぜい頑張るといいわ」

ユリは取り巻きたちの待つフロアの中央へ向かうべく、席を立つ

た。

「適当に遊んで、満足したら帰ってよ。あんたの顔なんか、長い間見ていたくないわ」

「ねえ、この店ってリクエストできるの？」

背を向けかけたユリに、女が問いかける。ユリは素っ気なく、フロアの対面にある、DJブースを指差した。

「ありがとう」

女はまたあの不気味な笑みを浮かべると、嬉々として人ごみを掻き分けてDJブースへ駆けて行った。

「変な女」

ユリは肩を竦めて、仲間の待つフロアに向かう。

ノリのいいダンスビートに合わせて身体を揺らし、何もかも忘れてしまいたい。

ガンホのことも。

ヒヨンスのことも。

その時、フロアを揺らしていた大音量が鳴り止み、ブースの中は次の曲をかけるべく準備が行われていた。その間に、店内には明かりが灯り、しばしの休息が取られていた。

だが、ブースの中では選曲に時間がかかっているらしく、中々照明が落ちない。ようやく絞られた照明の元、流れてきた曲に、フロアにいる若者全員が呆気に取られたように動きを止めた。

優しいな音色に合わせて、柔らかい男性ボーカルの声が穏やかなメロディを紡ぐ。

「何だ？ これ？」

「いつの曲よ？ こんなんじゃ踊れない」

あつという間に、フロア全体に不満の声が広がる。

「ユリ？ どうしたの？」

客たちと一緒にあって、口々にブーイングしていた取り巻きの少女の一人が、ユリのおかしいことに気付いて彼女の顔を覗き込む。

「……この曲……」

ユリは呆然とブースを見つめている。

「ちょっと、ユリ。大丈夫？」

その途端、ユリは未だざわめくフロアの客たちを押しつけて、ブーに駆け寄った。ユリに体当たりされた客たちが、口々に抗議の声を上げるが、ユリはお構いなしだった。

「やめてっ！ 曲を止めてっ！」

ユリはブースに飛び込むなり、DJに掴みかかった。

「何で？ いい曲でしょ？」

DJの隣りの椅子で膝を抱えて座っていた女が、ユリを見上げて微笑む。

「あんだ、この曲どこで？」

ユリはDJから手を離し、今度は女の襟首を掴んだ。

「ヒヨンスの好きな曲だよ。運動音痴の自分でも、この曲だったら踊れるんだって言ってた。一緒に踊ろうって」

「嘘よっ！ あんたなんかとあいつと一緒に踊りたがる筈ない。この曲は、あいつが初めて……」

「初めて……何？」

ジツとユリを見上げる女の視線が痛い。

ユリは乱暴に女から手を離すと、ヒステリックに叫んだ。

「誰か、この女を掴み出してっ！ 早くっ！」

慌てて黒服たちが駆け寄ってくる。

女は敢え無く、両腕を掴まれて、店の外へ運ばれた。

ご自慢の肩パットがズレて、より滑稽な格好になっていたが、女は満足そうに小鼻を膨らませ、やり遂げたような笑みを浮かべていた。

(ユリ?)

(入って来ないですよ)

雨の日曜日。

外出禁止を食らったユリは、自室の出窓に肘をついて、涙の滲む目で恨めしげに外を睨みつけていた。

中学に上がったばかりのユリだったが、その美貌は入学前から知れ渡っており、制服を着崩して身につけるような、いわゆる“不良”と呼ばれる集団から目を付けられていた。その中には、ユリが憧れる先輩もいて、その彼から週末にクラブに誘われた時、ユリは天にも昇る心地がした。

父親の目を盗んで、ベッドの中で初めての化粧をしていそいそと下準備に励んだが、十時を過ぎていざ二階の窓から抜け出そうとしたところを、帰宅間際の住み込みの家政婦に見つかってしまった。

当然、それは直ぐに父親の知るところとなり、ユリはこっぴどく叱られ、一ヶ月という、中学生のユリにとっては永遠とも言えるような長きに渡る“外出禁止”の罰を与えられた。

自室で塞ぎ込むユリを心配して、関係のないヒヨンスまで付き合い合っただけのところ外出していなかったが、ユリはそのことに気付いてはいなかった。

(おじさん、出かけたよ)

(あっそ)

(ちょっと、出て来ない?)

ヒヨンスの言葉に、ユリはガバツと顔を上げる。

(あんた、協力してくれるの? 私を外に出してくれる?)

部屋のドアを開けて、ヒヨンスの肩を掴む。

(外に出るのは無理だよ。おじさんはいないけど、お手伝いさんが見張ってる)

(何よ、情けないわね)

ヒヨンスは何も悪くないにも関わらず、八つ当たりをしたユリは乱暴にヒヨンスの身体を突き放す。

(でも、リビングまでなら大丈夫だよ)

(リビングに行って、何するのよ)

(着いて来て)

ヒヨンスは微笑んで、ユリの手を取る。退屈で死にそうだったユリは、バカらしいと思いつつも、ヒヨンスの後に続いて階下へ降りて行く。

(見て、これ)

リビングに着くと、ヒヨンスは部屋の隅で埃を被ったLPレコーダーのカバーを外した。それは、ユリとヒヨンスが、「オモチャではないから」と、固く触れるのを禁止された、父親の宝物だった。

(ちょっと、かけてみない?)

そう言うとヒヨンスは、棚の陰から、大判のレコードまで取り出した。

(あんだ、それどこから?)

(おじさんの書斎から、ちょっとだけ借りてきたんだ)

ヒヨンスは肩を竦めて見せる。

(バレたら、殺されるわよ)

そう言いながら、ユリは徐々に愉快な気持ちになってきた。真面目なヒヨンスが、こんな冒険をするなんて。

(本当に音出るの?)

(見てて)

そう言うのと、ヒヨンスはプレーヤーの蓋を開けて慎重にレコードをセットすると、静かに針を落とした。

ジジ……ジジ……

外の雨音に良く似た音が、しばらくリビングに響いた後、古めかしいが温かいメロディが流れてきた。

(あー!)

ユリは思わず歓声を上げて、ヒヨンスを見た。ヒヨンスがニッコリと微笑む。

(踊ってみる? ユリ)

(ここで?)

(クラブみたいにはいかないけどさ)

そう言って、ユリに片手を出します。

ダサイ……いつもなら、そう言って鼻で笑ってやるのだが、雨音の中のダンスはしつとりと気分が良くて、ユリは素直にその手を取った。

(何て曲なの?)

(『悲しき雨音』)

(イケてない曲ね)

(僕にはこれくらいが丁度いいよ。初めての僕でも、ちゃんと踊れる)

(ちゃんと踊れてないわよ、さつきから私の足踏んでる)

ぎこちないそのダンスに文句を言ってやれば、ヒヨンスは照れくさそうに頭を掻いた。

(ごめん。もつと練習するよ)

(バカね。こんなダンス踊る機会なんて、そんなに無いわよ)

(痛っ)

(何?)

(ユリも、今僕の足踏んだ)

(何よ、文句あるの? 仕方ないじゃない。私も初めてなんだから)

一瞬顔を見合わせた後、ユリはクスクス笑いだした。それにつられて、ヒヨンスも笑う。二人は互いの肩に自分の額をつけて、即席のダンスホールに変えたりリビングで、二人だけのつかの間のダンスを楽しんだ。

「馬鹿な奴……あんな、昔のこと」

「ユリ?」

カウンターで濃いカクテルを喉に流し込みながら、ユリは唇を噛む。

もう忘れかけていたあの日の雨音が、ユリの心を乱していた。

*

(ヒヨンス、いつも何聞いてるの?)

講堂で席を並べて座っていた時、そう尋ねると、ヒヨンスは片耳に挿していたイヤホンをナビに貸してくれた。

流れてきたオールディーズの名曲に、ナビはパツと顔を輝かせた。

(これ、知ってる。うちのジエビン兄貴ヒヨソも持ってるよ)

楽しげに身体を左右に揺すってリズムと取るナビに、ヒヨンスが微笑む。

(若いのに、こんな曲良く知ってるね)

(ユリのお父さんが好きで、レコードを持ってたんだ。これで、ユリと初めて踊った)

(へえ、ロマンチックだね)

口笛を鳴らすナビに、照れた表情で頭を掻くヒヨンスの様子を今でも覚えている。

きっと、ユリも覚えているはず。

二人で共有した“初めて”のダンスを、忘れられるはずがないんだから。

「ちょっと、正気ですか？ この僕を入れないなんてどういうことですか？ 二十四年間生きてきて、今までクラブで門払いされたことなんか……」

黒服に取り押さえられた、よれよれＴシャツに緑のナップザック、牛乳瓶の底眼鏡の男が、入口で押し問答している。

「全く、今日は一体どうなってるんだ？ さっきのボディコン女といい、こいつといい」

「いいから、早く入れて下さい！ 知り合いがきつと、中に……」
「どうかしたんですか？」

その時、クラブの前に突然現れた男を見て、黒服たちが背筋を伸ばした。

「これは、ジエビンさん！」

「え？」

黒服の言葉に振り返ると、そこにはタイトなブラックデニムに黒い皮のジャケット、シンプルなシルバーのクロスを首に下げた、スタイリッシュの権化のようなジエビンが立っていた。

「先輩に頼まれて、搬入に来ただけど」

そう言って親指で指し示す背後には、畳んだ状態の『ペニー・レイン』 つまり、キャンピングカーが止まっていた。

この店のオーナーはジエビンの商売仲間で、時折、ジエビンが仕入れた珍しく高級な酒や食材があると、こうして取引きに訪れるのだった。

「雨が降りそうだから、さっさとやって終わりたいんだよ。こっちも、今夜は開店するハメになりそうだから」

「はい、ではすぐにオーナーに連絡を」

そう言つて、黒服の一人はシャツの襟元につけていた無線で店の中と連絡を取る。

「……ちよつと」

その時、牛乳瓶の底眼鏡の男は、恨めしげにジエビンをねめつめた。

「まさか、知らんぷりするつもりじゃないでしょうね？」

そう言われて、ジエビンは初めて、足の先から頭のとっぺんまで、マジマジと男を見つめた。その野暮ったさ加減は最早、このような華やかなクラブの前で見ると天然記念物の域だったが、それはまさしく、ハン・ミンホその人に違いなかった。

「ジエビンさん？ お知り合いですか？」

怪訝そうな黒服の視線を受けて、ジエビンは我に返る。

「……いや。知らない」

「はあっ?!」

予想もしない裏切りに、ミンホが叫ぶ。

「早く通してくれ」

「ちょっとあなた、今ココで僕を見て見ぬフリしたら、一生後悔することになりますよ」

ミンホは必死でジエビンの腕を取って縋りつく。

「離せ。クラブにはクラブのルールがあるんだよ。そんな珍妙なゼンスしてる、お前が悪い」

「好きでこんな格好してるんじゃないやありません！ 急いでたから、仕方なくです。それもこれも、お宅のナビヒョンのせい……」

ミンホが途中まで言いかけたその時、中から両脇を黒服に取り押さえられた、ミンホ以上に珍妙な服装の女が弾き出されてきた。

「痛あつ！」

アスファルトの道路に転がされた女は、ハスキーな甲高い声で悲鳴を上げる。

「もうっ！ 女の子には優しくしろって、小学校で習わなかったのかよっ！」

ズレたカツラをかなぐり捨てて、女 だったものが、叫ぶ。

「……え？」

片パットのズレたボディコンスーツ、太い眉毛、唇から大きくはみ出した真っ赤なルージユ、奇妙奇天烈には違いないが、それはミンホとジエビンがよく見慣れた人物。

「ナビッツ?!」

「ナビヒョンッ?!」

二人はほぼ同時に、素っ頓狂な声を上げた。

「…………あれ? ミンホ…………に、兄貴^{ヒョンドン}まで…………何でここに?」

ナビは道路に尻餅をついた姿勢のまま、キョトンと二人を見上げる。

「ああああ…………お前、何てことだ。兄ちゃんは、お前をそんな不思議ちゃんセンスの子に育てた覚えは…………」

「あなた、今気にするのはそこじゃないでしょ?」

「こいつか? この珍妙ダサ男と一緒に暮らしてるせいで、美的感覚が狂ったのか?」

「酷い言われようですね! だから僕は、好きでこんな格好してるんじゃないって言ってるでしょ?!」

「女装するにも、もっとやり方が…………」

ジェビンの“女装”の一言に、黒服たちが振り返る。ミンホは慌てて、ジェビンの腹に肘を食らわせた。

グウツと息を詰まらせるジエビンの横で、ミンホは黒服たちに愛想笑いを振りまいて、その場を取り繕う。

「あはは、ジエビンさんなら、女装も似合いそうだあ。本当の女人より綺麗ですよ、きつとお……アハハハハ」

その時、ポツリ と、ナビが手を着くアスファルトの道路に、黒い染みが出来た。

ポツリ、ポツリ、ポツリ……

その染みはあつという間に広がりを見せ、本格的な雨が降り出した。

「うわっ！ やっぱり来た」

ジエビンが慌てて、着ていた皮のジャケットを脱ぎ捨て、ナビの頭に被せる。

「搬入はまた明日だ。急いで開店する場所見つけなきゃ」

ジエビンはそう言うなり、当然のように尻餅をついたままのナビに手を差し出した。

雨が降ったら、『ペニー・レイン』へ帰す

ナビの身柄を預かった時からの、彼らとの約束。

ミンホはチクリとした胸の痛みを感じながらも、目の前でこの兄弟を見送るべく、自分は一步下がって身を引いた。

「ナビ？ 早く行くぞ」

ジェビンはいつまでも自分の手を取ろうとしないナビを不審に思い、座り込んでいるナビに顔を寄せる。

「どづした？」

「じゅめん、兄貴ヒョウ！」

ナビは言うなり、勢いよく立ち上がって、少し離れた場所に立っていたミンホの手首を掴んだ。

「え？ ナビヒョン？」

呆気にとられるミンホの手を取ったまま、ナビは走り出す。

「戻ったら、うんつと働くから！」

「ナビ？！ おい、待てよっ！」

ジェビンの制止も虚しく、ナビは雨の繁華街を、ミンホと手を取り合って駆け抜けて行った。

「早く、入ってください」

暗いホテルの部屋に先にナビの身体を押し込んでから、ミンホは部屋の明かりを付けた。

すぐにシャワールームへ直行し、ナビのために狭いバスタブに湯を張ってやる。ふんだんに雨を吸い込んで重くなったボディコンス

「ツを着込んだナビは、所在無げに玄関に突っ立ったままだ。

「何してるんですか？ 早く、こっちに来てください」

バスルームから、怒気を含んだミンホの声が聞こえてくる。

「うー……そんなに、怒るなよお」

ナビは弱々しく唸り声を上げながら、恐る恐るミンホの待つバスルームへと入って行く。

「無茶を通り越して、あなたは無謀です。どういう思考回路してるから、女装なんて思いつくんでしょうね」

まだグズグズしているナビの腕を引っ張って、ミンホはパットの両肩を掴んで背後から抑え込むと、グイッとナビの身体を脱衣所の鏡の前に向けてやった。

「これはもう、女装じゃなくて、仮装です。見てみなさいよ、お化けです」

ミンホの言う通り、雨で流れた眉墨とマスカラが、ナビの頬に黒い線を描き、まるでホラー映画のような様相を呈している。帰る途中で、雨避けになるかと再び被り直したカツラがペッタリと頬や首筋に張り付き、ますます不気味さに拍車をかけている。

「僕、以前休暇で日本に行った時、あなたにそっくりな人形を見ましたよ。勝手に髪が伸びる、呪いの人形だそうです」

「完全にお化けじゃん！」

「だから、そう言ってるんです」

ミンホは傍にかけてあったタオルを鷲掴みにすると、グルツとナビの身体を反転させて、向き合った格好でゴシゴシと容赦なくナビの分厚い化粧を落としていく。

「い……痛いよ、痛いって！ 鼻がもげるっ……ンゲッ」

タオルで窒息させられそうになり、賢明にミンホの身体から逃れようともがくが、ガツチリ背中をホールドされているので、それも適わない。

「これじゃあ、僕がやった方がまだマシでしたね」

「180センチ超える大女がいるかよっ！ お前の方が、お化けだよっ」

ジタバタ暴れながらも、ようやく本来のナビの顔がタオルの下から現れる。

「じゃあ、早く脱いで」

「はっ」

ミンホは黒く汚れたタオルを洗面台に放り投げると、片眉を吊り上げて言った。

「は？ じゃないでしょ。今更、何恥ずかしかってるんですか。早くして下さい。風邪引きますよ」

そう言って、ナビの肩パットに手をかける。

「ちよっ……ちよっと待てっ！」

慌てたナビが、ミンホの手を振り払う。

「ひ……一人で脱げるよ」

「濡れて身体に張り付いてるでしょ。脱ぎにくいから引つ張ってあげます」

「いやいやいやっ！ 大丈夫っ！」

「そうですか？ じゃあ、どうぞ」

腕を組んで、洗面台に背中を預けると、狭い脱衣所の中でミンホはジッとナビを見下ろした。

「何で、そこにいるの？」

「何でって、あなたの脱ぎ捨てたその戦闘服みたいなボディコンスーツを、さっさと洗いたいからですよ」

「後で持っていくから、お前は部屋出てろよっ！ 着替えてるとこ、覗くな！」

ナビの言葉に、ミンホは黙ってジトーツとナビを見下ろしている。

「……な、何だよ？」

「この部屋に初めて来た時も、『覗くな』って騒いでましたよね。」

この際だから、ハッキリ言っておきますが、僕は男に欲情する趣味は、ましてお化けみたいな女装した男に欲情する趣味は、ありません。そんなに不自由していません。あしからず」

「出てけっ！」

嫌味タップリな余裕の表情を浮かべるミンホに、濡れそぼったタオルを投げつけて、ナビはミンホを脱衣所から追い出した。

チャポーン……

ミンホが浴槽に溜めてくれた温かいお湯に首まで浸かると、ようやく人心地がついた。疲労に負けて、ウツラウツラしそうになったところで、見計らったように脱衣所に戻って来たミンホに声をかけられた。

「そのまま寝ないでくださいね。溺れますよ」

「わ、分かってるよっ！」

凶星を指されて、ナビは慌てて目を擦る。

曇りガラスの向こうで、ミンホがナビの洗濯物を拾っている様子が分かる。

「それにしても、今時こんなスーツ、どこで手に入れたんですか？
買おうと思っても、売ってないでしょ」

「前に先生にもらったんだよ。20歳の誕生日プレゼントに」

オーサー・リーのことだ。

全く、あの変態医者ときたら、何を考えているのか。

ミンホは苦々しげに舌打ちした。

「……ナビヒョン」

未だガラスの向こうで立ち去る気配のないミンホが、静かに切り出す。

「何？」

「……さっき、何でジェビンさんと一緒に行かなかったんですか？」

雨が降って来たのに。

差し出されたジェビンの腕ではなく、ミンホの手を取って駆け出したナビ。ミンホは、その理由が知りたかった。

「……『遊びでやってるんじゃない』って、言っただろ？」

雨が降ったら姿を消す

遊びでやってるんじゃない。

それは、ヒヨンスのことで喧嘩をした時の、ミンホの台詞だった。

「……そんなこと、気にしてたんですか」

気まずさに、ミンホの方が押し黙る。

「そういうわけじゃないけど。ここにいる間は、僕もお前に協力するって決めたんだ」

だからって、今日みたいな無茶な真似は　　そう言いかけて、ミンホは口を噤んだ。

不器用でやり方は突拍子もないが、ナビが彼なりにミンホの役に立ちたいと思っている気持ちは伝わってきたからだ。

ミンホはズシリと重いナビのスーツを抱えて、脱衣所を出た。だが、自然にほころぶ口元には、未だ本人ですら気付いてはいなかった。

「そんなことが？」

講堂の前で見つけたヒヨンスを見つけたナビとミンホは、昨晚の騒動の一部始終を説明した。どうせ黙っていたところで、あんな大騒ぎを起こして、ユリを始め彼女の取り巻きたちにも現場を押さえられていては、ヒヨンスにバレるのも時間の問題だったからだ。

「君って本当に、無茶するね。ナビ」

ヒヨンスは呆れた顔をしていたが、次第に耐え切れずにクスクスと笑い出した。

「本当に、君たちと話していると、何だか悩んでることがバカみたいに思えてくるよ」

ヒヨンスはひとしきり笑うと、顔を上げてナビと向き合った。

「……俺、決めたよ。ユリをラストダンスに誘う」

「本当？ ヒヨンス」

「ああ。ナビがこんなことまでしてれたんだ。本人の俺が、頑張らなきゃ嘘だろう」

「うん！ 頑張れ、ヒヨンス」

力強くガッツポーズを取るナビに、ヒヨンスは少し寂しげな笑みを浮かべながら言った。

「……ありがとう、ナビ。本当に、ありがとう」

ミンホはその横で、そんなヒヨンスを、何か言いたそうな顔でジッと見つめていた。

大学の帰り道、一人で歩くヒヨンスの行く手を、突然現れたガンホが塞いだ。

その背後には、ユリの姿もある。

「探したぜ、親友」

ガンホはヒヨンスの肩に手を回し、耳元に顔を近づけた。

「あの夜以来、サボリ癖が着いたのか？ お前が学校になかなか来ないから、話もろくに出来やしない。ユリも寂しがってたんだぜ。なあ？」

ガンホがユリを振り返ると、ユリは彼の顔色を見て、曖昧な笑みを浮かべた。

「折り入って、お前に頼みたいことがあるんだよ、親友」

ガンホはいやらしく『親友』という言葉を連呼すると、ヒヨンスの抵抗を許さないことを示すように、回した腕に力を込めた。

ヒヨンスはそんな腕を強く振り払うと、ガンホを真っ直ぐに見据えて言った。

「そんなことしなくても、俺は逃げないよ。どこへでも、連れて行
けよ」

「アハハハハッ！ 聞いたか？ ユリ」

ガンホは腹を抱えて笑い出した。

「俺たちの『親友』は勇ましいな。この間の大仕事を終えてから、
一皮剥けたみたいだ」

ガンホの言葉に、ユリはソワソワと落ち着かない様子を見せたが、
ガンホは相変わらず不適に微笑んだまま、路肩に止めてあった自慢
のスポーツカーを顎でしゃくった。

「来いよ。男同士の話をしようぜ」

ガンホの車に乗せられて辿り着いた先は、漢江川岸ハンガンに並び立つ貨物倉庫の一つだった。

ガンホは車を降りると、皮のジーンズのポケットからジャラジャラと伸びていたチエーンの先を辿り、そこに繋がっていたいくつもの鍵の一つを取り出して倉庫の鍵穴に差し込むと、静かにシャッターを開けた。

対岸のビルの明かりが川面に反射する明かりの他に、光を確保するものではなく、暗い倉庫の奥は濃厚な闇が垂れ込めていた。

ガンホはポケットからペンライトを取り出すと、倉庫の壁面を照らした。

「これ、何だか分かるか？」

詰まれたダンボール箱の山を叩きながら、ガンホが上擦った声で問う。ガンホはユリに乱暴にペンライトを手渡し、手元を照らすように指示を出すと、ダンボールの山の一つにカッターで切り込みを入れた。出来た傷に手を差し入れ、中から何かを鷲掴みにして、その手をヒヨンスの目の前で開いて見せる。

サラサラと砂時計が時を刻むように、白く輝く粉がガンホの指の間から零れ落ちた。

「……こんなもの、どこから？」

目の前の光景はもう既に、学生のお遊びの域を超えていた。

しかし、それに驚かない自分がいる。

冷静なのではない。

もう、当に麻痺しているのだ。

ダンスフロアの地下へ行つたあの日から。

薄暗い地下の配管室で寂しく死んでいた女の遺体を、ユリのために、この漢江に投げ捨てた、あの日から。

そんなヒヨンスにはお構いなしに、ガンホは興奮した様子で捲くし立てる。

「聞いて驚くなよ。俺は、サツの中に『金のなる木』を持ってんだ。絶対にバレない、その上、この先いくらでも好きなだけヤクが手に入る確実なルートだ。今までは、小遣い稼ぎにチマチマ売ってたけど、こんなにあるんだ。もつとデカく当てなきや嘘だろ？」

「何する気なの？」

ヒヨンスの言葉に、ガンホは異様な光を宿した目をキラキラと輝かせながら言った。

「ダンスパーティーの夜、学内にこれ運べ」

ガンホは暗闇の中でヒヨンスにピタリと顔を近づける。

「買い手はもう決まってる。お前にも、当然分け前はやるよ。悪い話じゃないだろ？」

ガンホは手の甲で、ヒヨンスの乾いた頬をなぞった。

「……ここまで知ったら、もう足抜けしようなんて思わない方がいいぜ。それとも、大好きなユリを置いて、自分だけ逃げたいか？」
「逃げないよ」

意外にもハッキリとした口調で言い切ったヒヨンスに、ガンホが一瞬たじろいだ。

「だけど、条件がある」
「条件？」

身構えるガンホを通り越して、ヒヨンスはガンホの後ろで先ほどから一言も発していないユリを見つめて言った。

「……ユリ、僕とラストダンスを踊ってくれる？」
「え？」

ヒヨンスの言葉に、ユリは啞然とした表情でヒヨンスを見た。

「僕と、踊って……約束してくれたら、この仕事引き受けるよ」

ユリが答える前に、ガンホが笑い出した。

「アハハハハ！ 踊ってやれよ、ユリ。そんなくだらないことが条件か？」

「約束して。ユリ。お願いだから」

ガンホを無視して強い視線で自分を見つめるヒヨンスに、ユリは戸惑いながらも尋ねる。

「あの女」

「え？」

「クラブに来てた、あの女」

「ああ」

ナビのことを言われているのだと分かって、ヒヨンスはほんの少し笑った。

少しでも、気にしてくれる気持ちがまだ残っているんだね。

「僕の気持ちは変わらないよ。誰か一人としか踊れないなら、ユリ、僕は君がいい」

「フン、聞いてられないぜ」

小バカにして笑うガンホの横で、ユリは小さくコクリと頷いた。

「ありがとう、ユリ」

「安い男だな。本当に」

ガンホが嘲るように鼻を鳴らした。

二歳で母を亡くした。

五歳で職を失った父と、食うにも困る生活を余儀なくされ、腹をすかせて父と二人、何日もソウルの街中を歩き回った。

失うものなど何も持たない自分たちから、神様はこれ以上何を奪う気なのだろう。幼心にそう思っていた。

生きるために、遂には物乞いの真似事まで始めた時、目の前に現れたのが、君だった。

『ねえ、何してるの？』

あれは酷く凍えた冬のある日、道路の片隅で、空腹に耐えかねて横たわる父親の横で、膝を抱えて座っていた僕。

何か新しい遊びでもしていると思っただのか、君はキレイなコート

が汚れるのも構わずに、僕の横に腰を下ろした。

僕の真似をして、膝を抱える君。

目が合うと、フフツツと楽しそうに笑う。

『競争よ。どっちか先に動いた方が負け』

そう言つと、言葉通り息を止めて、人形のように固まって見せる君。

だけど、その勝負だったら、僕が負ける筈がなかった。

だって、君を見つめて少しも動けなくなったのは、僕の方だから。

『ユリー、どこに行つたんだい？』

『あつ！ パパー！』

お人形の時間を止めて、また気ままに人間に戻つた君は、僕の隣りに腰を下ろした時と同じ軽やかさで、フワリと立ち上がり駆け出した。

『ダメじゃないか。急にいなくなつたりしたら、心配するだろ？』

…あれ？ その子は？』

急に、光が差した。

飢えと寒さだけが支配する地獄に、突然下りてきた天国の梯子だった。

ああ、そうか。

お人形のような君は、本当は天使だつたんだ。

天国でどんなに天使がワガママに振舞つたつて、そんなこと構いやしなかった。

だって、今ここで僕が息をしているのは、あの日君が天国に引き

上げてくれたから。天国を、この目に見せてくれたから。

どんなワガママも聞いてきた。

君は確かに、僕の天使だったから

「ミンホッ！ ミンホッ！」

雨が降りしきる日曜日の朝、ホテルの窓枠に腰掛けて外を見ていたナビが、突然大声でミンホを呼んだ。

「……………何なんですか、ナビヒョン……………日曜くらい、ゆっくり寝かせてくださいよ」

気だるい朝の空気をまとい、まだベッドの中でまどろみの最中にいたミンホは、面倒くさそうに寝返りをうつて言った。

「ヒョンスだよっ！ ヒョンスが来てるんだ」

ナビはそう言うと、ミンホの横たわるベッドを踏み超えて、部屋のドアに向かって走った。

「うぐうっ……………」

思い切りナビの足で背中を踏まれたミンホは、くぐもった、声にならない呻きをあげる。

数分後には、ナビは戸惑いがちなヒョンスの手を引いてホテルの部屋に戻って来た。

「どうしたのヒョンス？ 僕たちに、何か話したいことがあって来たんじゃないの？」

部屋の中へ促してベッドに腰を下ろしても、なかなか口を開けないヒヨンスに、ナビが切り出した。

「……僕、警察に行く」

消え入るような声でヒヨンスはそう呟くと、再び黙りこくってしまった。

「その必要はありませんよ」

ミンホの言葉に、ヒヨンスが顔を上げる。

ミンホは静かに、ポケットから警察手帳を取り出して見せた。

「……え？」

驚きで声も出ないヒヨンスに、ミンホは頭を下げる。

「騙してて、すみませんでした」

「……ナビ、もしかして、君も？」

ナビは静かに首を横に振る。

「……ナビヒヨン」

ヒヨンスの混乱を察して、ミンホが静かに言った。

「……ペニーレインへ行きませんか？　そこなら、きっと落ち着いて話ができる」

ジェビンは暖かいカフェオレとハムエッグの乗った皿を、カウンターの向こうから、そっとヒヨンスの前に差し出した。

「モーニングセットだよ。朝飯、まだだろ？」

ジェビンは微笑みながら、久々の豪快な皿洗いにいそしむナビを振り返って言った。

「ナビが友達連れてくるなんて初めてだな」

「俺は？ 俺は？」

「先生は友達じゃないでしょ。僕のこと、ヤラシー目で見てるもん」
「そんなあ、純粋なフレンドシップだよ、フレンドシップウ」

相変わらずなオーサーを冷たくあしらうナビの様子を見て、ヒヨンスが少しだけ微笑んだ。

「あれ？ 君、笑うと魅力的」

オーサーが目ざとくそれを見つけて笑う。

「どうしよう、俺。ナビの周りにはいい男がいっぱいで、油断できないワ」

「バカ言っていないで、少しはその人にしゃべらせてあげてください」

見かねたミンホがとうとう間に入る。

「あんたが、話したいことってのは何だ？」

それまで黙っていたチョルスが静かにテーブルを立ち上がり、ヒヨンスの隣りのカウンター席に腰掛けた。

『ペニー・レイン』にヒヨンスを連れてきた時、ミンホとチョルスは彼に自分たちの正体を明かした。

時期尚早かとも思われたが、ヒヨンスが並々ならぬ決心でここに来たことが分かっていたので、腹を割って全てを話して欲しいと思つてのことだった。

テーブルの上で組んだ手に視線を落としたまま、ヒヨンスは青ざめながら小さな声で言った。

「ソンステギョ聖水大橋の遺体……」

「ノ・ミラか？」

思わず乗り出したチョルスに、ヒヨンスは言葉を詰まらせる。

「チョルスヒョン」

「……悪い」

ミンホがたしなめると、チョルスは気まずそうに再び椅子に深く腰かけ直した。

「……彼女の遺体を、漢江に捨てたのは俺です」

深くうな垂れたまま、ヒヨンスは消え入るような声で続ける。

「……ユリの様子が酷く取り乱していて様子がおかしくて、着いて行ったら、既に彼女は死んでいた。何日も経ってるみたいで……そこに、ガンホもいた」

「なぜ、その時すぐに警察へ行かなかったんですか？」

ミンホの問いに、ヒヨンスは首を左右に振って答えた。

「出来なかった。ユリを……守りたくて。約束したんだ。誰にも言わないから、ユリの不安は消してあげるから、だからもう薬はやめてくれて……だけど、間違ってた。ユリは、やめられなかった」
「それで、今さら俺たちに自首してどうするつもりだった？ あんただけしよっ引いても、あんたの好きな女も、そのガンホって奴も、証拠を掴まなきゃ、のうのうと外で生きていられるんだぞ」

チヨルスの言葉に、ヒヨンスは初めて顔を上げた。その目には、決意の色が滲んでいた。

「パーティーの夜、大量のクスリが漢江ハンガンの貨物倉庫から運ばれる」
「何？」

「会場には、買い手の学生が一同に集まる。現行犯で押さえられる」
その場にいた全員が、啞然とした顔でヒヨンスを見つめている。

「パーティーが始まる前、7時に漢江の貨物倉庫で『運び屋』と『売人』が落ち合う約束になつてる。ヤクはそのまま会場に運ばれる。煽動してるのは……」

「学長の息子、ガンホ」

ヒヨンスに代わって、ミンホが後を引き継ぐ。

「そうですね？」

ヒヨンスがコクリと頷いた。

「『運び屋』は、僕。『売人』は……ソウル市警の人間だ」

ヒヨンスの言葉で、チヨルスとミンホが同時に深く息を吐く。驚きよりも、やはりという気持ちの方が強かった。

「その市警の人間に、あんたは会ったことがあるのか？」

「ない。やり取りは全部ガンホがやってた」

「そこまで話してくれてありがとうがたいが、分かっているのか？ 聞いちまったからには、見過ごすわけにはいかないんだぞ。ガンホも、あんたも……あんたの好きな、ユリって女も」

「……いいんだ」

チヨルスの言葉に、俯いたヒヨンスはポツリと言った。ジェビンが入れてくれたカフェラテの表面に反射したヒヨンスの顔は、穏やかな笑みを湛えていた。

「……ユリは、意地っ張りだから、自分で悪いことしてるって分かってても謝れない。止められない。昔からそうだった。止めてくれるの、叱ってくれるの、待ってるんだ」

「……せんせ」

その時、ナビが皿を拭く手を止めて、ジッとオーサーを見つめて言った。

「ん？ なぁに、ナビ」

「昔に戻る薬ってないの？」

突然のナビの言葉に、その場にいた全員がナビを見つめた。

「大人になってからのさ、すれ違っちゃった記憶だけ消して、また昔に戻る薬。先生は、天才なんでしょ？ ユリとヒヨンスを、昔に戻してあげてよ」

必死に言い募るナビをしばらく無言で見つめていたオーサーだが、やがて少し寂しげに微笑むと、手を伸ばしてクシャクシャとナビの頭を撫でた。

「さすがは、俺のナビヤ。優しいね」

ひとしきり柔らかい髪感触を楽しんだ後、オーサーはスルツとナビから手を離して言った。

「でもさ……忘れることが、本当に幸せ？」

オーサーはカウンターについた肘に右頬を寄せ、横目でヒヨンスに視線を送る。見つめ返すヒヨンスの瞳には、もう答えが描かれていた。

「ありがとう……ナビ」

ヒヨンスが微笑む。

「甘えついでに、一つだけ、ワガママを言わせてもらえないかな？」

ヒヨンスは顔を上げて、自分を取り囲んでいる五人を一人一人ゆっくり見つめると、再び深々と頭を下げた。

「……最後の曲が終わるまで、待って欲しい」

深夜の署長室で、ミンホはチョルスと連れ立って潜入捜査の結果を告げた。

「今、何て言った？」

震える声で問い返す署長に、ミンホはもう一度きっぱりと言った。

「署内に、内通者がいます」

椅子に深く腰かけた署長が思わず身を乗り出す。

「そんなバカな話があるか！ 一体、誰が……」

「ホン・サンギョ警査です」

「っな?!」

見る見る顔から血の気の失せていく署長に、チヨルスが更に追い討ちをかける。

「明慶に一斉捜査の情報を流して便宜を図った見返りに、薬の販売ルートが学生組織の間に確立させたんでしょう。ホン警査の口座に摘発の前後に渡って多額の入金が繰り返されています。学生たちに売りさばいた薬は、別の大学から摘発した薬の量を改ざんし、手に入れた分を粗悪品に加工し量産したものです。ホン警査から薬の加工を依頼されたヤクザを、別件で引つ張り自白させました」

ここ数日で、チヨルスが極秘でサンギョの周囲を洗い出した成果だった。

「鑑識のノ警衛にも、ワイロを渡してました。明慶の女子学生の変死事件の、検視結果の改ざんの見返りでしょう」

チヨルスは別人の名義になっている銀行口座の入出金記録が書かれた書類の束を、資料の上に積み重ねた。

「彼は明慶の学内イベントに乗じた、これまでにない規模の取引を計画しています。アゲるなら、チャンスはこの日しかない」

署長はチヨルスの言葉にも、しばらく唇を噛み締めたまま答えを出せずにいた。警察内部の者の犯行となると、世間的にも非常に厄介だった。

しかし、一人死者まで出したこの事件を、このまま葬り去るわけにもいかない。

「……動員を、お願いします」

頭を下げるチヨルスとミンホに向かつて、署長はやがて一言、分かった　と呟いた。

日没と共に、学校中が準備に明け暮れた学内最大イベントである明慶大学ダンス・パーティーが始まる。

ミンホは既に昨日の晩から、チヨルスたちとの最終打ち合わせに出かけていて戻って来ていない。

彼はそのまま、パーティーに潜入するという話だった。

時計の針が午後6時を差し、ナビはようやく重い腰を上げる。

曲がりなりににも正装を要求される場所なので、今日はジエビンから借りてきたフォーマルなスーツを着ているが、着慣れていない分、居心地が悪くて仕方ない。

ナビは胸元に手をやり、自分の首を締め付けているネクタイをむしり取り、ズボンのポケットに捻じ込んだ。ついでに、第二ボタンまで乱暴に開けて、蒸した身体に風を通す。暑さには適わなかった。ナビの腰が重い理由は、何も暑さのせいばかりではなかった。

今夜、これから起こることを知っているナビにとって、それはただのパーティーではなかった。

ヒヨンスの本当の、ラストダンス。

目の前でヒヨンスが捕まる姿は、見たくなかった。

だが、いつまでもグズグズしていても仕方ない。

ナビが思い切って立ち上がったその時、ホテルの部屋のブザーが鳴った。

「……誰？」

覗き窓から目を凝らしたナビの視界に、ニンマリと微笑みながら大荷物を手に立っているジェビンとオーサーの姿が飛び込んできた。

「ちよ……兄貴^{ヒヨク}も先生も、一体どうしたのさ？」

部屋になだれ込んでくる二人に押されるように後ずさりしながら、ナビが尋ねる。

「舞踏会にはおしゃれしてドレス着て、カボチャの馬車に乗って行くものだよ、シンデレラ」

相変わらず気障なオーサーの台詞に、ナビは目を白黒させる。

「ドレスつて、何言ってるのさ？ もう、スーツ着て……」

「ナビヤ、兄貴^{ヒヨク}が悪かったよ。女装の何たるかを、今日こそちゃんと教えてやる」

「いや、教えてくれなくていいからっ！」

「はい、座つて。ナビちゃん」

二人がかりで追い詰められては、ナビに逃げ場はない。

どこから調達して来たのか、ジェビンは小さな三面鏡までついたコスメボックスを開き、慣れた様子でファンデーションを溶き始めた。

「な、何で僕が女の格好しなきゃいけないのさ？ 意味が分かんないっ」

「男同士で、ダンスを踊るの？ 変に目立って、ユリとヒヨンスに自然に近づけないと困るでしょ」

もっともらしい説得をしながらも、オーサーの口角は上がりっぱ

なしで、ただ単にナビのドレス姿を楽しんでいるのが明らかであった。

「それに、お前に任せてたら、この前みたいなボディコンお化けになるからな」

「アハハ、聞いたよ、ナビヤ。俺も見たかったなあ」

「な？ 元はと言えば先生がっ！ クラブで一番イケてる服と化粧なんだって言っつて、くれたんじゃないかあ」

「本気にしちゃうあたりが、ナビヤの可愛いところだよねえ」

「嘘だったのお?!」

「ナビ、あんまり動かないで」

化粧途中の顔をグイッと鏡の正面に向けられて、ナビは口を尖らせて押し黙る。

「何で、僕がドレスなんだよ」

「ミンホのドレス姿よりマシだろ?」

「うん、想像したくないです」

片手を上げて、オーサーも同意する。

「ナビ」

頬に白粉をはたきながら呼びかけられ、ナビが薄く目を開けると、至近距離でジエビンの優しい灰色の瞳とぶつかった。

「……よく、頑張ったね」

そう言っつて、柔らかいナビの黒髪に手を伸ばす。

「『バレない自信、ある?』」

それは、『ペニー・レイン』からナビを送り出すときに、ジェビ
ンがかけたあの言葉だった。

ナビの黒目勝ちの瞳は何かを言いたそうに一瞬だけ揺れたが、す
ぐにキユと口角を上げて、ジェビンに答えた。

「『兄貴ヒヨーンの“弟”を、信じなさい』」

まるで二人だけの合言葉のように、決まった台詞を繰り返す。

そんな二人を、オーサーは少し悲しげな微笑を浮かべて、静かに
見守っていた。

広い講堂の中は、学生バンドが奏でるワルツの音色が響き渡り、
すし詰め状態になった人々の熱気で溢れていた。

オーサーが言うところの“カボチャの馬車”こと、いつものキャ
ンピングカーに押し込められて会場に到着したナビは、一曲も踊っ
ていないのに、早くも人ゴミに揉まれてヘトヘトになっていた。

やっとの思いで辿り着いた窓辺に背中を預けて一息つくくと、人、
人、人でごった返す会場内に目を凝らした。

あの日『ペニー・レイン』で別れたきりのヒヨンスの姿を探すが、
ワルツの輪が何週もして、同じ曲が何度繰り返して流れてきても、ナ
ビは一向にヒヨンスを見つけ出すことができなかった。

もはや、今日は来ないのかもしれないとさえ思う。

それならいっそ、その方がいい。

そんな淡い期待を抱きながら手の甲で額を拭くと、ビツシヨリと汗に濡れる。ここまで疲労する主な原因は、この居心地の悪い、慣れない服装のせいに他ならなかった。

肩が大きく開いたワインレッドのドレスは、華奢なナビの鎖骨を強調している。普段、こんな風に肌を晒すことなどないから、無防備すぎて、先ほどから落ち着かなくて仕方ない。ベトベトした唇のグロスも気持ちが悪い。舐めとってしまいたくてこっそり舌を出したところでジエビンに見つかり、先ほど車の中でこっぴどくどやされた。

アップにまとめたウィッグには、ドレスと同じ色の大きなリボンが留められていて、地毛を思い切り引っ張られているせいで、痛いし重い。

出来ることなら、足を挫きそうなこの淡い金色のピンヒールも脱ぎ捨てて、今すぐに裸足にジーパン、Ｔシャツのいつものスタイルに戻りたい。

「女って、大変なんだな」

思わずそう一人ごちたその時、いつの間に居たのか、見知らぬ男が隣りに立っていた。

「ドリンク、いかがですか？」

正装した男は、この大学の生徒なのだろう。見たことのない顔だったが、やたらと馴れ馴れしい笑顔で近づいてくる。

「あ、どうも。ごく親切に」

彼が差し出すグラスを受け取るつと手を伸ばした時、ナビの手が届く寸前で、横から現れた長い腕がナビのグラスをさらっていった。

「何する……っ！」

文句の一つも言つてやろつとその腕の主を振り仰いだ時、ナビは思わず言葉を失った。

「……っな……おま……」

それだけ言うのが精一杯だった。
そこには、正装姿のミンホが立っていた。

シャツの襟元には、黒い細身のリボンタイが結ばれ、細身のパンツが嫌味なくらいに長い足を更に強調している。

明慶大に潜入してからすっかり板についていた『野暮ったさ』を完全に封印したミンホは、シレッとした顔でナビから奪ったグラスに口をつけると、それを一気に煽ってから、空いたグラスを男に突き返した。

「オリジナルカクテル？ 随分キツイ度数ですね。これが、いつもの手口ですか？」
「な?!」

ミンホの辛辣な言い方に、男が目を吊り上げる。

「酔わせた女子学生を車に連れ込んで、お楽しみ。そんなところですかね？」

「失礼だぞ、お前。何の証拠があつて……」

掴みかかろうとする男の手首を掴んで、ミンホが軽く捻りあげると、男は途端に情けない悲鳴を上げた。

「別にあなたが何しようが僕には関係ありませんけどね。この人は僕の連れですから、ターゲットにする相手を間違えましたね」

そう言つて男の体を軽く押すと、男はよろめいて、派手に床に倒れこんだ。

「チクシヨウ。相手がいるなら、物欲しそうに立ってるんじゃないねえ

よ！」

男は悔し紛れにナビに向かって暴言を吐き捨てると、そのまま床を這って逃げ出した。

「大丈夫ですか？」

男が去ると、ミンホはナビを振り向いた。

「な……何だよっ！ 余計なことして。僕、喉乾いてたのに」

急に気恥ずかしくなって、ナビはそれを誤魔化すように素っ頓狂な声で抗議した。

「だったら、大好きなクリームソーダにでもしなさいよ。あなた、べらぼうに弱いでしょ？ アルコール」

ホテルでの仮住まいの最中に、一日の疲れを癒そうとミンホが買ったビールを飲んで、ナビは卒倒したことがあった。本当は酒が好きではなく、また極端に自分がアルコールに弱いことも自覚しているのに、ミンホにナメられたくなくて無理をして飲んだのだ。それが分かっただけから、ミンホは二度とビールを買ってこなくなり、自分は飲みたい時もあるだろうに、ナビに付き合っただけ、お茶ばかり啜っていた。

年寄りくさい……とバカにしながら、ナビは内心ではミンホの不器用な優しさを感じていた。

照れくさくて、上手く感謝の言葉など口にすることは出来なかったけれど。

「それにしても、その格好……」

ミンホは改めて、マジマジとドレス姿のナビを観察する。

「な、何だよ?! 何か、文句でもあるわけ? 好きでこんな格好してるんじゃないよ。兄貴ケイと先生に無理やり」

「別に、文句なんかありませんよ。この間のボディコンに比べたら、遥かに良いです。あのお化粧メイクと一緒に踊るくらいなら、男同士の方がマシだと思ってたんですけど、これならダンスを申し込んであげてもいいですよ」

ニツコリ微笑むミンホは、癪に障るくらい優雅な身のこなしで、ナビに向かって手を差し伸べた。

「僕の方が、お断りっ」

遊ばれているのが分かって、ナビはプイツと顔を背けた。そんなナビを見て、ミンホは手の甲を口に当てて、クスクス笑いを漏らす。

「だけど、ジエビンさんの腕は大したもんですね。一応、ちゃんとした女の子に見えますよ」

「一応って、何だよ!」

いちいち一言多いミンホに、ナビは食ってかかる。

「でも、胸はもっと詰めた方がいいですね。スカスカですよ。あの肩パット、捨てなきゃ良かった」

そう言って、長身を利用して、ナビのドレスの胸の谷間を上から覗き見る。

「おまつ！ この、変態野郎っ！」

ナビは今自分がドレス姿で少女を演じていることも忘れて、金色のピンヒールを凶器にして、ミンホに蹴りを入れる。

「……っ痛。格好が変わっても、中身の野蛮さは変わりませんね」

ミンホは長い脛を擦って、恨めしげにナビを見た。

「ところで、ヒヨンスは……見つかりませんか？」

そろそろふざけるのは止めにして、ミンホは小声でナビに尋ねる。

「……うん」

「きつと、もう来てる筈です」

講堂の時計は、既に午後9時を指していた。

その時、突然会場の明かりが落ち、辺りが闇に包まれた。

『さあ、いよいよラストの曲です！！』

司会を務める執行委員の学生が、今日の一大イベントのフィナーレを高らかに宣言する。それとほぼ同時に、ナビとミンホの背後の窓に、激しく叩きつけるような雨が降ってきた。

*

ヒヨンスは突然降り出した雨にずぶ濡れになりながら、講堂の中に入って来た。

会場の隅で一人、いよいよ始まったラストワルツのバンドの音色と、

張り合うように激しさを増していく雨の音を聞いていた。

「おいっ！ 遅かったじゃねえか！」

不意に、グイツと肘を捕まれて振り返る。

そこには、表の顔はアメフトの花形選手であり、我が物顔でパーティの主役を気取るタキシード姿のガンホと、その恋人として皆の羨望を集めるに相応しい、ボディラインを強調する、スリットの深く開いたタイトなドレスに身を包んだ美しいユナの姿があった。肘の内側をドス黒く変色させている無数の注射針の痕は、ドレスと同じ色の長い手袋で巧みに隠している。

「例のブツは？ ちゃんと運んだんだろうな」

ヒヨンスは黙って手を伸ばし、ガンホの手の中に二つの小さな紙包みを落としてから、講堂の隅にある倉庫を顎でしゃくる。

「もうみんな、お待ちかねだよ」

ヒヨンスの言うとおり、何人もの学生がソワソワしながら倉庫の扉の周囲に集まっている。

ガンホは目を輝かせてユリの肩を掴んだ。

「行くぞ、ユリ」

ユリに紙包みの一つを押し付けると、倉庫へと向かおうとする。そのガンホの前に、ヒヨンスが立ちふさがった。

「何だよ？ もう用は済んだ。早くどけよ」

肩を突き飛ばされてよろけながらも、ヒヨンスは真っ直ぐにユリを見つめて手を差し出した。

「……約束だよ、ユリ。ラストダンスは、俺と踊って
「おいっ！」

ガンホに小突かれても、ヒヨンスは動かない。ユリから視線を外さない。

ユリは戸惑いながら何度もガンホとヒヨンスを見比べた。

「っち」

盛大な舌打ちをして、ガンホはユリの肩をヒヨンスに向かって乱暴に突き飛ばした。よろめきながら、ユリはヒヨンスの腕の中に納まる。

「そんなに俺の女と踊りたきゃ、好きにしろ」

そう捨て台詞を吐くと、ガンホはあっさりと背を向けて倉庫の方へ向かった。

そんなガンホをまだオドオドと見つめているユリの手を引いて、ヒヨンスは静かにラストダンスの輪の中に加わった。

「お、始まったみたいだね」

講堂の裏に止めたキャンピングカーの中で、漏れてくる音楽に耳を澄ませながら、オーサーは煙草に火をつけた。隣りの運転席には、ジェビンが膝に抱いたオンマの背を撫でながら座っている。

「ナビにドレスを着せてやったのは、本当に捜査のため？」

何でも無い世間話のような調子で、オーサーが語りかける。

「他に、何があるって言うんだ？」

ジェビンはオンマの背に視線を落としたままで言う。

「いや……親心って、ヤツなのかなってね」

窓を開けて、フツと湿気を含んだ外の風に煙草の煙を吐き出す。

「『バレない自信、ある？』か」

開いた窓の隙間から手を出し、指先に触れる雨の感触を楽しむ。

「本当は『バラさない自信、ある？』。そう、聞きたかったんじゃないの？」

互いに別の方向を向いて視線を合わせないまま、沈黙が続く。

「……あいつは、俺の“弟”だ」

ポツリと呟くジェビンに、オーサーは頷く。

「そう。ナビとお前が、望む限りね」

オーサーは不意にジェビンの背をバチンツと叩いた。

「……おまつ……痛いな。いきなり、何するんだよ！」

「心配しなくても、“巣立ちの時”はまだ当分先だよ。特に、あの坊や相手じゃね。苦労するなあ、“お父さん”」

「お前、面白がってるだろ？」

ジェビンはお返しにオーサーの胸を拳でドンツと殴りつけ、不貞腐れたように運転席のシートに背中を預けた。

*

「……ナビヒョン」

ミンホは動きだしたワルツの輪に目を凝らしながら言った。

「いました。あそこです」

ミンホの指差すほうへ視線をやったナビは、そこに確かに手を取り合っただけこちなく踊る二人の姿を見つけた。

「来て」

ミンホは突然ナビの手を取ると、有無を言わずズンズンとワルツの輪に近付いて行った。

「なっ?! 何なの?」

「シッ! 踊るフリして。ヒヨンスの近くにいた方がいい」

長身のミンホに振り回されるような格好で、ナビのぎこちないダンスが始まった。

周囲を見回してみると、他の男子とペアを組んだ女性陣たちが、ウツトリした目でミンホに釘付けになっている。

可哀相な男子諸君は、先ほどからそんな薄情な女性陣たちに足を踏まれ放題になっては、小さな呻き声を上げている。

ミンホはナビと違い、悔しいくらいに優雅でスムーズな美しいステップを踏んでいた。ナビは慣れないリズムに四苦八苦ししながら、バカにされたくない一心で、意地になってミンホのリードに付いていく。ナビに何度も足を踏まれ、顔をしかめながらその都度憎まれ口を叩いても、ナビの背を抱くミンホの手は優しく暖かった。

音楽が最大の盛り上がりを見せる。

その時、講堂の正面玄関の曇りガラスの向こうで、複数の影が動くのが見えた。

「……ミンホ」

ナビがミンホの袖口をギュッと掴む。

「……大丈夫」

ミンホは背に回した腕に力を込めて、ナビを落ち着かせるように静かに頷いた。

「ありがとう、ユリ」

ヒヨンスは腕の中のユリを見つめたまま微笑んだ。長い間ずっと側にいたのに、こんなに近い距離で彼女を見ることはなかった。

「何で、お礼？」

ユリはヒヨンスに手を取られたまま、気まずそうに顔を背ける。

「僕に、天国を見せてくれたから」

「え？」

バイオリンとピアノの音色が競うように掛け合いを始め、曲のクライマックスが近いことを告げる。

「君がいる場所が、僕には天国だったんだ」

ビリビリと弦を爪弾く、長く尾を引くすすり泣きのようなバイオリンの音を残して、ワルツが終わる。

その時、バンツと鋭い音がして、講堂の扉が蹴破られた。

「動くなっ！ 警察だ！」

そこかしこで上がる悲鳴。

一斉に中に雪崩れ込んできた警察と学生の間で、あっという間に小競り合いが始まる。

「何なのっ？ どうして、こんな！」

パニックになるユリの背を支えながら、ヒヨンスはその時を静かに待っていた。

「ユリ」

ヒヨンスに名を呼ばれ、ユリが顔を上げる。

「……ごめんね」

「え？」

その時、ユリの背後でカシャリと冷たい金属音がした。

「イ・ユリ。覚せい剤使用容疑で逮捕する」

「……っな?!」

言葉を失うユリの胸元から、ポトリと小さな紙包みが落ちた。

先ほど、ヒヨンスからガンホへ、そしてユリへと手渡されたものだった。

「ちよっ、離せっ！ 何のマネだよっ！」

遠く倉庫の前では、大勢の学生が複数の警察に取り押さえられている。その中に、一際大声で怒鳴り散らしながら暴れるガンホの姿があった。

「さ、早く来い」

警官に背中を押されたユリは、青ざめた唇を震わせて、ヒヨンス

を見上げた。

「……あんた……あんたが、呼んだのね？」

ヒヨンスはそんなユリの視線を真正面から受け止めた。

「私を売ったのねっ！ どうして？ 私のこと、好きじゃないの？」

「好きだよ」

「だったら、何でっ！」

「愛してる」

ヒヨンスは手を伸ばして、ユリの頬に触れた。

「……愛してる、ユリ」

そのままそつと、震えるユリの唇に触れるだけのキスをした。目を見開き抵抗するユリに唇を噛まれ、ヒヨンスの口の中には苦い血の味が広がった。

「許さないからっ、ヒヨンスッ！ あんたが、あんたが私を裏切るなんて……あんたは、あんただけは……私を……裏切っちゃいけないのに……」

ユリの瞳から大粒の涙が零れ落ちる。金切り声でヒヨンスを罵倒し叫んでいたのは最初だけで、次第にその声は弱々しい啜り泣きに変わっていった。

「言ったよね、ユリ。君のいる場所が、僕の天国だって」

ヒヨンスはそんなユリに優しく微笑む。

「……コ・ヒヨンスだな？」

その時、ヒヨンスの背後から伸びてきた腕が、突然ヒヨンスの肩を掴んだ。

「え？」

啞然とした顔でヒヨンスを見上げるユリに、ヒヨンスはもう一度柔らかい笑みを浮かべると、静かに後ろを振り返った。

「ノ・ミラの、死体遺棄容疑で逮捕する」

抵抗することなく差し出したヒヨンスの手首に、カシヤリと冷たい金属音が降ってきた。

「ヒヨンスッ！」

「愛してる」

ヒヨンスは肩越しに、もう一度ユリを振り返って言った。

「……君がいる世界が、僕の天国」

ナビは騒然となる学生たちのワルツの輪の中で、連行されていくヒヨンスの背中を見送った。

ヒヨンス自身が決めたことだから、もうどうすることもできない。

それでも、やりきれなくて堪らなかった。

「……ナビヒョン？」

気付いたら、まだミンホに手を取られたままだった。

「離せよっ！」

泣き出しそうなのを気付かれたくなくて、ナビは乱暴に手を振りほどこうとした。

しかし、ミンホはそんなナビの手を離してはくれなかった。

「何だよっ！ 離せって言ってるだろ」

「まだ終わってませんから」

「……何が？」

「ワルツ」

ミンホはすました顔で告げる。

「何言ってる……もうとっくに……」

「聞こえませんか？」

そう言われても、とっくに音楽は鳴り止んで、周囲は雑然とした学生たちの声しか聞こえない。

「よく、耳を澄ませてみて。僕には聞こえますよ」

そう言われてナビも意識を集中させると、学生たちのざわめきの間から、一定の強いリズムで講堂の屋根を叩く、雨の音が聞こえてきた。

「……あ」

思わず声を漏らすのと同時に、これまでの緊張の糸がプツンと切れて、ナビはなぜだか急に目頭が熱くなってきた。

ふっ、ふっ、と涙をこらえるために漏れてしまう声を聞かれたくなくて、ナビはミンホの胸を叩いて言った。

「……見るなよ」

するとミンホは、ナビの後頭部に手をやり、そのままグツと自分の胸にナビの額を押し付けた。

「見えません」

それは逆効果で、ナビはとうとう溢れてくる涙を止められなくなり、ヒックヒックとしゃくり上げ始めた。

「……聞くなよ」

ナビの頭に回っていたミンホの手が、優しくナビの髪を撫でる。

「雨の音で、聞こえませんか」

屋根を叩く雨の音を聞きながら、ミンホは肩を震わせて泣くナビを、いつまでも優しく抱きしめていた。

3 - 1 (前書き)

気が付けばいつも、雨雲を探していた……

澄みきつた空気の中で、パンの焼ける香ばしい匂いが漂う。

朝靄あさぎりが立ち込める庭の中で駆け回っていた少女は、朝露あさつゆに濡れた芝生に滑ってツルンツと転ぶと、ビックリしたように目を見開いて、しばらく固まった後にクスクスと笑い出した。

「チエリンー？ 幼稚園に行く前に、お洋服汚しちゃダメよ」

開け放したリビングの窓の向こうでキッチンに立っていた母親は、カウンタ―越しに少女の様子を見守りながら、手際よくスクランブルエッグを焼いている。

少女は露で濡れたお尻を擦りながら、クスクス笑いを止めることなくリビングに上がってきた。

「なあに？ 朝からご機嫌じゃない？」

母親もフライパンを持った手を起用に動かしながら少女に声をかける。

「昨日からアツパがいるから、嬉しいの？」

母親が言うと、少女はキャットと小さな手で顔を覆ってコクコクと頷く。そんな可愛らしい少女の様子に、母親もいつしか自然に笑顔になっていた。

「じゃあ、チエリンにお願い。アツパを起こしてきてあげて。一緒にご飯にしましょ」

少女は母親の言葉に大きく頷いて、部屋を飛び出していった。父親の寝室は、リビングの隣りだった。

少女は背伸びをしてドアノブを回すと、そっと大好きな父親の匂いが満ちた部屋の中に足を踏み入れた。

「……………アツパア」

少女は部屋に入って、キョロキョロと周囲を見回した。確かに父親の匂いが濃厚に漂っているが、そこに肝心の父の姿はなかった。ベッドの上では毛布が人型のまま盛り上がり、ついさっきまで確かにそこに彼が居たことを物語っている。

「アツパア……………」

少女の鼻先を、ヒヤツとした朝の湿り気を帯びた風が掠めていく。裏庭に続く窓が開け放され、レースのカーテンが揺れていた。

男は振り返り、自分の背後にそびえ立つ、鉄条網を張り巡らせた高い塀を見上げた。

丘の上にそびえ立つそれは、まるで中世の罪人を捕らえるための楼閣のようだった。七年もの長きに渡り、自分を閉じ込めてきた忌々しい塀だが、いざ出て行くとなると、不思議なもので何とも感傷的な気分になる。

ではもう一度、塀の中に逆戻りするかと問われれば、それは絶

対に固辞したいところなのだけねど。

男が塀から目を逸らし、再び歩き始めようと一步踏み出した時、カラカラと乾いた車輪の音が聞こえてきた。男が音のする方へ目を凝らすと、遙か先まで続く灰色の塀の向こうから、車椅子に乗った男が現れた。

カラカラカラカラ……

両手で器用に車椅子を操って、あっという間に男の元まで辿り着く。

「……何だよ、出迎えはお前だけか？」

男が鼻を鳴らしながら笑うと、車椅子の男は低い位置から男を見上げ、手が届く範囲の男の太ももをペシントと叩いた。

「贅沢言つな」

大袈裟に痛がって見せながら、男が笑う。

「お前、その車椅子、油切れてるんじゃないの？ 変な音してるぜ」
「知ってのとおり、ウチの組織は金がないんだよ。タダで貸してもらってるんだ。文句は言えんさ」

「へえ……誰かさんとは、エライ違いだな？」

男は皮肉気な笑みを浮かべながら、丘の上から眼下に広がるソウルの街を見下ろした。遠くにソウル市警も見える。

「車、何台来るかな？」

「え？」

「あいつだよ。あいつも、今日こことオサラバだろ？」

車椅子の男は一瞬深く眉根を寄せると、男の太ももに手を伸ばし、キュツと強く捻りあげた。

「痛てててっ！ 何すんだよっ！」

「比べて、どうする」

贅沢言うな。

最初に言った言葉を繰り返して、車椅子の男は仕上げにもう一度、ペシンツと男の腿を打った。

「……贅沢、ね」

男はツネられた腿を擦りながら、苦笑をこぼす。

「一台あれば充分だろ。車は丘の下に置いてきた」

「へいへい、感謝してますよ」

「あと、これ」

そう言うつと、車椅子の男は膝の上に置いたジェラルミンケースを男の胸に押し付けた。

「……これなしじゃ、いられないだろ」

「相変わらず、手回しのいい奴だな。助かるよ」

男はほんの少し複雑な笑顔を浮かべると、ジェラルミンケースを

抱え直し、車椅子の横に並んで歩き出した。

「なあ……ところでお前、どっかいい宝石店知らないか？」

車椅子の男は怪訝な顔で男を見上げた。

「宝石店だと？ シャバに出て、まず真っ先に行きたいところがそれか？」

呆れ顔の車椅子の男とは対照的に、男は無邪気な子どものような顔で頷く。

「あの時は、一つしか買えなかったから」

男は薄汚れたブルゾンのポケットに手を突っ込んで、隠し持っていた札束の感触を確かめる。

「……揃えてやらなきゃな」

車椅子の男は何も言わずに、自分の中の思い出に向かって満足そうに笑う男から目を逸らした。

パイプ椅子に深く腰かけて俯いていたヒヨンスは、軋んだ声を上げながら開く取調室のドアの音に顔を上げた。

「調子はどうですか？ コ・ヒヨンス」

入ってきたミンホは、少しやつれた感のあるヒヨンスの顔を見て、労わるような笑みを浮かべた。その後ろではチヨルスが、ミンホよりは難しい顔をしてヒヨンスを見ている。

ミンホは静かに自分とチヨルスの分の椅子を引くと、ヒヨンスの向かいに腰を下ろした。

「……………保釈申請が出ています」

座るなり、ミンホは単刀直入に切り出した。ヒヨンスは驚くでもなく、ただ落ち着いた様子でミンホの言葉を聞いていた。

「イ・ヒョンジュン氏ですよ」

それは、ユリの父親の名前だった。

「君と話したいって」

ヒヨンスは静かに首を横に振る。

「手紙も、受け取らないらしいな？ 何でだ？ 親父さんはもちろん、イ・ヒョンジュンはお前に特別に目をかけてきた、第二の父親みたいなもんだろう。あんなに心配してるのに、何で……」
「ユリは？」

我慢できずに口を挟んできたチョルスの言葉の途中で、ヒヨンスは言った。

「ユリには、何て？」

ヒヨンスの言葉に、ミンホもチョルスも一瞬黙り込んでしまった。だが、やがてミンホが言いにくそうに口を開いた。

「……申請は、出ていないよ」

初めから知っていた そんな表情で、ヒヨンスは微笑んだ。

「お前は取調べにも素直に応じてる。保釈したって、ヤクに手を出す危険も、証拠隠滅の恐れもない。高額の保釈金だつて払ってやるって人がいるんだ。お前さえ望めば、明日にでもこんなとこ出て行けるんだぞ」

理解できないと言うように、チョルスは熱くヒヨンスを説き伏せようとする。だが、チョルスが熱くなればなるほど、ヒヨンスは反対に落ち着いていくようだった。

「でも、ユリがない」

そう言って微笑むヒヨンスの表情は、穏やかそのものだった。満ち足りた表情で繰り返す。

「出て行く時は、ユリも一緒だよ。ユリの居る場所が、僕の居場所だから」

いままでずっと、下僕扱いされていたのにか？

喉まで出かかった言葉を、チヨルスはグツと飲み下す。

取調べの中でも、ユリやガンホの態度は酷かった。お互いがお互いへ罪の擦り付け合いをしているだけで、とても自分の過ちを悔いる様子はなかった。警察官を恫喝したり、ヒステリックに泣き喚く二人の取調べから戻ってヒヨンスの取調室に來ると、その落差に複雑な気持ちになる。

お前がそこまで献身的な愛を注ぐ価値のある女か？

チヨルスは本気でそう問いただしたくなる。

幼い頃から側において、他の世界に目を向けなかったから、愛することを義務のように感じているだけじゃないのか？

そんな残酷な問いかけをしたくなるが、ヒヨンスの凪いだ海のような穏やかな表情を見ていると、言葉を失ってしまう。

「……僕は、本当にいいんだ。後悔してない」

割り切れない思いに悶々とするチヨルスを察してか、ヒヨンスの方が氣遣うようにチヨルスに言った。

「それより、気になってることがあるんだ」

ヒヨンスは今度はミンホに視線を移し、そこで初めて表情を曇らせた。

「……ナビに、ゴメンって伝えて。嘘ついて、ゴメンって……ちやんと、謝れなかったから」

ヒヨンスの言葉にミンホは微笑んだ。

「気にすることはないでしょう。嘘をついたのは僕らも一緒、お互い様です。だけど、ちゃんと伝えておきますよ。あの人も、あなたをととても心配していました」

ヒヨンスは膝に手を置いた姿勢で、深く頭を下げた。

ナビが持つ生来の純粹さは、出会う者の心を深く捉える。それは、例え二週間という短い期間であっても変わらない。現に全てを達観したような向きのあるこのヒヨンスでさえも、たとえ愛するユリのためとは言え、ナビに嘘をついたことを気に病んでいる。

本当に、不思議な人だ。

ミンホはヒヨンスを通して、二週間で共に過ごしたナビの姿を思い浮かべていた。

取調室を後にしたチヨルスとミンホは、二人で並んで歩きながら捜査課へ戻った。

ドアを開けるなり、部屋の隅に置かれたテレビから流れる大音量に、二人は仰け反った。型の古い青少年課からのお下がりであるそのテレビは、昼のニュース番組を流していた。

「クムジャ姉さん！ 何でこんな……ボリユーム絞ってくださいよっ！」

チヨルスが耳を塞ぎながら文句を言うと、クムジャはテレビの音に負けないくらいの大声で言い返してきた。

「今日が何の日だか、あんた知ってて言ってるの？」

「何の日？ 俺の誕生日はまだずっと先……」

チヨルスが言い終わらない内に、クムジャの放ったボールペンがチヨルス目がけて飛んでくる。ミンホは頭を下げ、上手くその矢を避けた。

「まったく、これだから！ たまにはちゃんとニュースでも見て、勉強しなさい。ほら、ここに来て座りなさい。ミンホ君も」

結局クムジャには逆らえず、二人は渋々テレビを囲む、埃まみれのソファーにクムジャを挟む形で腰を下ろす。

ちなみにこれは、鑑識課からのお下がりだ。

クムジャはお気に入りのミンホが側に来てくれてご満悦の様子で、テレビのリモコンを取ると更にボリュームを上げた。

テレビには、見慣れたソウル市警の正面玄関が映し出されている。玄関から門まで、制服を着た警察官が真っ直ぐ一列に並び、もうすぐ姿を現すであろう人物を、微動だにせず待ち構えている。

門の外ではいつくもの黒塗りの車が並び、報道関係者の嵐のようなフラッシュが焚かれている。あまりの明滅ぶりに、画面を見ていたチヨルスは目がチカチカしてきた。

「何なんですか？ この騒ぎ」

「あんだ、本気で言ってるの？」

クムジャが呆れ返った声を出したのと同時に、正面玄関から一人の男が姿を現した。

居並ぶ警官たちが、一斉に敬礼の姿勢を取る。フラッシュの嵐は激しさを増し、画面は一瞬、男の顔すら判別できないような白い光の渦の中に飲み込まれた。

『ソウル地方警察庁長パク・ヨンチヨル氏、退任』

画面に大きなテロップが流れた。

「あ……」

「ようやく分かった？」

思わず声を漏らしたチヨルスに、クムジャは溜息を吐く。

「我らが大ボスの顔、知らないなんて言わせないわよ」

それは、若干41歳の若さで、韓国全警察機構の中、1名の治安總監に次いで、わずか4名しかいない治安正監の座につき、今日までの七年間、ソウル地方警察庁長として、事実上韓国国家警察の中枢の座に君臨し続けた、パク・ヨンチヨルの退任セレモニーの中継映像だった。

「やっぱり、凡人とは違うわよねえ」

クムジャがうつとりと画面に釘付けになる。

五十手前の男盛りであることに加え、若々しく澁刺とした容姿に、気品溢れる立ち居振る舞いで、大きな事件が起きてマスコミへ登場する度に、多くの女性の心を捉えていった。

「警察大学校主席卒業のエリートですもんねえ。辞め方もスマートだわあ」

「警察大学校なら、ミンホだって同じじゃないですか」

チヨルスの言葉に、ミンホがとんでもないと顔の前で手を振る。

「僕なんかとは比較になりませんよ。今でも学校では伝説になってるくらいです。在学中から文武両道で、鳴り物入りで警視庁へ入庁した、エリート中のエリートです」

「おまけに、家柄も申し分ないのよ。亡くなられたお父様も、元治安正監。普通、二世は煮ても焼いても食えない奴が多いのに、彼に限っては父親の上を行ってるわね」

「何で、姉さんがそんなに詳しいんです？」
「ゴシップ誌の情報を甘く見ないで」

悪びれもせずに胸を張るクムジャに、今度はチヨルスが呆れる番だった。

「上を行ってるって……治安正監の上って言ったら、総監しかないじゃないですか？ しかも、今日で退任なのに？」

チヨルスの問いかけに、待つてましたとばかりにクムジャはしゃべりだす。

「バカね！ あれだけの人が、何の目的もなく定年前にただ黙って退任するわけないでしょう？ 政界進出を目指してるのよ。第二のステージね」

「それは、確かな話なんですか？」

珍しく話しに食いついてきたミンホに、クムジャは胸を張る。

「間違いないわ。ゴシップ誌にも、確かな情報筋の話って書いてあったし」

「……何だよ、結局そっちのネタかよ」

「何か言った？」

舌打ちしたチヨルスを見逃さず、クムジャは目を光らせる。

「……いえ、何でも」

チヨルスが弱々しく首を振りながら、ソファアの上でにじり寄るクムジャから身体を逃がしていた時、捜査課の前の廊下を慌しく走

る足音が聞こえてきた。

パンツと勢いよく開いた捜査課のドアの先には、額に汗の玉を光らせたチヨルスたちの同僚が、青ざめた顔で立っていた。

「どうかしたんですか？」

ただならぬ様子にミンホが尋ねると、彼は肩で大きく息をしながら、乾いた声で告げた。

「……ホン・サンギョ警査が、拘置所内で首を吊った」

シーツを引き裂いて紐状にしたものを拘置所の窓枠に括りつけ、そこで首を吊っていたサンギョの遺体の側には、震える筆跡で書かれた遺書が残されていた。

死後、彼の身边調査を行った結果、ギャンブル癖が高じて膨らんだ多重債務に、首が回らない状況であったのが分かった。

彼が押収した薬物を粗悪品に加工して量産し、一儲けを企てる場所として明慶大学を選んだ背景には、学長の息子であるガンホを、高校時代に傷害罪で補導しておきながら、それを見逃してやった経緯があった。

被害者の少年は危うく失明しかける重傷を負わされたのだが、多額の金を積んで、最終的には被害届を取り下げさせている。

過去のその事件をチラつかせ、ガンホと組んで明慶大学内で薬物売買のための土壌を確立させたサンギョは、その売買で得た金を借金返済に回していた。

ガンホのもう一人の恋人であったノ・ミラが薬物使用による急死を遂げた際も、鑑識への賄賂提供で、事実を隠蔽しようとした。

各大学へ飛び火した大掛かりな事件には違いないが、サンギョの死によって、一連の『エデン』騒ぎは一応の収束を向かえた。

取調室の中で、相変わらずヒステリックに泣き喚き、取調官を手こずらせていたユリの元に、チヨルスとミンホは二人で出向いた。疲労困憊という様子の取調官とバトンタッチして、二人はユリの前に腰を下ろす。

「何よつ？」

ユリは興奮し、泣きはらした目でミンホを睨みつける。

「あなたの恋人は、落ちたぞ」

チヨルスが冷たい声で告げる。

「相棒だった刑事がな、自殺したんだよ。自分の悪事を全部暴露してからな。あなたの恋人も、もう言い逃れできないって悟ったのさ」

チヨルスの言葉に、ユリは大きな目を見開いて、深く息を吸ったまま動かなくなった。

「あなたは、どうする？」

チヨルスの後を引き取ってミンホが続ける。

「ヒヨンスはね……保釈申請を断りましたよ」

固まっていたユリの肩がピクリと動く。

「本当は明日にでも出て行けるのに、外にはあなたが居ないから、そう言っていました。あなたの居る場所が、自分の居場所だと」

唇が震え始め、それをグツと噛み締めると、ユリは横を向いてミンホから目を逸らした。

「……バカみたい。本当、バカな奴」

その姿勢のまま、やがてユリの瞳からは大粒の涙が溢れ出し、頬を伝って取調室のデスクの上に弾けて落ちた。

「昔っから、そうだった　パパは出来の悪い私より、賢いヒヨンスの方がお気に入りで……実の娘より、ヒヨンスが可愛いのよ……あいつは、それを知ってて……バカみたい……勝手に、負い目を感じてた……そんなことされたら、私が、余計惨めになるじゃない……」

ユリは子どものように泣きじゃくり、しゃっくり上げながら話し続ける。

「どんなにワガママ言っても、何でも聞いて……受け入れて……」
「あなたは、叱って欲しかったんですか？　ヒヨンスに？　それとも、お父さんに？」
「甘えるな！」

ピシヤリとチヨルスが言い放つ。

ユリは濡れた瞳のまま、ハツとしたように顔を上げた。

「いい加減逃げるのはやめて、自分で直接聞いたらどうだ？　いくら親子だってな、テレパシーがある訳じゃないんだ。恨み言でも何でも、口にしなきゃ分かんねえぞ」

啞然とした顔でチヨルスの言葉を聞くユリに、ミンホが告げる。

「……面会に来たいそうですよ。お父様が」

デスクの上に置いたユリの指が、小刻みに震えだす。

「どつするよ？ お嬢さん」

そんなユリの様子を見つめながら、チヨルスが静かに問いかける。

「一度くらい、面と向かって勝負したっていいんじゃないか？」

俯いた頬を伝う涙が、ユリの手の甲でいくつも弾ける。

チヨルスとミンホは、そんなユリの涙がひとしきり乾くのを、静かにその場で見守ってやった。

「もう戻ってくるなよ」

そう言って背中を押した、付き添いの看守を振り返って深々と頭を下げると、コ・ジョンヒョンはここ数週間を過ごした拘置所を後にした。

身柄を拘束されていたジョンヒョンにも、『エデン事件』の黒幕が警察官で、尚且つ自殺したこと、それにより現在署内は混乱の極みに達していて、自分のような小物への取調べどころではないのだという事実は、薄々分かっていった。

大きな渦の中に巻き込まれたようであり、それでいて最後には締め出されたような形になり拍子抜けした感は否めなかったが、これでもうこれ以上薬物が学生の間に出回ることではなく、ジスクの身が

危険に晒されることもない。

出所後は、どんなに跳ね除けられてもペク・ギョウンに頼み込み、ジスクを迎えに行こうと心に決めていた。

背中を丸めながら歩いていたら、不意にけたたましいクラクシヨンの音がして顔を上げた。

車線を隔てた向こう側に、黒い車が止められていた。

スモークのウィンドウが開き、中から軽薄なサングラスをかけた男が顔を出す。

「お勤め、ご苦労さま」

間の抜けた能天気な声の主の隣りでは、彼が出所後真っ先にその居場所を探そうと思っていたペク・ギョウンが、相変わらず眉間に深い皺を刻んだ鬼の形相で、ジョンヒョンに睨みを利かせていた。

「乗れ。早く」

ギョウンが不機嫌に顎をしゃくると、後部座席のドアのキーが開く低い音が響いた。

促されるまま、ジョンヒョンは慌てて車に駆け寄り、後部座席のドアを引いた。

その時だった。

「……あ……何で？」

それだけ言うのが精一杯だった。

車の中には、彼がこの半年、探し続けた人物。

片時も頭の中から離れることの無かった少女、ジスクが座って、戸惑いがちにジョンヒョンを見上げていた。

「感動の再会は後にしてさ、早く乗ってドア閉めてくれない？ せっかく効いてる冷房がもつたい無いでしょ？」

サングラスをずり上げながら、オーサーが苦笑する。ジョンヒョンはぎこちなく、ジスクの隣りに乗り込む。

低いエンジン音を立てて車が発進すると、車内は途端に気まずい沈黙に包まれた。

「あの……」

「えっと……！」

二人同時に口を開き、お互いが慌てて口を閉ざす。

「どうぞ、先に」

「いや、君から」

埒の明かない会話に介入しようとギョウンが大きく息を吸い込んだ瞬間、オーサーは「邪魔するな」とギョウンの腿をつねった。

「どうして、ここに？ 今まで一体どこに……」

「先生が助けてくれたの。クスリを抜くために、チエジユド濟州島でリハビリを

チエジユド「濟州島？」

そんな遠い場所です。

どつりで、ソウル中を探し回っても足跡一つ見つからない訳だ。

「先生から全部聞いたの。あなたが私を助けるために、ずっと私を探してくれていたって。自治会とは関係のないあなたが、警察に捕まってるまで」

なぜ？

その目は暗に、ジョンヒョンにそう問いかけている。

答えなど言うまでもない。

それでも、口にしなければ決して伝わらないことがある。

「……それは」

ジョンヒョンがしどろもどろになりながら口を開きかけたその時、

オーサーの視界の隅で、バックミラーにキラリと何かが反射するのが見えた。

サングラスの中の目を細めて、オーサーはハンドルを握ったままミラーの中で後方へと流れていく景色に意識を集中させる。

カメラのレンズのように絞られたオーサーの目が、反射した物体を捕らえた瞬間、オーサーは急ハンドルを切った。

「伏せろっ！」

鋭く叫ぶのと、車が反対車線を越えて崖沿いのガードレールに激突する音、そして、キュンツとごく小さく空間を引き裂く音が車内の空気を震わせるのはほぼ同時だった。

「一体、な……」

衝撃で開いたエアバックに顔を埋めたギョウンがぐぐもった声を上げる。その時、後部座席から鋭い悲鳴が上がった。

「……あ……ああ……ジョンヒョ……」

驚いて振り返ったオーサーとギョウンの目に、両手を血塗れにして、ガチガチと歯を鳴らすジスクが映った。

その彼女の膝元には、グツシヨリと後頭部を血に染めたジョンヒョンが横たわっている。

ジスクの手やジョンヒョンの頭が血で汚れていることを覗けば、それは睦まじい恋人たちが、膝枕で甘え戯れている光景と何も変わ

らない。

車内を覆いつくす、生臭い血の匂いさえ無ければ。

ギリツと唇を噛み締めて、ギョウンは向き直ると、シートベルトを外し、蹴破るように助手席のドアを開けた。

「止めろっ！ 外へ出るなっ！」

オーサーがギョウンの首根っこを捕まえて、急いで車内へ引きずり戻す。

キュンツと再び空気を裂く音がして、まだ車外に残っていたギョウンの足先を掠めて、アスファルトを抉った弾丸が火花を上げた。

「上から狙われてる。今車外へ出たら、相手の思う壺だ」

そう言った傍から続けざまに銃声が鳴り響き、ボンネットやフロントガラスに銃弾の雨が降る。

ハンドルに顔を埋め、身を低くして鉛の雨に耐えていたオーサーが、ようやく雨の切れ間を見つけ顔を上げた時、自分たちがたつた今降りて来た、拘置所のある山の上の木々の合間から、ひっそりとUターンする白い車の陰が見えた。

シャツの下、生身の腰に当たる銃の感触を確かめながら、オーサーは一気に車外へ飛び出す。

去っていく車のタイヤを狙って引き金を引く。

「ツクソ、届かない」

歯噛みするオーサーを嘲笑うかのように、またもやキュンツと小

さな音を立てて飛んできた銃弾が、オーサーの右頬を掠めた。

「……ッ！」

オーサーは咄嗟に開け放った車のドアの陰に身を隠す。

その際に、頭上で不穏な動きを見せていた白い車は見えなくなっ
てしまった。

「……ジョンヒョン……いやよ……目を開けて……」

車内からは、ジスクの悲痛な泣き声が聞こえてくる。

オーサーは息を乱したまま、車体に身体を預けて天を見上げる。

初めから、自分たちが今日ジョンヒョンの身柄を預かりに来るの
を知って、張られていた。

頬を掠めた銃創が、焼けるような熱さを伴って、ドクンドクンと
脈打っている。

一体なぜ？

防げなかった。

膨れ上がる疑問とともに押し寄せる自責の念が、脈打つ傷口と連
動してフツフツと込み上げる怒りに変わる。オーサーは手の中の銃
をきつく握り締めた。

長い梅雨が明けた。

韓国を代表するビーチ、釜山^{プサン}の海雲台^{ヘウンデ}海水浴場では早くも海開きが行われたと、今朝のニュースで報道されていた。

ミンホは捜査課の自席に座りながら、窓へと目をやり、カラッと晴れ上がった初夏の空を見上げる。

『ペニーレイン』を追っていた時、チョルスに冗談交じりに言われて作成した『逆さにしたテルテル坊主100個』は、未だに警察署の軒先にぶら下がっている。

風が吹くと、その100個は仲良く並んで身体を揺らし、まるでダンスを踊っているようだ。

不器用なダンスは、あの雨の夜、明慶大学での誰かさんのラストダンスを思い起こさせる。

何度も何度も足を踏まれた。

グハハーン、グハハーン、グハハーン……

不意に尾を引くようなあの独特のハスキーボイスの笑い声が聞こえてきた気がして、ミンホはブルツと頭を振った。

窓辺の逆立ちしたテルテル坊主にもう一度目をやると、今度は一体一体がナビの顔に見えてきた。

「……っ?!」

思わず立ち上がるミンホに、周囲が驚いたように振り返った。

「どづしたの？ ミンホさん」

「……あ、いえ……何でも。すみません……」

居た堪れない思いで再び着席するミンホを、周囲は奇異な物でも見るような目つきで見ているのが分かる。

ミンホは頬が熱くなるのを感じながら、恥ずかしさを誤魔化すように椅子に深く腰かけ直した。

「ねえ、これ……もういい加減片付いたらどうかしら？ 雨ざらしになって汚れてるし」

その時、窓辺のテルテル坊主を指して、クムジャが言った。

「明日、燃えるゴミの日だし……」

そう言いながら、窓辺のテルテル坊主に手をかけようとしたクムジャの元へ、思わずミンホは走り寄っていた。

「待って！ 姉さん」

突然手首を掴まれたクムジャは、驚いてミンホを振り返る。

「姉さんに、そんなことさせられません。時間のある時、僕が片付けますから……」

「まあ！」

単純に自分を氣遣ってくれたのだと思つたクムジャは、頬を染めて喜んだ。ミンホは氣まずそうに微笑みを返しながらクムジャを窓辺から追い払うと、開いた窓から、再び空を見上げる。

あんなに毎日ドンヨリと重くのしかかるような雨雲に覆われていたのが、信じられないような晴天だった。

若者であれば余計に、解放的になり遊びに繰り出したくなる、ご機嫌な夏の到来だと言つのに、ミンホの口から漏れるのは溜息ばかりだった。

無意識に、雨雲を探している自分がいる。

雨の向こうに霞む、神出鬼没の黒テント。

もう追う必要の無くなった『ペニー・レイン』。

事件の解決は喜ばしいことで、面倒事が一つ減つた筈なのに、ミンホはなぜかポツカリと心に穴が開いたような気持ちになっていた。

「おい、どうした？　ポーっとして」

その時、急に背後から肩を叩かれてミンホは飛び上がった。

「窓の外に、何かいいモンでも見えるのか？」

ミンホの肩を抱きながら、チョルスも一緒になつて窓から顔を出す。眼下に広がるのは、激しく行き交う車の流れだけだった。

「何だよ。セクシーな姉ちゃんでもいるのかと思つたのに」

ブツブツ言いながら、チョルスは早くも飽きたとでも言いたげに窓から頭を引つ込めた。

「……チヨルスヒヨン」
「ああ？」

窓に背中を預けてもたれるチヨルスに、ミンホが恐る恐る尋ねる。

「……あの人たちは、どうしているんでしょうか？」

「あの人たち？」

「……『ペニー・レイン』の」
「ああ」

ミンホの言いたいことが分かって、チヨルスは頷いた。

「相変わらず、好きにやってるんじゃないか。気のみ気のまま、自由に飛び回って。ひよっとしたら、ソウルには居ないかもしれないな」

ソウルにいない

何気ないチヨルスの一言に、ミンホの胸がザワザワと音を立てる。そんな自分の反応に、自分自身が一番動揺する。

「まあ、縁があればそのうち、またどっかで出くわすさ」

縁があれば。

確かにその通りだった。

逆に言えば、もう偶然以外に『ペニー・レイン』に出逢うことはない。

「おいっ！ チヨルス、ミンホ！ 出動だ」

その時、電話を取った捜査官の一人がチヨルスとミンホを振り返って言った。

「長安洞の風俗店がシツポだしやがった！」

チヨルスの目がスツと細められ、刑事のそれに変わる。

それは、数日前から追っていたソウルの歓楽街の代名詞とも言うべき長安洞での、地下営業の風俗店の取り締まりだった。経営母体が裏でマフィアに繋がっているとの情報を掴み、慎重に捜査を重ねていた。

今日は店に、そのマフィアの幹部が訪れているらしい。

一気に摘発するチャンスだった。

「行くぞ、ミンホ！」

「はいっ！」

呆けていた自分に喝を入れなおし、ミンホはチヨルスと共に長安洞へ向かった。

色とりどりのネオンが揺れる長安洞は、全盛期の頃と比べると明かりの数も消え、昔ほどの活気は無くなっていたが、今もソウルを代表する歓楽街として、清濁入り乱れた地下社会が形成されている。問題の風俗店の前では、既に駆けつけた何名もの警察官と客や従業員などが揉み合い、大変な騒ぎになっていた。

あられもない姿の女の写真を載せた看板が倒れ、飛び散ったガラスが道路の上で煌いていた。

チョルスはそんなガラスを踏み分け、人ごみを掻き分けながら、ズンズンと店の奥に進む。ミンホもチョルスの姿を見失わないように後を追った。

「ちくしょうっ！ 離しやがれっ！」

「触るなっ、このっ！！！」

店のあちこちから聞こえてくる罵声。バスタオル一枚を胸に巻いた姿のまま、部屋の隅で一塊になって震える女たち。

表向きはマッサージ店であり、その実態は春を売っているという、よくある地下営業店だったが、売上金の一部がマフィアの資金になっているとあっては、見過ごすわけにはいかなかった。

粗末なカーテンで仕切られたいくつも並んだ個室を、チョルスとミンホは端から確認していく。

その時、勢いよくシャツと音を立てて開けたカーテンの隙間から、少年が一人飛び出してきた。

「……っつー!!」

少年は頭からチヨルスの腹に突っ込むと、そのままチヨルスをなぎ倒し、自分は慌てて立ち上がると、脱兎の如く駆け出した。

「……ミンホッ!! 追えっ!! 逃がすなっ!!」

苦しげに呻きながらも、チヨルスが鋭く指示を出す。

ミンホも弾かれたように少年の後を追って駆け出した。

店を出て、少年は細い路地を自在に駆けていく。

息を切らせながら、逃すまいとミンホも必死に後を追う。毒々しいネオンに反射して、視界の隅で少年の鮮やかな金色の髪が揺れる。

何本目かの路地を曲がった時、不意に少年の足が止まった。

路地の先端は、行き止まりになっていた。

「……もう、追いかけてこは、終わりですよ」

追いついたミンホが、ジリジリと少年の背中に近付いていく。

「諦めて、こっちへ来なさい。君みたいな年少者に、手荒なマネはしたくない」

そう言って手を差し出したミンホに向かって、少年は路地の脇に積まれていたビールケースを投げつけた。

「抵抗しても無駄ですっ! 大人しく、言うこと聞きなさいっ!」

ミンホは次々に飛んでくるビールケースを避けながら、一気に少年との間合いを詰めて、遂にその手首を掴んだ。

その時、金色の髪の下に片耳だけつけたピアスが、路地から漏れるネオンの明かりに反射してキラリと輝いた。
その瞬間、ミンホの鼓動がドクンツと跳ね上がる。

「……っあ」

振り返ったのは、ニキビ痕の目立つ、まだ二十歳にも満たないであろう少年だった。少年は一瞬ミンホが力を緩めた隙を見逃さず、その手を力いっぱい振りきると、再び路地を逆走して、ネオンの街へと消えた。

少年の背中を見送りながら、ミンホは動けなかった。

一瞬、躊躇した原因は分かっていた。

少年が、ナビの姿に見えた

「馬鹿野郎っ!!」

腹の底から搾り出されたようなチヨルスの怒声が、捜査課の部屋中に響き渡る。

「……あ……痛てて」

だがそのすぐ後、情けなく腹を押さえながら身を擦る。そんなチ

ヨルスを、クムジャが呆れ顔で支えてやる。

「行き止まりまで追い詰めて、取り逃がすたあどういうことだよ？
ああ？！ 何か理由があるなら聞いてやるから、言ってみろ」

「……いえ。気が緩んでいました」

「気が……緩んでた、だと？」

ミンホの言葉は、チヨルスの逆鱗に触れた。

「ふざけるなよっ！！ お前っ！！……あ……痛ええええっつ！！」

怒りで顔を真っ赤に染めたチヨルスは、今度は痛みで更に顔の赤みを増した。

「ちょっと、あんたも落ち着きなさいよ。ひとまず、座つたら？」

クムジャに手を貸してもらいながら、チヨルスが椅子に腰を下ろす。ミンホが手を差し出すと、チヨルスは邪険にその手を振り払った。

「現場で気い抜くなんて、随分お偉くなつたもんだな。そんな奴とはコンビなんか組めねえな。お前、刑事向いてないんじゃないの？」

皆の前で激しく叱られ、ミンホは唇を噛み締めながら黙ってチヨルスの言葉を聞く。

「出てけ。今は顔も見たくない」

チヨルスが吐き捨てると、ミンホはグッと握った拳に力を入れ、そのまま静かに頭を下げた。

「……すみませんでした」

短くそう言うと、ミンホは言われたとおりに捜査課のドアに向かって踵を返した。

「ミンホ君っ！」

「放っとけ！」

後を追おうとするクムジャを、チヨルスが鋭く止める。パタンと扉が閉まり、ミンホは一人部屋を出て行った。

「……ミンホ君」

警察署の屋上からソウルの街を見下ろしていたミンホの背後から、クムジャが声をかけた。

「……姉さん」

振り返ったミンホは気まずそうに目を逸らしながら、クムジャに向かつて頭を下げた。

「……さっきは、すみませんでした」

クムジャはミンホの横に並んで、一緒に外を歩き交う人や車の波に目を落とす。

「……チョルスのことなんだけど」

「はい」

「誤解しないでほしいの」

思わず顔を上げて覗いたクムジャの横顔は、いつも勝気で、自分たちをコテンパンに言い負かしている手強い姉御の顔ではなく、慈愛に満ちた優しい表情をしていた。

「荒っぽくて、口も悪いし手も早いけど、根は本当にいい奴なのよ。ただ、致命的に不器用なだけ。さっきもあんなに怒ったのは、犯人

を取り逃がしたことだけじゃないのよ」

クムジャが困ったような笑みを浮かべてミンホに向き直る。

「勿論、それもあるけど、チヨルスが一番腹を立てたのは、ミンホ君自身に、命の危険があつたかもしれないってことよ。それを分かつて欲しかったのよ。現場では、自分で自分の身を守るしかないことばかりだから」

ミンホはうな垂れるしかなかった。

その通りだと思った。

「あなたが来る前、チヨルスとコンビを組んでた先輩が大怪我したって話したことあつたわよね。チヨルスは入庁した時からそのソ先輩にベツタリでね、それこそ金魚のフンみたいに、どこにでも付いて回つてた。だから、あなたとコンビを組めつて上に命令された時も、随分駄々こねて渋つたのよ。だけどね、あなたとこうして事件を追う中で、チヨルスは変わったと思うわ。粗野なところは相変わらずだけど、あなたに対して先輩としての責任をちゃんと感じてる。ソ先輩に教わつたことを、あなたに伝えようとチヨルスなりに必死なんだと思うわ」

分かつてやってね

そう言うと、クムジャはフワリと優しい笑顔を浮かべた。

ミンホは、他の場所では『狂犬』と恐れ罵られながらも、捜査課の中ではクムジャを始めとした理解者に囲まれ信頼を得ている、一人の刑事としてのチヨルスの筋の通つた姿に改めて尊敬の念が生まれるのを感じていた。

「……ごめんなさい。ありがとございます、姉さん」

ミンホがそう言って頭を下げると、クムジャはいつもの姉御の顔に戻って言った。

「お腹が空いて、気が立つてたのもあると思うわ。子どもと一緒にだから。降りてくるなら、お昼過ぎがチャンスよ。あいつの機嫌もいい加減直ってるでしょ。ニワトリと一緒にだから、怒りも持続しないわよ」

そう言ってカラカラ笑うと、クムジャはミンホを置いて屋上を後にした。

クムジャの背中を見送ってから、ミンホは屋上の柵にもたれて、晴れ渡った空を見上げる。

そう、刑事が現場で気を抜いていい筈がない。

もういい加減、気持ちを切り替えなくては。

ミンホは自分の気持ちを整理するために『心ここにあらず』の原因を作り出した張本人の姿を、青い空に思い描いてみる。

明慶大学のダンスパーティーの夜、連行されるヒヨンスを見て泣くナビを思わずこの腕に抱きしめた。

見慣れない『女装姿』^{ドレス}に、正直に言う気持ちと気持ちが混同していた感も否めない。

あの人は“男”だ。それはちゃんと分かっている。

だがあの時は、そうせずにはいられなかった。

抱いて、あの華奢な背中を落ち着くまで擦ってやりたかった。

意地っ張りで、可愛げがなくて、言動も容姿も何もかも子どもみたいなくせに、やたらと年上であることを誇示しようとする。見ていると危なっかしくて、ハラハラして、イライラして、放っておけなくなる。

何をしでかすか分からないから、常に見ていなくちゃ、その背中を視界に納めていなくちゃ、そんな調子で二週間を過ごしたから、目を煩わせるその存在が不意に無くなってしまつと、どうしていいか自分でも分からなくなつた。

全ての捜査を終え、店を畳んだ状態での『ペニー・レイン』^⑤つまり、キャンピングカー の前でチヨルスと二人で別れの挨拶をした時、ナビは自分の爪先に視線を落としたまま、なかなか顔を上げようとしなかつた。

「……………協力、ありがとうございました」

仕方なく、ミンホの方から先にナビに声をかけた。ナビは唇を尖らせながら爪先を見つめたままだったが、やがてポツリと聞き取れない程の小さな声で呟いた。

「……………結構、楽しかったよ」

そう言つと、突然ガバツと顔を上げ、ニカツという効果音がピツタリの屈託のない全快の笑顔で言った。

「またなあっ!!」

耳元で炸裂した鼓膜がおかしくなるくらいのポリウームのハスキ
ーボイスにミンホが目を白黒させている隙に、ナビはジェビンの待
つキャンピングカーにさっさと乗り込んでしまった。

その横を、灰色猫の“オンマ”が、まるでミンホを小馬鹿にする
ような優雅な仕草で通り過ぎ、当然という顔をしてナビの膝の上に
収まった。

気のせいか、意地の悪い目をしたこの猫は『ペニーレイン』と共
に着いていける筈も無いミンホを助手席の上から見下ろして、「諦
める」と告げているように見えた。

砂埃を巻き上げて、キャンピングカーが走り出す。

「ナビヒョン！！」

思わず叫んで開いた車の窓を見上げたミンホに、ナビはあの独特
の声で笑いながら、手を振った。

またな？

簡単に言うけど、本当に『また』会える？

雨の時にしか、姿を現さない。

簡単に捕まえられない『ペニーレイン』。

雨と一緒に生きるジェビンとナビ。

捜査を終え、ジェビンの隣りに帰って、心底嬉しそうに笑うナビ。
二週間の間、自分にそんな顔を見せることはなかったのに。

何に對してか分からない悔しさと、心に穴があいたような寂しさを
抱え、ミンホもまた日常へと帰っていったのだった。

「……チヨルスヒョン」

資料室のビデオルームにチヨルスがいるという話を聞き、ミンホはチヨルスの後を追った。チヨルスはヘッドフォンを嵌めて、今回の風俗店摘発で押収したビデオテープの一つをチェックしていた。

「チヨルスヒョン」

先ほどよりも少し大きな声で呼びかける。チヨルスは回転式の椅子を回してミンホに向き直ると、ようやくヘッドフォンを取ってくれた。

「……何だよ？」

相変わらず、正面からその鋭い目で見られると訳もなく緊張する。だが、ここで引いてはいけなかった。

「……本当に、申し訳ありませんでした」

深く深く、頭を下げる。

「チヨルスヒョンの言う通りでした。刑事として、あつてはならない行動でした」

狭いビデオルームに響き渡るミンホの固い声音に、頭を下げられているユノの方が面食らう。

「何だよ、突然……」

「僕、ちゃんと一人前になりたいです。チヨルスヒョンみたいな、一人前の刑事になりたいんです」

ミンホは頭を下げたまま、真剣な口調で言い募る。

「俺も別に……一人前なんかじゃねえよ」

気恥ずかしさを隠すように、モゴモゴとチヨルスが答える。

「二度と、現場で氣い抜くな」

「はい」

「俺とこれからもコンビ組むつもりだったら、『僕ちゃん』は卒業だぜ。一人前の男になれよ」

「はいっ！」

気合を込めたミンホの返事に、チヨルスはニヤツと口角を上げて笑った。

「じゃあ、早速仕事だ」

そう言うと、チヨルスは先ほどまで自分がかけていたヘッドフォンを、ミンホに向かって放り投げた。

「ビデオ中に映りこんでる、顧客の身元の割り出した」

ミンホは受け取ったヘッドフォンを頭にセットすると、チヨルスの隣りに腰を下ろして、モニターを食い入るよう見つめた。

東の空が白み始めた頃、漢江ハンガンのほとりに、闇と同じ色をした黒い車がそつと横付けされた。

今は小さな骨壺の中に納まった男を胸に抱いた少女は、白い韓服姿のまま、海へと向かう漢江の早い流れの前に立った。少女の髪には、喪帳である白いリボンが結ばれている。

「直系家族でもないのに」

韓国における葬式のしきたりである、直系家族が身につける正装をしたジスクの後姿を目で追いながら、ギョウンが呟く。

「天涯孤独の身の上らしいよ。工業高校を卒業する頃、両親をいっぺんに亡くして、親戚とも絶縁状態らしい。葬式を出してやる家族もないんだ」

「笑っちゃう。陳腐なドラマ並みに、不幸なヤツ」

だがそう吐き捨てるギョウンの声は、嘲笑どころか涙を含んで湿っていた。

「あの射程距離……」

ボソリと呟いたオーサーの言葉に、ギョウンが振り返る。

「……素人の腕じゃない」

「だとしても、何であいつが？ あんな、下っ端の、ガンホと直接

会ったこともないようなあいつが何で殺されなきゃならねんだよ
！」

「だからそれが、不可解だって言ってるんだよ」

激昂するギョウンを宥めるように、オーサーは努めて冷静な声で
言う。

「今更だけど、こんなに早く釈放されたのも考えてみればおかしい
んだ。仮にもジョンヒョンは警官を一人刺してる。命に別状は無い
にしても、相手は重傷だ。『エデン』事件とは別にして、簡単に拘
留が解かれるような罪じゃない」

「まさか……」

自身の思い当たった恐ろしすぎる仮定に、ギョウンが思わず言葉を
詰まらせる。

「最初から殺すつもりで、わざと釈放を？」

震えるギョウンに、オーサーは無言で頷いて見せる。

「俺たちに知られたくない何かを話される前に、あの山の中でケリ
をつけるつもりだったんだ」

「知られたくない何かって何だよ？ あんな奴が、そんな大層なこ
と、知ってるわけ無いじゃねえか」

ギョウンは拳を握り締め、悔し涙が頬を伝った。

小さな骨の粉に変わったジョンヒョンが、ジスクの手のひらから
サラサラと風に乗って、漢江の河流に向かって流れていく。

「好きだから、だよっ！」

その時突然、ギョウンはジスクの背中に向かって叫んだ。

「死ぬ直前に、あんたに言いかけてただろ。大学生でもないくせに、恋人もいるあんたを助けるために、ヤクの密売に首突っ込んで、警察に捕まった理由なんて、それしかないじゃねえか！」

振り返ったジスクの瞳に、新たな涙が溢れだす。

ジョンヒヨンの骨が舞うのと同じ方向に、彼女の黒髪が流れ、涙に濡れた頬に張り付く。

「バカな奴……詰まんねえ死に方しやがって……本当に、バカな奴だよっ」

胸に広がる理不尽な怒りを持って余して、ギョウンは身体の向きを変えると、思い切り車のタイヤを蹴飛ばした。いつもなら叱りつけるところだが、泣きながら拳で幾度もボンネットを殴りつけるギョウンを、オーサーは今日だけは何も言わずにそっから見守ってやった。

* * *

ガシャガシャ、ワシャワシャ……ザーザー。

鼻の頭に洗剤の泡を乗せながら、ナビは猛烈なスピードで皿を洗っていく。対面カウンターには新聞を広げながら、コーヒーに口をつけているジェビンの姿がある。

ここは、ソウル北部に位置する北漢山国立公園の麓。ソウル市街から地下鉄・バスを乗り継いで簡単に行ける距離にあるため、人気の登山コースになっている。

都市部と違い、紛れ込んでくる酔客の数も少ないので、ちょっとした休養も兼ねて、ジェビンたちはこの自然豊かな地に一週間ほど前から滞在していた。

今日はよく晴れ渡り、北漢山ブッカサンの緑も萌えるように鮮やかに見渡せる。

梅雨の間中開店して、水分をふんだんに吸ってしまった黒テントを、青空の下で組み立てて、こうして日干しすることで湿気抜きをしていた。

「ふああああああ」

ジェビンが口元を押さえることもなく、せつかくの美貌が台無しになることも厭わずに、大あくびをして目尻に涙を浮かべた。

「ナビは、働き者だねえ」

寝ぼけまなこを擦りながら、ジェビンが感心したように呟く。

「兄貴は、怠け者だねえ」

ナビが笑いながら、濡れた手でジェビンに向かって雫を飛ばす。

「冷たっ！ ちょっと、酷いよ。ナビッ！」

こんな兄弟同士の他愛ない戯れを、突然割り込んだドアベルの音が中断させた。

「あー！」

「……何だ、お前か」

二人同時に振り返ったナビとジェビンは、戸口に佇む見慣れたシルエットに、対照的な反応を見せた。

「や、お久しぶりー」

ヒラヒラと振りながら、勝手知ったる顔でオーサーはジェビンの隣り、ナビの対面のカウンター席に腰を下ろした。

「失礼ですがお客様。本日は開店休業日ですね。誰が、勝手に入って良いつて言ったよ？」

冷たく横目で一瞥するジェビンを物ともせず、オーサーはニッコリ微笑む。

「そうそう、だからね。ナビヤをデートに誘いに来たんだよ。休み

の日ぐらい、

皿洗いなんかオーナーに任せて、俺と登山デートに行こうよお」

「先生に登山する体力なんてあるの？」

「何言っちゃてんの？ 俺、こっに見えてもムキムキよ。兵役だってちゃんと勤めたモンね。お望みとあらば、ナビにだけは見せてあげるよ？ だから、このまま山の奥へ……」

言いかけたオーナーの頭を、丸めた新聞紙がスパーツと小気味良い音を立てて弾く。

「国立公園で、遭難したい？」

絶対零度の笑みを浮かべて、ジェビンが微笑む。

「まったく、相変わらず激しいなあ」

オーナーは叩かれて乱れた髪を手串で整えながら舌を出した。

「はいはい。筋肉は、オーナー様には適いませんよ……調子に乗りました」

「分かればよろしい」

カウンターに額をつけるオーナーの頭をポンポンと丸めた新聞紙でつつくジェビンの様子を見ながら、ナビがクスクスと笑った。

「今までずっとどこにいたの？ ソウルを離れる時も、絶対ついてくると思ったのにさ」

「あれ？ 俺がいなくて寂しかった？」

懲りずに身を乗り出すオーナーの襟元を掴んで、ジェビンが引き

戻す。

「そんなんじゃないけど。何かあったの？」

あつさり否定しながらも、ナビは少し心配そうにオーサーの顔を覗き込んだ。

「それに、その頬つぺた。怪我したの？」

オーサーの青白い頬には、大きく目立つ絆創膏が貼られている。

「どうせ、女にやられたんだろ」

ジェビンが呆れ顔でそう言うと、オーサーは絆創膏の上に手を沿え、わざと可愛らしく首を傾げた。

「そうなのお。色男は辛いわぁ」

「何だよ、心配して損した」

ナビが呆れ顔で肩を竦める。

「そんなことばかりやって、いつか女の人に刺されても知らないからね」

「だから、これからはナビ一筋でいくからー」

「お断りー！」

「やん、相変わらずツレないねえ。でも、そこが好きー！」

「おい、いい加減にしとけよ」

いつもの軽口の応酬が始まると、あつという間にそこは普段の『ペニー・レイン』の空気に変わる。テントを開く場所が変わっても、

ナビとジェビン、フラリと気まぐれに現れるオーサーがいれば。

「それにしても、ナビ。随分手際が良くなったよね」

ジェビンは新聞を畳んでナビに向き直ると、先ほどオーサーに向けていたものとは打って変わった、優しい笑顔を浮かべて言った。相変わらず、洗剤やら水やらはシンクの周囲や足元に跳ね飛ばされ、後でジェビンが拭き掃除をしなければならぬ状態だったが、短時間に処理できる皿の量が格段に増えた。

「ああ、これね！ コツがあつてさ……」

ナビは褒められたことでパアアツと顔を明るくさせて、言った。

「バケツを二つ用意してさ、汚れた皿を入れたやつ、隣りにはキレイな水を張ったやつ。どんどん洗って、キレイな方に入れていけば、ゆすぐ時間も半分で済むんだ」

「へえ、ナビにしては随分効率的な方法思いついたね」

「ナビにしてはって、何だよっ！」

思わず本音が漏れたオーサーに向かって、ナビは先ほどジェビンに食らわせたのと同様の、水しぶきの攻撃をお見舞いした。

「いやいや、でも物事を効率的に進めてくのは大事なことよ」

「あいつも同じこと言ってたよ！ 二言目には『ナビビヨン、頭使いましょうよ』って、生意気に……」

すると、突然ナビがハツとしたように口を噤んだ。

「ん？」

気付いたオーサーが先を促す。

「……何でもない」

ナビはキュツと唇を結んで、オーサーから目を逸らした。怒ったように、ガチャガチャと洗い物を続ける。

「『可愛い子には旅をさせよ』いっせって諺、本当だったね」

ジェビンがそんなナビをフォローするように、優しく微笑みながら言った。

「成長してくれて、俺は嬉しいよ」

ナビはわずかに頬を染めて、また忙しなく洗い物に没頭した。

*

「ナビー！ 飯にしよう」

午後一時を過ぎてから、遅い昼食の準備を整えて、ジエビンがナビを呼んだ。洗い物の後、ジエビンに許可を得て、オーサーと二人でテントの前で自前のサッカーボールでリフティング対決をして遊んでいた二人は、ジエビンの声に一齐に振り返った。

「天気がいいから、たまには外で食べようぜ。景色もいいし」

そう言って、ジエビンは簡単な折りたたみ式のテーブルと椅子のセットをテントの中から運び出してきた。

「やったー、俺もう腹ぺこぺこ」

素早く駆け寄ったオーサーに、ジエビンが素っ気無く言う。

「あれ？ いつ先生もお呼びしましたっけ？」

「お前まで、つれないこと言わないでよ。老体に鞭打って、ナビヤの相手してあげてたじゃない」

「ナビの相手は、お前が好きでしてたんだろ？」

冷たいジエビンの言葉に、オーサーは大げさにうなだれてみせる。

「俺にも、メシー！ ジェビンのメシー」
「もう、分かったよ。仕方ないな」

なぜかナビがそれに答え、オーサーの分の皿もテントの中から運んできてやる。

みんなテーブルに着いたところで、ジェビンに倣って皆で手を合わせる。

「いただきまーす！」

青空の下、郊外の澄み切った空気の中で食べるジェビンの手料理は最高だった。

ナビがジェビンお手製のチャプチェ（韓国風春雨の炒め物）を口に運びながら、ウーツと感嘆の声をあげる。

「やっぱり、兄貴ケムンの料理は最高だねっ！ ほうれん草でしょ、にんじんでしょ、もやしでしょ、牛肉の千切りでしょ？ チャプチェは具が多いほど、高級感が増すでしょ？ あいつのチャプチェなんて、麺ばっかで……」

言いかけたナビは、そこで再び口を噤んだ。

オーサーはニヤニヤ笑いながら、ナビを見つめた。

「あいつ……って？」

知っていながら、ナビの口から言わせたくてオーサーはその先を促す。

「刑事さんだろ？ あの、若い方の。えっと、名前は……」

ジェビンもオーサーのからかいに乗ってきた。

「……ミンホだよ。ハン・ミンホ」

ナビはニヤニヤ笑う二人から目を逸らして、自棄になったように吐き捨てると、チャプチェを口に運ぶ。

「あの刑事さん、料理なんかするんだ？　へえ、意外だなあ。ナビのために、作ってくれたりしたんだ？」

「だから、ジェビニヒョンの料理に比べたら、全然美味しくなんかなかったよ！　あいつ、大食いだから、量食べられればいいんだ。味オンチなんだ」

「あんなにスマートなのに、大食いなの？」

二人が寄つてたかつてミンホのことを聞いてくるものだから、ナビはついにチャプチェを全部かつ込んで、席を立てってしまった。

「ご馳走さまっ！！」

自分の分の皿を持って、逃げるようにテントに駆け込む。

その時に、思わずテントの入口の縁に足を引っ掛けて大きくよろけた。

ジェビンとオーサーは、そんなナビの背中を眺めて、二人で顔を見合わせて笑った。

「……全く、素直じゃないんだから」

「そんなところが可愛いとか、思ってるんだろ？　どうせ」

「あれ、バレたあ？」

ジェビンがゴチンツとオーサーの頭を小突いた。

「痛てて……まあ、冗談はこれくらいにして」

ナビの背中がテントの中に完全に消えるのを待ってから、オーサーが口を開いた。

自然に低くなる声音と共に、ナビと一緒に見せていたクルクルと良く動く切れ長の瞳からスツと色味が消え、鋭く冷たい光を宿す。

「コ・ジョンヒョンが殺された」

その言葉に、ジェビンが思わず振り返る。

「留置場でチヨルスの上官を刺した、あの坊やだ」

『エデン事件』の時も、ペニーレインを使って学生とやりとりをしていたのはオーサーなので、ジェビンにジョンヒョンとの面識は無かったが、その名前はよく聞き及んでいた。

「知ってるよ。新聞で読んだ。残った学生が、今回の一件でクスリのルートが途絶えたことを逆恨みして……」
「違う」

新聞記事から仕入れた情報を言い終わらぬ内に、オーサーは鋭く否定した。

「真相を隠匿するためのカモフラージュさ。拘留が解けたところを待ち伏せされて、狙撃されたんだ。あんな遠距離から一発で彼だけを仕留めるなんて、素人の腕じゃない」

「お前……」

「俺の目の前で殺されたんだ。奪われたと言ってもいい。どうしても俺らに知られたくない何かを、彼は知っていた。だから、口を封じたのさ。騒ぎ立てる家族も居ない身の上だったしね」

声を潜め、代わりにオーサーはジェビンに顔を近づける。

「……この事件はまだ終わってない。嫌な予感がするんだ。何か、もっと大きなことが裏で起こってる」

普段はいい加減でどうしようもなく軽薄な男だが、彼が本来持ち合わせている明晰な頭脳と動物的と言ってもいいほどの“感”の力を、ジェビンも認めている。その彼をもつてして“嫌な予感”と言わしめる事の成り行きに、ジェビンも言いようのない不吉さを感じていた。

襟元に垢の浮いた薄汚れたシャツを着て、男は地下鉄7号線清潭チヨンダム駅を降り、最近観光客の間でも話題を集めている高級ジュエリーショップが立ち並ぶ狎鷗亭アックシヨンエリアを歩いていた。

小綺麗な身なりの者が行き交うスポットで、何日も風呂に入った様子もない男の存在は異様で、道行く者たちは皆振り返って男を見ていた。

だが、当の男の方は気に留める様子もなく、煌びやかなジュエリーショップの中でも一際高級感を漂わせた店の一つにスカズカと入って行った。

「いらっしやいませ……」

入ってきた男に向かって丁寧に頭を下げた女性従業員は、男の姿を捕らえて思わず顔を上げた。

「……あ、あの……何か、お探しで？」

女が動揺を隠しきれぬまま尋ねると、男は図々しく店内をジロジロと眺め回しながら、女の元へやってきた。

「ピアスを、作りたいんだ」

「ピアス……ですか？」

「デザインは、もう決まってる」

男は思わず一歩後ろに後ずさる女の前にグツと身を乗り出して、ポケットから取り出したクシャクシャのメモ用紙に、先の丸まった鉛筆を取り出して絵を描きだした。酷い近視なのか、随分目を近づけて描いている。

「雨のカタチをした、ピアスだ」

「オーダーメイド、ですね？ お値段が少々張りますが」

遠慮がちに告げる女に、男は鼻を鳴らして言った。

「これで、足りるか？」

そう言うと、男は斜めに下げた布バックから、束にした一万ウォン札を何束も、自分と女の間ガラスのディスプレイの上に置いた。女だけでなく、後ろで控えていたスタッフたちも、息を飲むのが分かった。

男はニヤリと笑って言った。

「一番高いダイヤで作ってくれ。右耳用だ」

白い門扉の合間から、手入れの行き届いた庭を眺める。

決して大きくはないが、二階建ての白いモルタル造りの家は、清潔感に溢れていて、そして、どこことなく可愛らしかった。

ソンがこの家を購入したのは三年前のことだった。

チヨルスの愛称が『狂犬』なら、ソンの愛称は『野獣』。

まさにその名に相応しく、男ヤモメを地で行きながら、女の尻より犯罪者の尻を追うことに人生を賭けていた男に転機が訪れたのは、四十を目前に控えたある日のことだった。

汗まみれ、泥まみれになって、追いかけるヤクザよりもヤクザ者らしい気性と風貌でソウル市警の特攻を担っていたソンだったが、ある日を境に、仕事を終えるといそいそと一人で帰るようになった。以前は一晩中張り込みをして疲れきった身体を引きずってでも、チヨルスを連れて飲みに繰り出していたのに、ピタリとそんな無茶をしなくなった。

そのようなソンの様子に捜査課の面々が気付かない筈はなく、ある日、チヨルスを初めとした捜査課のメンバー数名で、心配半分、好奇心半分で、帰宅するソンの後をつけた。

ソンは、豆タンクのように堅い筋肉が詰まった重い身体をユサユサ揺らしながら、小躍りするように、ある花屋に入っていた。

ソんに、花屋

豚に真珠。

猫に小判。

馬の耳に念仏。

どの諺ことわざを持ってしても、その不釣り合いさに勝るものはなかった。何なら、往年の諺に加えてもいいくらいだ。

チヨルスと一緒に、口ではそれらしく心配するような風を装いながら、その実、根っからのミーハー根性でついてきたクムジャは、ポカんと口を開けたまま、呆気を取られてその場で固まっていた。

チヨルスたちの視線の先で、ソンはその花屋の若い女の店員と、俯いたまま二言三言、ぶっきらぼうに言葉を交わしていた。

ソンが見もせず指差した花を女は丁寧紙で包むと、ニッコリ微笑みながらソンに手渡した。

ソンは片手を伸ばして、無造作にその花を受け取る。

だが、俯いたその頬は、薄っすらと赤く染まっていた。

ソンはチヨルスたちに見られているとも知らず、花屋を出ると、先ほどのぶつきらぼうで不器用な対応から一転して、嬉しさを隠し切れないというように、スキップでもしかねない、更に軽くなった足取りで雑踏の中に消えた。

翌日、チヨルスたち（主に、クムジャが中心となって）は「証拠を掴んだ！」とばかりにソンに詰め寄った。「野獣」の異名を取るソンも、取り調べのプロたちに囲まれたらひとたまりもない。まして、生まれて四十年近く、ずっと縁遠くあった「恋」の分野で攻められては、早々に陥落するしかなかった。

ソンの自供によると、「事件」が起こったのは、三ヶ月前。

露店を襲ったチンピラを追跡し、路上で取り押さえようとした時、そのチンピラは、隠し持っていたナイフをソンに向けて一払いした。すぐにチヨルスが反応し、チンピラを地面に押さえつけたが、ソンの突き出た腹の辺りのシャツには見事な切れ目が入っていた。

「皮下脂肪が多くて助かったぜ。舐めときゃ治る」

そんな軽口を叩きながら、勧められてもろくに手当てもせず、路についたソンだったが、地下鉄の駅を降りて歩き出す頃、着替えたシャツの腹回りは、染み出した血でベッタリと汚れていた。

まだ肌寒い春先だったので、着込んだコートで腹を隠しながら歩いて、傷口は時間が経つに連れて、ズクンズクンと脈を持つような痛みが変わってくる。ソンはとうとう耐え切れなくなり、腹を押さえて道端にうずくまった。

その時、鼻先を不意に甘い匂いが掠めた。

「……どうしたんですか？」

甘い匂いに負けないくらいの、甘い声が振ってくる。

「具合、悪いんですか？」

薄れゆく意識の中でソンが見上げたのは、花を抱いた天使の姿だった。

結局、ソンはその花屋の娘スンミが呼んでくれた救急車で病院へ運ばれ、事なきを得た。

それが、ソンと現在の妻、スンミの出会いである。

それから毎日、ソンはスンミの花屋に通った。

最初は、助けてくれた礼として。

次は、離れて暮らす母へ送る花を探していると言う口実で。

毎日毎日、何かにつけて理由をひねり出しては、スンミに会うために花屋へ通った。

そんな男の無骨な愛情が届いたのか、遂にソンは十七年の離れたこの可憐な女性を妻に迎えることになる。

結婚してすぐに、娘のチェリンも産まれた。

ソンは愛する妻と産まれたばかりの娘のために、安月給の中からやりくりして、この可愛らしい郊外の一軒屋を建てたのだった。そこで親子三人、水入らずで静かに暮らしたいというスンミの願いとは裏腹に、結婚後も相変わらずチョルスと二人で一年中捜査に飛び回っていたソンは、折角建てたマイホームを空ける日も多かった。

それでもスンミは献身的に夫に尽くし、その帰りを待っていたが、隠し切れない寂しさはチョルスにも伝わってきて、ソンとコンビを組む者として、妻よりも多くの時間を共に過ごし、大切な夫を仕事の中に奪わなければならぬ後ろめたさに、胸が痛んだ。

だから、今回合成ドラッグ『エデン』の捜査中にソンを襲った不慮の事故は、不謹慎ながらも、ソンを家族の元へ返してやる良いきっかけとなった。

ソンが麻薬中毒の学生患者に腰を刺されて重症を負った時、チェリンを連れて駆け付けたスンミは血の気を失った顔をしていたが、

病院で甲斐甲斐しくソんに尽くすその姿は、ようやく自分の元に帰って来てくれた夫の世話を焼ける喜びに満ちていた。

先日ようやくソンが退院出来た時も、迎えに来ていたスンミが本当に幸せそうな顔をしていたと、チヨルスは同僚から聞き及んでいた。

退院時には駆け付けられなかったため、チヨルスは今日、退院祝いと一連の『エデン』騒動の報告を兼ねて、ソンの家を訪れたのだった。

『何さつきからポーっと突っ立ってんだ？ 早く入れよ』

いつまでも庭を眺めて入ってこようとしないチヨルスを部屋の窓から見ていたのか、突然インターホンの電源が入り、聞きなれたソンの野太い声が聞こえてきた。

「いやあ、可愛くって爽やかで、何て先輩にピッタリな家なんだろ
うって。やっぱり、独身時代の、あの薄汚いアパートは仮の姿……」
『バカ言っでないで、早く上がれっ！』

ブチツと音がして、インターホンの電源が切れる。

チヨルスは肩を揺らして笑いながら、手にしたケーキの箱を掲げて、青々とした芝生の庭に足を踏み入れた。

「いらっしやい」

玄関のドアを開けてくれたのはスンミだった。足元には、チェリンが張り付きながら、チヨルスを見上げている。

「お邪魔します。スンミさん、これ……」

そう言つてケーキの箱を手渡すと、スンミは「気を使わなくていいのに」と微笑んだ。

「ほら、チエリン。チヨルス兄さんに、ありがとうは？」

スンミが足元のチエリンの背中を押すと、チエリンは恥ずかしがつてスンミの後ろに隠れてしまった。

「いつも家では『チヨルス兄さん、チヨルス兄さん』って騒いでるじゃない」

面白がつてスンミがからかうと、チエリンは抗議するようにスンミの足をポカポカと小さな拳で叩いた。

「ハンサムすぎて、照れてるのよ。この子、メンクイだから」

「奥さんと違つて？」

「まあね」

「おい、聞こえてるぞ！」

その時、奥からソンの声が聞こえてきて、スンミとチヨルスは二人で顔を見合わせてプツと吹き出した。

ケーキの箱を抱えながらパタパタと奥の部屋へ走つて行くチエリンの後を追いつながら、チヨルスも靴を脱いで家へ上がる。

「全く、玄関からここに入つてくるまで何分かつてるんだよ。女みたいに、ぺちやくちやおしゃべりしやがつて」

チヨルスが奥のリビングに足を踏み入れた瞬間、窓辺に止めた車椅子に乗つたソンの太い声が出迎えた。

「元氣そうじゃないですか、先輩」

ソンは器用に車椅子を操って、チヨルスの側まで来ると、少し背を屈めたチヨルスの肩に両腕を回して抱きしめた。

肉厚の手で背中をバンバン叩かれる圧力に咽ながら笑う。

「全然、体力落ちてないですね」

「お前は、相変わらずモヤシみてえな身体だな。もっと食べて太れよ」

チヨルスは背中を起こして苦笑する。

「モヤシは酷いなあ。俺、結構筋肉あると思うんですけど。それに、折角両親がくれたこの恵まれた体型を、崩したらバチが当たりますよ」

チヨルスの軽口に、ソンが呆れたような声を出す。

「なあにが、恵まれた体型だ。お前の仕事は何だ？ あ？ モデルか何かでも、目指してんのか？」

二人が揃うと、いつもこんな調子だった。一月ほどしか離れていない筈なのに、妙に懐かしい気持ちになった。

「モデルって言えば……どうだ？ 新しく来た相棒は」
「クムジャ姉さんに聞いたんですか？」

チヨルスの予想は的中していた。

「電話がかかってきてな。聞いてもいないのに、すごい勢いでいかにハンサムか、いかに足が長いか、そんでいかにお前と違って真面目で礼儀正しいか、捲くし立ててたよ。えっと……何て言ったかな？ ミ……」

「ミンホです。ハン・ミンホ」

ソンは思い出したのかポンと膝を叩いて頷いた。

「そう、そんな名前だった。で、どんな様子だ。そのハンサム坊やは」

ソンの言葉に、チヨルスはしばらく考えるような素振りをしてから、真面目な顔で言った。

「意外に、骨のある奴です。まだまだ甘ちゃんですけどね。今回の『エデン』騒動でも、奴が解決に一役かいました」

「お前が褒めるんだ。本当に、見所のある奴なんだろうな。俺も、会ってみたいよ」

ソンはそう言って微笑むと、チヨルスの肩をポンポンと優しく叩いた。笑うと目尻に深い皺が寄り、岩石のようなゴツイ顔が途端に

柔和で愛嬌のあるものに変貌する。スンミもきつと、そんなソンの笑顔のギャップに惹かれたのだと、チヨルスは勝手に思っていた。聞いたことはないけれど。

「……ホン・サンギョ警査のことなんですけど」

不意に、チヨルスが声のトーンを落として言いにくそうに俯いた。

「……ああ、聞いたよ」

ソンも静かに頷く。

「俺、知りませんでした。先輩とホン警査は、陸軍時代の同期だったんですね」

明慶大学を舞台にした大掛かりな薬物売買の現行犯でホン・サンギョを逮捕した後、彼が拘置所内で自殺を図るまで、チヨルスは改めてホンの身辺を洗い直し、その中で、自分の直属の上官であるソンとホン・サンギョが兵役時代の同期で、入庁も同じ年であることを初めて知った。

「……すみませんでした」

「お前が謝らなきゃならないことは、何もないだろう?」

おかしな奴だなと、ソンは困ったように笑った。

警察官として正しい選択をしたという自負はあっても、自分の尊敬する直属の上官の昔馴染みを、結果的に自分が追い詰め、拳銃、死に追いやるようなことになってしまったのだ。チヨルスの心中は複雑だった。

そんなチヨルスの様子を察してか、ソンは続けて言った。

「いい奴だったが、昔から気が弱いところがあってな。特に、恋女房に逃げられてからは、生活が目に見えて荒んできた。段々疎遠になっていったが、借金も相当膨らんでいたんだろっ」

ソンは眉間に皺を寄せながら、かつての仲間の姿に思いを馳せているようだった。

「先輩は、幸せですね」
「ん？」

チヨルスの言葉を、ソンが聞き返す。

「まだ、奥さんに逃げられてない」
「こいつっ!!」

ソンは車椅子に座ったまま、笑い転げるチヨルスの額に、固いゲソッコツをお見舞いした。

「それはそうと!」

チヨルスは額を押さえながら、顔を上げた。

「驚きましたよ。先輩がコ・ジョンヒョンの起訴を取り下げたなんて」

チヨルスは身を乗り出してソンの膝を打つ。

「どうしてですか？ 奴のせいで先輩は車椅子生活を余儀なくされてるのに。警官を刺すなんて、ふざけたガキは、一生牢屋にブチ込

んでやれば良かったのに」

ソんに代わってプリプリと怒り出すチヨルスに、ソンは苦い顔で笑った。

「奴だつてまだ若い、将来のある男だろう。これをきっかけにクスリをきつぱりと止められたら、早く社会に出てマトモな生活をした方がいいと思つたのさ」

「先輩は、顔に似合わず優しすぎます」

大真面目にそう告げるチヨルスに、ソンは複雑な顔をした。

「おい。それは、褒めてるのかけなしてるのかどつちだ？」

「どつちもです。でも、結果的には、牢屋の中にいた方が良かったなんて皮肉ですね」

チヨルスに合わせて、ソンも顔を曇らせる。

「そうだな。聞いたよ。まさか、昔の仲間に襲われるなんて……俺が、奴を殺したようなもんだな」

「変なこと言わないでください！ 奴らがバカすぎるだけですよ。先輩が責任を感じる必要なんてこれっぽっちもありませんから」

チヨルスは力強くそう言うと、ソンの肉厚な両手を握り締めた。

「ジョンヒョンを襲った学生は？」

「行方をくらましてます。だけど、そう長い間逃げられないでしょう。指名手配してますから」

「ジョンヒョンと一緒にいたのは……」

ソンの言葉に、チヨルスが顔をしかめる。

「それが、あのオーサー・リーなんですよ。全くあの医者は、何にでも首を突っ込むんだから。最初は奴を疑いましたけどね」

「何で、奴と一緒に？」

「それもふざけた理由でね。『恋のキューピット』を買って出たんだって言うんですよ。ジョンヒョンが憧れてたナ・ジスクも同乗してましたから。釈放されて一番に、会わせてやりたかったって」

ソンは割れた顎に手をやり、剃り残しのヒゲの感触を確かめながら何かを思案するように目を閉じた。その様子を見て、チヨルスはハッと我に返った。

「先輩、もう疲れたんじゃないですか？ 俺、しゃべりすぎましたね。先輩は事件のことなんか考えないで、今はちゃんと休養取ってください。本当に仕事バカなんだから」

「バカは余計だ」

薄目を開けて、慥然とした様子でソンは反論する。

「二人とも、お待たせ。ケーキの用意が出来たわよ」

その時、盆に二人分のケーキとコーヒークップを載せてやってきたスンミが、二人の男の殺伐とした空気を華やかに解きほぐした。

カウンターに突っ伏した右肘に顎を寄せ、左手でマウスをイジリながら、ノートパソコンの液晶画面と睨めっこする。

カチツ、カチツ、クリックしては、スクロールを繰り返す。

目当てのものは、なかなか見つからなかった。

右肘に乗った華奢の造りの顎の上に乗る口元からは、先ほどから彼に似合わない溜息ばかりが漏れている。

「激写！ ナビのアンニュイバージョン！」

その時、パシャリという軽いシャッター音とフラッシュの光が、少しかだけ開かれたドアの隙間から伸びた手に握られた携帯から発せられた。

「……先生」

ようやく画面から目を上げ、身体を起こしたナビの呆れた視線の先には、今日もからかってやろうという気満々の、いたずらっ子そのままのオーサーの顔があった。

ナビはそんなオーサーを無視すると、パタンツとノートパソコンを閉じて、流しに向かう。

「あれあれ、つれないじゃない。何か飲む？ とか、聞いてくれな

いの？」

「じゃあ、『何か飲む？』」

面倒くさそうにナビがオウム返しすると、オーサーはパアツと顔を輝かせて、ナビに一番近いカウンター席を陣取って座り込んだ。

「エスプレッソお願い！ ねえ、もうアンニユイごっこ終わりなの？ 『憂いナビヤパート1』しか、携帯に収められなかったんだけど」

「何だよ『憂いナビヤ』って、勝手に変なタイトルつけないでよ。それで、知らない間に携帯に撮るのもいい加減止めてくれない？ 兄貴もたまにやるけどさ、そう言うの『盗撮』って言うんだって、知ってる？」

「えー?! ジェビンののはただのブラコン。俺のはシャイが故に、好きなコの姿を面と向かって見れなくて、こっそり撮り溜めした写真を代わりに見てる、純粋な乙女心じゃないか。一緒にしないでよ」

「誰がブラコンで、何が純粋な乙女心だって？」

外から酒の詰まった箱を両肩に担いで入ってきたジェビンが、オーサーの言葉を聞き咎める。

ナビはすぐにジェビンの元へ飛んで行き、よろけながら箱の一つを受け取る。

「親心って言うってほしいもんだね。ナビは一日一日、成長する」

「うわぁ、本気で引くわー。ねえ、ナビ。ナビもそう思うよね？」

カウンターの前に酒の箱を運び終えたナビは、中から顔を上げずに答える。

「ジェビニヒヨンののは許せるよ。でも、先生のはアウト」

「ひどいっ！ ナビちゃん」

オーサーはカウンターに突っ伏して、ワツと泣くマネをした。

「勝負あつたな」

ジェビンがニヤリと笑いながら、ナビに続いてカウンターの中へ消える。

「はい、エスプレッソ」

素っ気なくコーヒークップを差し出すナビの手に視線を落としたオーサーは、そこで初めて、ナビの指に巻かれた痛々しい絆創膏の数々に気がついた。

「ナビ、その指どうしたの？」

こんなに傷だらけの手では、毎日の皿洗いでも染みて痛かっただろっに。

「別に」

ナビはちょっと怒ったように唇を尖らせ、プイツと横を向く。

代わりにジェビンが話題を引き取って、カウンターの隅を親指でさした。

「鉛筆削るうとして、自分の手を削っちゃったんだよ」

ジェビンの言うとおり、カウンターの隅の灰皿の上には、さんざん削られて吸殻のように小さくなってしまった鉛筆の数々が山積み

になっていた。

「何で急に鉛筆削りなんか？」

今の世の中、文字を書くにはシャープペンかボールペンが主流だし、鉛筆を使うにしても、立派な「鉛筆削り」という文明の利器があるのだ。

わざわざ、お世辞にも手先が器用とはいえないナビが、指を削りながらナイフで鉛筆を削らなければならない理由がオーサーにはさっぱり思いつかなかった。

「僕だって、そのくらい出来るんだ」

子どものように拗ねた口調でナビは主張する。

「……僕だって？」

オーサーの目がキラリと光る。

「ふーん、誰と比べてるの？」

その瞬間、ナビの頬がカツと染まったのをオーサーは見逃さなかった。

「早く飲んでよっ！ いらなのっ！？」

怒ったナビが乱暴に、カウンターの上でオーサーにコーヒーカープを押し付ける。タップンと揺れた真っ黒な液体は、危つくオーサーの白いシャツの胸を汚すところだった。

オーサーはこれ以上ナビを怒らせてもいけないので、渋々差し出

されたコーヒークップに口を付ける。
恨めしげな目でナビを見上げて、一言。

「……苦い」

「エスプレッソだからね」

「怒ってるナビちゃんの味がする」

「気持ち悪いこと言わないで」

「だけどクセになる」

「人の話、聞いている？」

噛み合わない会話なのに、オーサーは先ほどの渋い顔はどこへやら、嬉しくて仕方ないという表情をしている。結局、怒らせても困らせても、ナビと絡んでいることそれ事態が幸せなのだ。

ナビは、もう疲れたとでも言うように大きな溜息を吐き出してから、流しに山積みになった皿を手に取り、タオルで拭き始めた。

「……また、戻しちゃったんだね？」

「え？」

苦いと文句を言っていたエスプレッソを優雅な仕草で口に運びながら、不意にオーサーが呟く。顔を上げたナビに、オーサーは小首を傾げながら、視線でその意味するところを指し示す。

ナビは咄嗟に、濡れた布巾を持った傷だらけの手で、自分の襟足に手を伸ばした。ナビの髪は、黒く染め直した前よりも、更に明るい金色に戻っていた。

「どうして？ 可愛かったのに」

先ほどまでのふざけた口調とは違い、オーサーの声はどこまでも深く柔らかく、それが余計にナビの動揺を大きくした。

「……可愛いって言うな」

それだけ言うのが、精一杯だった。

グーにした拳で、襟足で跳ねる髪を乱暴に撫で付ける。

オーサーに自分の心を見透かされそうで怖かった。

鏡を覗くたびに、大学生に変装していた頃のままの自分の姿が映る。

ここはもう、大学のキャンパスではないのに。
自分は今もう、学生ではないのに。

『ペニー・レイン』のボーイ、ナビに戻り、日常の中へ帰って来たというのに、鏡を見るたびに錯覚してしまうのだ。

まだ、あの日々の中にあると。
隣りに、ミンホはいないのに。

(……見るなよ)

(見えません)

ヒヨンスを見送ったラストダンスの時、堪えきれずに泣き出してしまった自分を抱きしめたミンホ。

(……聞くなよ)

(雨の音で、聞こえません)

グツと力を込めて、押し付けられた広い胸。

雨の音よりも、ナビの耳を強く打った鼓動の音。

思い出した途端に、ナビの胸も、一瞬ドクンツと力強い音を立てた。

ガシャーンツ!

盛大な皿の割れる音に、ナビがハッと我に返る。

手から滑り落ちた皿が、床で白い破片になって飛び散っていた。

「……………あ……………ごめん……………ジエビニヒョン」
「ナビ」

ジエビンはナビの手から濡れた布巾を取ってやりながら言った。

「お使い、頼んでいい？」

ジエビンは優しく微笑みながら、ジーンズの後ろポケットから財布を取り出した。

「山ごもりしてから、大分経つだろ？ お客は少ないけど、そろそろ食材も底をついてきたからさ。ちょっと遠いけど、市街まで頼める？」

「う、うんっ！」

「じゃあ、準備してきな」

ジエビンはナビの背中を叩いて、店の奥へ向かわせた。

「お使い？ ナビに、一人で？」

「店中の皿、割られる前にな」

そう言って、ジエビンはカウンターの中のダストボックスを開いてオーサーに見せる。

中には、ここ何日かでナビに割られたおびただしい数の皿の残骸が納まっていた。

「……………ふふっ」

オーサーが口元を押さえて笑う。

「何だよ？」

「いや……あんなナビヤを見るのは、二度目だなと思ってさ」

「二度目？」

怪訝な顔で振り返るジェビンに、オーサーは意地の悪い笑みを浮かべて言った。

「あれは、恋してる目だ」

オーサーとジェビンの瞳がかち合う。

「九年前……」

カウンターに肘を付いて、斜めの位置からジェビンを見上げるオーサーは、挑発するように続けた。

「覚えてるでしょ？」

オーサーの眼差しを受けたジェビンは、静かに口元だけで、ゾツとするような冷たい笑みを浮かべて言った。

「……お前、本当に性格いいね」

当直室のソファアールの上で、タオルケットにくるまって夢の中にい

たミンホは、チヨルスに荒っぽく身体を揺すられて無理やり叩き起こされた。

「……何ですか？ 交代の時間はまだ先のはず……」
「寝ぼけたこと言ってんじゃねえ！ 緊急動員がかかってるんだよ！」

ミンホは大きな目をパチパチとしばたたかせた。

「ハンナムテギョ漢南大橋で、ダンプが横転したところに、後ろから来た車が次々に玉突き事故だ。橋は南北で封鎖中。警察も消防も総動員だ！」

端的に状況を伝えるチヨルスの言葉で、ミンホは完全に目を覚ました。

「急げよっ！」

「はいっ！」

タオルケットを身体から剥ぎ取り、ミンホはチヨルスの後を追ってすぐに当直室を飛び出した。

「……いやあ、参りましたね。お客さん」

タクシー運転手は、遙か彼方まで連なるテールランプを眺めながら、後部座席に声をかけた。

「さつきから、全然動いてないね」

運転席と助手席の間に顔を挟むようにして、後部座席から身を乗り出したナビは、赤い提灯行列と化したフロントガラスの向こうを恨めしげに見つめる。

「何かあったの？」

ナビの言葉に、タクシー運転手は車内無線の音に耳を凝らす。

「事故、みたいですね。ハンナムテギョ漢南大橋が封鎖されてるそうです」

「ええー?!」

ナビはタクシー運転手の耳をキーンとさせる大声で叫んだ。

「どうしよう? 僕、帰らなきゃいけないのに」

「今夜は無理でしょう。引き返そうにもこんなに混んでちゃ、ウタ

「ーンも出来やしない。どっかその辺りのホテルにでも泊まった方が無難ですね」

「そんなお金、持ってないよお」

ナビは困り果てたという表情で頭を抱えた。助手席にも後部座席にも、ジエビンに頼まれた山ほどの食材が詰まれている。生ものも含まれているから、夜間とは言えこの陽気の中では一晩で腐ってしまうものも出てくるだろう。そして、それらと引き換えに、ジエビンから預かった財布の中身はほぼ空っぽに近くなっている。タクシ―代を払ったら、ギリギリ電車賃があるかないかという具合だった。

「運転手さん。ここで、降ろして」

決意を固めたナビは、顔を上げてキツパリと運転手に告げた。

「え？ こんなところですか？」

運転手は驚いたようにナビを振り返る。

「歩いてだったら、渡れるかもしれないでしょ？ そのまま駅に行けたら、電車で帰れるから」

「え？ ちよつと、無茶ですって……お客さんっ！」

慌てる運転手を尻目に、ナビはさっさとタクシ―代を手渡すと、大荷物を抱えて車を降りた。

「お客さんっ！」

運転手の叫びに振り返ると、ナビは一瞬荷物を地面に置いて、運転手に向かって大きく手を振った。

「ありがとう、運転手さん！」

そう大声で叫ぶと、再び下ろした荷物を抱え上げ、テールランプの海の向こうへと歩き出した。

両手に一つずつ抱えた紙袋の他に、手首と肘を使って片手に二つずつ下げたビニールの買物袋を持って、ナビは何度も細かい休憩を取りながら渋滞した道路の端を歩いていく。

どのくらいそうして歩いたのだろう。

視線の先に、事故が起きたという漢南大橋ハンナムテキヨの入口が見えてきた。

大勢の警察や消防隊が行き交い、担架に乗せられた怪我人などが、ナビの脇を通り抜けて言った。

ナビが想像していたよりも、大きな事故だったらしい。騒然とする空気が、離れた場所からも伝わってきた。

その時、不意に鋭い笛の音が、この生温い夜を切り裂いて鳴り響いた。

『その君っ！ 危ないから、下がりなさいっ！！』

遠くの方から拡声器を使って響き渡ってくる声は、明らかにナビに向けられていた。

「え？ 僕？」

分かっている、ついキョロキョロと周囲を見回してしまう。

勿論、こんな状況下でのこのこと道路を歩いているような人間が他に居るはずもない。見れば、テールランプを点けた渋滞した車中にいる人たちも、窓を開けてナビを奇異な目で見つめている。

逃げようにも、両手にこんな大荷物を抱えていては、逃げ出すことも出来ない。

『そこで、止まりなさいっ！ 動かないでっ！』

拡声器の声はそう言うと、マイクのスイッチをバチンツと切る音が聞こえてきた。それから、アスファルトを蹴る靴の音が段々と近付いてくる。

「え、え……どうしよう……」

咄嗟に頭を過ぎったのは、もしかして捕まってしまう？ ということだった。冷静に考えれば、封鎖される手前の道路を歩いていただけなのだから、奇妙ではあっても捕まるようなことはしていないのだが、近付いてくる足音にナビはすっかり動揺していた。

ナビがそうしてオロオロしている間に、細身の影はあっという間にナビの元へ辿り着いた。

「どこへ行く気ですか？ この先は事故で封鎖中ですよ」「す、すみませんっ！ でも、僕急いでて……」

ピョコンツと勢いよく頭を下げた瞬間に、手にしていた荷物を全部取り落とし、足元でグシャツとタマゴの潰れる嫌な音がした。

「……ピョ……ン？」

「え？」

頭上で震える声に、ナビは恐る恐る顔を上げた。

「っな?!……お前っ!?!」

ナビは口をパクパクさせて、その警官を指差す。

「何でいるのっ?!」

「あなたこそ、こんなところで何してるんですか？」

目の前に居たのは、キャンピングカーの前で別れて以来の、ミンホだった。

「それに、何なんですか？ この大荷物」

ミンホは無残に潰れたタマゴの黄身が染み出した袋を拾い上げてやりながら、呆れたように片目を細めて言った。

「ぼ……僕は、お使い頼まれて……ジエビニヒョンに」

しどろもどろになりながら、ナビが説明する。

「お前はっ?!」

動揺している自分を知られたくなくて、ナビは叫ぶように言った。

「僕は、事故の緊急動員に駆り出されたんです」

冷静に答えるミンホに、ナビは思わず悔しくなる。何だかこんなに動揺しているのは自分だけのような気がして、照れが勝った怒りで頬が熱くなる。

「おおーい！ ミンホ」

先ほどミンホが走ってきた道路の向こうから、聞きなれた声が聞こえてきた。

「チヨルスヒョンッ！ こっちです」

ミンホは後ろを振り返り、チヨルスに向かって手を振った。

「チヨルス?!」

ナビは夜の向こうに目を凝らし、こちらに駆けてくる人物を待った。

「え? ナビか?」

駆け寄ってきたチヨルスは、ナビの顔を確認すると大きく目を見開いた。

「驚いたな、お前。何でこんなところに?」

「お使いを頼まれたそうですよ」

「こんなとこまで、一人でか?」

チヨルスの言葉に、子ども扱いしないでよ、とナビが頬を膨らませる。

「それにしたって、今日はもうダメだぞ。これ以上、動きようがない」

「ええーっ?!」

ナビが頭を抱えて叫ぶ。

「お前ら、今どこにいるんだ?」

「ブッカサン北漢山の近く」

「ブッカサン北漢山っ?!」

ナビの答えに、チヨルスは思わず素っ頓狂な声をあげた。

「呆れた……あなた、どうやって帰るつもりだったんですか？ まさか、歩いて？」

「違うよっ！ タクシーで帰ろうとしたら、この渋滞に巻き込まれて……だから、駅までは歩いて行こうって」

「その大荷物じゃ、駅に辿り着くのだって至難の技だぜ」

チヨルスもつくづくナビの無謀ぶりに溜息をつく。

「本当に仕方がない人ですね。しょうがないから、送っていきます」「え？」

思わぬミンホの申し出に、ナビがキョトンと顔を上げる。

「そうしろ。駅までだって、ここからじゃかなり距離があるぞ。パトカーに乗れるなんて、滅多にない経験だぜ。良かったな、ナビ」

豪快に笑って肩を叩くチヨルスに、ナビはされるがままになっていた。

「ああ、そうだ……ミンホ」

チヨルスが不意にナビの肩を叩くのを止めて、パトカーの手配をしようと無線に手を伸ばしていたミンホを呼び止める。

「炊き出しの用意が出来たって伝えに来たんだった」

「炊き出し？」

聞いた途端に、ナビの腹がグーツと小さな音を立てた。

そう言えば、買い物に一生懸命で、昼間から何も食べていなかった

た。

「……あなたも、食べていきますか？」

ミンホが静かに助け舟を出す。

「……いいの？」

「おお、知らない仲じゃないんだし、食っていけよ。ジエビンの料理には負けるかもしれないけど、警察の炊き出しもなかなか捨てたもんじゃないんだぜ」

チヨルスは気安くそう言って、ナビの肩を叩いた。

「じゃあ、俺は戻るぜ。ミンホ、後でな」

「はい」

チヨルスはそう言うと、再び現場に戻るために駆け出した。

「チヨルスヒヨンッ！」

その時、ナビがチヨルスを呼び止めた。

チヨルス兄貴ヒヨン と、きちんと呼ぶのは初めてだった。

今までは、オマワリさんとか、怖い人とか、まともに敬意を払って呼んだことはなかった。

「またお店に遊びに来てよ。ジエビニヒヨンが寂しがってるよ！」

するとチヨルスは、走ったまま振り向いてヒラヒラと手を振った。

「客としてなら行ってやるって、ジエビンに伝えとけ！ もうコキ

使われるのはゴメンだぜ」

そう言ってチヨルスは豪快に笑いながら連なるテールランプのその先へと姿を消した。

「……僕らも、行きましようか？」

チヨルスの姿が見えなくなると、ミンホがぎこちなく切り出した。

「う、うん」

ナビも頷き、荷物を持つとと屈んだところで、横から伸びてきたミンホの手が、一瞬早く荷物を奪い取った。

「つな……いいよ、僕の荷物なんだから、僕が持つよ」

「僕の方が、腕力ありますから」

そう言つと、さつさと全部担いで歩き出す。

「……あ……ありが……」

「それに、これ以上タマゴ割ったら、お使いにやった意味がなくなります」

折角礼を言おうと開きかけていた口を、ナビは慌てて噤んだ。

そつだ、こいつはこつという性格の奴なんだ。

しばらく会ってなかったけど、やっぱり生意気だ！

こんな奴に、ちょっとでも会えなくて寂しいなんて思っていた自分がバカみたいだ。

ナビは前を歩くミンホの形の良い頭を、恨めしそうに睨みつけながら歩いた。

歩幅が違うから、必然的に小走りにならざるを得ないのも腹が立つ。

「……ヒヨン」

「何だよっ!？」

思わず大きく刺々しくなってしまった声に自分が驚いたが、当のミンホは気付いていない様子だった。

「……元気、でしたか？」

遠くの方から聞こえる車のクラクションや、事故処理に当たる警察や消防隊のざわめきで耳を澄まさなければ聞き取れないような小さな声だったが、わずかに俯きながら尋ねるミンホの声音は優しいかった。

「……まあね、お前は？」

「はい。見ての通り」

そこで、会話が途切れた。

いつもうるさいくらいにしゃべって、ムキになって喧嘩もしていたのに、まるでお互いに言葉を忘れてしまったみたいだった。

何を話していいかも分からぬままに、ナビはミンホの後姿を見つめながらテクテクと歩き、やがて、炊き出しテントまで辿り着いた。

「お疲れ様です、ハン警衛」

ミンホの姿を見つけた警官の一人が敬礼のポーズを取る。ミンホもそれに応えるように敬礼を返す。

「ちよつと、待って。君は？」

ミンホの後ろをチヨコンと付いて歩いていたナビは、当然ながら呼び止められた。

「この人は大丈夫です。僕の連れですから」

ミンホが振り返ってナビとその警官の間に立つ。

「そうでしたか……それは、失礼しました」

警官が頭を下げる。

そう言えば、ミンホは警察大学校出のエリートなのだとチヨルス

が話していたのを聞いたことがあった。今は学校を卒業し、兵役を終えたばかりの身で、急遽ケガを負ったチヨルスの方を指導係となつてはいるが、本来の階級はミンホの方が遙かに上であり、いずれは警察幹部として出世が約束されている。

二人で大学に潜入していた時はそんなこと気にしたこともなく、こうして警察組織の中に身を置いているミンホの姿を見ると、本当に自分とは住む世界が違う人間なのだと言うことを改めて思い知る。

何だか、急にミンホが遠い存在のように思えた。

「どうかしましたか？」

「……別に」

急に黙り込んだナビを怪訝な顔で覗き込んでいたミンホだったが、やがて閃いたというように、ニヤリと笑って言った。

「ちょっと、待っててください」

そう言うと、ナビを置いて炊き出しの列にならぶ。

やがてミンホは、両手に一つずつ、椀から溢れそうな雑煮を持ってナビの元に返ってきた。

「トック（韓国の餅）入り雑煮ですよ。腹持ちもよくて、なかなかいけるんです」

ミンホが炊き出し隊の人ごみから少し離れたところへ行こうと顎をしゃくる。ナビはその後に着いていく。

「あなた、お腹空いてたんでしょう？ いつもお腹空くと、電池

が切れたみたいに元気が無くなって、不機嫌になってましたもんね」「っな?! それは、お前だろっ?!」

ムキになって言い返すナビに、ミンホは肩を震わせて笑う。やがて、二人が腰をかけるのに丁度いい大きさの縁石を見つけて、ミンホはそこへ腰を下ろした。

「どうぞ」

ミンホは隣りにナビを促す。

「……うん」

ナビも言われるままに、ぎこちなくそこへ腰かけた。

「はい」

「……ありがとう」

ミンホに手渡されたトック雑煮は、夏の夜に食べるには熱すぎる代物だったが、疲れた身体に染みて旨かった。

しばらく二人は無言のまま、一心に雑煮を啜った。

「あの……」

「ねえ……あのさ」

二人同時に顔を上げる。

被ってしまった気まずさに、二人揃って慌て始めた。

「あ……え? 何?」

「いえ、いいんです。どうぞ、そっちから」

ミンホがナビに先を促す。ナビはすっかり頭が真っ白になり、自分が何を言おうとしていたのか忘れてしまった。

「……あ、ヒヨンスは……どうしてる？」

咄嗟に共通の話題が思いつかず、思わずヒヨンスの名前を口にした。

その時、ミンホの周囲の空気が二三度下がったような気がした。スツと目を細めたミンホは、ナビの方へ向けていた顔を正面へ戻し、雑煮に視線を注ぎながらぶっきらぼうに言った。

「……保釈申請が、イ・ユリの父親から出ましてね。だけど、それを本人が断りました」

「そっか」

ナビは線は細いながらも、意志の強い眼差しを持ったヒヨンスの事を思い出していた。

「……ヒヨンスは強いな。だけど、繊細なところもあるから、心配だよ」

「そうですね。誰かさんと違って」

思わずミンホの口からこぼれ出た言葉に、ナビが敏感に反応する。

「誰かさんって、誰のことだよ?!」

「あなたしか、いないでしょ」

ミンホも負けずに、いつもの調子で応戦する。

「僕のどこが、繊細じゃないって？」
「どこもかしこもですよ」

ミンホは雑煮の椀を置くと、ナビの方へ身体を向け、一気に捲くし立てた。

「繊細な人は、脱いだ服を散らかしっぱなしにしません。他人にパ
ンツ拾われても、平気な顔してません。ご飯をボロボロ落したり
しません。トイレを流し忘れたり……」
「もういいっ！！」

ナビも雑煮を置いて、迫ってくるミンホの肩を押し返す。

「わざとじゃないもんっ！ それが僕なんだもんっ！」
「開き直りましたね。だったら、繊細だなんて名乗らないでくださ
い」

「お前も繊細なんかじゃないよ！ 繊細な人は、そんなにズケズケ
言ったりしなもんっ！ 年上にもっと敬意を払うもんっ！」
「敬意を払って欲しかったら、もっと年上らしくしたらどうですか
？」

止まらない二人の応酬を、道行く警察官や消防隊員がチラチラ見
ている。

「……あの、ハン警衛……大丈夫ですか？」
「大丈夫ですっ！！」

見かねた警官の一人がミンホに声をかけたが、ミンホは噛み付く
ようにそう答えた。

「もう、僕帰るっ！」

ナビが叫んで立ち上がる。

「どござっ！」「ご自由に」

ミンホも勢い良く立ち上がり、近くにいた警官に声をかけた。

「すみません。車を貸してください」

「いいよっ。僕、歩いて行くから」

歩き出そうとするナビの襟首を掴んで、ミンホが引き止める。

「一般人にこんなところをウロウロされたら、こっちが迷惑なんですよ。いいから、最初からの約束ですから。駅までは責任持って送ります」

「ハン警衛っ！」

投げられた車のキーを受け取ると、ミンホは炊き出しテントに預けていたナビの荷物を他の警官に頼んで取ってきてもらった。

道路に横付けされたパトカーの助手席の扉を開けると、ミンホはナビに向かって顎をしゃくった。

「早くしてください」

ナビは懺然のとした表情のまま、ミンホの開けたドアの隙間から身体を滑り込ませた。

駅に向かう車の中で、ナビとミンホはずっと無言だった。ナビは窓に顔を寄せ、反対車線を埋め尽くすテールランプの赤い明かりばかりを見つめていた。

駅に到着し、キュッとブレーキの音をさせてミンホが車を止めた。

「……着きましたよ。終電には間に合っただしょう」

「……ありがとう」

「いえ」

車を降りるナビの後に続いて荷物を持ってやるために降りようとしたら、ナビに止められた。

「ここでいいよ。後ろ、車繋がってるから」

確かにナビの言うとおり、バックミラーからは遙か彼方まで続く後続車両のヘッドライトが見えた。

「じゃあ、ね」

「……ええ。さよなら」

呟いて、ミンホは口を噤んだ。

大荷物を抱えたナビの頼りない背中が、危なっかしい足取りで、駅の改札口へと向かう。

振り返れ。

ミンホは思わずそう強く念じていた。

もし、ナビが一度でも振り返ったなら、その時は後続車両のことなど気にせずに、車を飛び出し、悪かったと謝ろう。

いつも、言い過ぎてごめんなさいと。

だが、ナビは結局振り返らないまま、改札口の中へと消えた。

その時、フロントガラスをポツリと一滴、雨粒が叩いた。
ここ何日か無意識に、ミンホが待ち望んでいた雨だった。

雨が降らなければ、出くわすことのない『ペニーレイン』。

出逢うことのない、ナビ

不意に現れ、髪もスーツもグシャグシャに乱し、何事もなかったように去っていく。

だがもう雨が降っても、こうして出逢えるとは限らない。

ミンホはハンドルの上に顔を突っ伏し、大きな溜息をついた。

後ろから鳴らされるクラクションの音も、ミンホの耳には入らなかった。

*

雨が降りしきる日曜日の朝、ミンホは6時きっかりに目を覚まし、シャワーを浴びて朝食を済ませると、一人暮らしのアパートを出た。休みの日に寝坊出来ないのが自分の性質だ。

何も予定がない日でも、目覚ましの力を借りなくとも、いつも浮かび上がるように自然に目が冷める。

非番の日が世間一般の休日にも重なるのも珍しいので、傘を差して適当に街をぶらついてみたものの、すぐに飽きてしまい、結局向かった先は学生時代によく通った図書館だった。

雨のせいか、そこそこ人は入っていた。

今日は一日ここで過ごそう、そう思ってミンホは入口で傘を畳む。

明慶大学へ潜入していた時も、大学の図書館をよく利用した。ナビと口論になって、逃げ込んだ先も図書館だった。

あの時は、ナビに見つけられてしまったんだっけ。

そこまで考えて、ミンホは頭を振った。傘を差していても横から入り込んできた雨粒で濡れた髪から、雫がはねる。

いい加減、雨が降るたびにナビのことを思い出すのは止めよう。

あのダンプ横転事故があった夜も、折角再会できたのに、つまらない意地を張り、結局連絡先すら聞けなかった。

神様が与えてくれたチャンスにできなかった自分が悪いのだ。チャンスは一度　昔から、そう相場は決まっている。

ミンホが図書館の中に足を踏み入れると、ヒヤリとした冷気に身

体を包まれ、空調の効きすぎた室内は、雨に濡れた身体には少々寒く感じられた。

自分の肩を擦りながら、書架の間を移動する。

人が居ない、ガラガラの通りを選んで進んでいくと、目の前に脚立が現れた。ミシリと軋んだ音がして何気なく頭上を見上げると、不安定な体勢で本を取るうとしている人影に気がついた。

「……………うわっ！」

思わず声をあげたミンホに、脚立の上の人物が振り返る。

その拍子に、大きくバランスが崩れる。

「う……………うわああああああっっ！！！」

「あ、え?! ちょっとっ!!！」

何が起きたのか分からない。

しかしミンホは、咄嗟にその頭上の人物に向かって手を伸ばしていた。脚立ごとグラリと倒れこんでくる相手を、身体全体で受け止める。

ガッシャーンッ……………

図書館中に響き渡る大音量を残し、脚立が書架の間に倒れる。ミンホはその天辺に乗っていた人物を身体で庇ったまま、強か打ちつけた尻の痛みに顔をしかめた。

「……………っ、痛い」

なぜかミンホよりも痛そうな声が、腕の中から聞こえてくる。その時ミンホは、初めてその人物の顔を正面から見た。

「……ナビ……ヒョン？」
「……ミンホ？」

腕の中のナビは、目をパチクリさせてミンホを見つめていたが、やがて大声で叫んだ。

「またお前かつ！」
「それは、こっちのセリフですっ！」

その時、尋常ではない大きな音に集まってきた利用客に囲まれていることに気付いたミンホは、慌ててナビの手を掴んで立ち上がった。

「とにかく、こっちへ」

小声で囁くと、倒れた脚立を律儀に直し、書架の間を逃げるように移動する。ミンホはそのまま、地下にある食堂までナビを引っ張って行った。

「座って」

ミンホに促されて、ナビが対面に腰かける。

「本当に神出鬼没な人ですね。あんなところで、何してたんですか？」

「べ、別に……僕が図書館利用しちゃ、悪いの？」
「そんなこと、言っていないでしょう」

ミンホは先ほど痛めた尻を庇うようにして、席に着く。

「市街に、いつ戻ってきたんですか？」

「……昨日の、夜遅く」

「雨、降ってますけど」

「今日は夜からだから。午前の仕込みは一人でいって、ジエビン
兄貴ケイが」

「……そうですか」

ミンホはテーブルの上で組んだ自分の手の甲に視線を落とす。

「……で？ 何か探し物でもあったんですか？ あんな高いところ
によじ登って」

「……う、うん。まあ」

ナビは気まずそうに目を逸らす。

「何ですか？ 言ってくれば、僕も一緒に探せるかも。あの辺、
詩集のコーナーでしたよね」

その時、ナビは俯いたまま、小さな声で言った。

「……お前が、さ……」

「え？」

ミンホがナビの顔を覗き込むように、テーブルに頬をつける。

「……お前が、あの時読んでたヤツ。ずっと、探してたのっ！」

一気に言い終わると、ナビはプイッと横を向いてしまった。

「あの時、僕が読んでたヤツって……ヒューズですか？ ラングストン・ヒューズの詩集？」

「そう、そんなようなやつ！ 名前が分からなくて、ネットでも探しきれなかった」

ミンホの言葉に、ナビが膝を打つ。どうやら、本当に名前が思い出せなかったらしい。

「ハーレム・ルネサンス時代の有名な詩人ですよ。アフリカ・アメリカンの……ブルースの名曲の原詩にもなってる……」

ミンホの説明に、ナビは次第に身を乗り出し顔を輝かせてくる。

「気に入ったんですか？」

ミンホが問うと、ナビは恥ずかしそうに唇を尖らせて頷いた。

「うん」

「……貸して、あげましようか？」

「え？」

ナビがキョトンとミンホの顔を見ると、ミンホはカバンのポケットから、よく読みこんだ痕のあるボロボロになった一冊の本を取り出した。

「……どうぞ。良かったら」

「何で？ いつも持ち歩いてるの？」

「そっいつわけじゃ……」

今度はミンホがしどろもどろになる。

「……だって、あなたが、気に入ってたみたいだから」

くたびれた表紙を意味もなくペラペラと捲る。

「……いつ、雨が降りだすか分からないでしょ？」

その言葉で、ナビはようやくミンホの言いたいことを理解した。いつ雨が降るか、分からないから？

いつまたナビに出逢うか分からないから、その時渡せるように、ずっとヒューズの詩集を持ち歩いていた。

途端に、ナビの頬までカッと熱くなる。

「あ、ありがとう」

「……いえ」

お互いに気まずそうに正面の相手から目を逸らしながら、ミンホが思い切って口を開いた。

「あの時、言いかけてたのって、ひょっとしてこのことですか？」

「え？」

「炊き出しの時、何か言いかけてたでしょ？」

ナビはミンホに再会したあの夜のことを思い出していた。同時にしゃべり出そうとして、気まづくなったあの時のことを。

「……そうだよ。なのに、あの時もお前がケンカ売るから」

「ケンカなんか売ってませんよ」

「ほら、またっ！」

そう言ったところで、二人は顔を見合わせて思わずクスリと笑いをもらす。

「そんなに、気になってたなら、連絡先でも聞けば良かったでしょ？」

「兄貴の方から聞けるかよ」

ピッツとそっぽを向くナビに、ミンホは呆れてしまう。
何だ？ そのプライドは。

「ねえ………だったら今、連絡先教えてくれませんか？」

「何で？」

「………本、返してもらわなきゃいけないでしょ」

言った途端に、ミンホは口元を押さえて、横を向いてしまう。

「それに………まだ沢山あるんです。ヒューズの詩集」

そう言って、頬を染めるミンホの横顔に、ナビまでつられて赤くなつた。

*

帰り際、ミンホが買って持たせてくれたビニール傘を差しながら、ナビは片手に持った携帯を開けたり閉じたりを繰り返していた。

アドレス帳に登録された『ハン・ミンホ』の文字。

着信履歴には、登録のためにかげられた、1秒の短い不在着信が残っている。

発信履歴にも、同じ相手に同じ秒数の記録が残っている。

ナビは何度も何度も、携帯のボタンをいじっては、それらが消えてしまっていないか確認する。

別れる時、連絡先を交換しようとして取り出したナビの携帯を、ミンホは横からスツと奪った。

抗議しようとするナビの前で、ミンホは涼しい顔で長い指を器用に動かし、ナビの携帯を操作した。

（僕のメールアドレスは長いんで、僕が直接登録したほうが確実に。あなたは、間違えて打ちそうだから。）

そう言って、今度はさっさとナビの携帯から自分の携帯へ電話をかけ、素早く自分のアドレス帳にもナビの連絡先を登録する。

（間違つて消さないでくださいよ。再発行は、有料ですから）

いつもの憎まれ口を叩くのも忘れない。

「……カツコつけちゃって……フン」

そう一人呟きながらも、ナビは自然に頬が緩んでくるのを抑えられなかった。

携帯の画面ばかり見て歩くナビは、その時正面から歩いてきた男とぶつかった。その拍子に、男の手から何か角ばったものが零れ落ち、コロコロと車道の方へ転がった。

一方ナビが落とした携帯は、反対側の植え込みの下に転がり込んでしまった。

「あっ！ すみませんっ！」

ナビは自分の携帯よりまず先に、危うく車道に転がり出るところだった男の落し物に手を伸ばした。

雨に濡れて泥まみれになってしまったその物体は、四角い小さな箱だった。プレゼント用なのか、キレイにラッピングが施されている。

「どうしよう……すみませんっ、僕が前を見てなかったから……」

ナビは慌てて、ジーンズのパンツの脇で必死に箱に付いた泥を落とそうとした。

そのナビの手を、不意に伸びてきた手が掴む。

「……ハ又ル？」

探るように囁かれた名に、ナビは驚いて顔を上げる。

男の顔を正面から捕らえた瞬間、ナビはヒクツと喉を鳴らして息

を飲んだ。

「アハ……アハハハッ！ 本当にお前かよ？ どんな魔法だよっ
！！」

ナビの手を掴んだ男は、急にけたたましく笑い出した。
逃げ出そうにも、ナビは足が竦んでその場から動けなくなっていた。まるで、石になる魔法でもかけられたように。

「……それ、まだ付けてたんだな」

男の視線が、舐めるようにナビの左耳のピアスに注がれる。その瞬間、ナビは身体を強張らせ、手にしていた箱を男の胸に思い切り押し付けた。

「何だよ、お前にやるために買ったんだぜ」

男は反対に、ナビのその両手首を掴んで、箱ごとナビの胸に押し返す。

「きつと、そいつが呼んだんだよ」

男はナビの左耳で光る雫型のピアスを満足そうに眺め、口の端を歪めて笑った。

その時、植え込みの下で、ナビの携帯が光った。

メールの着信を知らせるLEDランプの下に浮かび上がったのは『ハン・ミンホ』の文字だった。

*

ミンホはアパートに戻ってから、自室のソファアに腰掛け、登録したばかりのナビのアドレスに向けて、初めてとなるメールを打った。

どうせ、くだらない兄貴の意地で、自分からはメールも電話も出ないだろう。短い付き合いでも、ナビのそんな性格をミンホは段々分かるようになってきた。

なら、こちらから送るまでだ。

もう、待つだけなんてゴメンだ。

そう勢い込んでみたものの、いざとなると、何を書いていいのか分からない。ミンホはしばらく思索して、頭をクシャクシャに掻き毟っては、何度も書いては消し、書いては消しを繰り返した。

やがて、書き終えた文章は、たったの一行。

だが、ミンホは何度もそれを読み返し、送信ボタンに手をかけた。メールなら、これくらい言える。

面と向かつては、まだ無理だけれど。

その時、視界の隅で、部屋の空調にあおられた100体のテルテル坊主チラチラと揺れた。

結局、捨ててしまうには忍びなくて、クムジャに処分される前にミンホはくたびれきった彼らを自分の部屋に避難させてきたのだ。た。

その彼らが、今はジツとミンホの様子を窺っている。

たった一人で部屋にいるのに、本当は誰に見られているわけでもないと分かっているのに、ミンホの頬は真っ赤に染まっていた。

「……ちよつと、失礼ですよあなたたち。ジロジロ見ないでください」

ミンホは思わずそう呟いて、洗濯バサミでリースのように窓辺に吊った彼らを、回れ右させてそっぽを向かせた。

気になる視線を外してから、ミンホはようやくソファーに腰を落ち着けて、大きく深く息を吸い込んだ。

中断していたメールを再開するため、決意するようにパクンツと音を立てて携帯を開く。

文章は、とつくに出来上がっていた。

親指に力を込めて、ミンホは今度こそ思い切って送信ボタンを押した。

「……会いたかったぜ」

男の手がナビの左の耳たぶに伸びる。

「また会えると思ってた。そいつが俺を呼ぶ。お前がどこにいても、何をしていても」

ナビはもはや声を発することすら出来ず、カタカタと小さく震えながら金縛りにあったように男を見つめていた。

植え込みの下で、携帯が光り続ける。

『雨が止んでも、会いたいです』

ハン・ミンホ

第三章【雨が止んでも】完

4 - 1 (前書き)

おいで。

そう、言ってくれた人。

カタカタカタ……

古びたデスクが小刻みに揺れる。

チヨルスは広げていた新聞から目を上げて、横を見やる。
揺れの発信源は、隣りの席のミンホだった。

「おい」

「……はい？」

ミンホはキョトンと顔を上げたが、まだ揺れは収まっていない。

「それ、やめろ」

「え？」

「それだよ、さっきから。貧乏ゆすり！」

チヨルスがデスクの下のミンホの膝を叩く。

「俺のデスクまで揺れてんの。気になってしょうがねえよ」

「……すみません」

ミンホは俯いて、自分の膝を押さえた。

しかし、しばらくすると、今度はコツコツコツ……という、先ほどとは質の変わった響きが聞こえてくる。チヨルスが再び目を上げ

ると、ミンホがデスクの上を爪でリズムカルに叩いていた。

「おいつー！」

再びチヨルスが声をかけると、ミンホはハツとしたように手を止めた。

自分では全く気付いていないらしい。先ほどよりも小さな声で「すみません」と呟くと、貧乏ゆすりをしていた膝の上に、デスクの上で遊んでいた右手を重ね、ギョツと力を入れてパンツを掴んだ。しかし、三度、奇妙な音は隣りの席からチヨルスを浸食する。今度は、ギリギリギリ……という何とも不快極まりない音。

「ミンホッ！」

見かねたチヨルスが新聞を置き去って、椅子を回し身体ごとミンホを正面から見据えた。

「どっつした？」

ミンホはギシツと音をさせて、ようやく齒軋りを止めた。

「イライラしてるな？ 何かあったのか？」

チヨルスに覗き込まれて、ミンホが気まずそうに俯く。

「……いえ、大したことはないんです。すみません……仕事中に」

ミンホは、パンツの尻ポケットに収まったままの携帯に意識を向けながら言った。バイブ機能にしてあるから、着信があったらすぐに分かるようになってる。だが、この三日間、携帯は死んだよう

に大人しいままだ。

ナビと別れて、決死の思いでメールを打ったのが三日前。プライドを捨てて、自分の方からあんな恥ずかしいメールを打つたというのに、当のナビからは無しのつぶて。返信すら届いていない。

何度も何度もメールセンターに問い合わせをしても、ナビからのメールはなかった。

「仕方ねえなあ」

チヨルスは呆れたように溜息を吐く。

「飲みにも行くか？ たまには、気晴らしに」

チヨルスがミンホの頭をグシャグシャに撫でながら笑う。

「男だったら、ウジウジ悩むな。酒飲んで、忘れちまえ」

豪快なチヨルスの言葉に、ミンホはこの日初めて笑顔を見せた。

「……はい。お願いします」

生真面目に頭を下げるミンホの髪を、チヨルスは更に上からグシャグシャにした。

人気のない黒テントの店内で、ジェビンは一人カウンターに座り

帳簿の整理をしていた。

ドアベルの音がして振り向くと、オーサーが入口に立っていた。

「どう？ ナビの様子は」

オーサーが雨粒を払いながら店内に入ってくる。ジェビンはかけていた眼鏡を外してカウンターのの上に置くと、首を横に振った。

「……奥で寝てるよ。相変わらずだ」

「何があったか、やっぱり話してくれない？」

「……ああ」

ジェビンが溜息をつきながら眉間を揉む。

三日前の夜、ナビは突然、傘もささずにびしょ濡れのまま帰ってきた。

帰ると約束した時間を大幅に過ぎていて、仕込みを全て終わらせてカウンターで一息ついていたらジェビンは、ナビが帰ってきたら、一言ガツンと言ってやるうと、いつものお玉を片手に待ち構えていた。

ドアベルとともに軋んだドアの開く音がして、ジェビンが立ち上がる。

「ナビッ！ 遅いよっ！」

そう大声を出した途端、ドアの隙間から身を滑らせるように入ってきたナビが、そのまま膝から崩れ落ちた。

「ナビッ?!」

驚いたのはジェビンの方だった。慌てて駆け寄り、崩れ落ちる身体を自分の膝の上に抱えあげる。

ナビはびしょ濡れで、ジーンズや靴にはところどころに泥が付着して汚れていた。

まるで、地面を這って逃げてきたような有様だった。

「どうした？ 何があった？」

ジェビンは、最近染め直したばかりの金色の髪が張り付いたナビの額をかきあげてやりながら問いかける。冷え切った唇は、青ざめて小刻みに震えていた。

「ナビ？」

口元に耳を寄せ、その小さい声を聞き取ろうと耳を澄ます。だが、結局ナビの声は言葉にならず、そのままガクツと身体が弛緩すると同時に、瞼が落ちた。

ジェビンはすぐさまエプロンのポケットから携帯を取り出すと、片手で短縮ダイヤルを押した。

「オーサー？ すぐ来てくれ」

駆け付けたオーサーによって精神安定剤を処方されたナビは、キヤンピングカーの中で寝かされたまま、この三日間ずっと夢と現の間を行き来しているようだった。

側で見守るジェビンの前で、ナビは何度もうなされ、聞き取れないわ言を呟いていた。

「じゃあちよつと、様子を見てきましようかね」

オーサーはカウンターの中へ進んで、ジェビンの脇を通り過ぎた。キャンピングカーに繋がった店の奥へと入っていく。

「ナビヤー、入りますよー」

ドアをノックし、気軽な声をかける。

ナビはベッドの上に起き上がり、両膝をぺタンと付く形で、こちらに背を向けて正座していた。

「起きてていいの？ 大丈夫？」

そう言つて背後からナビを覗き込んだオーサーが、目を見開いた。

「何やつてるの?! ナビッ!」

ナビはオーサーの左手首を掴んで、左耳から引き剥がした。途端に、ポタポタと真つ赤な血が、洗いたての白いシーツの上に点になつて零れ落ちる。左耳に爪を立てていたナビの指は、べったりと血で汚れていた。

その時、オーサーが開いたキャンピングカーのドアの隙間から、灰色猫のオンマが飛び込んできた。

金属音のような甲高い泣き声を上げると、そのままナビのベッドに飛び乗り、痛々しく血を流すナビの左耳を、ザラザラとした舌で舐め出した。

「……………うっ」

呻いて泣きじゃくりながら、ナビはオンマの舌や手首を掴むオーサーから逃れようと身を擦る。

「ナビッ！ もう止めて」

ナビの細い両手首を片手で絡め取ると、オーサーは空いた方の片手でナビの肩を強い力で押さえつけた。

「大丈夫だから……………ね？ 落ち着いて」

ナビの抵抗が止んだところで、オーサーは素早く自分のパンツのポケットをまさぐった。中から取り出した透明の小さなビニール袋を歯で干切ると、中に入っていた小さな錠剤を手のひらに移し、そのままその手でナビの口を塞いだ。

驚いて目を見開くナビの耳元で、オーサーは低い声で優しく呟いた。

「もう大丈夫……………ゆっくり、噛まないで飲み込んで」

コクリ……………と音がして、ナビの喉が小さく上下する。涙に濡れた目を閉じ、ナビはグッタリとオーサーの腕の中で気を失った。

オーサーはそんなナビの背中を優しく擦ってやりながら、柔らかい髪を撫でた。

「今は眠って……………辛いことは、全部忘れて」

低く囁くオーサーの背後で、キャンピングカーのドアが開く音が

した。

ナビを抱いたまま、ドアの前に立つジェビンを見上げたオーサーは眉を寄せて苦笑した。

「そんな怖い顔しないでよ。いくら俺だって、弱ってる子襲ったりしないよ」

つまらない冗談にジェビンが笑うはずもなく、その表情はますます凍えるように冷たいものとなっていく。

足元のオンマも、濁った金色の瞳孔を煌かせて、まるで非難するような冷たい目つきでオーサーを見上げる。

「何飲ませた？」

「あれ？ 見てたのね」

オーサーが肩をすくめる。

「トランキライザーだよ。ちょっと強めのね。ジェビンにはお馴染みの薬じゃない？」

その途端、ジェビンの目が細められ、射るような眼差しでオーサーを見据えた。

「おお、怖っ！ 久々に見たよ。おたくのそんな顔」

言葉とは裏腹に、オーサーは口元に冷ややかな笑みを浮かべていた。

「昔は、雨が降る度にそんな顔してたよね？ 変わったのはそう…
…いつからだっけ？」

「……黙れ」

ジェビンは冷たく言い放つと、ツカツカとベッドに近づき、オーサーの手からナビを奪い抱え上げた。血で汚れていない、自分のベツドへとナビを移動させるつもりらしい。その後ろに、静々とオンマも続いて歩き出す。

そんなジェビンの背中を目で追いながら、オーサーは挑発するように声をかける。

「久しぶりに、ジェビンにも処方してあげようか？」

肩越しに振り返ったジェビンが鋭い視線でオーサーを睨む。

「……いらねえよ」

吐き捨てるようにそう言うと、自分のベッドにそっとナビを降ろした。

「お前、もう帰れよ」

「電話一本で「すぐ来てくれ」なんて呼んどいて、用が済んだら今度は帰れって？ 全く、相変わらずの『お姫様』っぷりだね」

その途端、オーサーのコメカミを掠めて、果物ナイフが飛んできた。今はナビが眠る、ジェビンのベッドの脇にあるローテーブルの上に乗っていたものだ。

掠めたナイフはオーサーの背後の壁に貼ったコルクボードを貫通して、深々と突き刺さっていた。

オーサーが静かにコメカミに手をやると、ほんの少し掠った傷から血が滲んでいた。

フツと鼻から息を漏らすように笑ったオーサーが、口の端を吊り

上げて言った。

「そんな顔したお前に、可愛いナビヤを預けていけると思うっ？」

首を回して、背後に刺さったナイフの柄に手をかける。

「俺なんかの軽口も流せないようなお前に」

力を入れて引き抜いたナイフをクルクルと手の中で回して弄びながら、ジェビンにゆっくりと近づいていく。

「ナビに引きずられて、簡単にフラッシュバックを起こしそうになってるお前に。しっかりしろよ。お前は、ナビの兄貴ヒョウだろ？」

ジェビンの耳元に口を寄せ、低い声で言い聞かせるように呟く。

(……こっちにいらっしやい、ジェビン)

(何、これ？ ちっちゃい……やわらかい)

(お前の“弟”よ。抱いてみる？ 母さんが支えてるから、大丈夫よ)

(……ニヤアニヤア鳴いて、猫みたいだ)

ナイフの柄でグツと胸の先を押され、ジェビンは我に返った。

遠く掠れた幼い頃の記憶が、不意をついて鮮明に蘇り、ジェビンの足を竦ませた。

唇を噛み締め、顔を背けたジェビンの肩を優しく叩きながら、オーサーは眠るナビにも同じように、その肩にそっと布団をかけてやった。

銀のスプーンで鍋を突きながら、チヨルスは思わず溜息を零していた。

ちよつと前まで、その溜息は「美味いつ！」を代弁するものでしかなかったのに、今はその質が変わっている。

チヨルスはもう一匙、グツグツ煮立ったキムチチゲを掬うと、そのままフウフウ言いながら口に運んだ。

やはり出てきたのは溜息で、チヨルスはスプーンを啜えたまま首を捻った。

「……おかしいな」

眉を寄せて、湯気をたてている鍋を覗き込む。

「なあんか、じっくりこない」

そんなチヨルスの横で、ミンホは無表情のまま一心にスプーンを口に運んでいる。美味いのか不味いのか、そもそも味わっているのかさえ分からない表情で、モグモグと無言で食事を進めている。

「……味、落ちたか？」

思わずチヨルスがそう呟いたとき、配膳をしていた店のオヤジに思い切り睨まれた。チヨルスは慌てて口を噤んで、相変わらず横で

無心にスプーンを動かしているミンホに耳打ちした。

「お前、このチゲどう思う?」

「はい?」

面倒くさそうにミンホが顔を上げる。

「どつって、どう言う事ですか?」

「だから、さ。前からこんな物足りない味だったかと思ってさ」

眉を寄せるチヨルスに、ミンホは冷めた声で言う。

「チヨルスヒョンのお気に入りのお店だって言っただけで、僕を連れて来たんじゃないんですか? このキムチチゲが好物なんだって、さつき楽しそうに話してましたよね」

「そうなんだけどよ……何て言うの? こう、隠し味的なモノが足りないっていうの? もっと、美味しいもん食っちゃったせいか……」

そこまで言っただけで、チヨルスはハツとして押し黙った。

お気に入りのお店のお好物のチゲより、更に上をいくチゲを食べた場所を思い出したからだだった。

(うちの店のは、媚薬入りだから……)

舌が忘れられないあの味を思い出すと同時に、脳裏にお玉片手に妖艶な笑みを浮かべるジェビンの姿が浮かんで来て、チヨルスは思わず、ブルツと頭を振った。

そうか

『ペニーレイン』で食べたチゲの味が、忘れられなかったんだ。

思い出したら最後、目の前のチゲが急に色褪せた物に思えてきた。

「食べないんですか？」

横からスプーンを伸ばして、ミンホが相変わらず無表情で鍋を突つく。

「お前って、もしかして味オンチ？」

スプーンを咥えながら恨めしげにそう言うチヨルスを尻目に、ミンホは鍋をグチャグチャにかき回す。

「好き嫌いが無いって言うてほしいものですね」

ミンホはそのまま自棄食いでもするかのように、ガツガツとチゲを食べ始めた。

「あーあ、ジエビンのキムチチゲ、食べたい」

スプーンを放り出したチヨルスに、ミンホがピクリと反応する。

「探すか？ もう一度。『ペニーレイン』」

「本当ですか？！」

食べるのを止め、急に乗り出してきたミンホにチヨルスの方が思わず仰け反る。

「何だ？ お前も、ジエビンの料理食いたかったのか？」
「探しましょう、チヨルスヒョン！ あ、ちよっと！ 天気予報にチャンネル変えてくださいっ！」

チヨルスの問いにはまともに答えずに、ミンホは急に立ち上がると、店に一台しかないテレビのチャンネルを強引に天気予報に変えさせた。

薄い布団からはみ出した足の先が凍えるように冷たくて、目を覚ます。

小さな足を擦り合わせて暖を取ろうとするが、隙間風のせいで外と大差ない室温の中では、いくら冷たい自分の肌を擦り合わせても到底身体が熱を取り戻すことはない。

寒さで目覚めた筈なのに、意識が覚醒するにつれて、耐え難い空腹感も同時に襲ってきた。グーツと小さくなる腹を押さえて、布団からそつと抜け出す。

台所とは名ばかりの、流しと小さなガスコンロが一つあるだけの炊事場に立ち、一人暮らし用の小さな電気釜の蓋を開けた。

乾いてこびりついた米まで指の腹を使って一つ一つ丁寧に取り去って、欠けた茶碗に移す。少しでも量を取れるように。

コンロの上に乗ったままの、少し酸っぱい匂いを放つようになったスープに手を伸ばして、冷たいご飯の上にかけて、それから一気に立ったままそれを腹に流し込む。

冷たいご飯とスープが一塊になって胃の底に落ちていく感覚がして、ブルツと身震いしながらも、ようやく空腹感がいくらか和らい

でいくのを感じた。

「……ハ又ル？」

その時、先ほど自分が抜け出してきた布団の中から声が聞こえた。茶碗を流しに置いて、声のする方を振り返る。

「……何の音だ？」

声に答えて、窓の外を見てから静かに言った。

「雨の音だよ」

膨れた布団の中身は、ウーンと唸りながら、大きく寝返りを打った。

「……仕事は？」

「今日は休みだろ。この分じゃ」

尋ねると、短い答えが返ってくる。

「お前、寒くないのか？」

布団の隙間から覗く二つの眠そうな目が、こちらをつかがいながら問いかける。

「……うん。寒い」

「裸足だからだろ？」

「うん」

「バカ」

布団の中身は呆れたような声でそう呟くと、その汚れた薄い布団を捲り上げた。

「ほら、早く来い」

布団の端が捲く上がった途端、離れているのに嗅ぎなれた懐かしい体臭がした。一瞬躊躇して左足を引いたが、布団を捲り上げた男はポンツと気軽に自分の横を叩いた。

「早くしろ。俺も寒い」

その言葉に迷いを振り切り、布団の中へ滑り込む。

「朝までもう一眠りするぞ」

「……うん」

固い筋肉の腕枕に頭を預けて、目を閉じる。

どうか、雨が止まないように……
そう、祈りながら。

「……………ナビ？」

何度も呼ばれて、ハッと顔を上げる。目の前には、心配そうな顔で覗き込んでいるジェビンの顔があった。

「大丈夫か？」

「あ……………うん、ごめん。ボーツとして」

ナビは慌てて、手にしていた皿拭きを再開した。

「具合良くないなら、無理するな。店の方は気にしなくていいから」
「本当に大丈夫だよ。心配かけてごめん、ジェビニヒョン」

夢と現の間をさ迷った三日間の後、ナビはジェビンやオーサーが止めるのを振り切り、店に出るようになった。

身体を動かして何かしていたほうが良かった。そうでないところ、すぐに思考は流れてほしくないところへと流れていってしまう。

カウンターのいつもの特等席にはオーサーが居座り、夜が更けると同時に強くなってきた雨脚に合わせて、店を埋める客の数も増えてきた。

その時、ドアベルの音が鳴り響き店のドアが開いた。

「あれ？ どうしたの？」

戸口のところに今日もびしょ濡れで立ち尽くす長身の男二人を見て、ジェビンが声をあげた。

「また事件？」

「違うっ！」

チヨルスはそう叫ぶと、濡れた身体のままズカズカと店内に入ってきて、ジェビンの前のカウンター席にドカリと腰を下ろした。

「今日は客として来たんだ。いいな？ 客・と・し・て・だ。働かないぞ！ 今日は食うだけっ！」

ナビとミンホが明慶大学へ潜入している間、『ペニーレイン』を手伝わされたことで余程懲りたのか、チヨルスは人差し指をジェビンの鼻先に向けて、そう宣言した。

「ここのキムチチゲが忘れられなかったんだそうです」

「余計なこと言うなっ！」

横から口を出すミンホに、チヨルスが顔を真っ赤にして怒る。

「それでわざわざ探したの？ ご苦労様だね。素直に言ってくれたら、警察署まで出前したって良かったのに」

ジェビンはそう言って笑いながら、チゲの用意をするために奥へと消えた。

ミンホは、カウンターの隅でボーツとしたまま皿を拭くナビを横目で見つめた。自分たちが来たことにも気付いていないのか、ナビは焦点の合っていない目で床を見つめながら皿を拭いていた。

ミンホが座る席からナビまでの距離は少し離れていたため、ミンホは思い切って席を立ち、ナビの目の前のカウンター席に腰を下ろした。

「……何で、返事くれないんですか？」

恨めしげに呟いた言葉で、ようやくナビが顔を上げた。

「あ……れ？ お前、何で……ここに？」

「さつきからいましたよ。チョルスヒョンと二人で、今日はお客として来たんです」

「……そっか」

ナビは手にしていた皿と布巾をカウンターの上に置いた。

「……ねえ。答えてください。何で、返事くれないんですか？」

ミンホが痺れを切らせてもう一度言うと、ナビは怪訝な顔をした。

「え？」

「メールしたでしょ」

ミンホの言葉にも、ナビはキョトンとするばかりだった。

「何のこと？」

「何のこと？ じゃないですよ。あの後、別れてすぐに。どうせあなたからはしてくれないと思ったから、僕からメールしたんじゃないですか」

「来てないよ」

「送信履歴に残ってます！」

証拠を突きつけるように、ミンホは尻ポケットから出した携帯をナビの目の前で開く。ナビは画面を覗き込みながら首を傾げる。

「だって……本当だもん。僕、メールなんかもらってないよ……」

ナビも慌ててポケットから携帯を取り出そうとして、動きを止めた。

「……ない」

「え？」

「……落とした」

「はあっ?!」

途端に慌てだすナビに、ミンホは言った。

「いつからですか？」

「多分……お前と別れて、すぐ」

「じゃあ、五日も?!」

ミンホは目を見開いた。

「あなた本当に、このインターネット大国の人間ですか？ 携帯無

しで何日も……しかも、落としたことにも気付かないなんて」

「ちょっと、待って……あれ、どこで？」

その時、思いを巡らせていたナビの顔から一瞬で血の気が引いた。

「ヒヨン？ どうしたんですか？」

尋常でないナビの顔色に気付いたミンホも、ナビを見上げる。

「ヒヨン?!」

立ち上がり、ナビの肩を掴もうとしたミンホの目の前で、横から現れた腕が、ナビを強く抱きしめてミンホから引き離れた。

「ナビは調子が良くないんだ。責めるつもりなら、帰ってくれよ」

ナビを抱きしめたジェビンは、ナビの肩越しにミンホを冷たい目で一瞥をくれた。ナビは荒い息を吐いて、グツタリとジェビンの胸に顔を埋めている。

ジェビンはそのままナビの肩を抱いて、店の奥へと消えた。

ミンホはただ黙って、唇を噛み締めながらその背中を見送るしかなかった。

「君の負けー」

いつの間にか隣りに座っていたオーサーが、枝豆を頬張りながら可笑しそうに言った。

「酷なようだけど、今の君じゃあ、あの二人の間に入り込む余地はないよ」

カツと頬を赤くさせてオーサーを睨むミンホにお構いなしに、オーサーは余裕の表情で枝豆の皮を皿に投げ入れて遊びだした。

「……君は『痛み』ってやつを、どれだけ知ってる?」

まるで『海』って知ってる? とでも言うような軽い口調で、オ

ーサーが尋ねる。

「……何ですか？ 『痛み』って」

眉を寄せてそう尋ね返すミンホに、オーサーは一瞬ニヤリと口の端を曲げて笑った。

「イエッス！ ナイツシユー！」

枝豆の皮を全て皿の中に命中させると、オーサーは一人でガッツポーズをして席を立った。

「さあて、皮も全部入ったしー、ナビヤはいないしー、俺も今日はもう帰ろうつと」

「ちよつと！ 話はまだ終わってませんよ！」

オーサーの肩を掴もうとするミンホに、オーサーはクイクイと親指でカウンターの隅を指した。

「君も帰ったほうがいいんじゃない？ 先輩、つぶれちゃってるよ」

見ると、食前酒代わりのブランデーを煽ったチヨルスが、へべれけになってカウンターで潰れていた。

「チヨルスヒョンッ！」

ミンホが慌ててチヨルスに駆け寄る。

「じゃあねえ。バイバーイ」

オーサーはヒラヒラと手を振りながら、出口へと向かった。

「もうっ！ 何してるんですか。空腹のまま、こんなに飲むからですよっ！」

ミンホは潰れたチヨルスの頭をぺちんつと弾いてから、肩に腕を回し重い身体を持ち上げた。

「……………あれ？」

浮き上がるように意識が戻るのと同時に、瞼の裏を刺す光が眩しくて、ナビは目を開けた。

「気がついたか？」

枕元から、聞きなれたジェビンの声が静かに降ってくる。

「……………店、は？」

「もう閉めた」

「……………ごめん」

「気にすんな」

クシャリと柔らかい額の髪を撫でて、ジェビンは微笑んだ。一見すると女性と見まごうような整った顔立ちに反して、ジェビンの指はゴツゴツと節くれだった、男らしい手をしている。

働き者の手だ　と、いつかナビが言ったとき、ジェビンは少し恥ずかしそうに笑った。

頭の上でプチンプチンと音がして、ナビが首を上げると、ジェビンはナビのベッドの脇に置いた椅子の上で足を組みながら、マメを剥いて膝に抱えたボールに皮を入れていた。

「……………兄貴ケムシ」

「ん？」

目だけ上げてジェビンが答える。

「足、出して」

ナビはベッドの上から降りると、ジェビンの足元に腰を下ろした。広げた両足でジェビンの左足を挟むようにして脛から先をジーンズを押し上げて優しく擦ってやる。

「……………今日も、痛む？」

「お前がそうやってくれてる間は、全然忘れてる」

ボールに皮を落としながら、ジェビンは微笑む。キレイに剥けた一つをナビの口に持って行ってやると、ナビは嬉しそうに頬張った。ボールがマメの皮で一杯になる頃、ジェビンの足元からはスースーと規則正しい寝息が聞こえて来た。

ジェビンの足にもたれたまま、ナビはいつの間にか眠ってしまった。マメの皮が入ったボールをサイドテーブルに置いて、ナビの身体を抱えあげようと屈みこんだ時、キャンピングカーのドアが開いた。

「痛い痛い飛んでけーって？」

「……………帰ったんじゃないのか？」

現れたオーサーに、ジェビンは呆れ顔でナビに伸ばした手を引っ込めた。

「飲み足りなくてさ」

明らさまに迷惑そうな顔をしているのに、全く怯む様子もなくオーサーはキャンピングカーの中に入りこんできた。

「……ふふ。猫みたい」

ジェビンの足にもたれて寝るナビを覗き込んで、オーサーが笑いを漏らす。

「怒るぞ、きっと。動物と一緒にするなって」

「最初に言い出したのは、ジェビンだよ」

「俺？」

ジェビンが身に覚えのないことだと言うように、キョトンとした顔でオーサーを見る。

「猫を拾ったって、そう言った」

オーサーはジェビンと向かい合うようにしてベッドに腰を下ろす。

「あの時、俺が何て言ったかも覚えてる？」

「……いや」

「やめとけて、言ったんだよ」

オーサーが真正面からジェビンを見据える。

「くびり殺しそうな顔してたから。生きてるもの、何でも」

オーサーの言葉に、ジェビンの目がスッと温度を無くして細められる。

「そうそう、そんな目。久しぶりにあげようか？ 昔の、夜のお友達」

そう言うと、オーサーはサイドテーブルに裸にした錠剤の山を置いた。

その途端、ジェビンの手が伸び、錠剤を全て床に叩き落した。コロコロと小さな音を立てながら、叩き落された粒たちはベッドの下やテーブルの下に転がって行った。

「カリカリしないでよ。折角のキレイな顔が台無しだよ。そういうとこ、兵役の頃から本当、変わってないよね」

「どういうところが？」

「見かけはハチミツ、中味は唐辛子」

「上手い、とでも言うと思ったか？」

ジェビンの冷やかな視線にも負けず、オーサーはヘラヘラと笑う。

「まあ、でもいいんじゃない？ 見かけだけでもスイートでもらえれば取り敢えずは平和だよ。あの頃は、本当に酷かったからね。自覚あった？」

オーサーの言葉に、ジェビンは軽く舌打ちして答えない。凶星を指された証拠だった。

「見かけも中味も、荒みきってたからね。殺し屋みたいだった」

ジェビンが弱ったのを見て、ここぞとばかりにオーサーは面白がりながら攻め立てる。

「……だから、心配したんだ。手負いの子猫なんか、飼える状態じゃなかったから」

オーサーはまだジエビンの足にもたれて気持ち良さそうに寝息を立てるナビの頬に手を伸ばした。

手負いの子猫

オーサーの例えは、いい得て妙だった。

九年前。

電気の通っていないアパートの中は薄暗く、外からの明かりが届かない奥まったキッチンの隅は、更に濃い闇に覆われていた。

先ほどから飽きもせずにはアザアザと激しく降り続ける雨が、今も古びたアパートの粗末な窓を叩いている。

そんな雨の音と競い合うように、暗いキッチンの中には、脂を敷いたフライパンの中身を一心不乱に掻き回すジェビンの姿があった。フライパンの中で奏でられる、雨の音そっくりな脂の音を聞いている間だけは、憂鬱な雨そのものを振り払える気がして、ジェビンの腕には、ますます力が入っていく。

季節は晩秋の頃だというのに、捲くり上げた黒い長袖のTシャツはグツシヨリと濡れ、白銀に近い金色の髪も、汗で額に張り付いていた。

ポタリ

ジェビンの高い鼻筋から一粒の汗が滴り落ちるのと同時に火が止められ、自棄になったように掻き回されていたフライパンの中身が落ち着いた。

荒い息を吐いて、お玉を持ったジェビンの腕がダラリと垂れ下が

る。

火の音が止んだ途端に、外から響く憂鬱な水音がジエビンの耳を浸食し始め、料理中は忘れていた左足の傷が、ズクンズクンツと脈を打って疼き出す。

「……また、作り過ぎちまった」

苦々しげに呟いて額の汗を拭うと、ジエビンは躊躇することなく、まだ湯気を立てている出来たてのチャプチェを、フライパンごとダツシュボツクスの中に捨てた。

ズクンツズクンツ……

左足の痛みが増してくる。

痛みに呼応するように、胸のムカつきが自身の空腹を訴える。だが、作りたてのチャプチェは、既にダツシュボツクスの中だった。ジエビンは痛みと胃の不快感を振り切るように、無造作にキッチン台の端に転がっていた缶詰の一つに手を伸ばすと、ジーンズのポケットからナイフを取り出した。

台に置いた缶詰に、そのままナイフを力いっぱい突き立てる。

ブシュツと音がして、缶詰の蓋に穴が開いた。刃こぼれを気にしそうなところだが、使い込んだナイフは元々刃がボロボロで、今更多少欠けたところで大差なかった。

ギツ、ギツと金属が擦れる耳障りな音を立てて、ジエビンは缶詰の傷を広げていく。

丁度いい具合まで穴を広げたところで、開いた穴に刃を差し込んで、梃子てこの原理で蓋を開いた。

そのままナイフの腹で缶詰の肉を掬って、口に運ぶ。形の良い唇から肉の油が零れて、暗闇の中でヌラヌラと光る。ジエビンは手の甲でそれを拭い去ると、赤い舌で唇を舐めた。

空腹を満たしても、足の傷の疼きは収まらない。

ジェビンはナイフを手にしたまま立ち上がると、窓に向かって歩き出した。飽きることなく降り続ける雨を恨めしげに横目で睨みつけながら、ジェビンは窓の横の壁に貼り付けた、一枚の写真の前に立つ。

それはもう、写真と呼べる代物ではなかった。

首から下の広い肩幅で、その写真に写る人物が男であるということが辛うじて分かるが、首の上に乗った顔は、無数のナイフの傷で覆われ、もはやそれが本当に人の顔であったかどうかの判別も難しかった。

ジェビンは手にしたナイフの先を、その写真の人物の、かつては目があったと思われる場所に突き立てる。

ギギーッ

写真を貼り付けた壁もろとも、新たな傷を刻み付ける。

ギギーッ

ギッ、ギッ……

静かに、写真と壁を抉る音だけが、狭い部屋の中で響き渡る。

ガリッ

最後に爪で引っかくと、ジェビンは一瞬の鋭い痛みで顔をしかめた。

指先から血が滲み、唇を寄せると鉄の味がした。

ジェビンは刃の欠けたボロボロのナイフをジーンズのポケットに捻じ込むと、壁に掛けてあった革のジャケットを引っ掛けて、玄関

へ向かった。

途中、閉め切られた部屋の前で立ち止まり、そこへ頬を寄せてドアの向こうに向かつて小さな声で囁く。

「……兄貴は、出かけてくるよ」

ドアの向こうから返事はないが、ジェビンは確かめるようにドアを手のひらでそっと撫でると、身を翻してアパートを後にした。

両手をジャケットの中に突っ込んで、背中を丸めて雨の中を歩く。

ナア ナア

不意に、尾を引く、甘く媚びるような哀切な泣き声が路地裏から聞こえてきた。一瞬、赤ん坊の泣き声と間違えそうになるが、よく聞いてみれば子猫の鳴き声だと分かる。

そう言えば、昨日の夜からアパートの外でしきりに鳴いてジェビンの安眠を妨害していた。

ジェビンはジャケットの襟を立て直し、鳴き声から耳を塞ぐようにその場を立ち去った。

治安の悪さで知られるソウルの裏通りを迷いのない足取りで進みながら、ジエビンは雑居ビルの地下にあるバーへと下りて行く。

「よお！ ジエビンじゃねえか」

「久しぶりだな。調子はどうだ？」

ジエビンが店内に入るや否や、馴染みの客たちが声をかけてきた。ジエビンが口元だけで笑いながら店内を進んでいくと、スキンヘッドに丸めた頭にバラのタトゥーを入れた男が横から現れ、馴れ馴れしくジエビンの肩を抱いた。

「相変わらずつれねえな。すっかりご無沙汰だったけど、何してたんだよ？ 寂しかったんだぜ」

ジエビンは男を見もせず店の奥のカウンター席に腰を下ろすと、低い声でボソリと呟いた。

「……新しい情報、入ったか？」

「ああ……あるぜ」

男はそう答えると、素早くカウンターの下のスタッフに目配せした。スタッフはジエビンに気付かれないように微かに男に頷いて、制服のポケットに手をやった。中から一瞬覗いたキーの柄がキラリと光った。

「今度のは、確かなスジのとおっておきの情報だ。ここじゃちよいと言えねえから、場所変えようぜ」

男の手がジェビンの細い腰に回され、いやらしく蠢く。ジェビンは表情一つ変えずに男に促されるまま立ち上がった。

「……あつちへ」

男はジェビンの耳に口付けせんばかりに唇を近付け囁く。男はさりげなくカウンターに合図を送って、スタッフが滑らせたキーの上に隠すように手を重ねた。

その時だった。

ダンッ!!

短く重い音が響くと同時に、キーの上に重ねた男の手の甲には、直角に突き出たナイフが刺さっていた。

「うぎゃああああああああつっ!!」

店内を凍りつかせるような悲鳴を上げ、男はカウンターに手ごとナイフで縫い付けられたままガクンと膝を折る。

「……ジエ……貴……様……」

息も絶え絶えになりながら、冷たい目で見下ろす隣りのジェビンを振り仰ぐ。

「ガセネタで抱こうなんて、図々しすぎないか？」

抑揚のない声でそう呟いてカウンターの中のスタッフに視線を移すと、スタッフはヒツと息を飲んで身をすくめた。

「相手して欲しけりゃ、いい加減まともなネタ持って来い」

ジェビンは膝をつく男の髪を掴んで、引き上げた顔にその美しく表情の無い顔を近づけた。

「……また来る」

男の髪を掴んでいた手を離すと、ジェビンはポケットから取り出したウォン紙幣をカウンターに置いて、店を後にした。

親指で頬を擦ると、先ほど男の手を串刺しにした時に飛び散った返り血が、乾いてこびりついていた。

見ればジャケットにも転々と血の跡がついている。ジェビンはジャケットを脱ぎ去って腰に巻くと、もう一度顔に血の跡がついていないか確認してから、煌々と明かりを灯すコンビニに入ってしまった。

数分後、コンビニの袋を提げて、ジェビンはアパートの前の道を歩いていた。

行きがけに聞こえていた路地裏の猫の鳴き声が今は止んでいる。

ジェビンが鳴き声のした路地に入っていくと、湿ったダンボールの中で小さな小さな子猫が二匹、寄り添いあつたまま冷たくなっていた。

ジェビンは眉を寄せて、コンビニの袋の中に視線を落とした。

また今夜も鳴かれたら、適わないから

そう思って買ったミルクのパックが、ズシリと腕の中で重みを増す。

そっと手を伸ばして小さな身体を人差し指で撫でてやると、雨に

打たれて固く冷たくなった毛並みがしつとりとまとわりついてきた。その瞬間、どこで見えていたのか、灰色の痩せ衰えた猫がジェビンの前に降り立った。毛並みの悪い全身を逆立て、威嚇の証である耳を小さな頭に張りつかせんばかりに倒しながら、金色の瞳孔だけをキラキラと輝かせてジェビンを睨みつける。

きっと、この子猫たちの母親なのであるうその姿に、ジェビンはそつと踵を返して、哀れな猫の親子たちに背を向ける。

無駄になってしまったミルクパックをその辺に捨てて帰ろうか、そう思った時、朝聞いたのとは質の異なる鳴き声が聞こえてきた。

……ッフ……ッフ

息を殺すように、控えめに吐き出される音は、口元に手の甲を当てているのか、くぐもって聞こえてきた。

ジェビンが声の在りかを求めて視線を巡らせると、悪臭を放つゴミの集積所のポリバケツの影から、骨と皮のような二本の素足が伸びていた。

死体か？

一瞬そう思ったジェビンだったが、寒さに小刻みに震えているので、その持ち主がまだ生きていることが分かった。

ジェビンは近付いていって、その足の持ち主の身体を隠していたポリバケツの上に屋根のように被さったダンボールを勢いよく取り払った。

急に開け放たれた視界に、ゴミの影で蹲っていた少年は、ビクツと身体を震わせてジェビンを見上げた。

丸く見開かれた幼い瞳は、雨に濡れた路面のように濡れて光っていた。

その目が、つい先ほど人差し指で撫でてきた小さな生き物の姿に重なって、思わずジエビンの口を突いて出た言葉は

「……………猫？」

潤んだまま、更に怯えたように大きく見開かれる瞳に、ジエビンは無意識の内に手を伸ばしていた。

行き交う通行客は、植え込みからニヨキツと突き出した長い足を怪訝な顔で振り返りながら通り過ぎる。

中にはその足に躓いて、暴言を吐き捨てながら去っていく者もいる。

ミンホは泥だらけになりながら、先ほどから植え込みの下に潜り込み、枝や葉や砂利を掻き分けて落とし物を探していた。

図書館の前のコンビニで傘を買って持たせてやっってから、この先の路地でナビと別れた。角を曲がってナビの姿が見えなくなるまで背中を見送っていたから、ナビが携帯を落としたとすれば、自分の目が届かなくなったこの路地からの筈だ。

警察業務を生業とするミンホらしい発想で、ナビの携帯の在りかに目星をつけ、植え込みの下を片っ端からシラミ潰しに探していた。

「……あっ」

ふとミンホの目の先で、白いフリツパ型の携帯の背が、半分土に埋まる形で光っていた。

「あつたあ！」

携帯を掴んで勢いよく頭を起こしたとき、枝がサクツと頭に突き刺さり、ミンホは腰を突き出した姿勢のまま身悶える。

「…………痛あ」

呻きながらも手にした携帯はしつかりと握り締めたまま、ミンホはズルズルと植え込みから這い出してきた。

ズボンの端で泥だらけになってしまったナビの携帯を丁寧に拭いてやる。パカッと蓋を開けると、微かだがまだ電池が残っていた。

他人の携帯を見るのに一瞬のためらいはあったが、自分の恥ずかしいメールを消してしまいたくて、ミンホは受信ボックスを開いた。だが、そこにミンホのメールはなかった。

あるのは『送信者：ジエビン兄貴^{ミンホ}』の名前と、インターネットカフェのお得情報メールだけだった。受信したままに、削除も整理もしていないところが、いかにもナビらしかった。

ミンホは首をかしげながら、自分の携帯を取り出す。

ミンホの送信ボックスには、ナビ宛のメールがきちんと送信済みとして残っていた。

何の原因で届かなかったのかは分からないが、勢いで送ってしまったあのメールを、ナビが見ていないという事実には、ホツとするのと同時にとてもガツクリしてしまう気持ちはどうしようもなかった。

それに、携帯を落としてから五日間も無くしたこと事態に気付かないなんて、ナビが別れてからずっと、ミンホへメールを送ろうと思わなかったということだ。

それを思うと、ミンホは先ほど枝を頭に突き刺した以上の衝撃で、頭を殴られたような気がした。

失恋決定か？

だがすぐに、いやいやいや

と首を横に振る。

まだそうと決まったわけじゃない。

ミンホはナビの携帯を丁寧に分のズボンのポケットにしまう。ナビは興味の矛先が一点に集中しているときは、他のものが目に入らない。それは、明慶大学に潜入して一緒に過ごしたあの二週間の間でも、イヤと言うほど思い知らされた。

この五日間、ナビの意識の先が他のものに向いていただけ。時期が過ぎれば、十分にチャンスはある。

そこまで考えて、ミンホはふと我に返る。

失恋決定？

チャンスはある？

まるで、好きな相手を墜とすための作戦を練ってるみたいじゃないか。

ミンホは自分の脳内会議の内容に、激しく異論を唱える。僕は別に、ナビヒョンを好きなわけじゃない。

兄貴ヒョンのくせに、危なっかしいあの人を、放って置けないだけだ。

第一、童顔で子どもみたいで……ちよつと……本当にちよつとだけ、可愛いからって言ったって、あの方は男だ。

恋愛対象である筈がない。

確かに、オーサーとか言うあのもぐりの医者も、『ペニーレイン』の美貌のオーナー、ジェビンも、みんな寄ってたかってあの人を甘やかし、猫可愛がりしているけれど。

ジェビンの顔を思い出した途端に、ミンホの心は暗く沈んだ。

この前、『ペニーレイン』で思わず携帯を無くしたというナビに詰め寄った時、ナビを庇うようにミンホの前に立ちふさがったジェビン。

ミンホを見据える冷たい目と、苦しげな息の下で何の迷いもなくジェビンの胸に縋るナビの身体を抱く力強い腕のギャップに、言い

ようなない疎外感を感じた。

(君の負けー)

オーサーのふざけた声が蘇ってくる。

悔しいが、確かに完敗だった。

オーサーの言うとおり、とても昨日今日知り合ったばかりの自分が、あの二人の間に割って入っていける気はしなかった。

泥酔したチョルスを引きずるようにして帰りながら、ミンホは酔っている時がチャンスとばかりにチョルスに聞いてみた。

「チョルスヒョンは、あのオーナーとどういう関係なんですか？」

ミンホに肩を担がれたチョルスが、ヒックとしゃっくりしながら顔を上げる。

「前に言ってたでしょう？ ちょっとした事件の関係者だったって」

簡単に口を割るかと思っていたチョルスは、しかし口を真一文字に引き結んで、そっぽを向いた。

「それは、言えねえな」

「え？」

ミンホは少なからず驚いてチョルスを見る。

「どうしてですか？」

チョルスはミンホから目を逸らし、アスファルトを睨みつけるようにしながらキツパリと答えた。

「あいつの名誉に関わることだから、いくらお前にも言えない」
「名誉？」

「ただ一つ言えることは、あいつは完全な被害者だったってことだ」
歩みを止めてチヨルスと向き合おうとしたミンホの目の前で、チヨルスは突然両手で口元を押さえた。

ウツプ……

弱々しい声をあげて、路地の隅に駆け込み身体を二つに折り曲げて激しく嘔吐する。

ミンホは情けない先輩の背中を呆れた顔で見守りながら、オーサーの言葉を思い出していた。

(……君は『痛み』ってやつを、どれだけ知ってる?)

路地の先の行き止まりに、ひっそりと佇む黒テントが滲んでいる。今夜は非番だったため、一人で車に乗り込みソウル中を走り回った拳句、明け方近くなってようやく見つけた。

ポケットの中の携帯電話を持ち主に返すためだった。

店の入口に顔を出したとき、ナビは相変わらずボーっとした様子でカウンターの中で皿拭きに専念していたが、ミンホの姿を見つけて酷く驚いた様だった。

そのままジエビンを振り返ったが、接客に追われていたジエビンは気付かない。ミンホは顎をしゃくって、そのままナビを店の外に誘い出した。

「どうしたの？ お前……今日は一人？」

ミンホと二人きりになるのが落ち着かないのか、キョロキョロとチヨルスの姿を探すナビに、ミンホはボソリと言った。

「……………これ、返しに来たんです」

そう言って、手のひらの上にナビの白い携帯電話を乗せて差し出す。ナビが手に取ろうとしたところで、素早く拳を握り携帯を渡すのを阻止する。

「何だよっ？ 返してくれるんじゃないの?!」

ナビがまたキャンキャンと吠え出したところで、ミンホは言った。

「メールは消しました」

「え？」

本当は消したのではなく、消えていたのだが、ミンホは彼なりの意地でそう言っただけで突っ張った。

「何で勝手に。じゃあ、もう一回送ってよ」

「嫌です」

「はあ?!」

「一度しか、言いたくありませんから」

ワケが分からないという顔で、ナビはミンホを見上げる。

「……痛みって、何ですか？」

「え？」

急にトーンを変えたミンホの声に、ナビがキョトンとした顔でミンホを見つめる。

「あなたと、あのオーナーが持つてる『痛み』って……」

その時、店のドアの向こうから「ナビー、どこ行ったー?」というジェビンの声が聞こえてきた。

「あ……戻らなきゃ……」

途端に身体の向きを変えようとするナビの両肩を、ミンホは強い力で掴んだ。

「痛っ！」

思わず悲鳴を上げるナビに構わず、ミンホはずっと押さえつけてきたものを吐き出すように、激しくナビの身体を揺さぶった。

「そんなものがなくちゃダメですか？！ 僕だって、無視されたら心が痛いです」

「無視なんか……」

「好きな人が、いつもどこか別のところを見てたら、傷つきますっ！」

「……好きな、人？」

思いのたけをぶちまけたミンホも、ぶちまけられたナビも、ハタツと一瞬動きを止める。

ナビの両肩に食い込ませたままの指を、ミンホは慌てて解いた。途端に赤くなる顔を背け、ミンホは大きな手で自分の口元を覆って横を向いてしまう。

ミンホは携帯電話を押し付けるようにナビに渡し、顔に集まった熱を振り払うように首を振ってから、開き直ったように低い声で呟いた。

「……そういう、ことです」

ナビが一言も返せずにいる内に、店から出てきたジェビンが二人の姿を見つけた。

「お前ら、そんなところで何やって……」

雨に濡れそぼったまま、呆けたように向かいあっている二人を、ジエビンが怪訝な顔で窺っている。

その時だった。

おかしいな空気を一蹴するように、ミンホの携帯電話の電子音が鳴り響いた。

「……はい、こちらハン・ミンホ警衛」

仕事用の固い声で胸ポケットから取り出した携帯電話に出たミンホの目が、突然見開かれた。

「分かりました、すぐに向かいます」

短くそれだけ言うと、すぐに携帯の電源を切り、ポケットにしまい込む。

「今日は、これで帰ります」

短くそれだけ言うと、ミンホはクルリと背を向けて、走り去っていった。

カクカクときこちなく走っていくその背中を見送りながら、ナビは自分の頬にも熱が集まってくるのを感じていた。

トクトクと脈打つ鼓動に合わせて、胸の奥から熱い思いが込み上げる。

年下の、生意気な、エリート警察官。

目上の者に対する敬意が足りないと、口づるさく言えば、じゃあ敬意を払われるように少しは年上らしくすると、減らず口を返される。

見惚れるほどの容姿と反比例した口の悪さに辟易しながらも、い

つても大切な場面ではナビを気遣い守ってくれた。

ジェビンとはまた違った、不器用な優しさは、それでもナビにきちんと届いていた。

胸の熱さがそのまま喉元まで這い上がり、うっかりすれば涙になって瞳の端から零れ落ちそうになった。

「ナビ？ どうした。あいつと、何かあったのか？」

目の前で、優しい灰色の瞳が自分の様子を窺っている。

遠慮がちに伸ばされたひんやりとした指が、熱を持った頬に触れる。気付いたらずっと傍にあり、変わらぬ優しさで包んでくれたその指を掴んで、ナビはそっと目を閉じる。

今ナビの胸を満たしているものは、九年前、この手を取った時とはまた違う、胸の熱さだった

ナア ナア

夢の現の間をまどろみながら聞く、まるで赤ん坊のような泣き声。自分が、こうして隠れるように路地裏のアスファルトの上に身を横たえてから、いったいどれ程の時間が過ぎたのだろう。

夕刻の頃になれば、ソウルの秋は肌寒いを通り越して、既に手足がかじかむほどの冷え込みをみせる。

空腹の感覚など、もうとうの昔に過ぎ去っていて、骨と皮だけになっってしまったような自分の枝のような手足が、霞んだ視界の隅に映るだけである。

身につけているものと言えば、肌着のように薄いＴシャツと擦り切れたハーフパンツだけで、濡れたアスファルトから直に伝わる冷気は、ますます自分の脳裏から思考する力を奪っていく。

まだ辛うじて残る意識の隅で聞いていた泣き声が止むと、不意に頬にザラリとした感触を感じて薄目を開けた。

そこには自分の胸の上に乗る、金色の瞳孔を鋭く光らせた痩せた猫がいた。

冷静な思考回路を失った脳は、一瞬、自分がこの猫の餌食として狙われているのかと解釈した。

飢えて凍えて路地裏に倒れた自分の末路は、この痩せ衰えた猫の餌食となることで終わるのかと、本気で考えた。

さつきまで、赤ん坊の泣き声だと思っていた子猫の声は、きつとこの猫の子どもたちなのだろう。骨と皮ばかりのような自分の肉体でも、少しでもこの猫たちの飢えをしのぐ役に立つのなら、それも

いい……。

半場諦めの境地で再び力なく瞼を閉じると、不意に口の中に生臭い何かを詰め込まれ、むせ返った。

込み上げる吐き気と共に目を開ければ、先ほどまで胸の上に乗っていた猫が、そのまま首を伸ばすようにして、自分の口の中に啜え込んだ魚を押し付けていた。腐りかけた身をつけた魚は酷い悪臭を放っていたが、吐き出そうとする自分をその猫は許さず、痩せて鋭い爪を持った前足を、口を塞ぐように押し付けている。

胃の奥からせり上がってくるような嘔吐感と、口を引っかかれる苦痛に顔を擦って抵抗するが、灰色の猫はそれを許さず、とうとう根負けしてゴクリと喉を鳴らし、その魚の身をひとかけらを、胃の奥に落としてしまった。

「……ツウ……ウゲツ……ゲホツ」

涙を流しながら咳き込んでいると、胸の上に乗っていた猫は身を翻し、再び現れたと思ったたら、痩せた身体で器用に雨水を溜めた割れた茶碗を押ししてきた。

先ほどその爪で引っかいたせいで血の滲んだ口の周りを、こんどは慰めるようにザラザラした舌で舐め始める。

茶碗を手取る気力も無かったため、椀の中に顔を突っ込むようにして、何日ぶりかになる泥の匂いのする雨水で、貪るように喉の渴きを潤した。

その灰色の痩せた猫は、それからも幾度となく、赤ん坊のような子猫の鳴き声の合間に現れては、どういうわけか、腐りかけた自分の食料を分け与えてくれた。その痩せた身体を押し付けられたところで、少しの暖が取れる訳でもなかったが、始めは自分を喰おうとしているのかと思ったその猫が、徐々に自分の母親のように思えてくるから不思議だった。

そうか。

自分は人間だと思っていたのは夢の中の話で、本当は自分は路地裏で凍える子猫なのかもしれない。

金色の目で、痩せ衰えた灰色猫を母に持つ、路地裏の猫。

だから、今までの辛い記憶も何もかも、冷たい雨の中で見た悪夢に過ぎないんだと。

「……猫？」

だから、突然頭上のダンボールが取り払われそう尋ねられた時、思わず「ネエ（ああ、そうだよ）」と答えそうになり、声が出ないことに気が付いた。

当たり前だ。

話せるような気になっていたけど、自分は子猫なのだ。

人間に通じる言葉を発せられる訳がない。

案の上、そう呟いて伸ばされた手は鼻先で止まり、それ以上近付いてくることはなかった。

だが、こちらの出方をジッと覗いながら手を伸ばしてきた男を見上げた時、そのあまりの美しさに、呼吸すら忘れて魅入ってしまった。

もしかして、天使？

本気でそう思った。

放射状に頭上から降り注ぐ細い雨の糸から自分を庇うように見下ろすその瞳は、今まで自分が見てきたどんな人間の目の色とも違う不思議な色をしていた。

白銀に近いプラチナブロンドの髪も、男の神秘的な顔立ちを余計

に引き立てていた。

実はもう、子猫の自分は路地裏で飢えと寒さのために死んでいて、そんな自分を天国から迎えに来てくれたのではないか。

クリスチャンでもない自分にも、こうして神のご加護があったということなのではないか。

「おいで」

美貌の天使は、魅入られたように固まったままの自分に、低い声でそう一言だけ呟いた。

少し掠れた、柔らかく深い声だった。

その声に導かれるように、固まっていた指がピクリと反応する。

その些細な動きを見逃さず、天使は自分から手を伸ばして、凍えた子猫の指先を絡め取った。恐る恐る重ねた指先は、繊細な天使の風貌に反して、ゴツゴツと骨ばって男らしかった。

ジワリと伝わる熱に導かれるように、長いこと座り込んでいたせいで皮膚がくつついてしまったのではないかとさえ思える、冷たいアスファルトの地面から、何日ぶりかで腰を上げる。

季節外れとしか言いようのない、薄手のＴシャツ一枚しか着ていなかった自分に、男は腰に巻いていた皮のジャケットを解いて被せてくれた。

天使のジャケットからは、微かに血の匂いがした。

「おお、来たか」

雨の中、自家用車で駆けつけたミンホの姿を真つ先に捕らえると、大勢の警官に囲まれ難しい顔で俯いていたチョルスは、眉間に皺を寄せたまま彼を手招きし、騒然とした警官の輪の中に招き入れた。

竜山米軍基地に隣接する梨泰院地区イテウォンは、いつ来てもここが韓国ソウルだという事実を忘れそうになる。アメリカ人を初めとする多国籍な人種が行き交う街並みは、昔から自由で洒落ているには違いないが、自国であって自国でない、どこか言い知れぬ不安がいつも付きまとい、ミンホはあまり好きになれない場所であった。

「非番の日に悪いな」

ちっとも悪そうには見えない顔で、チョルスはミンホの肩に手を置く。

「民間人を襲った米兵が逃げ出したなんて聞いたら、トイレの途中でも駆けつけなくちゃならないでしょう」

ミンホらしい言い回しに、チョルスは眉間に皺を寄せたまま口の端だけで笑った。

「捕まえたって、すぐにS O F A（米韓駐屯軍地位協定）に邪魔されて、やっこさんの身側は米軍側あちうんに渡さなきゃならないけどな」

厭世的なチヨルスの言葉に、ミンホもつられて眉間に皺が寄る。在韓米軍の犯罪は、韓国側に刑事裁判権があるとされながらも、容疑者の身柄は一旦米軍側に引き渡さなければならぬ取り決めのため、その後改めて引渡しを要請しても、実質、治外法権を許容してきたという苦い慣例がある。

この手の犯罪が起こるたびに、国内には根の暗い反米感情が渦巻くのと同時に、無能な警察組織への手厳しい批判が集中する。

「……被害者は？」

ミンホの問いに、チヨルスは傍にいた若い警官が持っていた資料を取り上げ、読み始める。

「チヨン・ユンゼ KATUSAを退役して復学したばかりの23歳、大学生」

「KATUSA ?」

ミンホの眉間の皺が消え、反対に大きな目が見開かれる。

「兵役中に、目をつけられたんだらうよ。可哀相に」

チヨルスは苦虫を噛み潰したような顔で付け加えた。

「変態野郎が」

おまけに、ペツと勢いよく唾を吐き出す。警官として、いい大人として、あまり行儀がいいとは言えない兄貴分の行動を非難するのにも忘れて、ミンホはチヨルスの手から引っ手繰るようにして捜査資料に目を走らせた。

KATUSAとは、'Korean Augmentation to the United States Army'の略称であり、「米陸軍配属韓国軍要員」と訳される。

一部からは「米国傭兵^{ヤンキ}」と非難を浴びることもあるが、主に在学中の大学生以上の学歴の者で構成されるエリート意識の高い集団であり、志願する若者は少なくない。

だが、そのエリート意識の高さが高卒兵がほとんどの米兵との間の軋轢^{あつれき}の遠因にもなり得る他、韓国国内の反米感情がそのままKATUSAの兵と米兵の係に影を落とすこともある。

有事の際の、韓国と米国の橋渡し的な役割を担うはずのKATUSAに身を置くことで、逆に反米感情を高め、米軍に対立する集団という要素も合わせ持ったKATUSAは、韓国国内においても、葛藤を抱える存在であった。

「被害者はどこに？」

ミンホの言葉に、チヨルスは黙って顎をしゃくる。

チヨルスの視線の先にあるのは、米兵向けのナイトクラブだった。

「地下にご丁寧^{ごていせい}に隠し部屋があつたよ。黴臭いベッドと、おまけにヤクもたつぷりな。その道のプロには、有名な店なんだとよ。こんな、冰山の一角だ。泣き寝入りしてる奴の方が多いだろうしな」
「……被害者に、話を聞けますか？」

チヨルスが脇に控えていた若い警官を見やる。彼は一瞬躊躇しながらも、「どうぞ」と言つて、チヨルスとミンホを今はテープが張り巡らされた店の入口へと案内した。

店内は、割れたガラスの破片と、零れ出た酒が放つ、むせ返るようなアルコールの匂いに満ちていた。襲われた大学生と、異変に気

付いた彼の仲間が米兵と争った跡が、説明せずとも何よりも雄弁にその事実を物語っていた

「あちらです」

若い警官が示した先には、店の隅で救護班に囲まれ、急ごしらえのガウン代わりの白いシーツを、身体にグルリと巻きつけて小さくなる青年の姿が見えた。

チヨルスとミンホが遠慮がちに近づいていくと、顔色を失い、焦点の合っていない目で歯をガチガチと鳴らす彼の様子が、次第に明らかになって来た。

「……チヨン・ユンゼ君？ 少しだけ、話を……」

言いかけたミンホの手首をチヨルスが掴む。

ミンホが振り返ると、チヨルスは無言で首を左右に振った。

（今は、無理だ）

彼の目はミンホにそう伝えていた。

彼らは仕方なく、青年の側を離れ、倒れたテーブルがそのままになっっている店の中央まで戻った。

ここなら、話し声が青年まで聞こえる心配はない。二人とも暗黙の内に、互いの胸の内を悟って自然に動いていた。

「怪我の具合は？」

一緒について来た若い警官に、ミンホが尋ねる。

「揉みあった時の打撲や裂傷はありますが、どれも軽いものです。」

問題は……」

そう言ったまま、若い警官は口を噤んでしまった。彼が言わんとしていることは、ミンホやチヨルスにとって、聞くまでもないことだったが、チヨルスはことを明らかにするため、敢えて厳しく尋ねた。

「ハッキリ言え。レイプは未遂か？ どっちだ？」
「……未遂です」

単刀直入なチヨルスの言葉に、若い警官は観念したように搾り出すような声で答えた。

「幸いに、とは言えねえな。あの様子を見たら」

チヨルスは先ほどから刻まれたままの眉間の皺を、これ以上はないというほど深くして、大きな溜息を吐いた。

「知ってるか、ミンホ？ 昔からレイプは拷問に使われてきたんだぜ。肉体的なダメージが傍から見ても分かりづらい割りに、メンタルを傷つけることが出来るから」

「止めて下さい。考えたくもありません」

生真面目に嫌悪感を顕わにするミンホは、許されるなら今ここでチヨルスの真似をして、アルコールとガラスの破片塗れの汚れた床に、唾を吐きかけたかった。

その時、応援に呼ばれた、ミンホたちとは別のチームの警官二人が、店の中に入って来た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9237m/>

ハルラン～雨を呼ぶ猫の歌～

2011年12月28日07時50分発行